

第6章 竪穴式石槨外出土の遺物

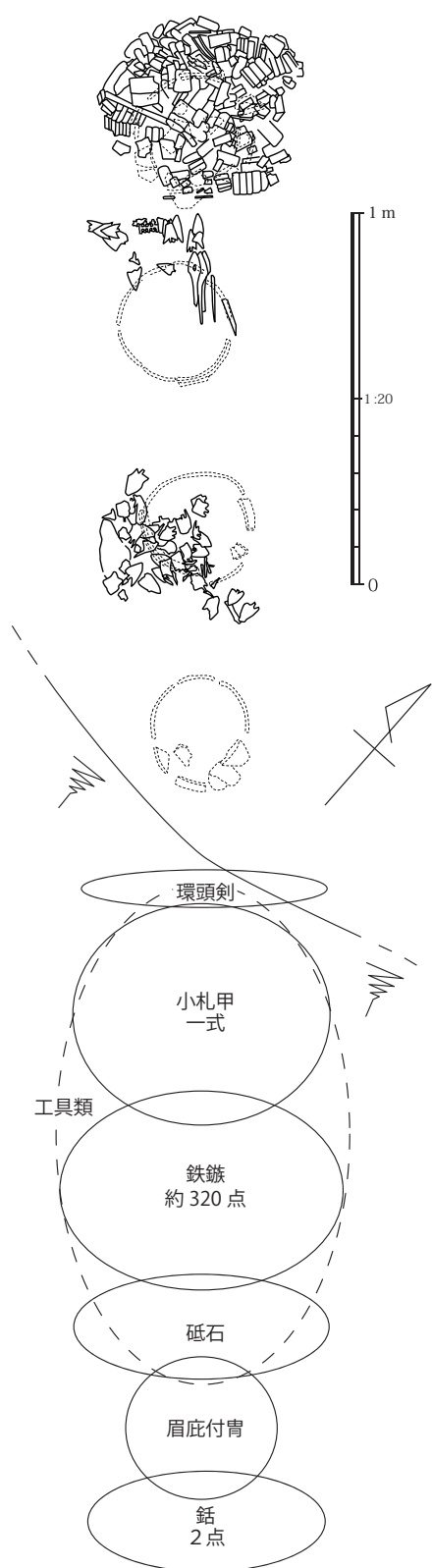
1 概 要

(1) 品目と数

発掘報告で竪穴式石槨外出土と記載された遺物と、今回の整理作業によって竪穴式石槨外出土遺物と認定したものの対応を第4表にあげる。発掘調査以前の不時発見の遺物についてはいずれも竪穴式石槨外出土とされ、発掘調査によって埴輪下から出土した遺物と合わせて竪穴式石槨外に埋納された副葬品であったと考えられる。ただし、そういった出土の経緯により、特に小札群のように発掘調査前と発掘調査中の両方で出土したものが、発掘報告にあるように2領の小札甲からなっていたのか、それとも同一個体を構成するものであったのかについては確定できなかった。そのためここでは小札甲および発掘報告では籠手と報告された脛当はいずれも一式以上とした。金銅金具として報告された飾金具についても複数の部材からなることが判明したが、同一個体を構成していたものか、別個体に用いられたものかが確定できないため、一式としている。蛇尾・鉸具はさらに1点ずつ確認している。

第4表 竪穴式石槨外出土遺物一覧

品目	現状点数	発掘報告〔網干1962〕における名称	点数
武具	眉庇付冑	四方白鉄地金銅装眉庇付冑	1
	鍔	鍔	1
	小札群	小札甲	一式以上
		脛当	一式以上
	帯金具	金銅製龍文鈐帯金具	9以上
		金銅製三葉文鈐帯金具	3以上
	飾金具	金銅金具	若干
	蛇尾	蛇尾	2
武器	鉸具	尾錠	1
	鉄鏃	細根鉄鏃	367
		大型平根鉄鏃	7
		平根鉄鏃	93
農工漁具	環頭剣	環頭剣	1
	鍬・鋤先	—	—
	鎌	鎌	1
	手鎌	横形斧頭	2
	斧	竪形斧頭	5
	鑿	鑿	3以上
	鋸	—	—
	鉈	鉈	4以上
	刀子	鹿角装刀子	3
	ヤスリ状鉄器	—	—
	鉄鉗	鉗	2
	鋤頭	鋤頭	3
	鉄床	鑽	1
	鑿	大型鑿	6以上
		小型鑿	2
	耳搔き状鉄製品	—	—
	ヤス	—	—
	鋸	箱形鉄製具	2
	砥石	砥石	6
不明鉄製品	15	—	—



第 45 図 埴輪下（竪穴式石槨外）
遺物出土状況図・配置復元図

鉄鏃 は 467 点の出土が報告されているが、鏃身部ならびに関部の計測の結果、367 点以上と判断した。農工漁具類では、新たに鍬・鋤先 2 点、鋸 3 点、刀子 7 点以上、ヤスリ状鉄器 4 点、耳搔き状鉄器 5 点、ヤス 5 片の存在を認識した。帯金具や鑿、鉋、鑿についても発掘報告段階よりも多くの点数を確認している。

(2) 配 置

発掘調査では、竪穴式石槨の東側に並ぶ 4 点の円筒埴輪の下から副葬品が出土した。その配置は、南側から平根系鉄鏃 52 点のまとまりがあり、やや隙間を開けて北側 50cm ほどの位置に平根系鉄鏃が計 25 点と三葉文鍔帯金具や蛇尾・鉸具が配置される。三葉文鍔帯金具や蛇尾・鉸具の付近には黒色化した土が認められており、革帯の痕跡とされている。すぐ北側にはたたんだままの状態で副葬されたとされる小札の塊が検出されており、小札甲 1 領分とされている。

より南方から出土した遺物は発掘調査以前の耕作にともなう不時発見によるもので、その配置の詳細は不明である。発掘報告の埴丘実測図には埴頂の南東側に攪乱の範囲を示すとみられる線が記されており、耕作にともなう攪乱が南方の鉄鏃のまとまりから約 70cm の位置にまで及んだことがわかる。耕作時の遺物の出土状況は発掘調査時に聞き取りがなされており、おおよそながら復元が可能である。

発掘調査以前に出土した遺物のうち、もっとも南方から出土したものは 2 点の鋤で、そこから北側に向かって眉底付冑（冑 3）、砥石、鉄鏃約 320 点、小札甲一式、環頭剣が出土したという。工具類については詳細な位置は不明だが、砥石から小札甲の間のいずれかに一括で配置されていたとされる。環頭剣より北側には耕作は及ばず、埴丘実測図で攪乱が及ぶ範囲とされている境界位置をおおよそ環頭剣の出土位置とみなしてよいだろう。遺物の出土範囲は南北約 2 m、東西約 1 m とされており、これを遺物の出土状況図とあわせて復元すると、第 45 図のようになる。ちなみに第 3 章でも述べたように、このように復元した際の竪穴式石槨外出土遺物の想定配置箇所の南端は竪穴式石槨の南端よりもさらに 1 m ほど南方に及ぶことになる。（川畑 純）

2 武 具

竪穴式石槨外出土の武具には、いわゆる蒙古鉢形と称される眉庇付冑 1 点（冑 3）、小札甲、脛当がある。

発掘調査時に出土した小札塊の X 線画像の観察により、小札塊の内部に龍文鍔帯金具 1 点が含まれることが明らかとなった。龍文鍔帯金具は発掘調査前に出土したとされ、発掘調査時の出土は報告されていない。このことから、発掘調査前出土の小札甲と発掘調査時に埴輪下から出土した小札甲の計 2 領それぞれに龍文鍔帯金具が取り付けられていた可能性や、発掘調査前出土の小札と発掘調査時出土の小札は本来 1 領の甲冑を構成していたものだが、分割されて副葬された可能性が想定できる。

本節ではさしあたり小札甲と脛当を一括して小札群として報告する。また、発掘報告では装身具とされたが、帯金具は小札甲に装着されたものであるため本節に含めている。発掘報告における金銅金具についても、後述するように韃や胡籐といった盛矢具にともなう装飾金具の可能性がもっとも高いと考えたため、飾金具として本節に含めている。（初村武寛）

（1）眉庇付冑

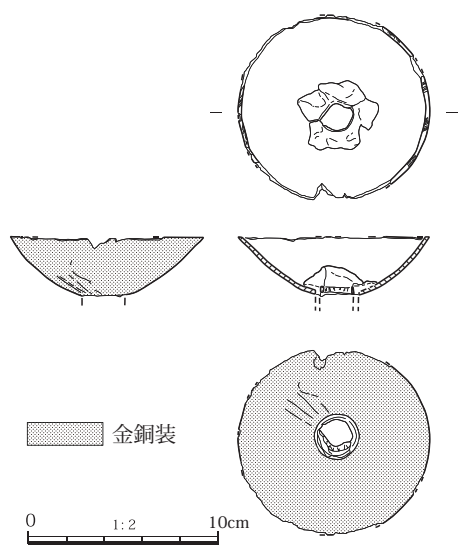
①冑 3（図版 46～60 第 46～48 図）

構成と法量 冑全体の構成としては、受鉢と伏鉢ならびに底部を銅に鍍金した部品で構成し、胴巻板と腰巻板、そして地板の一部を鉄地金銅張とする、小札鉾留眉庇付冑である。管を欠損し、底部も部分的に破損するが、全体としては遺存状態が良好である。冑鉢本体は、伏鉢が伏板の役割をも果たす稀有な事例であり、そのほかは地板第 1 段・胴巻板・地板第 2 段・腰巻板からなる。形態的にも高さがいちじるしいという特徴があり、蒙古鉢形と表現されてきたものである。

各部の計測値は、現存高 22.2cm、全長 30.1cm、最大幅約 20.0cm（復元値）、冑鉢本体の前後径 20.9cm、左右径 18.2cm、鉾頭径 3mm、鉾頭高 2mm、鉾孔径 2mm、保存処理後の現重量 1346.3g である。厚さ 1～2mm 程度の鉄板を用いる。

なお、原則として以下の記述は、保存処理前の実測図作成にともなって実施した観察所見に基づく。したがって、提示する実測図についても、保存処理前の状態を資料化したものである。ただし、記述の内容には、保存処理後に得られた知見を一部含んでいることを明記しておく。

受鉢・管・伏鉢 受鉢は鍍金をほどこした青銅製であり（図版 60－2・4・5）、高さ 1.5cm、直径約 5.1cm である。受鉢の中央には 8mm の孔があり、その周囲に管の痕跡が残存する。痕跡から管は厚さ 1～2mm ほどの銅板を直径 1.2cm ほどに丸めたものとみられる。受鉢の内面には、管とは別の筒状品の端部を切り分けて、おおむね 6 方向に折り曲げる様子を見て取れる（図版 60－3・5）。伏鉢も受鉢と同様に鍍金をほどこした青銅製であり、高さ 5.3～6.3cm、前後径 9.2cm、左右径 8.6cm である。全体に鑄巢が入っている状況を X 線画像により確認できる（図版 59）。伏鉢の頂部に 7mm の孔があり、その周囲には径 1.1～1.2cm の管の痕跡が残存する。冑鉢本体の内面では、伏鉢から突出した筒状品の端部を切り分けて、おおむね 4 方向に折り曲げている。以上の状況から、筒状品は、受鉢・管・伏鉢を貫通させて両端をかしめることで、これらを固定したものと考えうる。なお、筒状品の内面には木質の付着が認



第 46 図 冑 3 受鉢実測図

枚ずつ小札を重ね、もっとも下重ねとなる背面中央に幅広の小札 1 枚を配置する。内面の観察によれば、小札はいずれも四隅のうち上隅部を斜めに直線的に裁断するものの、全体としては角張った形状を呈する。背面中央の幅広の小札は上辺長約 1.3cm、下辺長約 3.5cm、展開高約 9.1cm であり、それ以外の小札は上辺長約 1.0cm、下辺長 2.4cm 前後、展開高 9.0cm 前後である。なお、正面の 3 枚、左側面の 4 枚、右側面の 4 枚、背面の 3 枚の小札は、金銅張によって装飾がほどこされている。通常、鉄地金銅張技法では鉄板に金銅板を重ねた上で鉄板を巻き込むように金銅板の端部を折り曲げて固定するが、本例の地板の小札では保存処理の際におこなわれたクリーニング作業の結果、金銅板を鉄小札に重ね合わせて上から鉚留する構造をとることが明らかとなっている（図版 58－2）。また、地板第 1 段の中位より若干上の位置においても、小札を連結するために鉚留がなされるという特徴を持つ。現状で 24 個の鉚が残存し、さらに 2 個の存在を復元できる。総数 26 個の鉚が使用されたと考えられ、正面と背面の小札はそれぞれ左右の 2 箇所ずつで鉚留されるが、そのほかの小札はいずれも 1 箇所のみ鉚留される。用いられる鉚はいずれも銅製のものであり、鉚頭に鍍金がほどこされている。なお、一部で鉚をかしめずに、鉚の先端を折り曲げて使用する状況が認められる〔阪口編 1998〕（図版 58－3）。

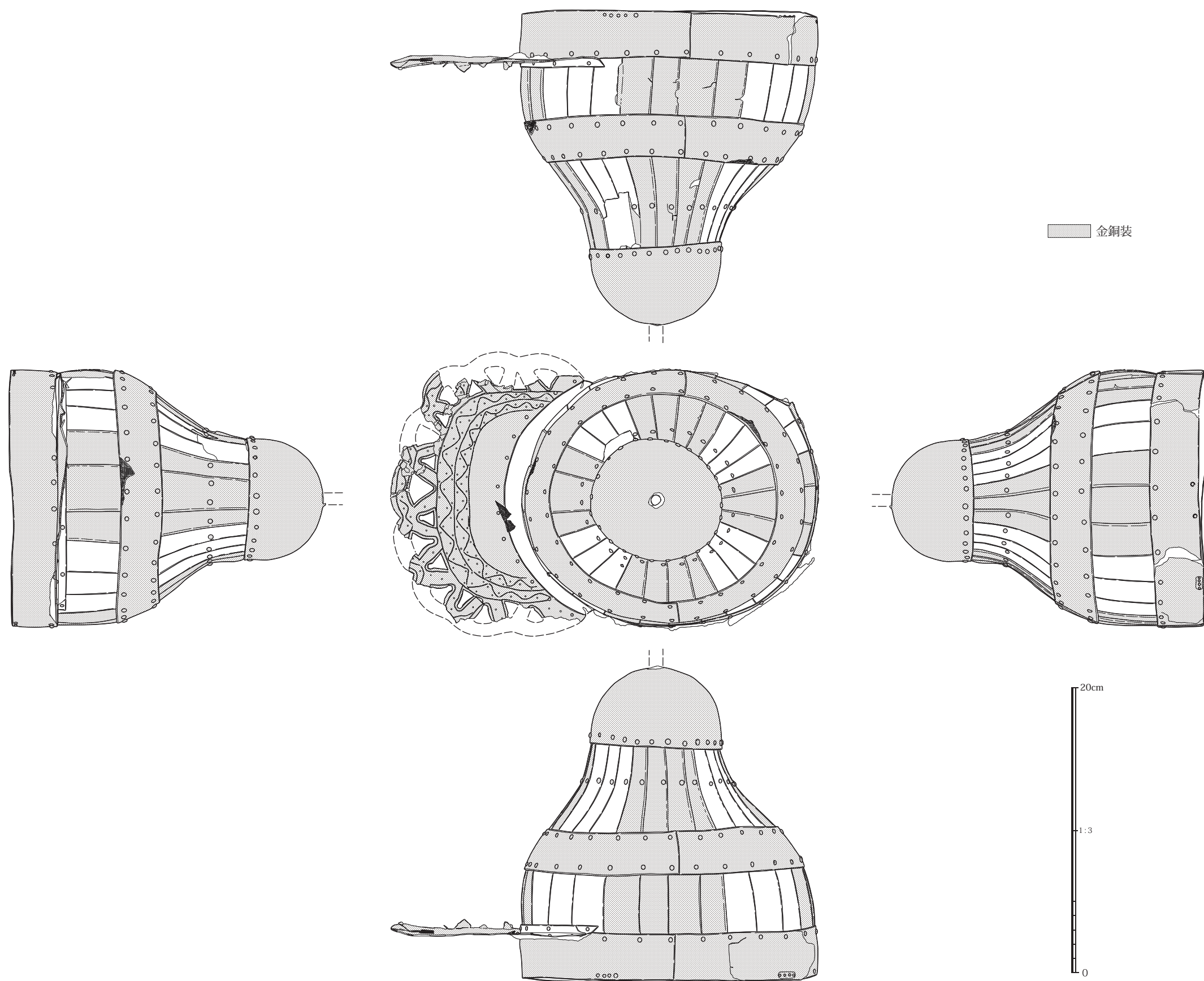
胴巻板 胴巻板は高さ 2.9～3.2cm、前後最大径 19.6cm、左右最大径 17.8cm である。胴巻板は、全体が金銅張によって装飾される。上辺に沿って地板第 1 段の小札下端を留める鉚列が巡る。鉚は全て現存し、総数は 27 個を数える。さらに、下辺に沿って地板第 2 段の小札上端を留める鉚列が巡る。鉚は全て現存し、総数は 27 個を数える。なお、胴巻板の重ね合わせ箇所が左右の側面にある。重ね合わせは前側が上に位置しており、重ね合わせ箇所を留める鉚は、上辺と下辺に一つずつ、2 個が認められる。使用される鉚はいずれも銅製で、鉚頭に鍍金がほどこされる。

地板第 2 段 地板第 2 段は、高さ 3.9～4.4cm であり、小札 26 枚で構成される。小札の重ね合わせは、背面中央の小札に順次上重ねとする通則に全て則っている。すなわち、正面中央に小札 1 枚を配置し、外面からみて順次下重ねに左右それぞれに 12 枚ずつ小札を重ね、もっとも下重ねとなる背面中央に幅広の小札 1 枚を配置する。内面の観察によれば、小札の四隅は角が比較的明瞭な形状を呈し、おおむね

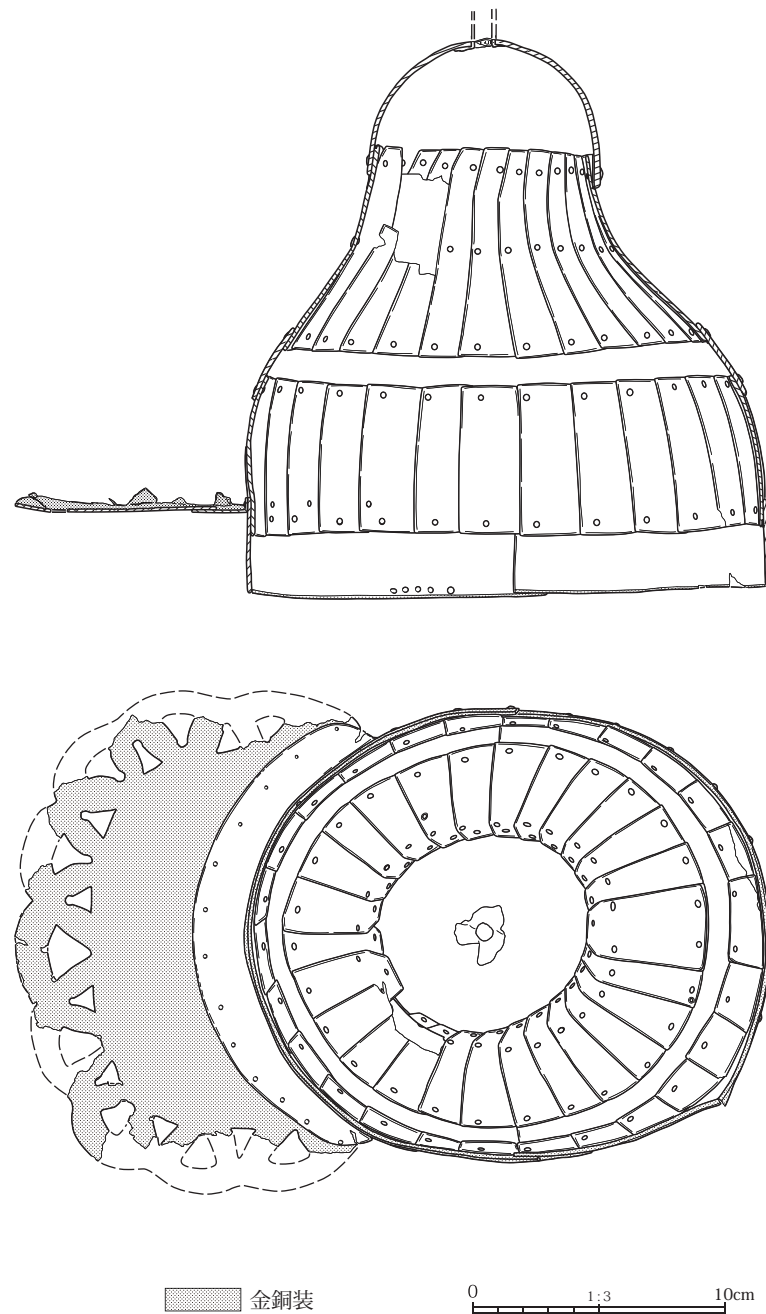
められる。木質の上に銅板を巻いて筒状にしたものと想定できる。

なお、本例では伏鉢が伏板をも兼ねる構造をとるため、周縁に沿って地板第 1 段の地板上端を留める鉚列が巡る。現存する鉚は 25 個を数える。このほか鉚頭を脱落したもの 1 個があり、本来の総数は 26 個となる。使用される鉚は全て銅製で、鉚頭に鍍金をほどこす。

地板第 1 段 地板第 1 段は、高さ 5.3～6.5cm であり、小札 26 枚で構成される。小札の重ね合わせは、背面中央の小札に順次上重ねとする通則に全て則っている。すなわち、正面中央に小札 1 枚を配置し、外面からみて順次下重ねに左右それぞれに 12



第47図 冑3実測図（外面）



第48図 冑3実測図（内面）

長方形を呈する。背面中央の幅広の小札は上辺長約 3.2cm、下辺長約 3.8cm、展開高約 6.5cmであり、それ以外の小札は上辺長 2.2cm前後、下辺長 2.5cm前後、展開高 6.5cm前後である。なお、正面の 3 枚、左側面の 4 枚、右側面の 4 枚、背面の 3 枚の小札は、金銅張によって装飾がほどこされている。地板第 1 段と同様に、保存処理にともなうクリーニングによって、金銅板は端部を折り返して鉄小札を巻き込んでおらず、部材を重ね合わせた上から鎮留することで固定されていることが明らかとなっている。地板第 2 段の前半部には下辺から 5 mm ほど上の位置に底部が取り付けられる。

腰巻板 腰巻板は高さ 3.2～3.5cm、前後径 20.9cm、左右径 18.2cmである。腰巻板は、全体が金銅

張によって装飾がほどこされる。鉾留だけでなく、金銅板の端部を内面に折り返すことで腰巻板に固定する状況を確認できる（図版 58－4）。上辺に沿って地板第 2 段の小札下端を留める鉾列が巡る。鉾は全て現存し、その総数は 27 個を数える。左右の側面に腰巻板の重ね合わせ箇所がある。重ね合わせ箇所を留める鉾は、上辺に沿って巡る鉾のほかには認められない。なお、右側面の重ね合わせ箇所より前方において腰巻板下端を 1 箇所のみ鉾留する。

腰巻板の下辺に沿って左右側頭部および左右後頭部の 4 箇所に 4 孔一組の綴孔列が穿たれる。孔径は 2 mm である。また、背面中央の下端付近に 2 孔の穿孔がほどこされている。

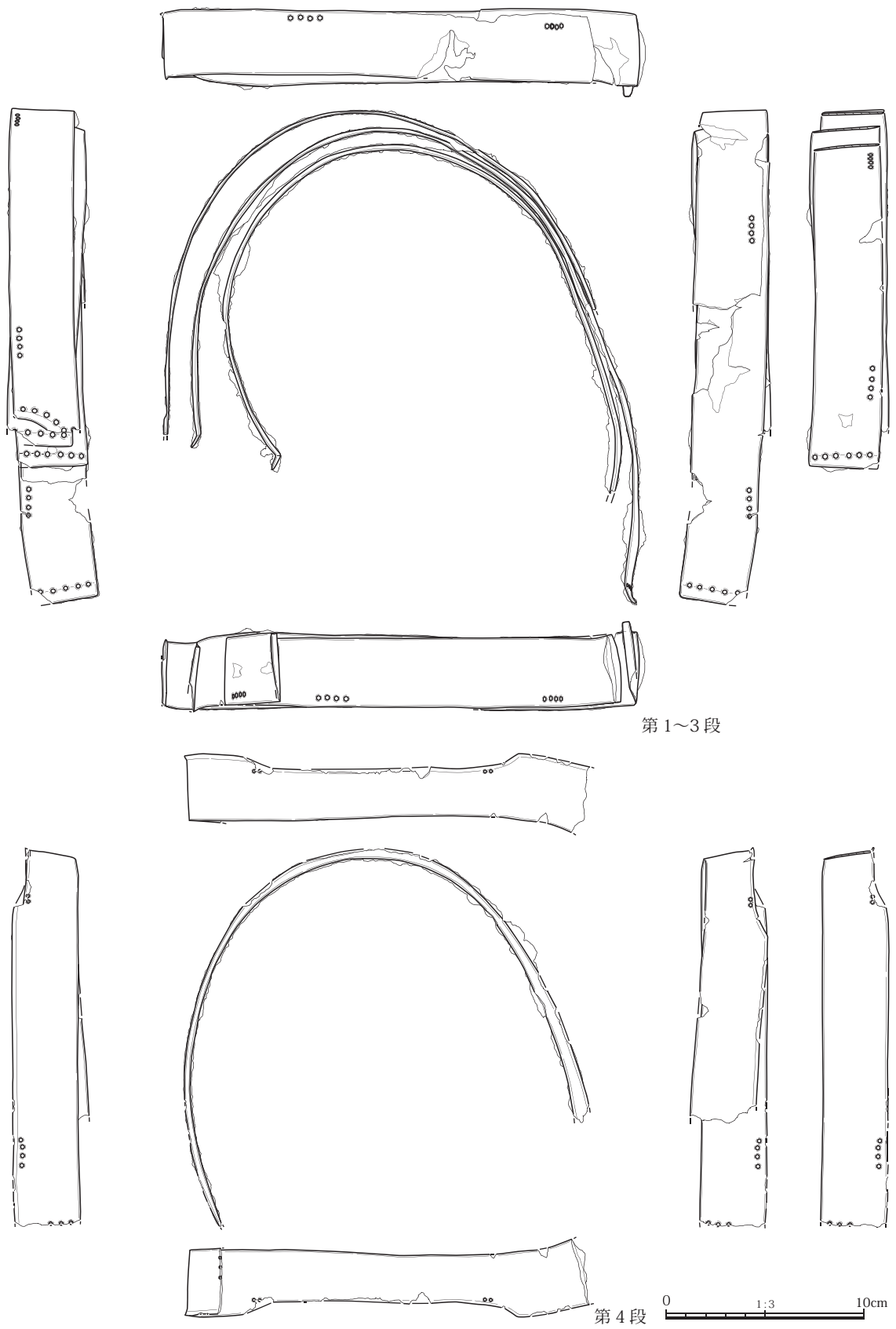
底 部 底部は正面中央での前後長 9.2cm、最大幅約 20cm（復元値）である（図版 50－2・56－2）。冑鉢本体との接合方法は、金銅板の底部に断面 L 字形の鉄製金具を介するものである（図版 51－2・57－2）。すなわち、端部を幅 5 mm ほど折り曲げた平面形態が三日月状を呈する鉄製金具を底部の金銅板の下から 13 個の鉾を用いて留めたうえで、さらに鉄製金具の折り曲げた端部と冑鉢本体とを鉾留する。接合部を留める鉾は 7 個を数える。金銅板と鉄製金具とを接続する鉾は、ほかの部分で使用される鉾に比べてやや小ぶりの金銅製鉾であり、鉾頭径 2 mm、鉾頭高 1 mm のものである。なお、冑鉢本体に底部が取り付けられる箇所が地板第 2 段である点には注意が必要である。接合端部の手法は、橋本達也氏の分類〔橋本 1995 p.14〕で「(5)」に相当する。

底部の周縁は花卉状に成形されている。周縁の半分以上を欠損するが、残存部位から花卉の数は 9 弁に復元しうるのであろう。底部には文様を透かし彫りしており、橋本達也氏の分類〔橋本 1995 p.7〕の「Ⅱ b 型」（小林謙一氏による分類〔小林謙 1983 p.106-107〕の「三角文系 c」）である。すなわち、周縁の 9 弁に平行する弧状の底辺を有する三角形孔 9 個、その間に逆向きで頂点を周縁側に向ける小三角形孔 8 個を配列する。金銅板の表面には蹴り彫りによる細線文と打ち出し列点文によって施文がなされており、金銅板の部分ほぼ全体に文様が充填される。すなわち、周縁や透かし彫りされた大小それぞれの三角形孔の縁に沿って、蹴り彫りによる細線文がほどこされる。さらに細線文の間には、蹴り彫りによる波状文が周縁と同心円状となるように割り付けられ、波状文の間には打ち出し列点文が一定の単位をもってほどこされる（図版 58－1）。なお、施文の影響が底下面においても確認でき（図版 58－5）、やや軟質の作業台のうえで施文した可能性をうかがわせる。

②冑 3 付属綴（図版 61、第 49 図）

構 成 4 段構成である。第 3 段の前辺が挟られるように裁断されていることから、4 段を垂下した際の側面観が一枚綴のような触先状になっていた可能性を想定しうる。なお、本例は遺存状態が悪く、全体に歪みが極めていちじるしいものとなっている。したがって、以下で提示する全体の法量については、あくまでも参考値に留まるものであることを強調しておく。

第 1 段 前後幅は 17.8cm を残し、左右幅 20.1cm 程度（復元値）となる。高さは 3.5cm である。前辺に穿孔が六つほぼ等間隔にほどこされ、端部の幅 7 mm ほどを外方に屈曲させる。前辺にほどこされた穿孔の孔径は 2 mm である。穿孔部分に有機質はまったく遺存していない。左右側頭部および左右後頭部において、下辺から 4 mm ほどの位置に 4 孔一組の綴孔が穿たれる。綴孔径は 2 mm である。綴孔に有機質は確認できない。



第49図 冑3付属鍔実測図

第 2 段 前後幅は大きく歪みを持ちながら 24.2cm に達する。復元すれば本来は 20cm 前後に収まるものと思われる。また、現状の左右幅は 22.6cm である。高さは 3.4cm である。前辺に穿孔が五つほぼ等間隔にほどこされ、端部の幅 6mm ほどを外方に屈曲させる。前辺にほどこされた穿孔の孔径は 2mm である。穿孔部分に有機質は認められない。左右側頭部および左右後頭部において、下辺から 4mm ほどの位置に 4 孔一組の緘孔が穿たれる。緘孔径は 2mm である。緘孔に有機質は確認できない。

第 3 段 欠損により本来の法量は不明であるが、現状において前後幅は 16.4cm、左右幅は 21.6cm を残す。高さは 3.2～3.5cm である。前辺の下半を浅く抉り、端部の形状に沿うように穿孔が五つほぼ等間隔にほどこされる。また、端部の幅 5mm ほどを外方に屈曲させる。前辺にほどこされた穿孔の孔径は 2mm である。穿孔部分に有機質は認められない。左右側頭部および左右後頭部において、下辺から 4mm ほどの位置に 4 孔一組の緘孔が穿たれる。緘孔径は 2mm である。緘孔に有機質は確認できない。

第 4 段 欠損により本来の法量は不明であるが、現状において前後幅は 19.1cm、左右幅は 21.5cm を残す。高さは 2.4～3.4cm である。下辺を幅 3mm ほど外方へ屈曲させるとともに、後頭部においては全体を深さ 8mm ほど抉っている。前辺の端部付近に穿孔をほどこす。現状において確認できる穿孔は前辺の上部に等間隔に並ぶ 3 孔である。前辺にほどこされた穿孔の孔径は 2mm である。穿孔部分に有機質は認められない。右側頭部において下辺から 4mm ほどの位置に 4 孔一組の緘孔が、左右後頭部において、下辺から 3mm ほどの位置に 2 孔一組の緘孔が穿たれる。側頭部の緘孔径が 2mm、後頭部の緘孔径は 1mm である。緘孔に有機質は確認できない。

③小 結

冑 3 と鋳についてその特徴をまとめると、以下のようになる。

1. 受鉢および伏鉢、底部、胴巻板、腰巻板、地板の一部を金銅装とする。同様に、頂部装飾と胴巻板、腰巻板、地板、底部を金銅装とする例として、千葉県祇園大塚山古墳出土小札鋳留眉庇付冑〔村井 1966〕、大阪府大仙古墳前方部石槨出土小札鋳留眉庇付冑〔滝沢 1996 など〕、大阪府西小山古墳出土小札鋳留眉庇付冑〔梅原 1932・末永 1934〕、三重県佐久米大塚山古墳出土小札鋳留眉庇付冑〔下村ほか 1978〕がある。また、同様の可能性のあるものとしては、福岡県月岡古墳出土小札鋳留眉庇付冑〔児玉編 2005〕がある。橋本達也氏の金銅装眉庇付冑の装飾法の分類案〔橋本達 2005 p.278〕では「総金銅装」に相当する。
2. 地板第 1 段・第 2 段ともに 26 枚の小札で構成する。
3. 底部は「Ⅱ b 型」である。
4. 底部接合端部手法は橋本達也氏の分類〔橋本 1995 p.14〕で「(5)」に相当し、地板第 2 段に取り付けられる。
5. 小札鋳留眉庇付冑の鋳孔、鋳の緘孔は 4 孔一組を基本するものと推測される。
6. 鋳は 4 段構成である。古谷毅氏の分類〔古谷 1988 pp.10-11〕の「D 形式」に相当する。
7. 鋳各段の下辺に近い位置に緘孔を持つ。古谷毅氏の分類〔古谷 1988 p.11-12〕による「第Ⅲ形式」に相当する。

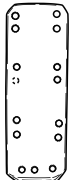
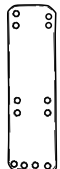
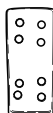


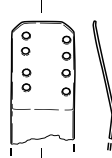

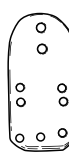


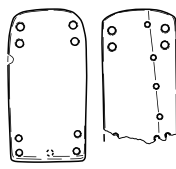


(岩本 崇)

(2) 小 札 群

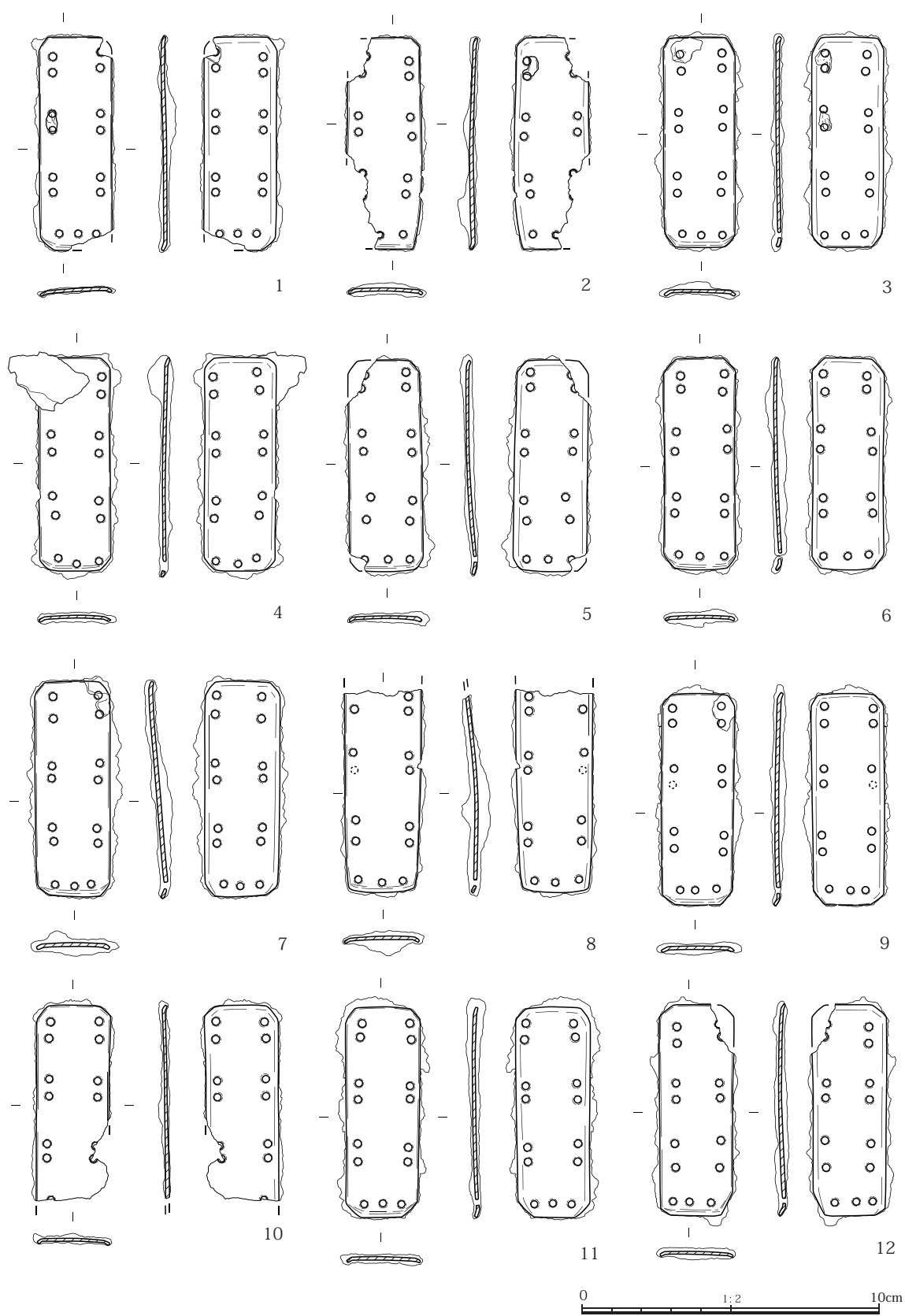
小札甲ならびに臍当がある。小札は12種に分類することができ、ほかの付属具が存在した可能性も考えられる。個体数が多量であるため、形態的特徴により分類し、各類型について報告する。

①小 札 甲 (図版62～84 第51～77図)

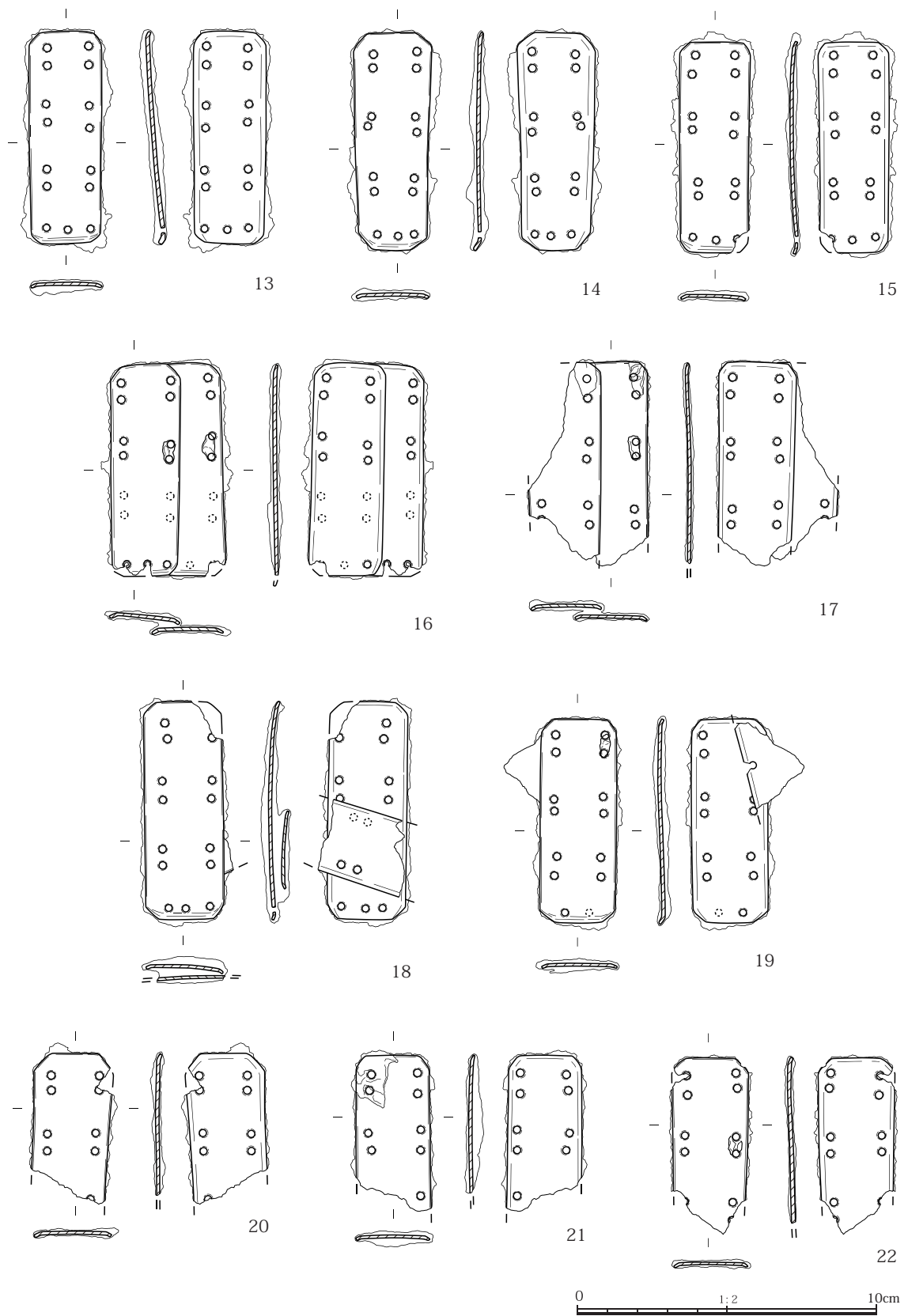
方頭小札A類 (1～48) 計48点を図化した。形態的な特徴は、頭部が方形を呈し、上端・下端の四隅が斜めに裁断されている。頭部付近には、2列に並んだ緘孔が4孔穿たれる。中位には、2列に並んだ綴孔が8孔穿たれる。札足付近には、下捌孔が3孔穿たれる。全長7.1～7.2cm、幅2.3～2.5cm、

頭部形状	方 頭						円頭
緘 孔 列	2 列						1 列
綴 孔 数	8 孔	4 孔			6 孔?	不明	12 孔?
下捌孔数	3 孔	4 孔	0 孔	1 孔	3 孔	不明	2 孔
湾 曲	なし	なし	なし	なし	なし	あり	あり
第3緘孔	なし	なし	なし	なし	なし	不明	あり
法 量	71×24mm	66×19mm	37×20mm	28×15mm	60×22mm	(全長不明)×24mm	193×23mm
模 式 図							
	方頭小札 A 類	方頭小札 B 類	方頭小札 C 類	方頭小札 D 類	方頭小札 E 類	方頭小札 F 類	
頭部形状	円 頭		偏円頭			円頭	
緘 孔 列	1 列		2 列			1 列	
綴 孔 数	4 孔		0 孔	4 孔		8 孔?	
下捌孔数	3 孔		3 孔	1 孔?		1 孔	
湾 曲	な し		なし	なし		あり	
第3緘孔	な し		なし	なし		あり	
法 量	56×26mm	35×22mm	42×25mm	60×31mm		(全長不明)×13mm	
模 式 図							
	円頭小札 A 類	円頭小札 B 類	偏円頭小札 A 類	偏円頭小札 B 類		小型篠状鉄札	篠状鉄札

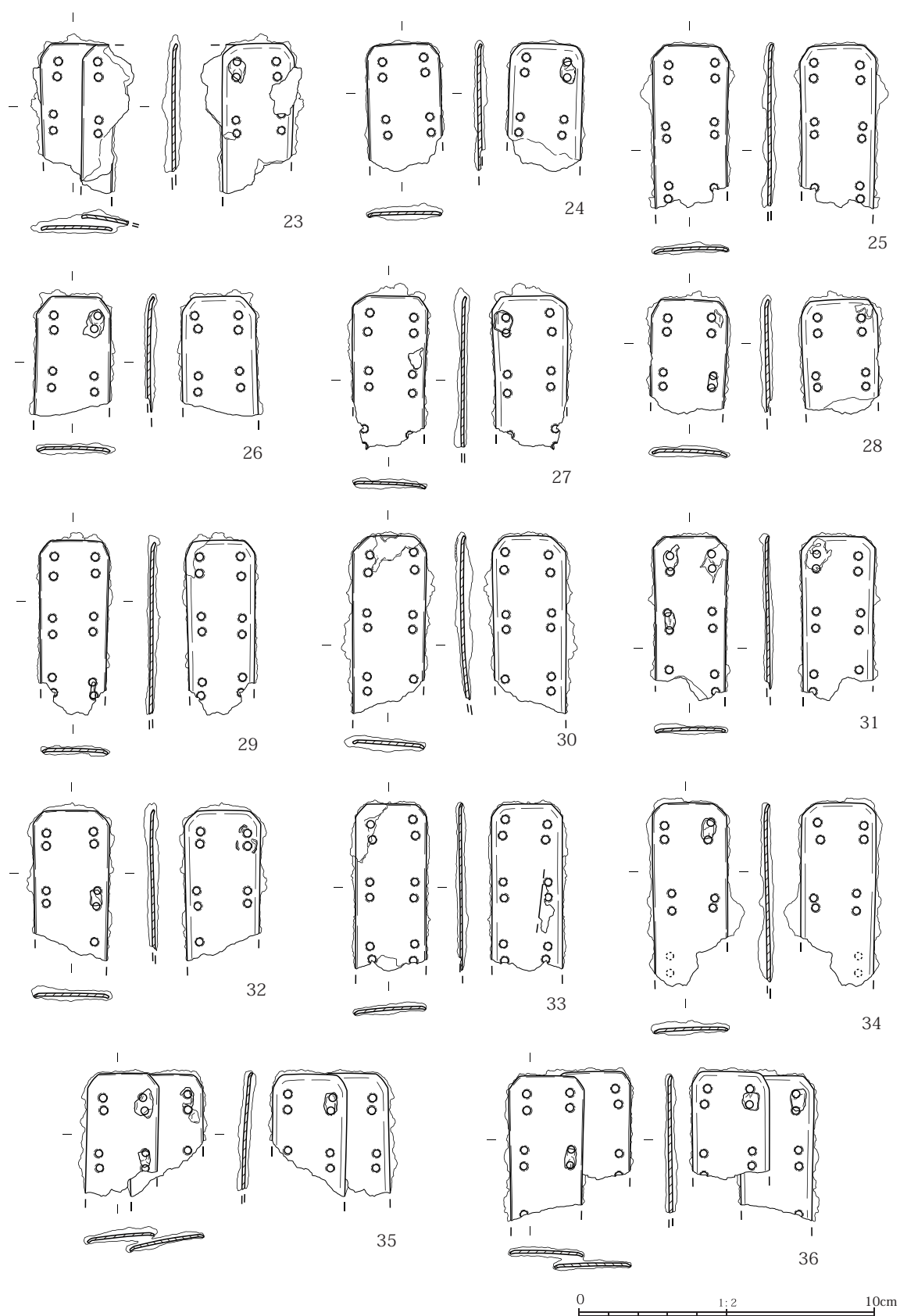
第50図 竪穴式石槨外出土小札の分類



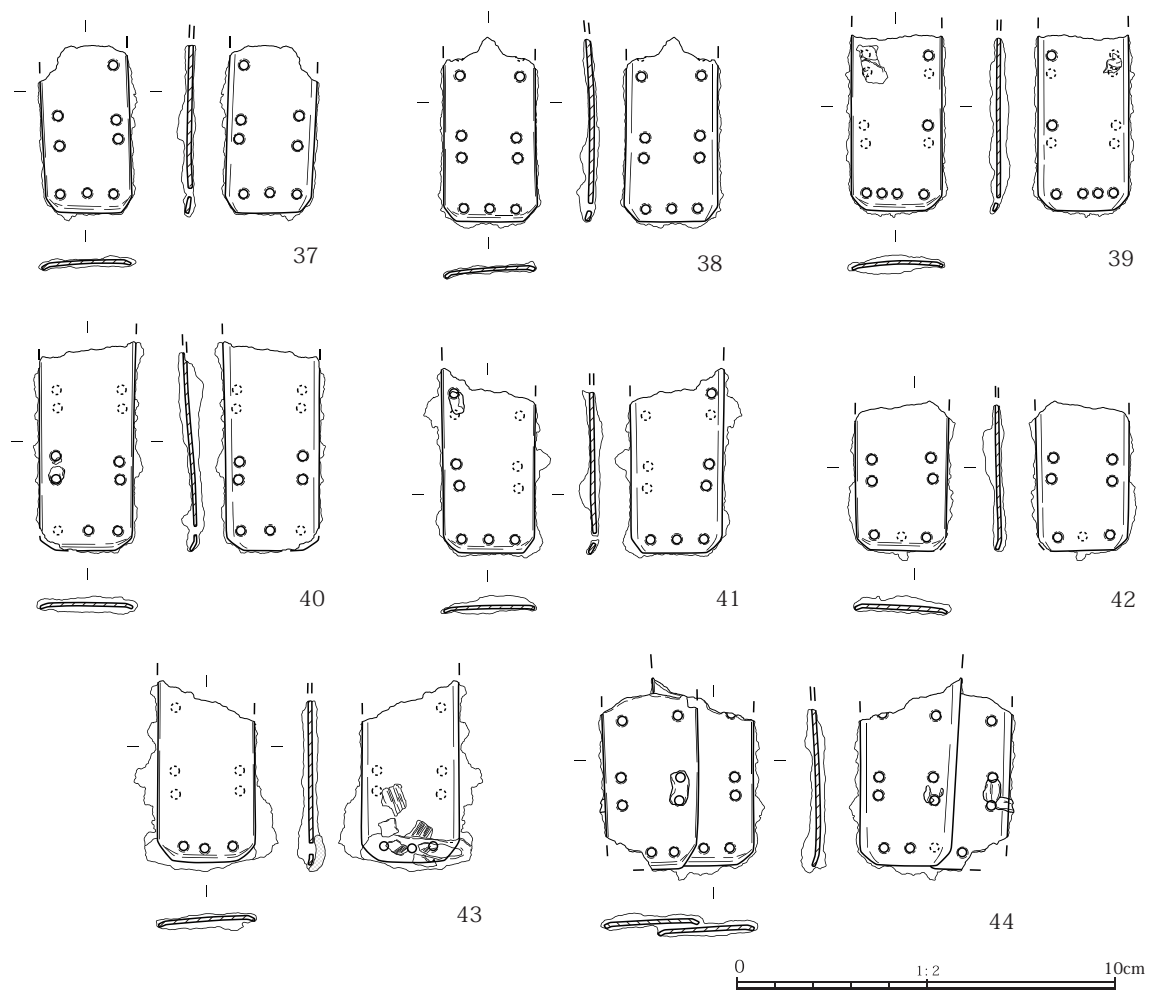
第51図 小札群実測図(1):方頭小札A類(1)



第52図 小札群実測図(2):方頭小札A類(2)



第53図 小札群実測図(3):方頭小札A類(3)



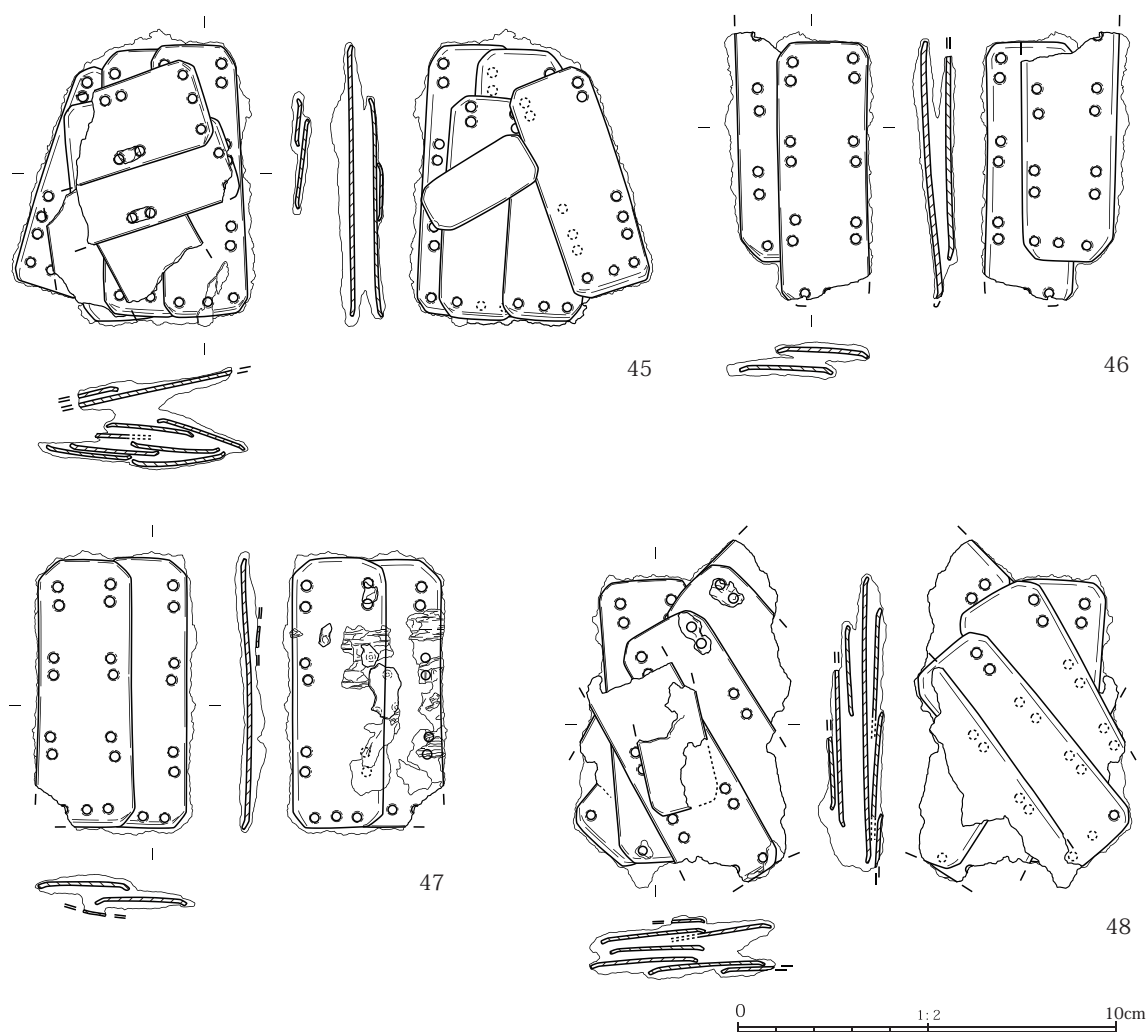
第54図 小札群実測図(4):方頭小札A類(4)

厚さ1mmである。縦断面形は平坦であり、平札である。小札の上端・左右両端は裏面側に曲げる「きめだし」がなされており、下端については、表側に曲げる「かえし」が良好に確認できる。

小札を連結する緘や綴、下拵などについては、良好に遺存しているとは言い難い。しかし、緘では裏面で立取となるもの(2・3・23・24・26・27・32・35・36・47)があり、表面においても緘孔の範囲に遺存するもの(7・9・26・31・35・48)が存在するため、緘技法は通段緘技法a類〔初村2011〕であると考えられる。綴については、表面で立取となり(1・16・17・22・28・31・32・35・36・44)、裏面で凸凹状になるものが認められる(44)。下拵についてはほとんど確認することができなかったが、小札の札足を革で覆うもの(43)があり革包覆輪をほどこしていた可能性がある。

現状では1枚に遊離している小札も多く、この方頭小札A類が使用された部位の段数の確定は困難である。図化したものの中では、2段の小札列を確認するに留まっている。なお、小札の重ね方向には右上重ねと左上重ねの両者が確認でき、部位によって使い分けがなされていた可能性が考えられる。

これらの小札の一部には、飾金具やほかの形態の小札が裏側に銹着するものが存在する。小札甲は、収納された状態になると、竪上側が内側、草摺側が外側となるドーナツ状を呈する。小札甲が散逸した状態で出土する場合を除き、小札の裏面に他製品が付着する部位は、小札甲の竪上付近である可能性が



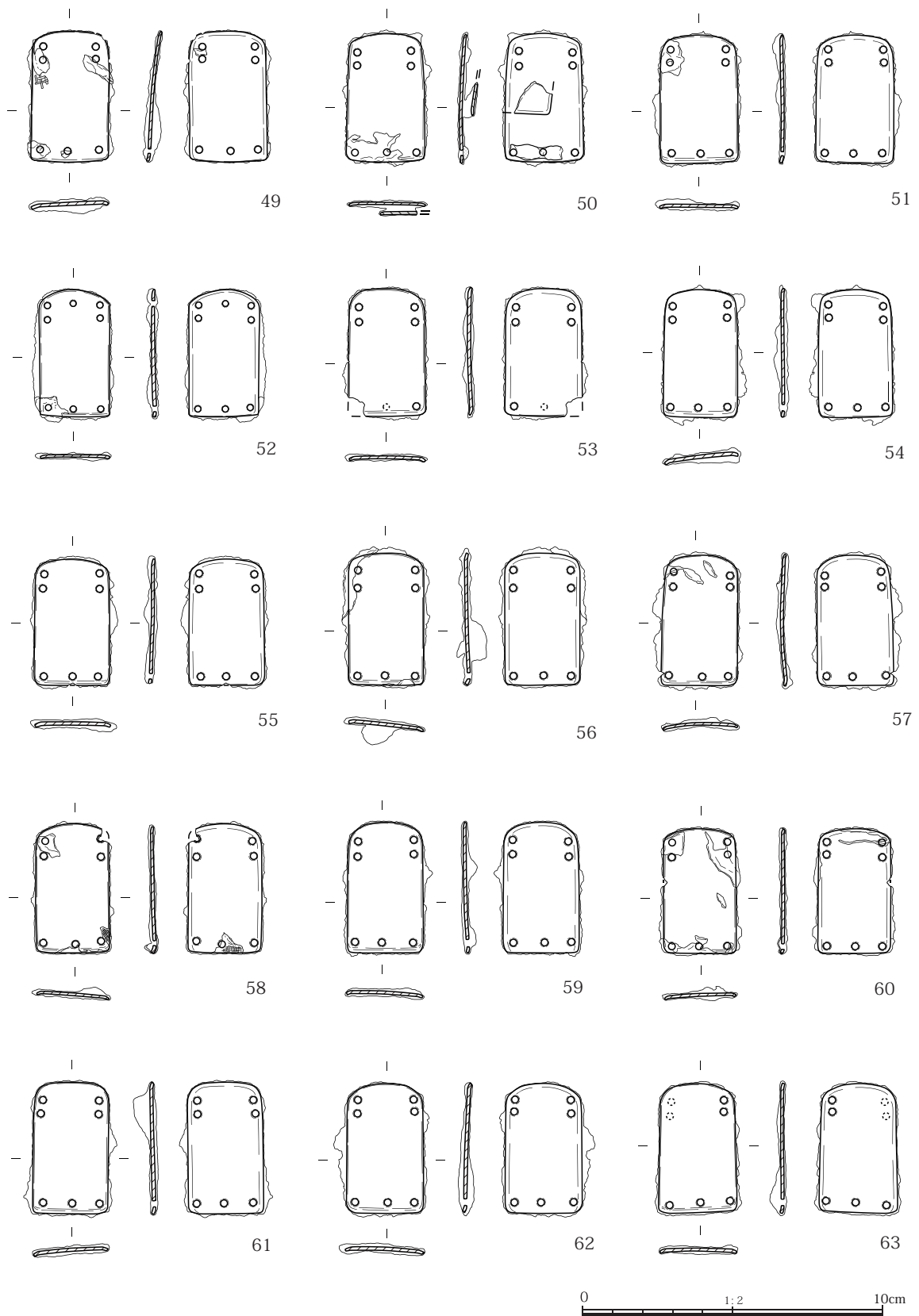
第55図 小札群実測図(5):方頭小札A類(5)

高い。石槨外出土の小札甲は、出土時に副葬時の状況を保持していることが確認されているため、方頭小札A類は、このようなほかの製品が小札の裏面に錆着する部位、つまり竪上付近に使用された小札である可能性が高い。

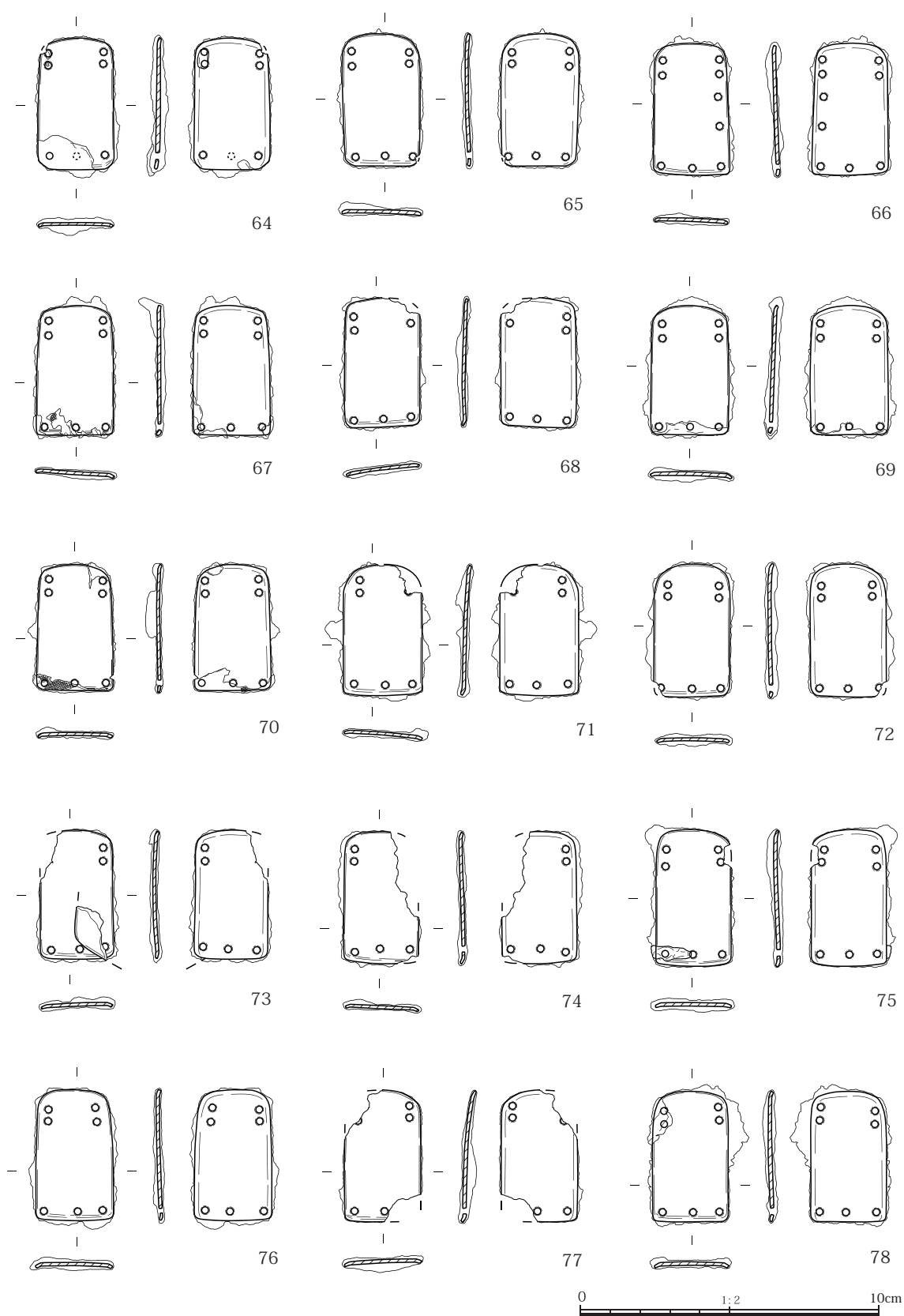
偏円頭小札A類 (49～105) 57点を図化した。形態的な特徴は、頭部が偏円形を呈し、下端部付近にいくにしたがってやや幅が広がる。頭部付近に2列に並んだ緘孔が4孔、札足付近に下捌孔3孔がそれぞれ穿たれる。全長4.2～4.3cm、最大幅2.4～2.6cm、厚さ1mmである。縦断面形は平坦であり、平札である。きめだし・かえしは確認できるが、方頭小札A類ほど明瞭ではない。

連結技法については、ほとんど確認できなかった。しかし、緘技法についてみれば、51・81・89・91・94は表面で緘孔付近に革帯が遺存しており、龍文鍔帯金具が錆着する小札(第83図11)の裏面では、緘孔間を斜めにのびる草紐が確認できるため、綴付緘技法〔初村2011〕の可能性が高いと思われる。下捌技法は、確認できるものでは全て革帯が小札の札足付近に遺存しているため、革包覆輪技法であった可能性が高い(50・64・75)。

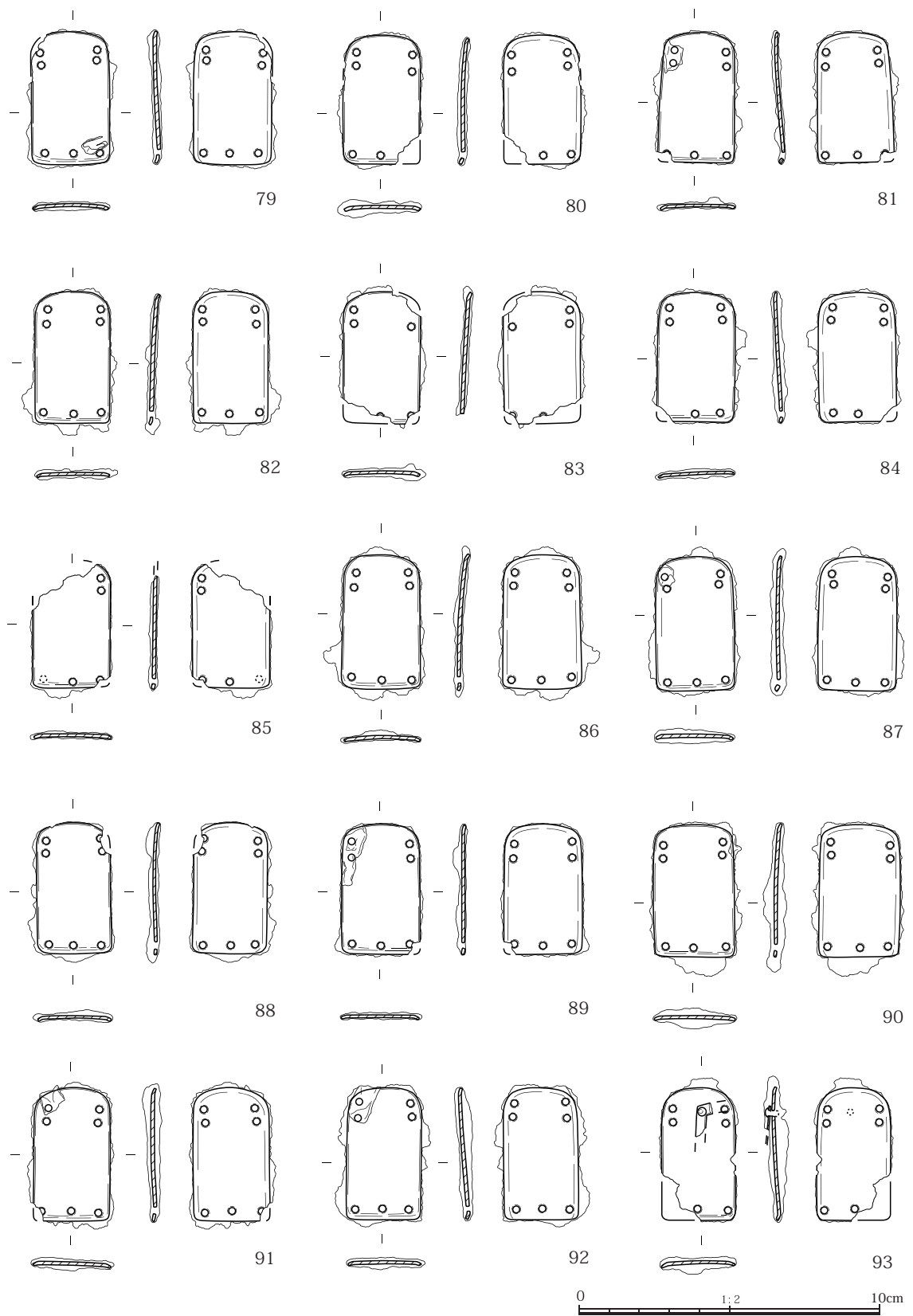
側辺に沿って孔が穿たれている個体が稀に含まれる(66)が、この孔の周辺には有機質等の遺存は



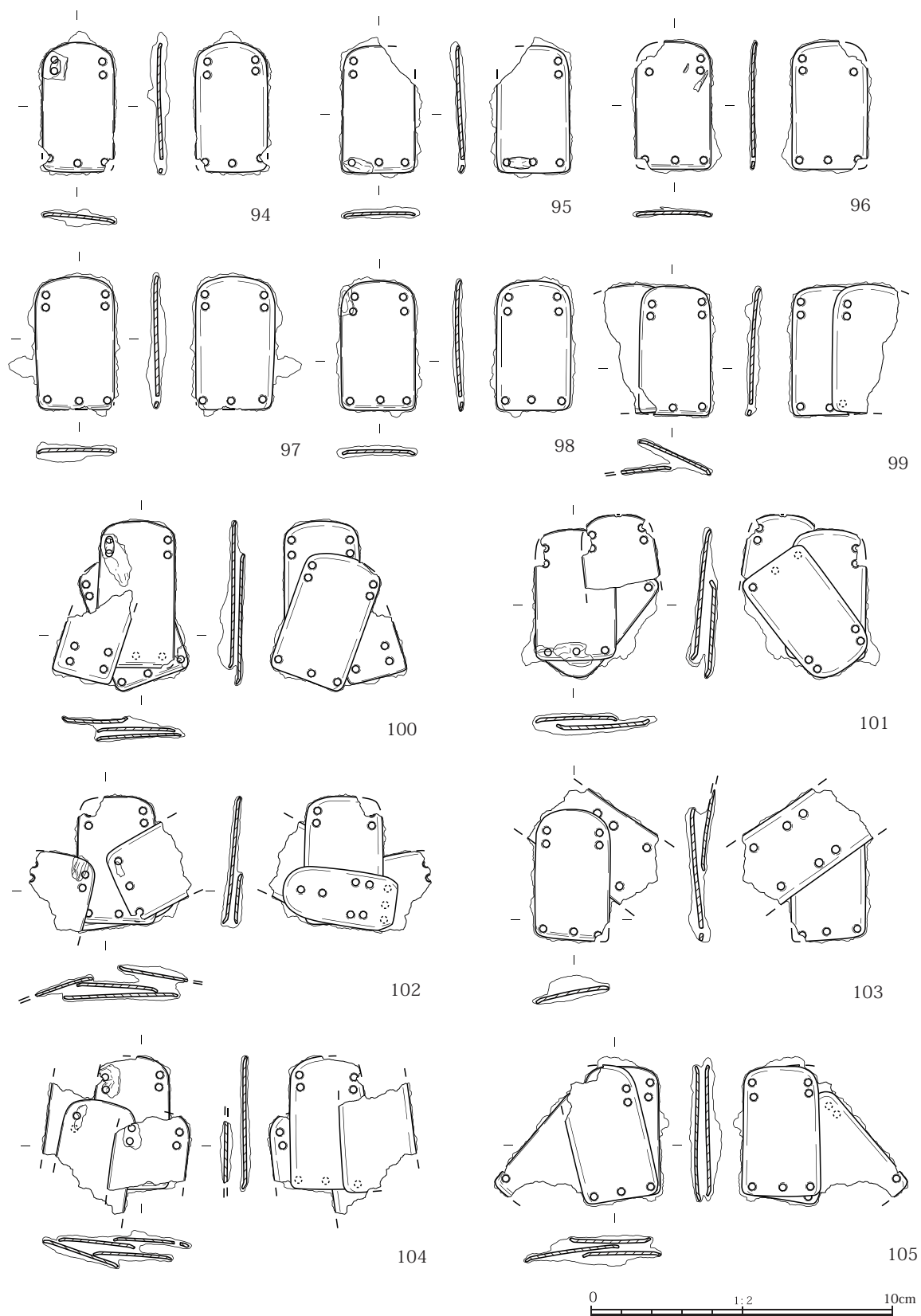
第56図 小札群実測図(6): 偏円頭小札A類(1)



第 57 図 小札群実測図 (7) : 偏円頭小札 A 類 (2)



第58図 小札群実測図(8): 偏円頭小札A類(3)



第 59 図 小札群実測図 (9) : 偏円頭小札 A 類 (4)

認められない。しかし、端部に何らかのものを固定・連結するための孔であると思われ、小札を連結した際の端部に使用されたものである可能性が高い。

1枚に遊離しているものが多く、小札の重なりや段数などについては不明な点が多い。

表面に龍文鍔帯金具が付着する個体があり（93、第82・83図）、帯金具がこの小札にともなうものであることを示している。また、小札の緘孔間に孔を穿つもの（52）があり、龍文鍔帯金具を固定するための孔の可能性もある。龍文鍔帯金具が付くものを腰部に充てることができるのであれば、この小札が、小札甲の腰札となる可能性が高い。

円頭小札A類（106～148） 43点を図化した。形態的特徴は、頭部が半円形を呈し、下端の両端が隅切りされる。頭部付近に1列に並んだ緘孔2孔、中位に2列に並んだ綴孔が4孔、札足付近に下捌孔3孔がそれぞれ穿たれる。全長5.0cm、最大幅2.5cm、厚さ1mmである。縦断面形は平坦であり、平札である。きめだし・かえしは明瞭に確認できる。法量にはややばらつきがある。

既述の2類型とは異なり、有機質の遺存状況は良好である。緘技法は、表面で上端からのびてきた緘紐が緘孔に入り（108・124・118・139）、裏面で立取となるもの（108・114・116・118・124・126・131・132・135・136・139）が確認でき、方頭小札A類と同じ通段緘技法a類をおこなっていることがわかる。綴技法は、いずれも表面で立取となる（106～108・110～113・120・139）が、裏面では綴紐が斜め方向にのびる（106・132・140）ものと、鋸歯状となるものとが存在する（111・115・131・132）。下捌技法は札足に革紐をらせん状に絡めるらせん状下捌技法をほどこすもの（108・121・131）と、革包覆輪をほどこしているもの（106・113・114・120・132・137～139・143）とが存在する。前者が草摺小札に、後者が草摺裾札にそれぞれ使い分けがなされていたものと想定される。なお、143では綴孔からのびた綴紐が下捌孔に入っている。これは、綴紐の端部を下捌孔に入れて覆輪として使用することで処理した可能性がある。

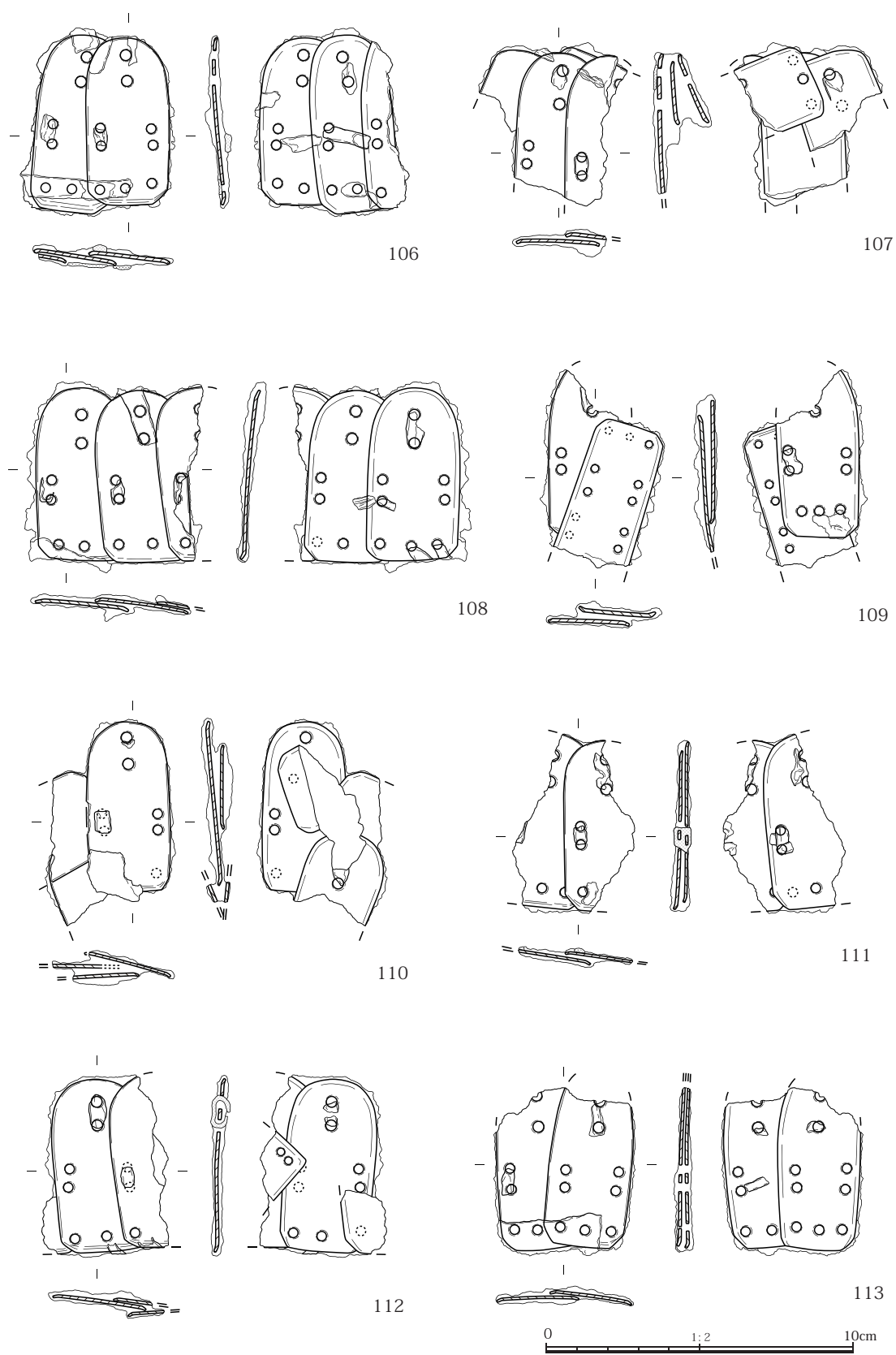
1枚に遊離したものは少なく、大部分は複数枚の小札が連結された状態のものである。さらには、ほかの小札が銹着しているものを確認することができる。つまり、小札甲の周辺に、ほかの付属具などが副葬されていたことを裏付けている。

小札塊（第65図） 石槨外出土小札甲の大部分が、現状でも1点の塊として遺存している。残存長47cmである。

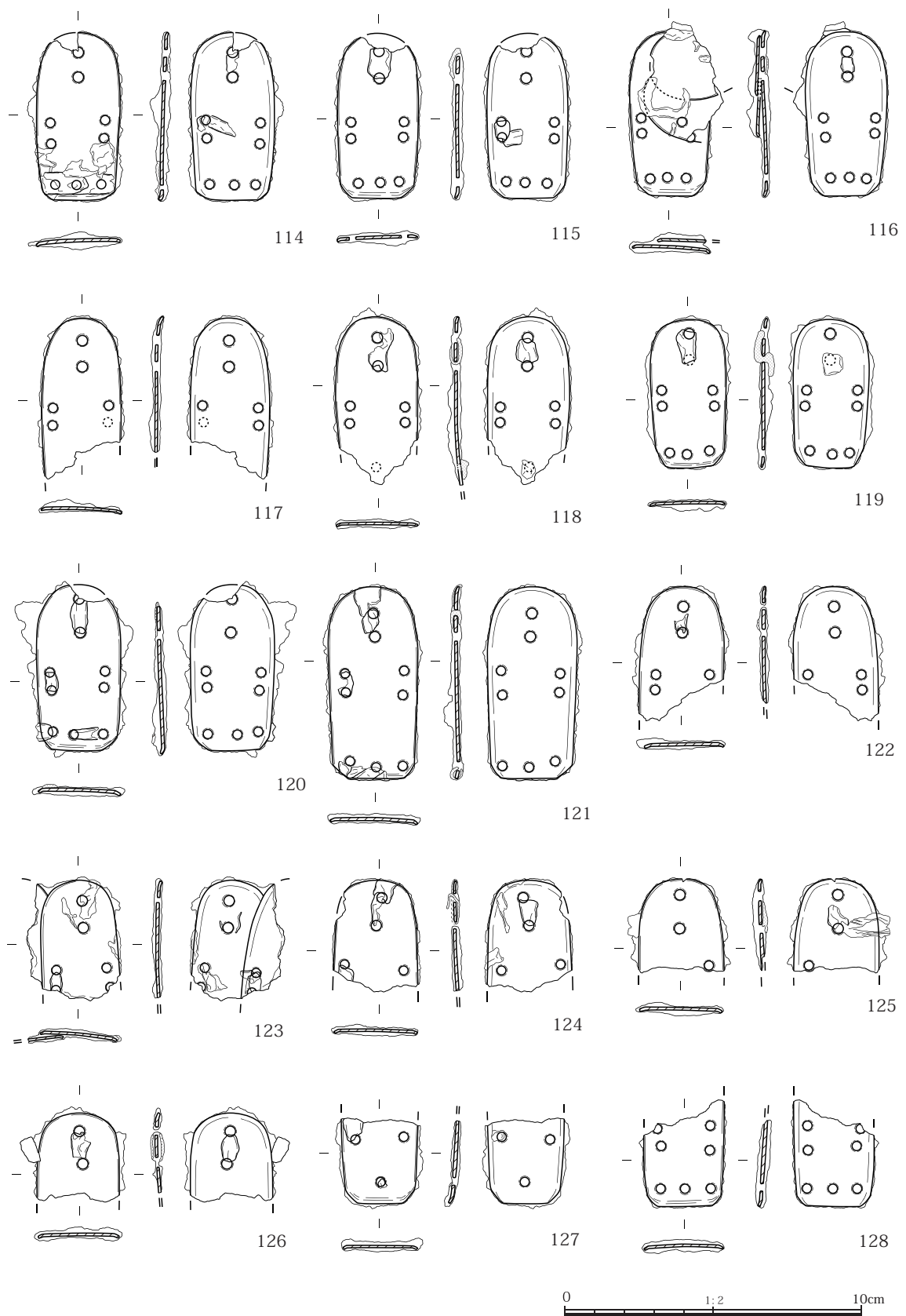
この小札塊を観察する限り、もっとも表面で確認できる小札は、円頭小札A類である。円頭小札A類は、3段以上で構成されていたものである可能性が高い。既述のように、円頭小札A類は、下捌孔にらせん状下捌技法と革包覆輪をほどこすものが確認できているため、小札甲の草摺に使用されているものと考えられよう。

クリーニング時にこの小札塊の中に金銅製品が含まれていることが確認された。この金銅製品は、X線画像の観察により龍文鍔帯金具であることが確認された。龍文鍔帯金具の項目でも述べているように、龍文鍔帯金具には偏円頭小札に銹着している個体があり、この小札塊から遊離したものであると考えられる。これらは、草摺である円頭小札A類の内側に位置しており、先述のように、腰部に使用された小札である可能性が高い。

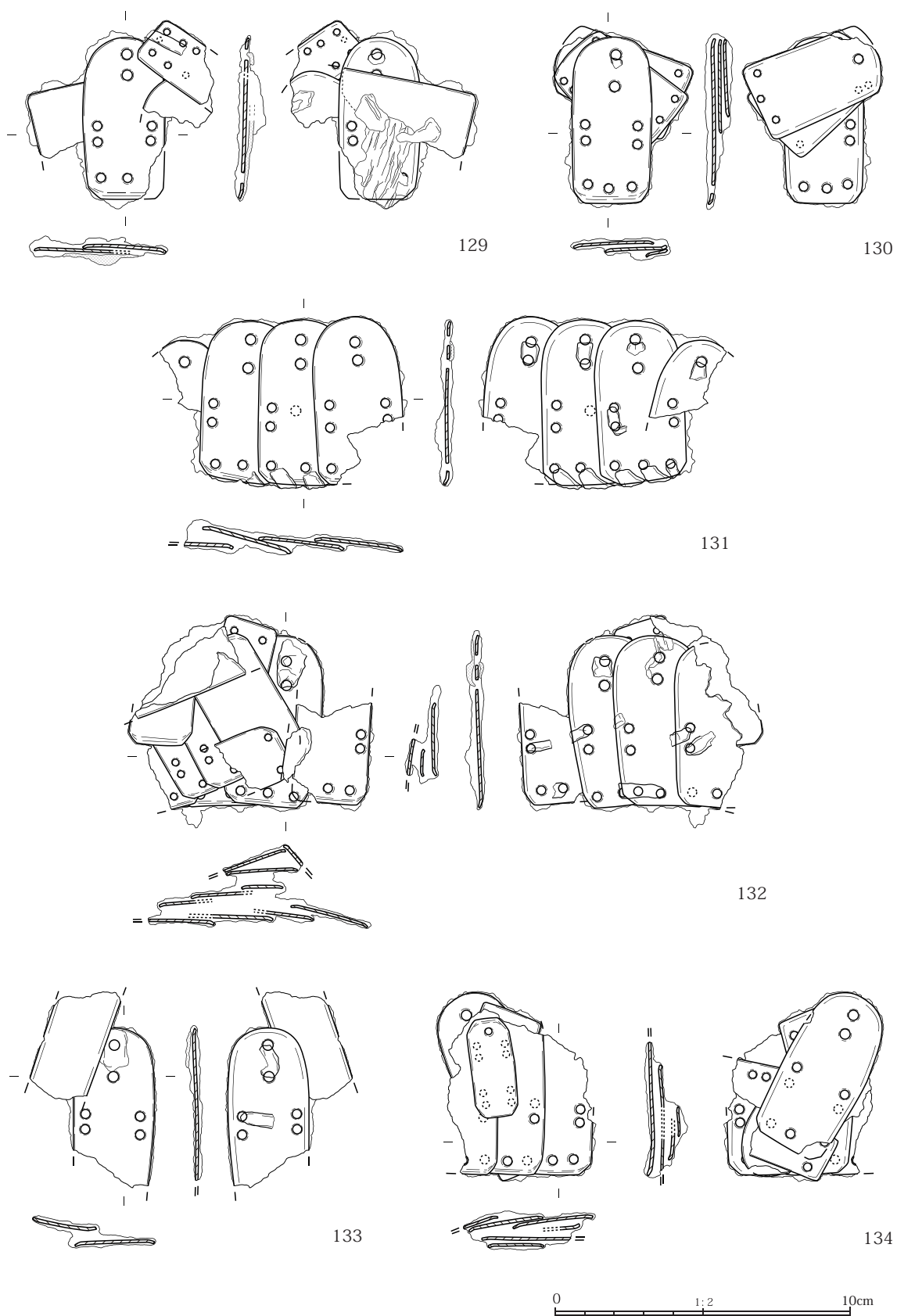
方頭小札B類（149～182） 34点を図化した。形態的特徴は、縦長の方形を呈し、上端・下端の四



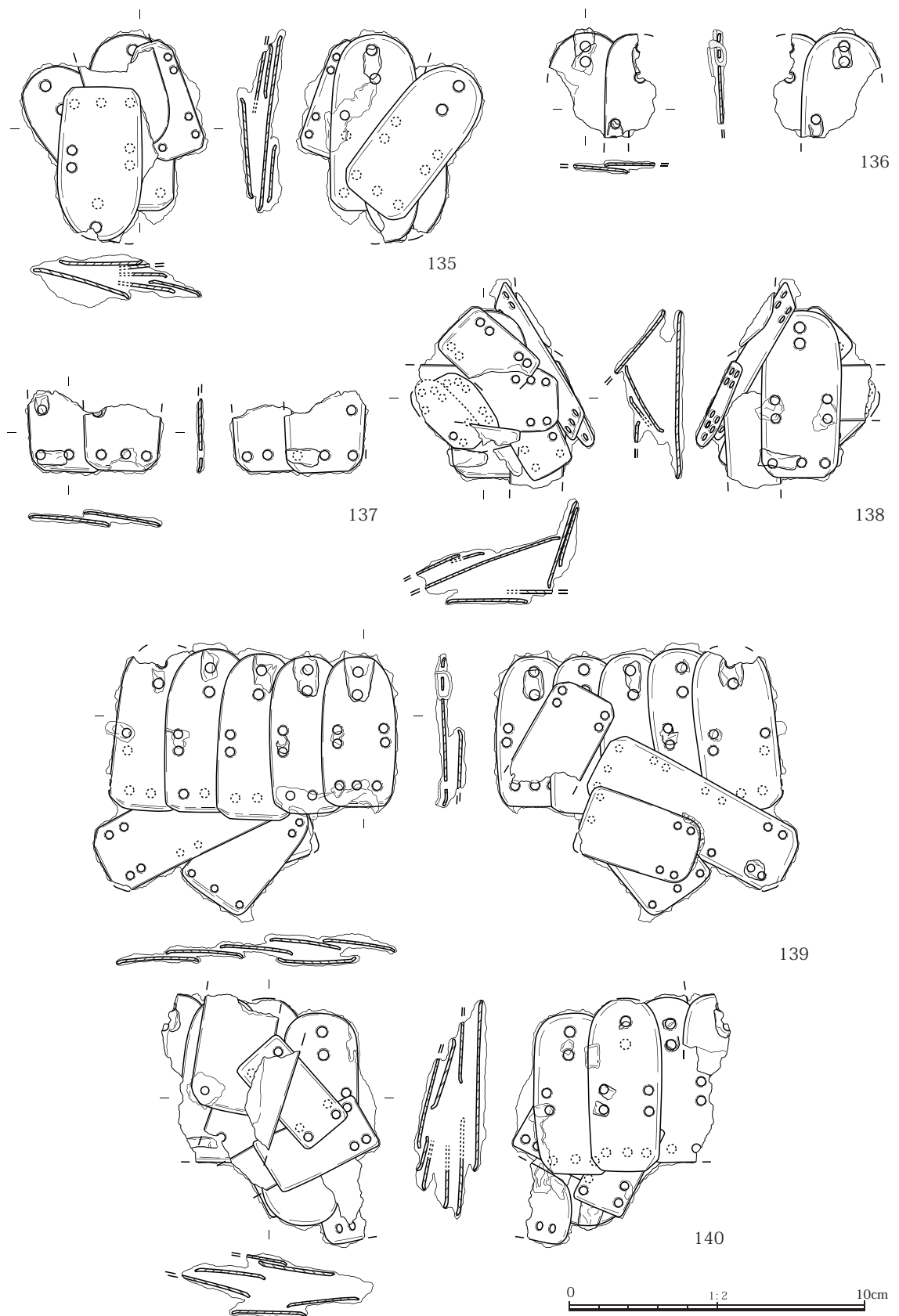
第 60 図 小札群実測図 (10) : 円頭小札 A 類 (1)



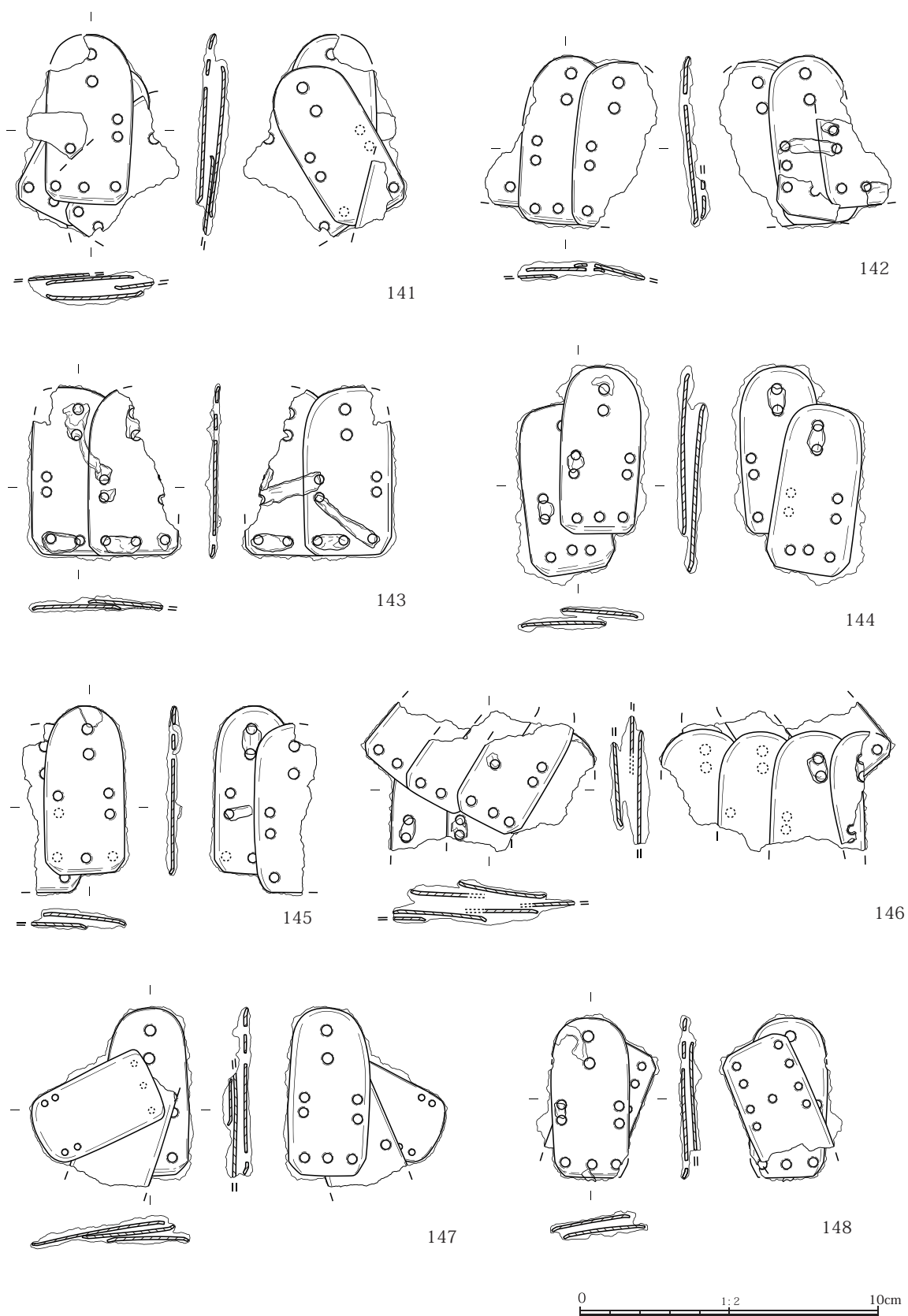
第61図 小札群実測図(11):円頭小札A類(2)



第 62 図 小札群実測図 (12) : 円頭小札 A 類 (3)



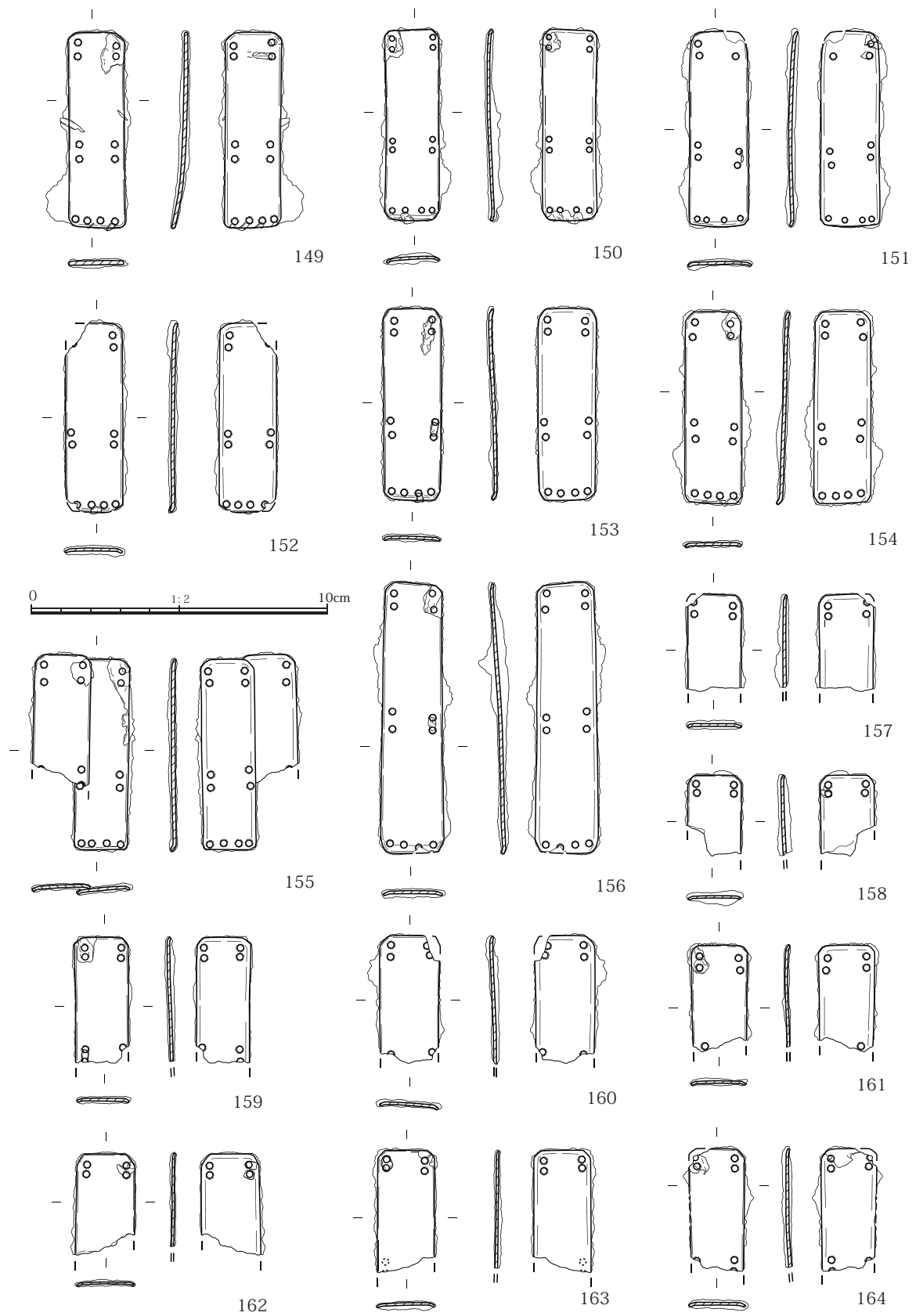
第63図 小札群実測図(13):円頭小札A類(4)



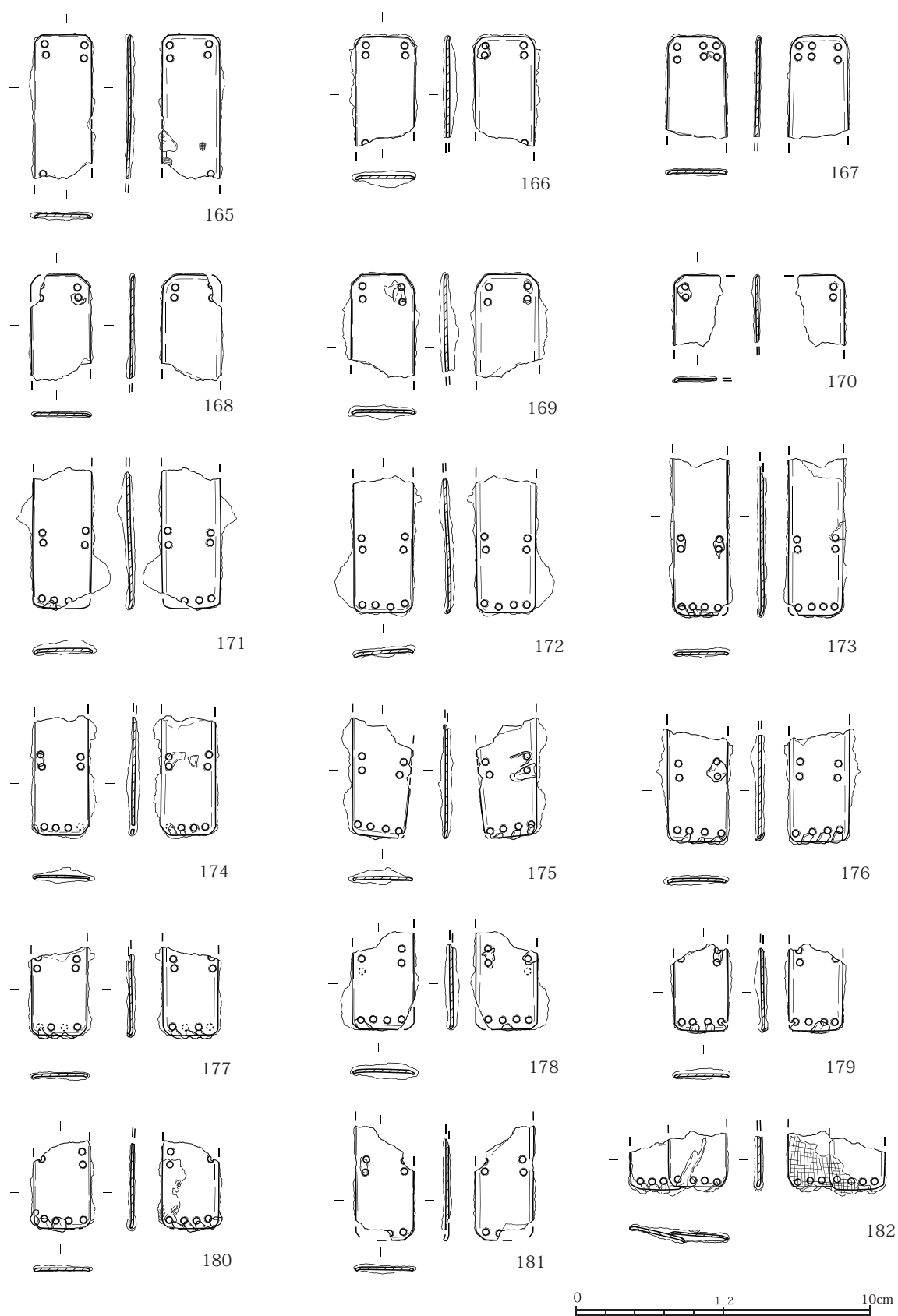
第64図 小札群実測図(14):円頭小札A類(5)



第 65 図 小札群実測図 (15) : 小札塊



第66図 小札群実測図(16):方頭小札B類(1)



第 67 図 小札群実測図 (17)：方頭小札 B 類 (2)

隅が隅切りされている。頭部付近に2列に並んだ緘孔が4孔、小札の中位に2列に並んだ綴孔が4孔、札足付近には下捌孔が4孔それぞれ穿たれる。167のみ頭部付近の穿孔が3列の計6孔となっている。全長6.6cm、最大幅1.9cm、厚さ1mmである。しかし、現状で確認しうる限り、1枚のみ全長9.1cm、最大幅2.1cm、厚さ1mmの大型のもの(156)がある。

連結用の革紐の遺存状況は良好ではない。しかし、緘技法については表面で立取となるもの(163・169)や幅広の緘紐が遺存するもの(149・150・154～156・159・161)があり、裏面で斜め方向にのびる緘紐が確認できる(149・151・162)ことから、綴付緘技法であるように思われる。綴技法は、表面で立取となり(153・156・159・173・174・176・179・181)裏面で斜め方向にのびるものが確認できる(175・178)。下捌技法は、小札の札足に革紐をらせん状に絡めるものがあり(149・150・171・173～180)、らせん状下捌技法であることが確認できる。

現状では1枚に遊離している小札が多く、複数枚が連結した状態のものは極めて少ない。現状では、小札の重ねは、右上重ねと左上重ねの両者が存在する。

ほかの小札と銕着するものも存在しないため、どのような状態で副葬されていたかは不明である。

方頭小札C類(183～199) 17点を図化した。形態的特徴としては、方形を呈するが、上端・下端の四隅は隅切りされない。頭部付近に2列に並んだ緘孔が4孔、その下に2列に並んだ綴孔が4孔それぞれ穿たれる。全長3.7cm、最大幅2.0cm、厚さ1mmである。小札の縦断面形が平坦である平札である。きめだし・かえしを明瞭に確認できる。

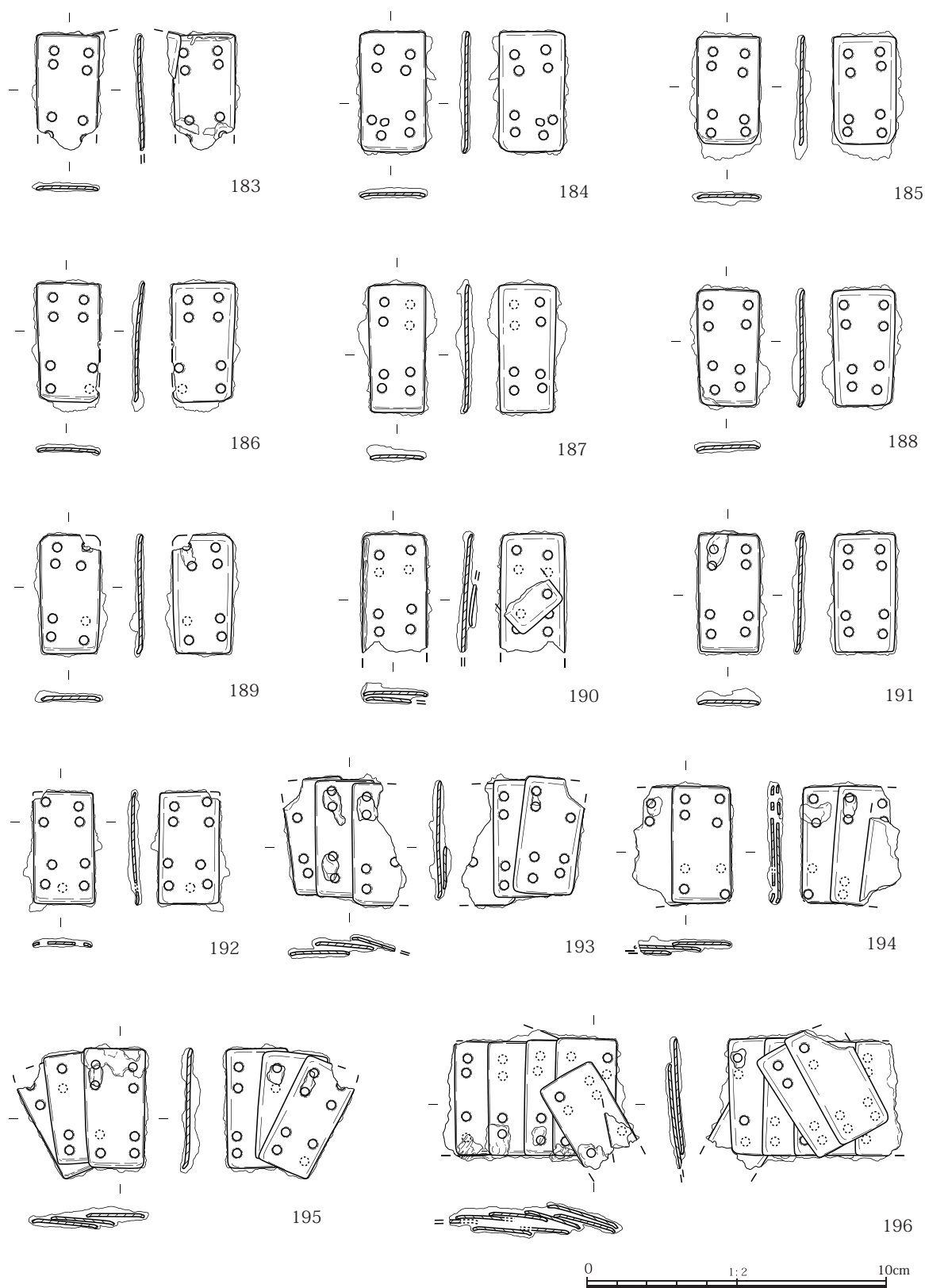
小札を連結する緘技法や綴技法、下捌技法などについては、良好に観察できるほど遺存しているとは言いがたい。しかし、緘技法については、上段より続く緘紐が小札の緘孔の下孔に入るものや、裏面で立取となるものがあり、表面においても緘孔間に遺存するもの(191・193・199)や、裏面で立取となるもの(189・193～195)が存在するため、通段緘技法a類であると考えられる。綴技法については、表面で立取となるもの(193・199)が確認できるが、裏面では確認できていないため不明である。下捌についてはほとんど確認することができなかった。

現状では1枚に遊離している小札も多いが、複数枚の小札が連結された状態で遺存するものも存在する。複数枚が連結された状態のものについてみれば、小札の重ねは右上重ねである。

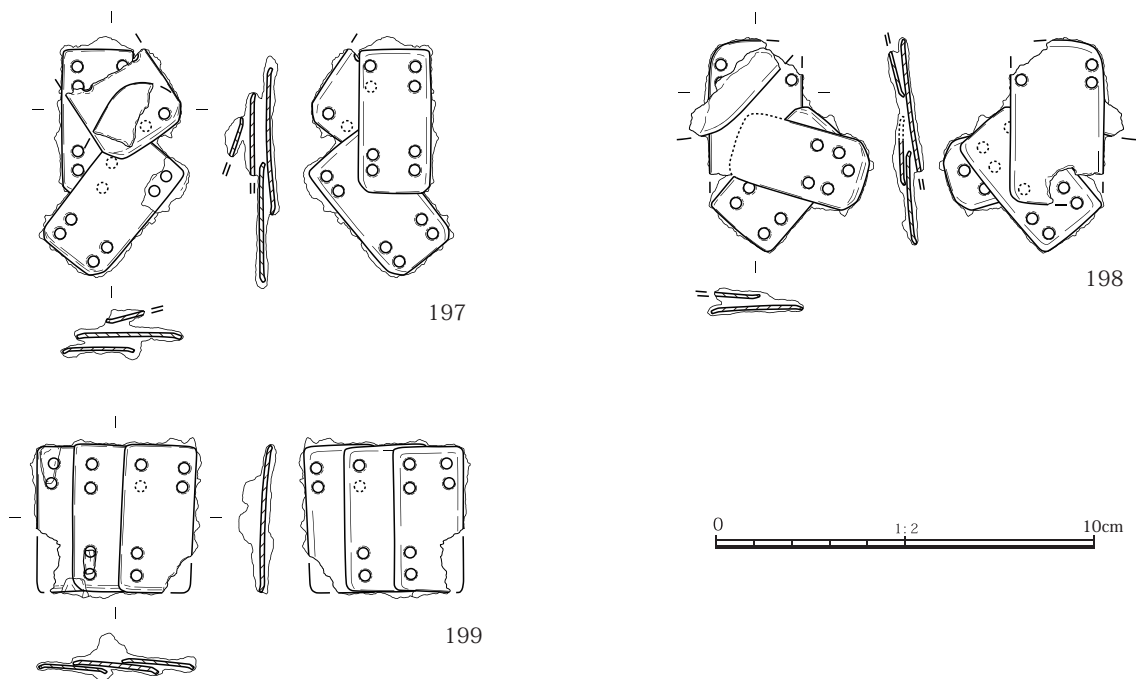
ほかの類型の小札との銕着関係をみると、偏円頭小札A類や方頭小札D類と銕着している個体が確認できる(198・257)。方頭小札C類で構成される武具がこれらの近くに副葬されていたと考えられるが、いずれも銕着している方向に統一性がない。そのため、遊離した小札同士が銕着したものである可能性が高い。

方頭小札E類(200～202) 3点を図化した。形態的特徴は、頭部が方形を呈し、上端・下端の四隅が隅切りされる。頭部付近に2列に並んだ緘孔が4孔、その下に2列に並んだ綴孔が6孔、札足付近に下捌孔3孔がそれぞれ穿たれる。全長6.0cm、最大幅2.2cm、厚さ1mmである。縦断面形が平坦な平札である。きめだし・かえしは明瞭に確認できる。

小札を連結する緘技法や綴技法、下捌技法などについては、確認できるものが比較的多く遺存している。緘技法は、裏面で立取となるものがあり通段緘技法a類である可能性が高い。緘紐は、幅7mmの革紐を用いていることが確認できる(200)。綴技法は表面で立取となるものがあるが、裏面では確認で



第 68 図 小札群実測図 (18) : 方頭小札 C 類 (1)



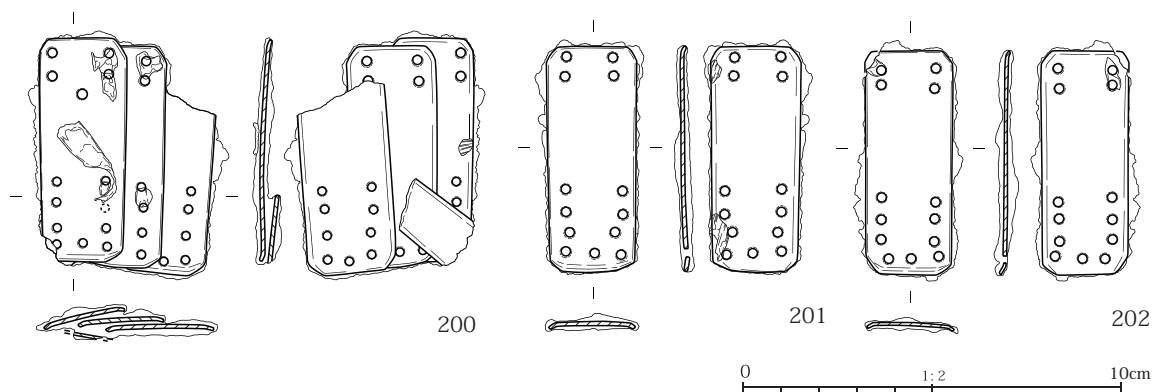
第69図 小札群実測図(19)：方頭小札C類(2)

きていない。下捌技法は確認することができなかった。

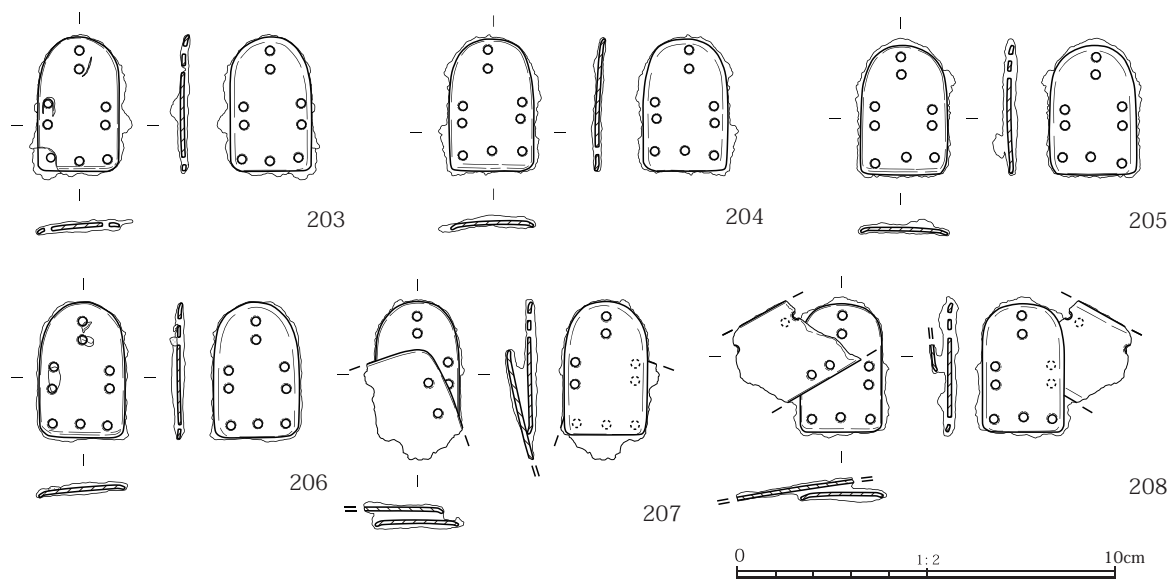
現状では1枚に遊離しているものと、複数枚の小札が連結された状態で遺存するものが確認できる。複数枚が連結された状態のものについてみれば、小札の重ねは左上重ねである。重ねが確認できるものは1点のみであり、方頭小札E類全体が左上重ねであるかどうかは明らかにし得ない。

一部の個体には木質が付着している(201)。ほかの副葬品に由来する木質が付着したか、竪穴式石槨外の埴輪下出土の副葬品が木箱に収められていた可能性が考えられるが、現状では判断できない。

円頭小札B類(203～208) 6点を図化した。形態的特徴は、頭部が半円形を呈し、下端部両端が隅切りされている。頭部付近に1列に並んだ緘孔が2孔、その下に2列に並んだ綴孔が4孔、札足付近に下捌孔3孔がそれぞれ穿たれる。全長3.5cm、最大幅2.2cm、厚さ1mmである。円頭小札A類に比べて法量が小さい。縦断面形は平坦な平札である。きめだし・かえしは明瞭に確認できる。



第70図 小札群実測図(20)：方頭小札E類



第71図 小札群実測図(21): 円頭小札B類

小札を連結する技法などについては、現状では明らかではない点も多い。緘技法・綴技法については、表面で立取となると思われる(203・206)が、裏面では確認できていない。下捌技法については、203は草包覆輪である可能性があるが、現状では確定するには至っていない。

複数枚が連結しているものは確認できておらず、全て1枚に遊離している。ほかの小札との銹着関係については、208は方頭小札A類と銹着している。207で銹着している小札は、どの類型の小札か明らかにし得ない。

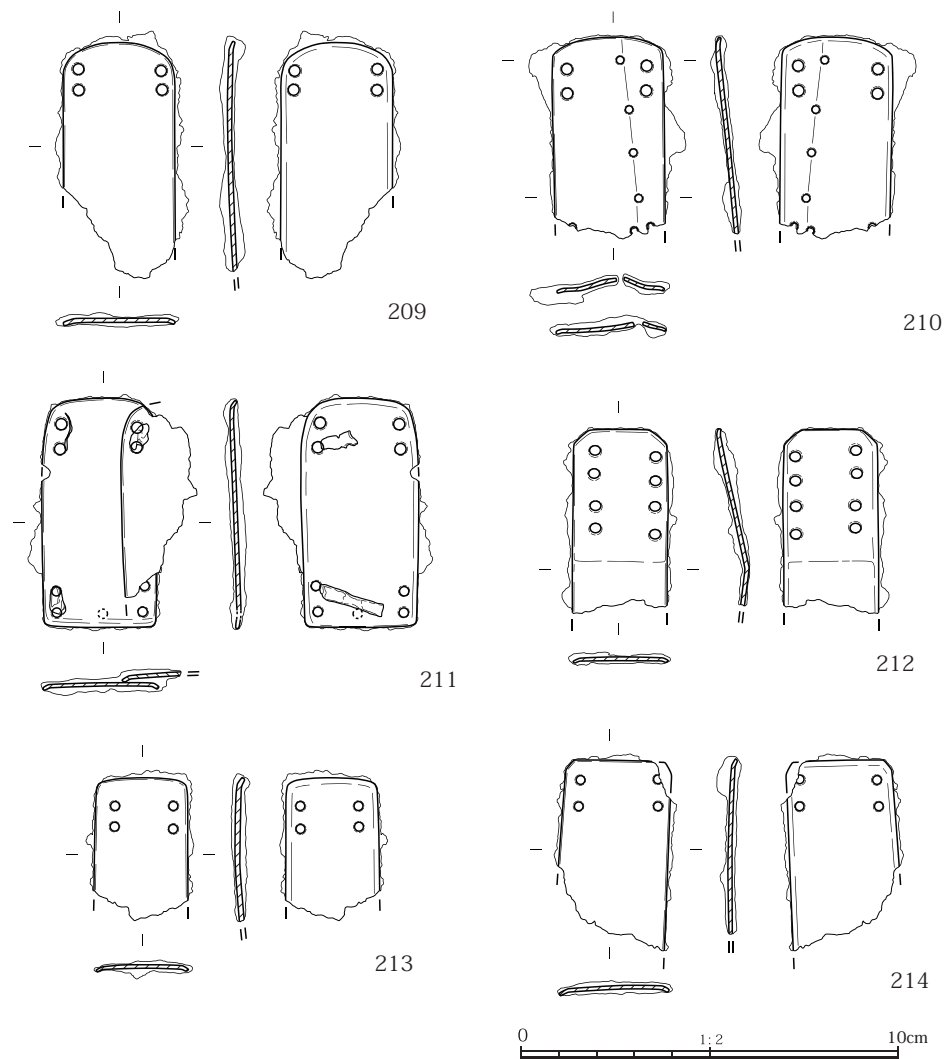
方頭小札F類(212) 1点を図化した。形態的特徴は、頭部が方形を呈し、頭部両端が隅切りされる。頭部付近に2列に並んだ緘孔が4孔、その下に2列に並んだ綴孔が4孔穿たれる。下半部は欠損しており不明である。残存長4.9cm、最大幅2.4cm、厚さ1mmである。縦断面形に明らかな屈曲点を持つ。腰札とする見方もできるが、日本列島で多く確認されるΩ字形腰札とこの屈曲を比べると、この個体の屈曲方向は逆であり、腰札と断定できるものではない。土圧などにより屈曲した可能性も捨てきれない。

連結技法については、遺存状況が良好ではないため、確認することができなかった。

偏円頭小札B類(210・211) 2点を図化した。形態的特徴は、頭部が偏円形を呈する。頭部に2列に並んだ緘孔が4孔、札足付近に2列に並んだ綴孔が4孔、その中央に下捌孔が1孔穿たれる。綴孔のうち、下捌孔と並ぶ孔は綴と下捌の両方に使用された可能性があるが、現状では明らかにできていない。全長6.0cm、最大幅3.1cm、厚さ1mmである。きめだし・かえしは明瞭に確認できる。

211の草紐の遺存状態は比較的良好である。緘技法については、表面で立取となり裏面で斜め方向にのびている。これから判断すれば綴付緘技法であるとみられる。綴技法は、表面で立取となり裏面で斜め方向にのびており、斜行状綴技法である。下捌技法については、遺存しておらず明らかにし得ない。

211については湾曲を持たない平札であることが確認できるが、210については、小札の縦軸上に屈曲点を持ち、この屈曲上に等間隔に孔が穿たれている。このような例は、朝鮮半島出土の小札などにも認められるものであるが、この穿孔の用途については、現状では明らかにし得ない。



第72図 小札群実測図(22)：方頭小札D類・偏円頭小札B類・その他の小札

その他の小札(209・213・214) 欠損のため全体の形状が不明な小札3点を図化した。

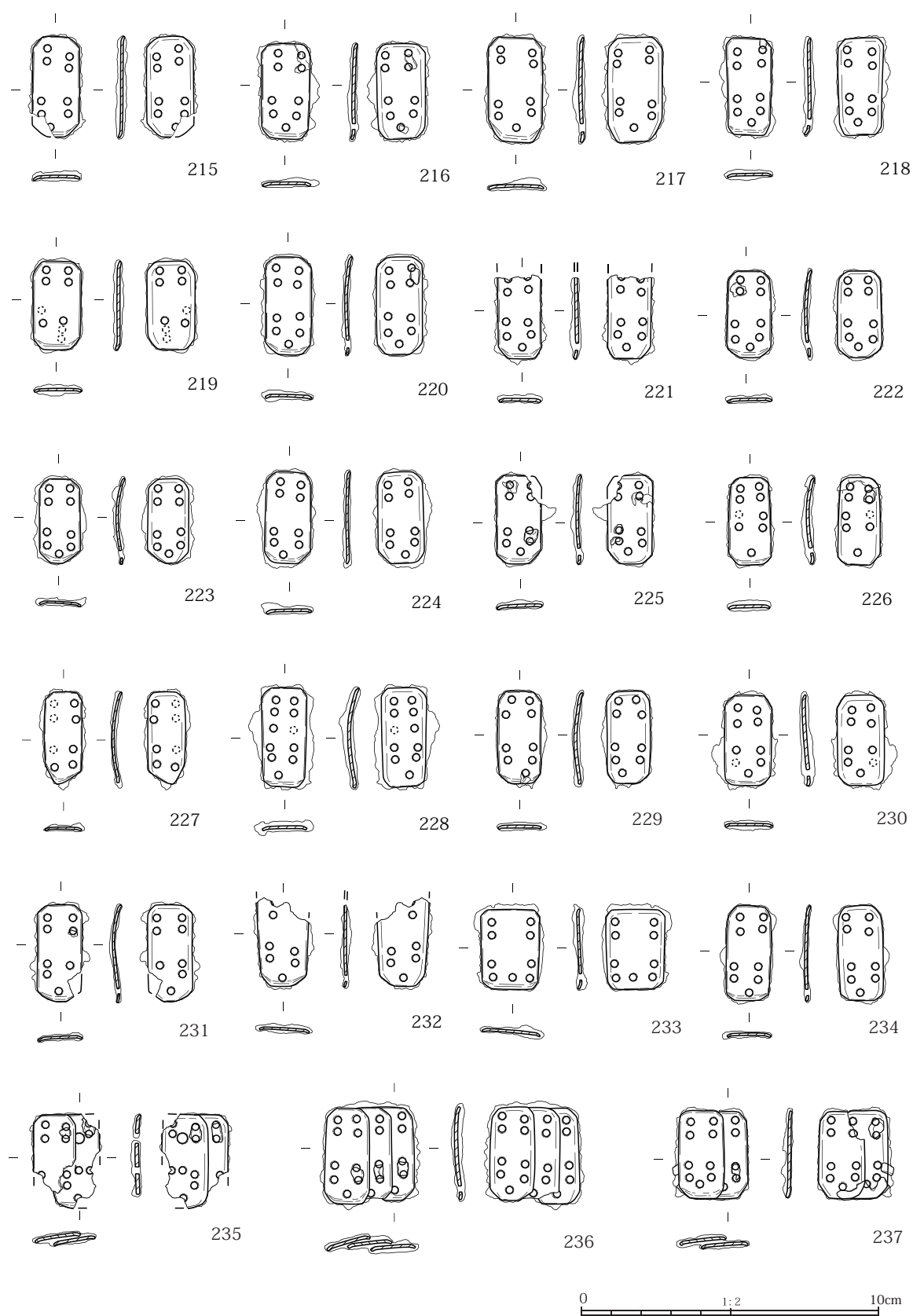
209は頭部が偏円形を呈する小札である。下半部は欠損しており不明である。残存長6.2cm、最大幅2.9cm、厚さ1mmである。頭部には、2列に並んだ緘孔が4孔穿たれているが、緘紐は確認できなかった。縦断面形は平坦な平札である。

213は頭部がやや丸みを持った方形を呈する小札である。下半部は欠損しており不明である。残存長3.7cm、最大幅2.4cm、厚さ1mmである。頭部には2列に並んだ緘孔が4孔穿たれているが、緘紐の遺存は確認できなかった。縦断面形はやや湾曲するようである。

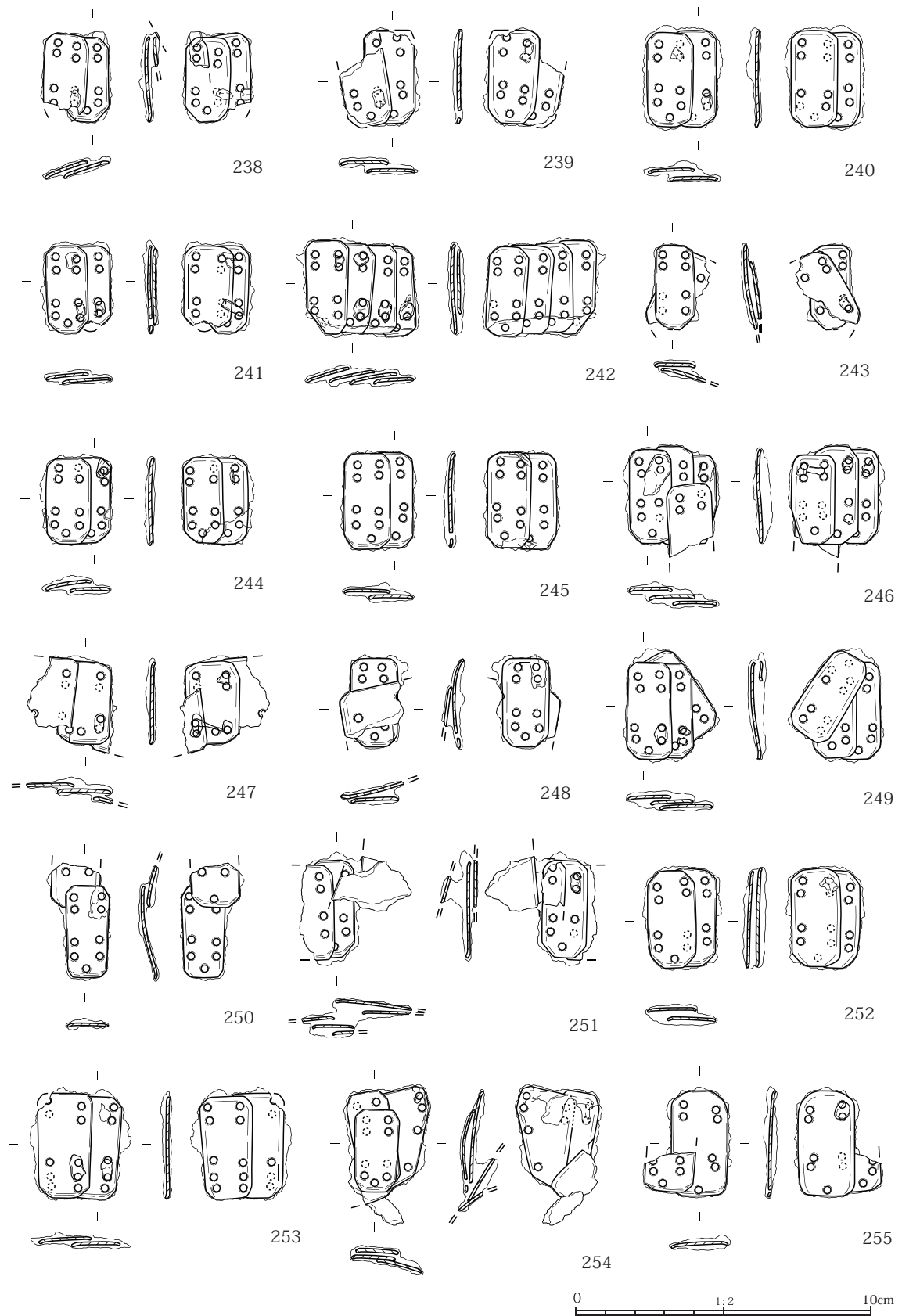
214は頭部が方形を呈し、頭部両端が隅切りされるとみられる。下半部は欠損しており不明である。残存長4.9cm、最大幅2.8cm、厚さ1mmである。頭部には2列に並んだ緘孔が4孔穿たれているが、緘紐の遺存は確認できなかった。縦断面形は平坦な平札である。

方頭小札D類(215～255) 41点を図化した。形態的特徴としては、頭部が方形を呈し、上端・下端の四隅が隅切りされる。下端の隅切りは上端の隅切りよりも大きい。頭部付近に2列に並んだ緘

2 武 具



第73図 小札群実測図(23):方頭小札D類(1)



第74図 小札群実測図(24):方頭小札D類(2)

孔が4孔、その下に2列に並んだ綴孔が4孔、札足付近に下捌孔1孔がそれぞれ穿たれる。全長2.8cm、最大幅1.5cm、厚さ1mmである。縦断面形が平坦な平札である。以上の形状・穿孔を基本とするが、中には法量が異なるものや穿孔位置が異なるもの、隅切りに偏りがみられるもの、縦断面形がやや湾曲するものが存在し、バリエーションがある。きめだし・かえしは明瞭に確認できる。

小札を連結する緘技法や綴技法、下捌技法などを確認できるものが比較的多くある。緘技法は、裏面で立取となるもの(226・235・237・239・246・251・255)があり、通段緘技法a類である可能性が高い。綴技法は、表面で立取となるもの(225・236～242・247・249・253)が多くあるが、裏面では斜め方向に綴紐がのびるもの(237・241)と鋸歯状となるもの(247)がある。下捌技法は、いずれも革で小札の札足を包むもの(237・242・244)が確認できるのみであり、革包覆輪技法であったものと考えられる。

現状では1枚に遊離している小札と、複数枚の小札が連結された状態で遺存する小札が確認できる。複数枚が連結された状態のものについてみれば、小札の重ねは左上重ねである。しかし、1枚に遊離した小札の中には、緘技法・綴技法の立取が右上重ねを示すものもあり、右上重ね・左上重ねの両者が存在していたものと考えられる。

小札錆着個体(256～266) 複数類型の小札が錆着した状態のものである。出土時の状態を保っているため、小札のセット関係を一定程度想定することができる一方、錆や重なりのためX線画像などでも詳細が不明な点が多い。

257ではこの小札甲の主体となる方頭小札A類・偏円頭小札A類・円頭小札A類が一つの塊として錆着しており、近しい部位に存在したことが裏付けられる。さらに258ではそれに付属具としての篠状鉄札や小型の小札などがともなう状況が見て取れる。

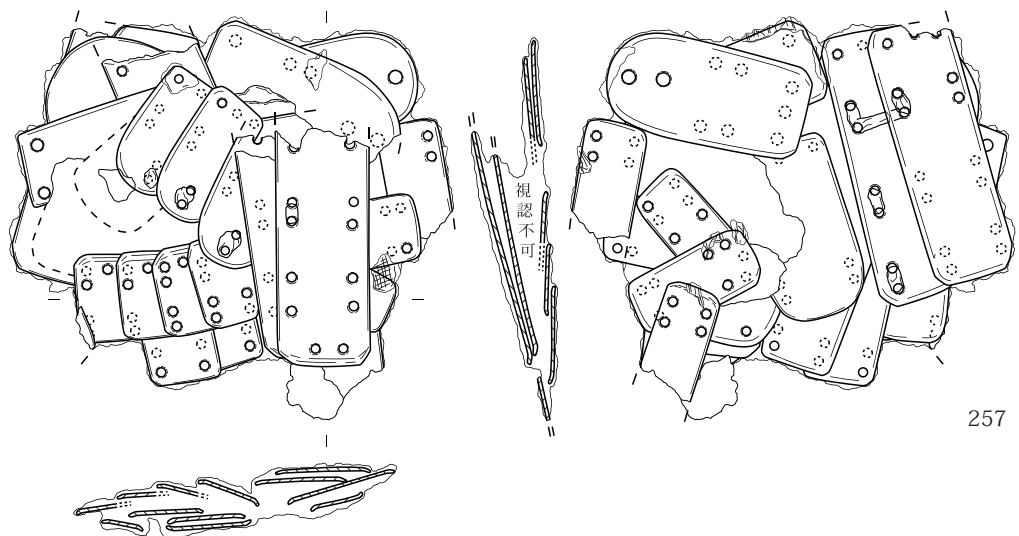
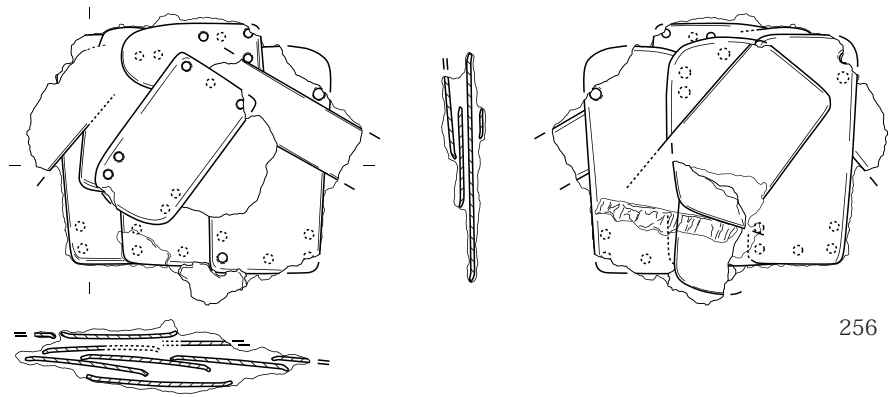
ただし、これらの個体について一部では小札の列や段が確認できるものの、小札の上下・表裏が一致しないものも多く、散乱した状態で錆着したものと思われる。

裏面に木質の遺存するもの(256・259・263・265)が多く、小札甲の周辺に木質を用いた製品が存在したことを示している。後述する飾金具(第85図7)では一部に木質の存在が認められ、候補の一つとして考えられる。ただし、これらの小札の詳細な出土位置は不明なため、確定は難しい。

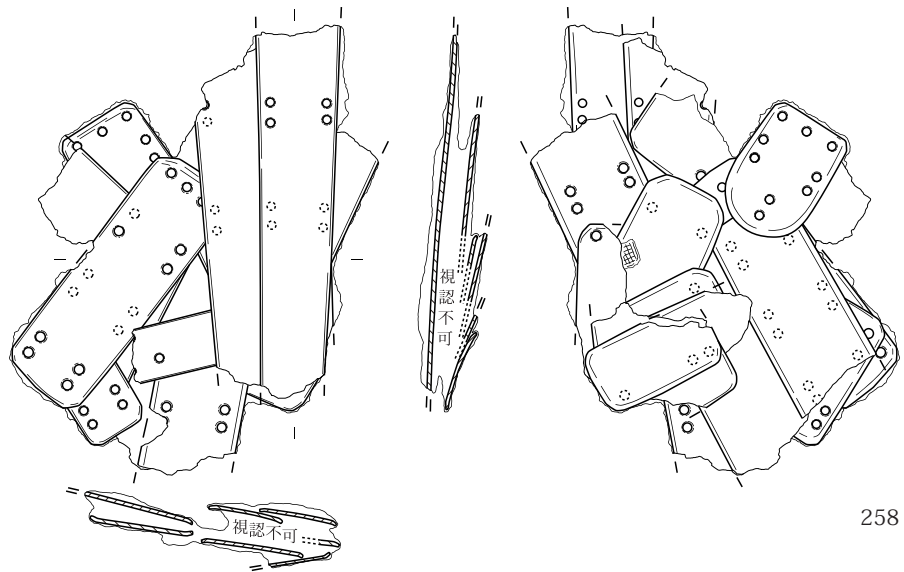
② 臚 当(図版85～88 第78～81図)

篠状鉄札(267～300) 34点を図化した。形態の特徴は、頭部が半円形を呈し、下端部両端が隅切りされる。完形のもの1点のみだが(267)、全長19.3cm、最大幅2.3cm、厚さ1mmである。本墳より出土した小札の中でもっとも大型である。縦断面形は中央部分が内反りにやや湾曲している。頭部付近には1列に並んだ緘孔が2孔、その下に2列に並んだ綴孔4孔が2箇所があり、札足付近に緘孔1孔と下捌孔2孔がそれぞれ穿たれる。札足付近に穿たれた緘孔・綴孔・下捌孔については、ややバリエーションがある。

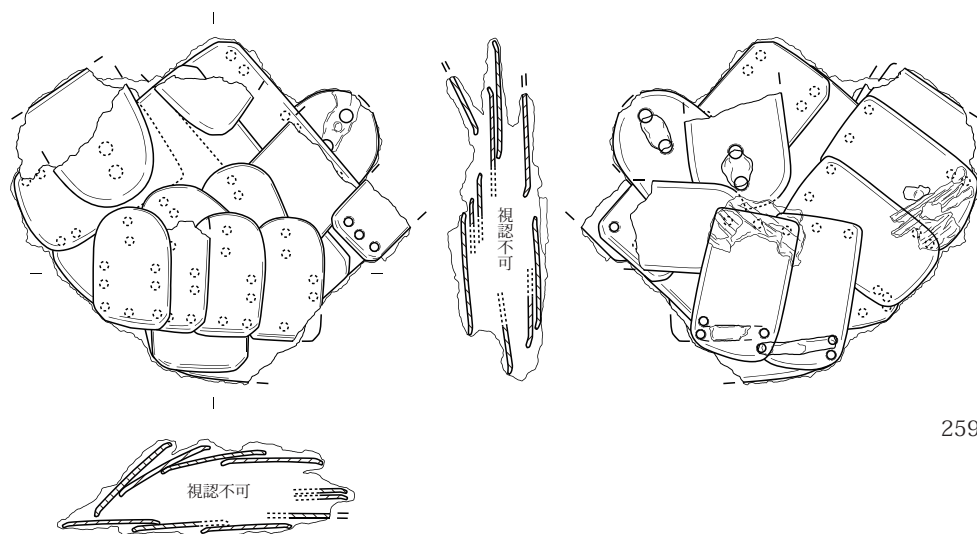
篠状鉄札を連結する技法などについては、現状では明らかではない点も多い。緘技法については、現状ではほとんど確認できていない。綴技法については、表面で立取となるものがあり(269・281・282・289)、裏面でも立取となるもの(273・282・283・296)や横方向にのびる革紐が確認できる



0 1:2 10cm

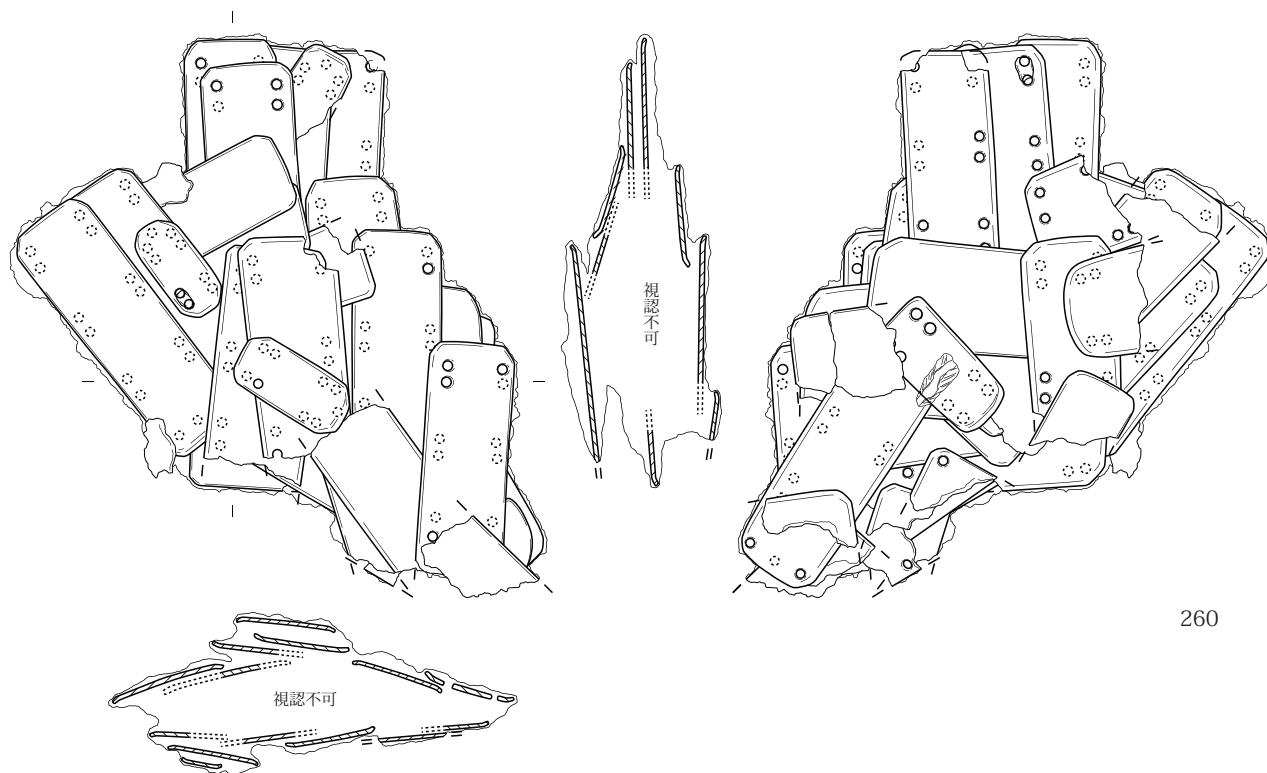


第75図 小札群実測図(25):小札鏽着個体(1)



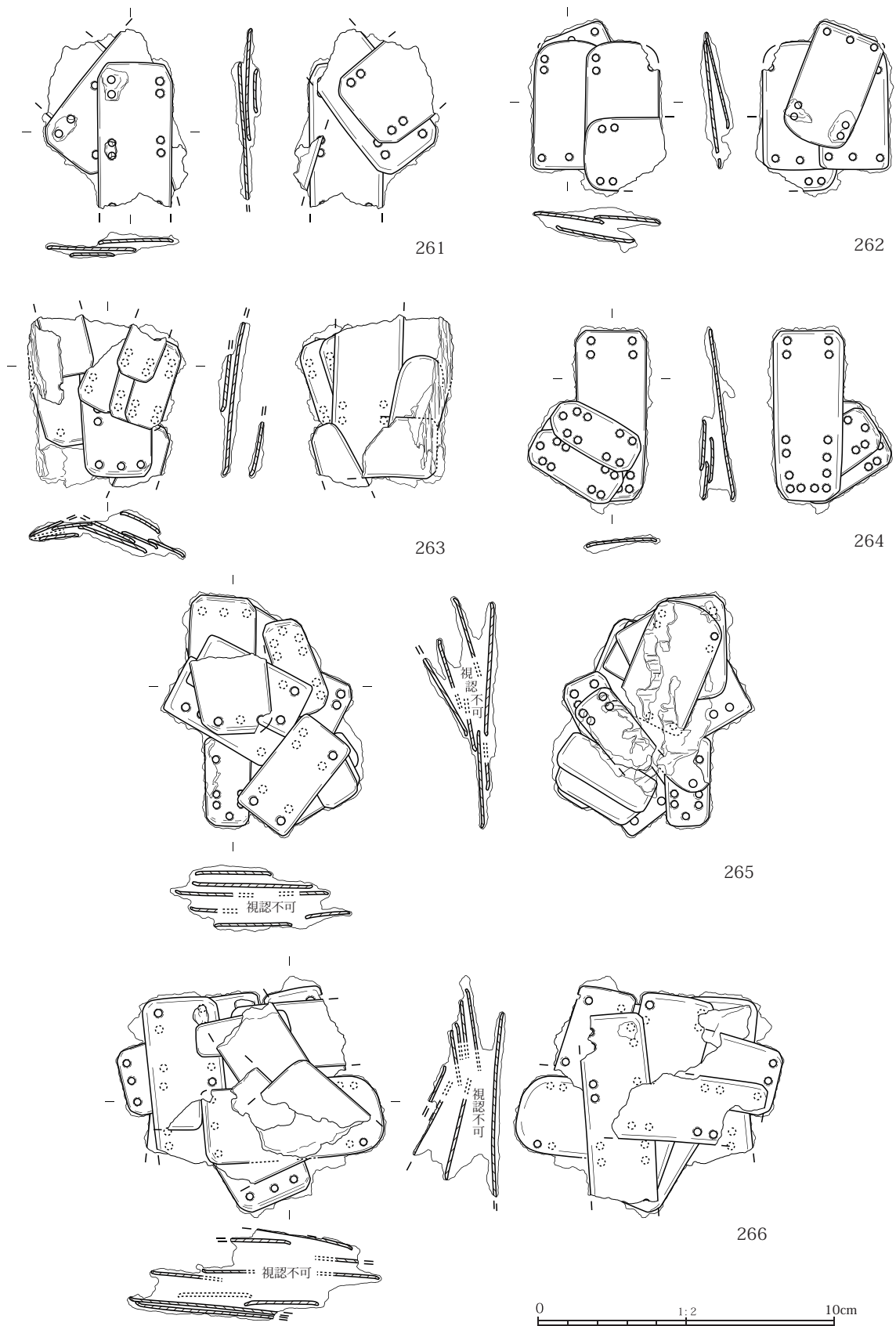
259

0 1:2 10cm



260

第 76 図 小札群実測図 (26) : 小札錆着個体 (2)



第77図 小札群実測図(27):小札鏽着個体(3)

もの（288・300）があり、方頭小札A類と同様、裏面で凸凹状になる綴技法である可能性が高い。下拵技法については不明である。篠状鉄札の側辺には革包覆輪をほどこすものが存在しており（279・285）、これらが篠状鉄札を連結した際の側端部に位置するものと思われる。

この篠状鉄札は、臙当に使用されるものと思われる。連貫状態となる場合、篠状鉄札の上段および下段には小型の小札が連貫されるが、現状ではこの小型の小札がどの類型の小札であるのか、断定することは難しい。同種の篠状鉄札を出土している滋賀県新開1号墳、福岡県稲童21号墳などでは、篠状鉄札と同様の円頭緘孔1列の小札が篠状鉄札にともなっている〔西田・鈴木・金関1961、山中2005〕。この点を重要視すれば、この篠状鉄札にともなう小札は、円頭小札B類である可能性が考えられるが、篠状鉄札に円頭小札B類が銕着したものは確認されていない。現状で篠状鉄札に銕着している小札は、方頭小札A類（290）や方頭小札D類（293）など、方頭小札に限定される。唯一258で両者が銕着しているが、他の類型の小札も多くみられるため関係は確定できない。

なお、この篠状鉄札は、小札塊にも銕着していることを確認している。小札甲と篠状鉄札のセット関係を示すものである。

小型篠状鉄札（301～321） 21点を図化した。竪穴式石槨内出土小型篠状鉄札と同型である。形態の特徴は、頭部が半円形を呈し下端部両端が隅切りされる。完形のものはない。現在確認できるもののうち、もっとも遺存状況が良好なものは、残存長5.4cm、最大幅1.3cm、厚さ1mmである。縦断面形は、中央部分が内反りにやや湾曲しているようである。頭部付近には1列に並んだ緘孔が2孔、その下に2列に並んだ綴孔4孔が、札足付近には緘孔1孔、2列に並んだ綴孔4孔、下拵孔1孔がそれぞれ穿たれる。札足付近に穿たれた緘孔については、やや位置が異なるものも存在するようである。一部には緘孔が2孔穿たれ、その2孔同士がつながって孔が大きくなっているものも見受けられる。

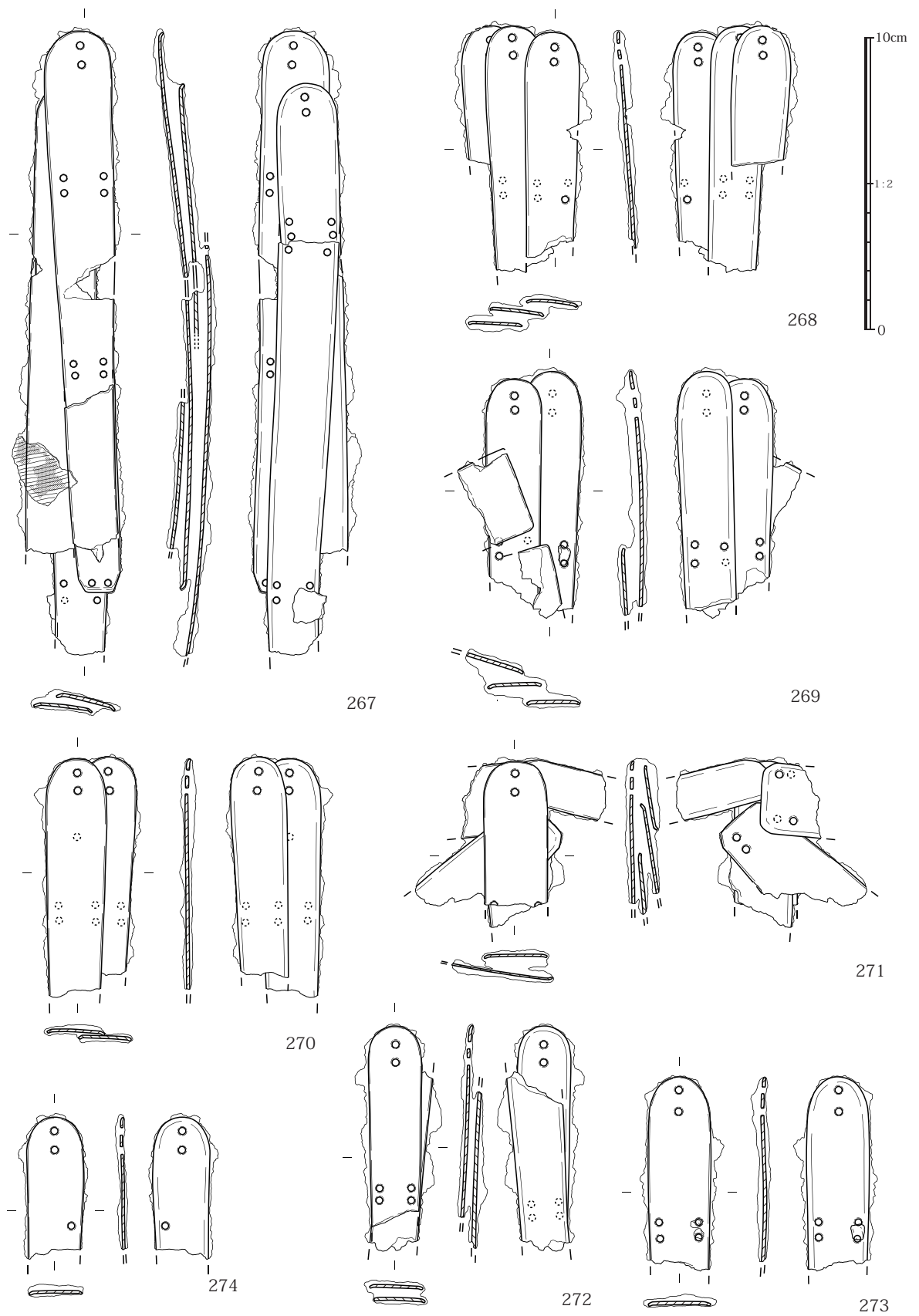
小型篠状鉄札を連結する技法などについては、現状では明らかではない点も多い。頭部の緘孔にほどこされる綴技法には表面で立取となるもの（306～308）が存在するが、裏面の状況については不明であるため、技法を確定することはできない。綴技法については、頭部近くの綴孔では表面で立取となるもの（303・308・311）があり、裏面で鋸歯状となる綴技法である（304・311）。下拵技法については、全体的に遺存状況が良好ではないため、確定は難しい。

小型篠状鉄札についても、篠状鉄札同様、ほかの類型の小札が上下にともなう可能性がある。小型篠状鉄札の緘孔の孔間距離は、頭部・札足の緘孔ともに約6mmである。これと最も近い孔間距離を持つ小札は、方頭小札D類であり、これが小型の篠状鉄札にともなう小札の候補と考えられる。しかし、小型篠状鉄札と方頭小札D類が銕着する個体が存在していないため、確定することは難しい。

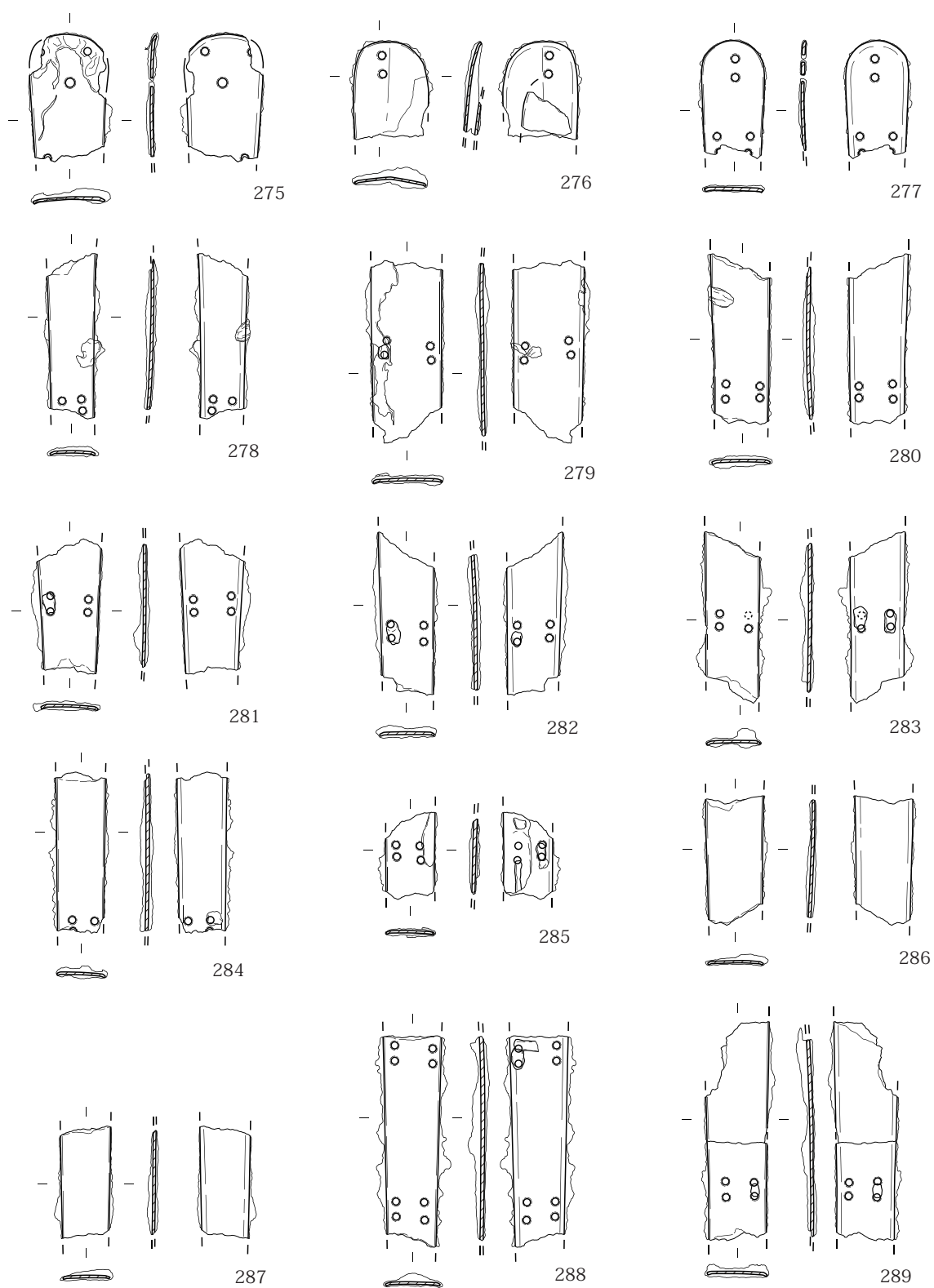
③小 結

以上のように、竪穴式石槨外出土の小札式甲冑として方頭小札A類・偏円頭小札A類・円頭小札A類を主体として構成される小札甲、篠状鉄札を主体とする臙当の存在が確認された。しかし、そのほかの小札については現状でも用途が明らかではないものも多数あり、小札甲・臙当のほかにもさらに付属具がともなっていた可能性が高いと思われる。今後、これらの用途を解明し、五條猫塚古墳に副葬された武具の全容を検討していく必要がある。

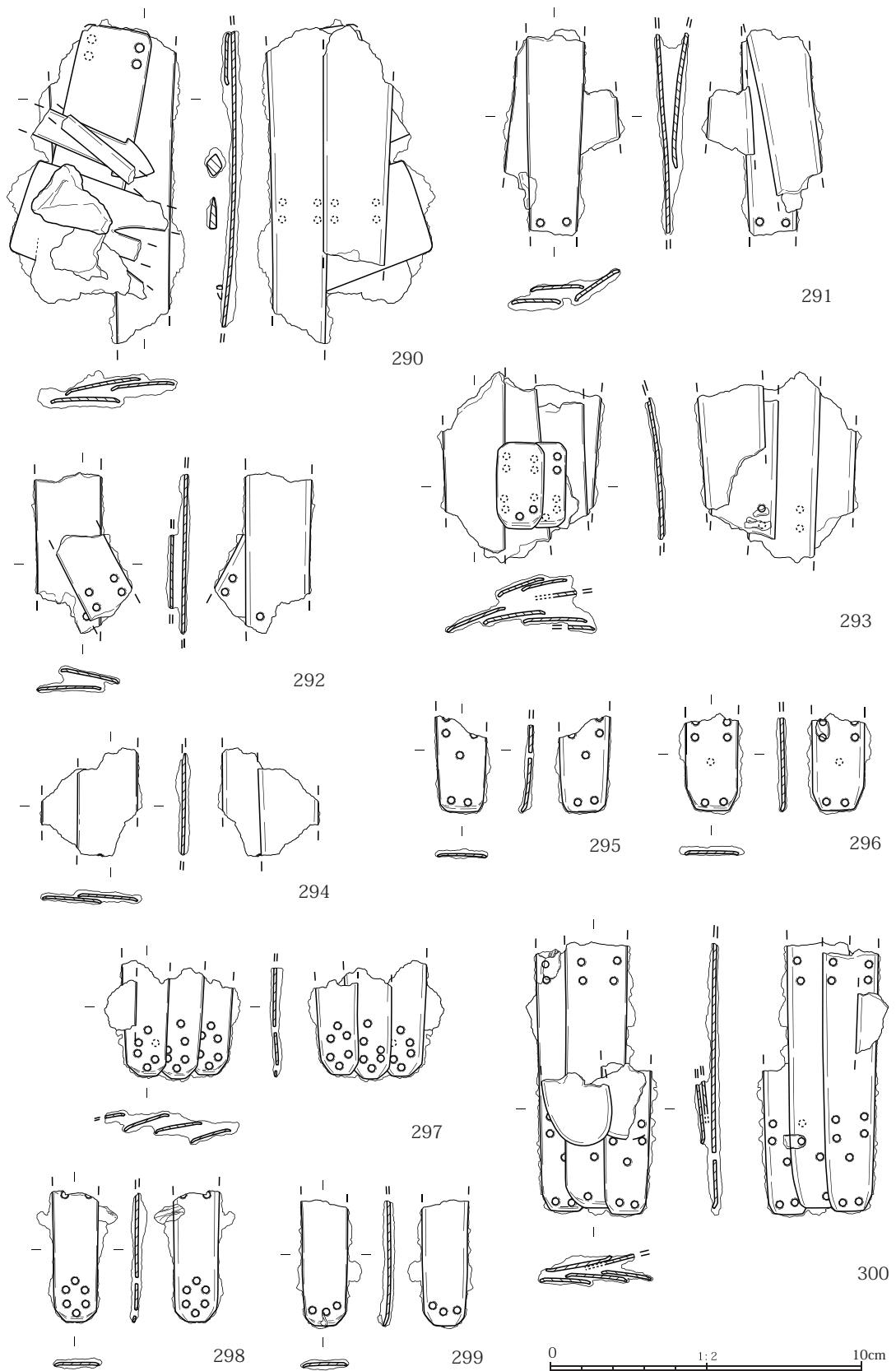
（初村武寛）



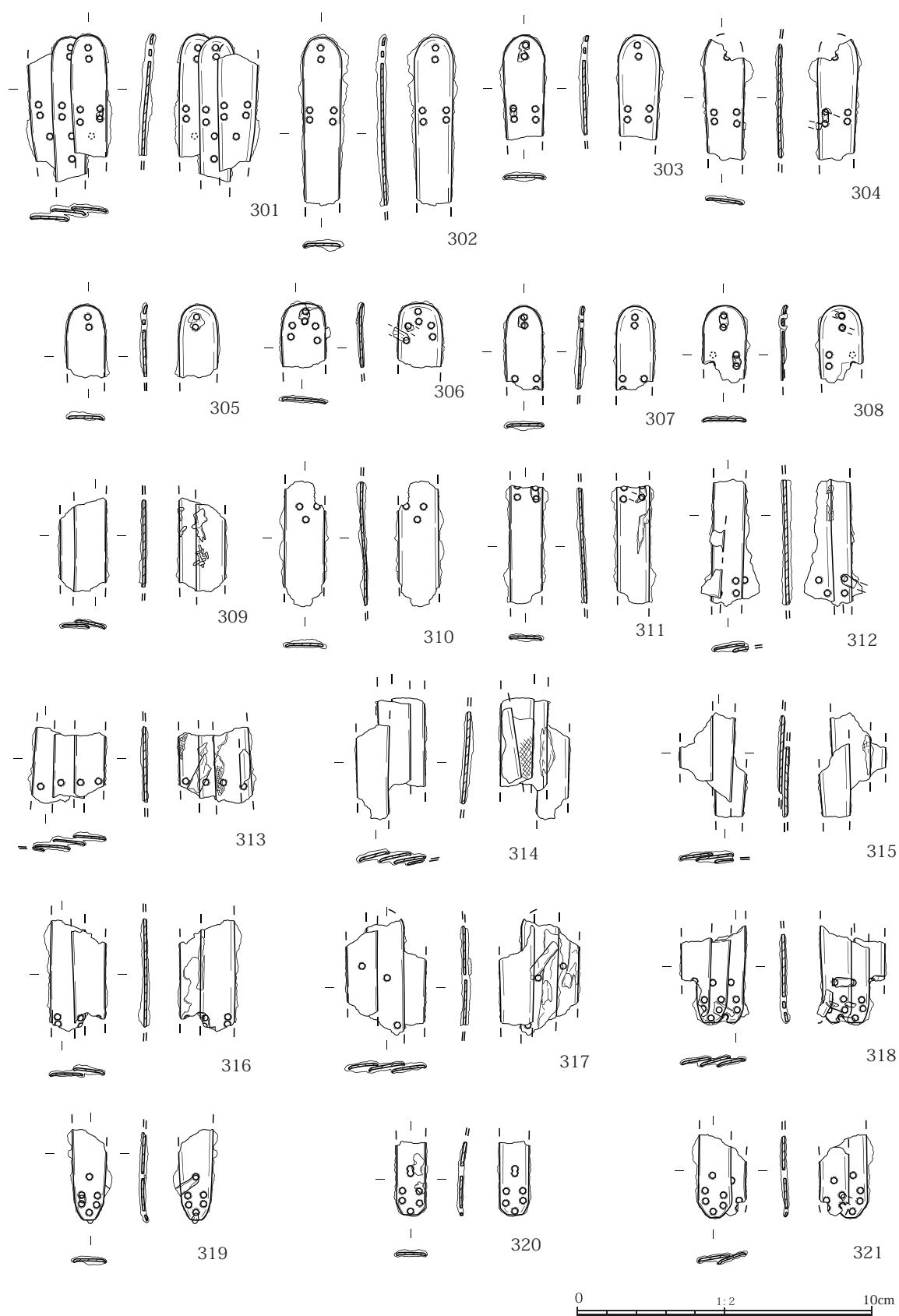
第78図 小札群実測図(28): 篠状鉄札(1)



第 79 図 小札群実測図 (29): 篠状鉄札 (2)



第80図 小札群実測図(30): 篠状鉄札(3)



第81図 小札群実測図(31): 小型篠状鉄札

(3) 帯金具 (図版 89～91、第 82～84 図)

概要 帯金具と考えられるものには、金銅製龍文鍔帯金具と金銅製三葉文鍔帯金具、蛇尾、鉸具がある。現状において、龍文鍔帯金具を 9 点以上、三葉文鍔帯金具を 3 点以上、蛇尾と考えられるものを 3 点、鉸具を 2 点確認している。このほか、本例にはさらに帯先金具がともなうものと推測するが、その存在は確認されていない。いずれも竪穴式石槨外において出土したものであり、龍文鍔帯金具のうち 7 点は発掘調査前に小札甲とともに出土し、残りは発掘調査によって出土した小札甲の残欠にともなうものである。現状においても、一部の破片は小札甲を構成する小札群中に取り込まれた状態となっている。三葉文鍔帯金具 3 点は、いずれも発掘調査によって確認された円筒埴輪下から鉄鏃群とともに出土したものである。蛇尾 1 点と鉸具 1 点は調査で出土した三葉文鍔帯金具とともに確認されており、残る鉸具 1 点は発掘調査前に出土した遺物群中に含まれるものである。

金銅製龍文鍔帯金具 (1～16・20～22) 龍文鍔帯金具は 9 点において同一部分の文様が認められるため、少なくとも 9 点以上が存在したことは確実である。若干の法量の差異や文様表現の違いはあるものの、確認しうる全ての金具が基本的に全体の様相、法量、文様構成・表現をほぼ同じくする。

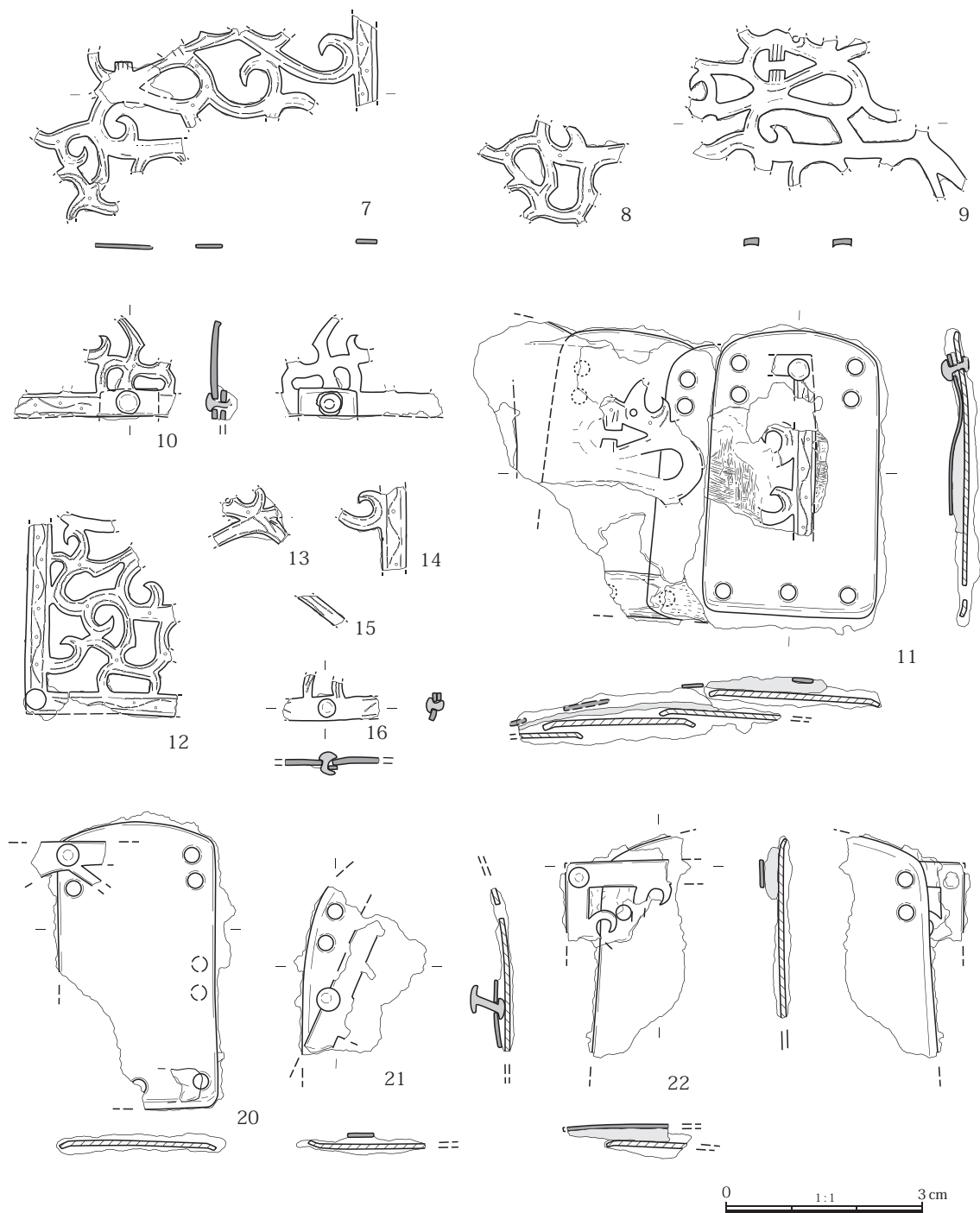
いずれの金具についても、銅板に鍍金をほどこす。鍍金は表面にのみ認められ、裏面ではまったく確認できない (図版 90－3・4)。銅板の端部については錆による表面状態の悪さもあってか、鍍金の有無は不明である。したがって、鍍金が製作工程のどの段階でほどこされたのかを特定することは容易ではなく、別途に検討を要する。

法量は大きさの明らかなもので、縦幅が約 4.4cm、横幅が約 5.9cm、厚さが 1 mm 前後である。龍文を囲む周囲の枠となる周縁の幅は、3.5～4.0mm ほどである。周縁には 2 条の直線文による平行線がほどこされ、その間に 1 条の波状文を刻む (図版 90－1)。直線文と波状文は、鑿を用いた蹴り彫りで施文される。また、波状文によって表現される山形の部分の内側には、石目鑿を使用した打ち出し列点文が一つずつ配される。

金具の四周の周縁内側には、向かって左向きになるように龍文が透かし彫りによって表現される。透かし彫りのなされた端部は表面から裏面へと縁が突出して中央が窪む形状をなしており (図版 90－4)、銅板の切断作業が表面側からなされたことを示唆する。龍の体軀は逆 S 字形を呈し、全体に唐草文化したものとなっている。頭部を中央上部からやや左側に置き、頭部から逆 S 字状に湾曲した頸部が付属する。頭部には眼と歯牙が鑿による蹴り彫りで直線的に刻まれ、明瞭に表されている (図版 90－2)。なお、眼の瞳の部分は、径 1 mm ほどの穿孔によって表現される。そして、金具の中央付近よりやや下の位置においては横方向に体部がのび、右下に位置する尾部に接続する。明瞭ではないが、頭部から頸部へ至る起点となる部分や、体部から尾部へ至る部分には、体毛の表現が蹴り彫りによってほどこされる。なお、脚部は全体に抽象化された表現となっている。龍文の文様細部については、体軀と眼を透かし彫りで表したのち、鑿による蹴り彫りと、石目鑿による打ち出し列点文を用いて表わされる。蹴り彫りは 2 条の直線文による平行線を用いるのを基本とする。蹴り彫りを細かく観察すると、工具の打ち込み部分の重複が目立ち、蹴り彫りの体をなさず、線状を呈する。蹴り彫りと打ち出し列点文は極めて近接する部分が多いにもかかわらず、重複する部分が認められない点から、蹴り彫りののちに打ち出し列点文がほどこされたものとする。ところどころに列点文を等間隔でほどこす部分が存在する。

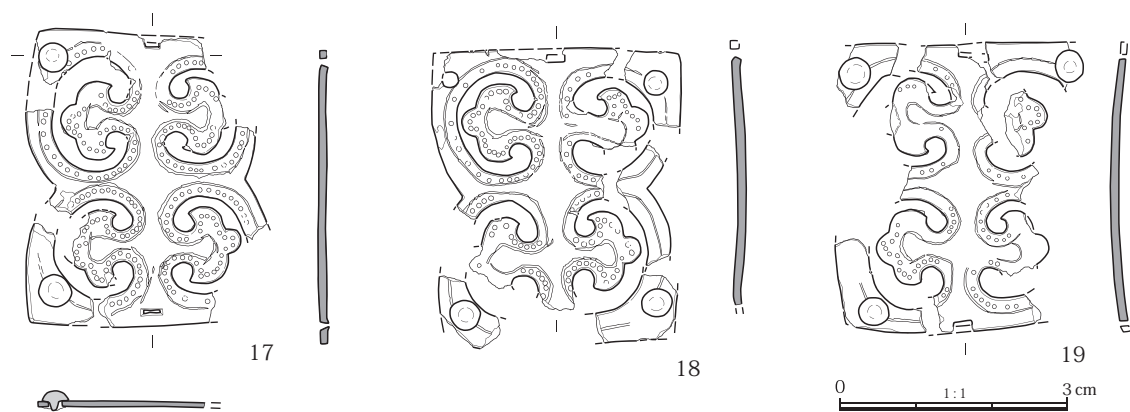


第 82 図 金銅製龍文鈐帶金具実測図 (1)



第 83 図 金銅製龍文鈎帶金具実測図 (2)

いずれの金具においても周縁の四隅と上下の中央には径2mm程度の穿孔がほどこされており、この孔に鉾を用いて金具は帯本体と連接され、さらには小札甲を構成する小札に留められる。穿孔部分を詳細に観察すると、銅板の裏面側において孔を穿った際に生じためくれを確認することが可能であり、表面側から強い圧力をかけることで穿孔がなされたことがわかる。上述のように、穿孔は周縁の上下のそれぞれに三つずつ、合計六つの孔をあけるのを基本とするが、1点のみ左側に位置する周縁の枠の中央に



第 84 図 金銅製三葉文鈐帶金具実測図

孔を穿ち、合計 7 孔とするものがある（1）。こうした特徴が 1 点の金具のみに認められるという点を踏まえるならば、この金具は鉸具に接する部分を構成する鈐板である可能性が高いと考える。接続に使用される鉸は、鉸頭の直径が 3～4 mm 程度のものがほとんどであり、多くは鉄錆を表面に確認できるが、錆化の顕著でない部分では金銅鉸を使用していることを確認できる。小札甲の小札と接続されるために、本来の状況を留める部分は少ないが、ほかの鉸もおおむね金銅製であるものと推測する。なお、遺存する例では、鉸脚長は 5 mm 程度となる。鉸は打ち込んだのち、その先端をかしめるのではなく、折り曲げて固定するものが目立つ。なお、下端で鉸を使用して別の銅板を接続し、垂下していたと想定できる金具を持つ破片がある（10・16、図版 90－5）。ただし、具体的にどのような部品を垂下していたのかは現状では不明である。明らかなのは、龍文鈐帶金具の下辺中央に位置する孔を用いて、別の金銅板からなる垂飾を鉸留するという点である。なお、金具の裏面には粗い布状の有機質の存在と、さらにその粗い布の上下に別の微細な繊維からなる有機質が付着するのを確認することができる（図版 90－6）。粗い目の布の上に別の繊維からなる有機質を巻いたうえで鈐板と接続し、さらには小札と鉸留した可能性を考えておきたい。なお、小札との接合に用いられるのは鈐板上辺の周縁にあけられた三つの孔であり、下辺に位置する周縁の孔が小札との接続に使用されている状況は確認できない。

金銅製三葉文鈐帶金具（17～19） 三葉文鈐帶金具は少なくとも 3 点以上の存在を確認できる。いずれも全体の様相、法量、文様構成・表現がほぼ共通する。

材質は龍文鈐帶金具と同様の金銅板である。表面ならびに外周端面や透かし彫り部分の端面に鍍金がほどこされるが（図版 90－7）、裏面に鍍金は見られない（図版 90－8）。透かし彫り部分の端面に鍍金を確認できる点から、銅板で大まかな形状を造り出し、透かし彫りののちに鍍金をおこなったことは確実である。さらに詳しく観察すると、蹴り彫り部分においては鍍金の確認できない部分もあることから、鍍金がほどこされたあとに施文がおこなわれた可能性が高いと考えるであろう。透かし彫りののちに鍍金をほどこし、施文をおこなうという大まかな製作工程を復元できる。

法量は大きさの明らかなもので、縦幅が約 3.9cm、横幅が約 3.1cm、厚さが 1 mm 弱である。金具の上下にあたる部分は直線的に裁断し、左右にあたる辺はそれぞれ二つの弧を連ねた形状を呈する。三葉文は透かし彫りによって上下左右に配された四つの区画のそれぞれに一つずつ、合計四つが置かれる。透かし彫り部分の端面については、表面から裏面へと縁が突出しており、銅板の切断作業が表面側からな

された可能性を考慮できる。

三葉文の内側には透かし彫り部分の縁に沿って1条の細線がほどこされる。細線は、鑿を用いた蹴り彫りで施文される。細線の外側と透かし彫り部分の縁の間にはおおむね幅2mmの空間が設けられており、直径0.5mmほどの円形文が1列に充填される。円形文はいわゆる列点文とは異なり、円の輪郭のみが打ち出しによって表現される。その円形文と円形文の間隔は一定せず、ばらつきが認められる。特に三葉文に近い部分では円形文が極めて密に配置される（図版90-7）。

金具の四隅には直径2mm程度の穿孔がほどこされる。裏面では孔の周囲にめくれが生じていることから、表面側から圧力をかけることで穿孔をほどこしたと判断しうる。孔には鋳頭径4mmほどの金銅製の鋳が残る。なお、穿孔と細線の重複関係から、穿孔は施文後になされたことが確実である（18）。また、金具の上下の中央部分にはそれぞれ縦幅0.5mm、横幅3mmほどの長方形の孔の存在を確認できる。この孔についても裏面に明瞭なめくれがあり、表面側から強い圧力をかけることで穿孔したものと理解しうる。おそらくはさらに別の金具を垂下するための造作と想定されるが、具体的にどのような金具が使用されたのかは部品自体が存在しないため不明といわざるを得ない。なお、三葉文鍔帯金具の裏面においても有機質の付着が確認されているが、褐色の付着物が僅かにあるのみで、材質をはじめとする詳細は不明である。（岩本 崇）

（4）飾金具（図版92～95 第85・86図）

発掘報告では金銅金具として報告されたものである。今回の再整理作業により、細片を含め14点を確認した。大きさや文様からA～Gに区分した。A～Gそれぞれは複数の破片からなる。破片には接点のないものもあるが、文様構成などから位置が復元できるものはそのように図中で配置した。なお、用途や本来の形態は不明な点が多く、本来の天地や左右は不明である。そのため便宜的に実測図に提示した形で上下左右を記述する。表裏については、蹴り彫りに際して鑿が打ち込まれた側、打ち出し円文の凸面側を表面としている。

飾金具A 1・2である。厚さ0.7mmほどの金銅板からなる。兩個体に確実な接点はないが、後述のように飾り金具Aの本来の形を左右対称形とみるならば、ごく近接して配置でき、1・2を合わせた遺存部位は凹字形に復元できる。ただし左右両方で上側を欠失しており、本来の全形は不明である。

1は縦6.3cm、横5.4cm、2は縦6.5cm、横16.2cmで、1・2を合わせた本来の横幅は23cmほどに復元できる。下辺は上下幅2.7cmで、やや中心が窪んでいるが製作時の形態を反映したものではないと考える。左右両辺はそれぞれ左右幅3.5cmで、下辺よりも左右両辺の方が幅広である。

下辺では、裏面からの打ち出しによる打ち出し円文を心々間約6mmで上下端と中央に計3条ほど配す。その間を蹴り彫りによる波状文と打ち出し円文による列点文からなる波状列点文を計2条配する。ただし、蹴り彫りによる波状文は山谷が角をなしており、波状文というよりも鋸歯文という方が適当かもしれない。山と山の間はややばらつきがあるがおおよそ2.5cm間隔で、山と谷の幅は約8mmである。波状文の間を充填する打ち出し円文による列点がない箇所も部分的にある。蹴り彫りは長軸約2mmで、1cmあたり4～5回打ち込まれる。外縁側の波状文では左から右へ、内縁側では右から左へと打ち進められている。打ち出し円文は径約2mmである。

左右両辺も同様の文様構成であり、3条の打ち出し円文列の間に蹴り彫りと打ち出し円文による波状列点文が2条ほどこされる。ただし、列点部分は左側の内側にしかみられない。下辺にも列点部分がみられない箇所もあることから、左右両辺には列点が配置されていなかったというよりも、多くの箇所で打ち出し忘れただけであろうと考えられる。波状文の山と山の間隔は2.5cmほどで下辺とほぼ同じだが、山と谷の幅は約1.0cmで下辺よりも僅かに広い。これはそもそも下辺よりも左右両辺の幅が広いためであろう。蹴り彫りは、左辺の外縁側では上から下へ、内縁側では下から上へ、右辺の外縁側では下から上へ、内縁側では上から下へ打ち進められている。

左右両辺と下辺の接合箇所では左右で蹴り彫りの配置が異なっており、左右両辺と下辺から続く波状文の連結に苦慮した様子がうかがわれる。これは左右両辺の波状文の山谷の配置箇所がずれているために、生じた現象であろう。

下辺外縁側には、下縁の打ち出し円文列よりも僅かに上の位置で、3箇所に径約2.5mmの穿孔があり、それぞれ鉾が遺存している。左端は欠損しているため、本来は4箇所に鉾が配されていたと考えられる。鉾は金銅製で、鉾頭径約3mmである。右端の鉾では、鉾脚先端が内側に折り曲げられており、鉾脚にはなんらかの有機質が付着している。下辺内端にも計3箇所に穿孔がみられ、右側のものには鉾が遺存している。左右両辺でも外縁側下端から約4.5cmの位置に穿孔がみられる。これらの穿孔は本来は全て鉾留用であったと考えられる。なお、穿孔の端が裏面にめくれており、表面から穿孔されたことがわかる。

裏面には全体に繊維が多量に付着している。繊維は直線的で、最大で長さ1.5cmほどである。左辺では図左上から右下へ、下辺では図上から下へ、右辺では図右上から左下へ繊維の流れがあるが、それぞれ別部材に由来したものというよりは、同一部材内での繊維の方向の偏りによるものとみられる。この繊維は肉眼観察によるが鳥獣毛とみられ、本製品の裏面には革製の部材が密着していたと考えられる。本製品の多くの箇所にみられる鉾は折り曲げ部分までの鉾脚の長さが1～2mm程度しかないが、おそらくそれらの鉾を用いて本個体と革製の部材を固定していたのであろう。

飾金具B 3～5である。いずれも厚さ約0.7mmの金銅板からなる。3は幅が約2.5cmで内縁右端が上方に直角に折れ曲がっており、4は3と同じ文様構成を持つ幅約3.5cmで3よりも幅が広い。そのため形態・大きさから、3は飾金具Aの下辺右端に、4は右辺に相当するとみられる。つまり、飾金具Bは本来は飾金具Aと同形同大の凹字形をなす部材であったと復元できる。5は中央付近いずれの箇所にも該当する可能性があるが、波状文の振れ幅がやや大きいと右辺に配置した。

3は縦3.1cm、横9.7cm、4は縦3.2cm、横3.5cmである。3は中央部分が内側に折れ曲がっているが、飾金具Aと同形とみるため、本来の形態を反映したものではないと考える。下辺・右辺ともに裏面からの打ち出しによる打ち出し円文を心々間約4mmで3条ほどこし、その間に蹴り彫りによる波状文計2条を配する。下辺では波状文の山と山の間隔は約1.4cmで、山と谷の幅は4～7mmである。右辺では波状文の山と山の間隔は約2.5cmで、山と谷の幅は9mmであり、下辺に比べて右辺では波状文の単位がかなり粗い。蹴り彫りは長軸約1mmで1cmあたり10～12回ほどこされる。蹴り彫りそれぞれが接近して密にみられ、また1打あたりの大きさも小さく、飾金具Aと比べてかなり造作が細やかである。蹴り彫りは下辺では上下とも左から右へ、右辺では左右とも下から上に打ち進められており、上下もしくは左右で蹴り彫りの進行方向が逆になる飾金具Aとは異なる。

下辺では計9箇所孔がみられ、うち1箇所には金銅製の鉾が遺存している。鉾頭径は約3mmである。ただし、これらの孔には打ち出し円文の位置にあるものもあり、劣化により生じた孔もあると考えられる。中央右端の1孔は孔の縁が非常に整っており劣化がみられず、外縁中央部分の1孔は打ち出し円文の位置からずれるため、鉾が遺存する1孔とあわせてこれら3孔については、意図的な穿孔とみてよい。その場合、鉾が遺存する1孔と外縁の1孔は飾金具Aの穿孔位置にほぼ一致する。ただしほかの孔についても意図的な穿孔の可能性は否定しきれない。右辺にも外縁側上端に穿孔がみられるが、これも飾金具Aの右辺外縁側にある穿孔に対応するのであろう。なお、穿孔はいずれも表面からなされている。

裏面には全体的に繊維が付着している。繊維は直線的で、最長で1cmほどである。下辺ではおおよそ上下方向に、右辺ではおおよそ左右方向へ繊維の流れがあるが、右辺では繊維の遺存量がやや少なく、下辺・右辺での傾向の違いを積極的に認めるのはやや難しい。この繊維は飾金具Aと同じく、鉾を用いて本個体と革製の部材を固定していたために付着したものであろう。

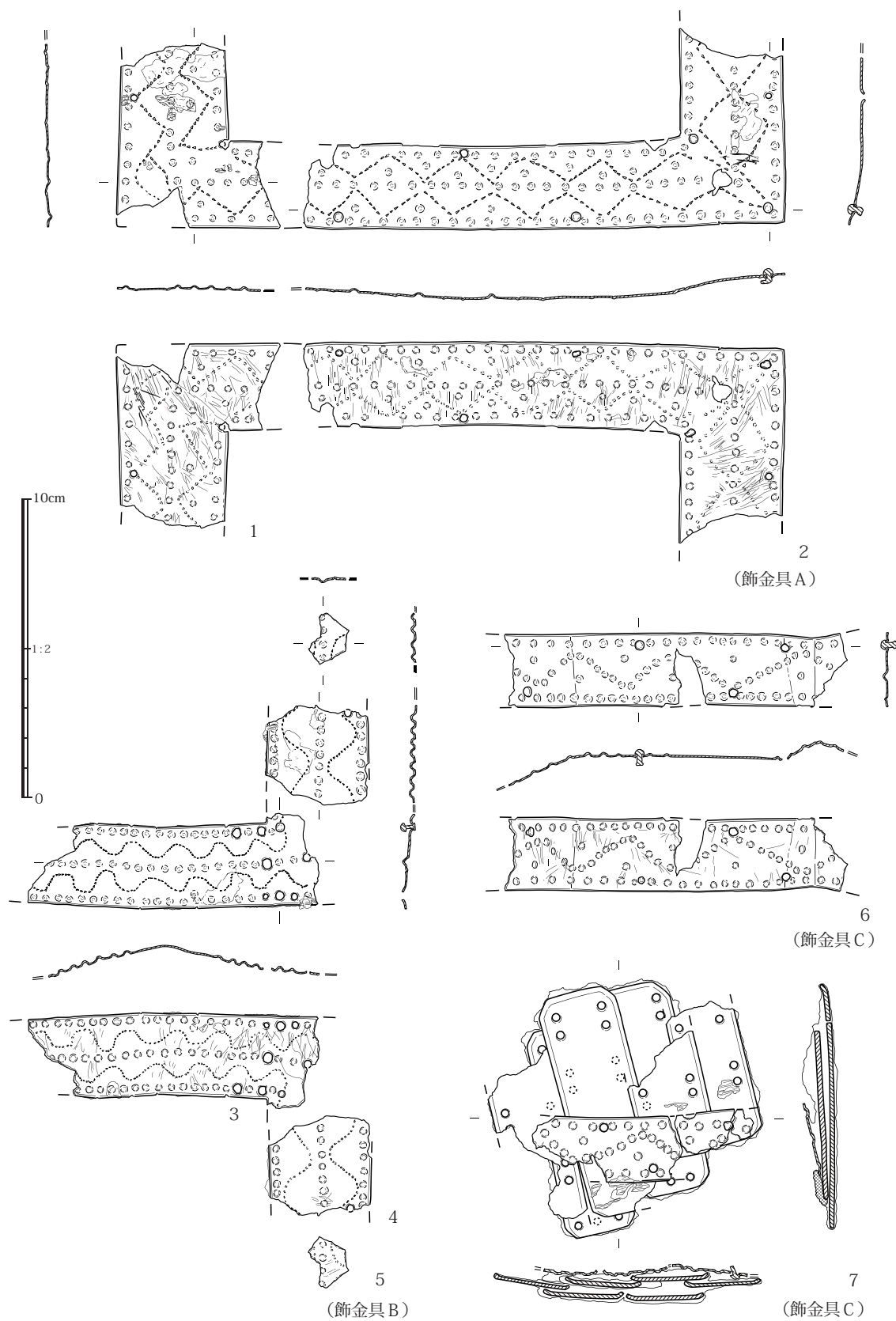
飾金具C 6・7である。厚さ0.7mmほどの金銅板からなる。7は方頭小札A類の塊に銹着しており、現状では裏面のみしか観察できない。7の飾金具部分は横現存長7.4cmである。6は縦約2.4cmで横は現存長11.4cmであり、左端から約2.5cmの位置で内側に、約9.5cmの位置で外側に、右端から約1.0cmの位置で再び内側に折れ曲がっている。真ん中の外側への折れ曲がりには横軸に対してかなり斜行しており、本来の形態を反映したものではないと考えるが、左右の内側への折れ曲がりについては横軸にほぼ直交しており当初から折り曲げられていた可能性がある。その場合、飾金具Cは全体として「〔 〕」形をなしていたことになる。なお、左右の折り曲げ箇所は後述する波状列点文の山の位置で揃うという点も、両者が意図的に折り曲げられた可能性を示唆する。

裏面からの打ち出しによる打ち出し円文を心々間約5mmで上縁・下縁に沿って計2条配し、その間を打ち出し円文による波状列点文で充填する。波状列点文の波状文部分の山と山の間隔は約3～4cmで、山と谷の幅は約1cmである。波状文部分の打ち出し円文の心々間は約3～4mmで、上縁・下縁の打ち出し円文列のものよりも間隔が狭い。また上縁・下縁と列点文部分の打ち出し円文の径は約3mmであるのに対し、波状文部分の打ち出し円文の径は約2mmと小さい。波状文の箇所の打ち出しを密にするために、一つ一つの打ち出しを弱く小さくしたものと考えられる。

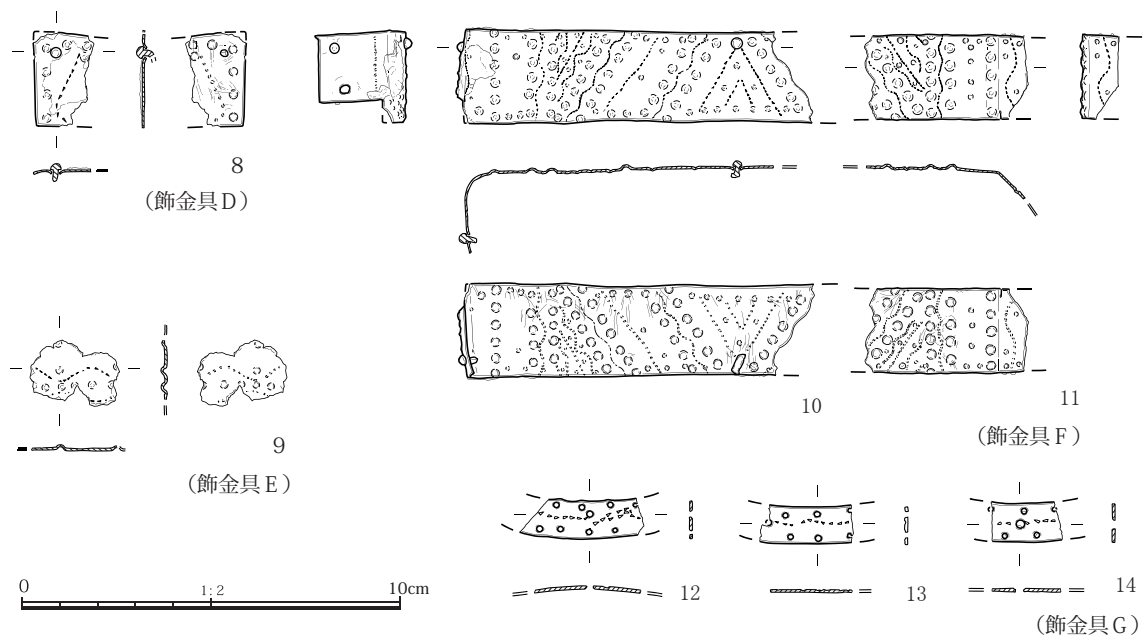
上縁側では左端から約4.5cmの位置と右端から約2.0cmの位置で、上端から約5mmの箇所に径2.5mmほどの穿孔があり、そのうち左側の穿孔には金銅製の鉾が遺存している。下縁側では左端から約6mmの位置と右端から約4.2cmの位置で、下端から約5mmの箇所に穿孔があり、同じく左側の穿孔には金銅製の鉾が遺存している。鉾脚はいずれもかしめられている。鉾頭径はいずれも約3mmである。なお、穿孔はいずれも表面からなされている。

裏面には全体的に繊維が付着している。繊維は直線的で、最長1cmほどである。繊維は特定の方向にまとまる様子はない。飾金具A・Bと同じく鉾を用いて革製の部材と連接した結果付着した鳥獣毛と考えられる。

飾金具Cには蹴り彫りがほどこされていない点が、飾金具A・Bと異なる。鉾留のための穿孔の位置が上下で互い違いになっている点は前二者と同じだが、少なくとも遺存部位で直角に角度を変える箇所はみられず、また縦幅も狭い。確定はできないが左右両端付近が内側に折り曲げられていた可能性がある。



第 85 図 飾金具実測図 (1)



第86図 飾金具実測図(2)

り、飾金具A・Bとは異なる形態・機能を有していたのであろう。

飾金具D 8である。厚さ0.7mmほどの金銅板からなる。左端は本来の外形面を保っており、方形の带状品であった可能性がある。縦幅2.5cm、横残存長1.5cmの小片のため文様の全貌が不明であり、これまでにみてきたいずれかの飾金具と同一個体となる可能性もある。後述するように裏面からの打ち出しによる打ち出し円文と表面からの蹴り彫りにより文様が構成される。同様の構成を持つのは飾金具A・B・E・Fであるが、A・Bは内縁・外縁付近に加えてその間にも打ち出し円文列を配しているため、本個体の文様配置とは一致しない。飾金具Fについても文様の配置が左右対称であったと考えるため、文様の配置上本個体が配置されるべき箇所がない。そのため、いずれの個体とも同一と認定できないため、別個体としてあつかった。

上縁と左縁に裏面からの打ち出しによる打ち出し円文を、心々間約6mmで配置する。右上の打ち出し円文のすぐ左下部分にも別の打ち出し円文があり右下方向へと続く別個の文様が配されていた可能性がある。また、そのすぐ左側から蹴り彫り列が左下方向へと進み、下縁付近で右に緩やかに折れ曲がる。蹴り彫りの間隔は約2mmで、上方から下方へと彫り進められている。

左上の打ち出し円文のすぐ右下部分に穿孔があり、金銅製の鉾が遺存している。鉾頭径は約3mmである。鉾脚はかしめられていたと考えられるが、先端を欠損しているため折り曲げられていた可能性も否定しきれない。なお、穿孔は表面からなされている。

裏面には飾金具A～C・Fと同じく鳥獸毛状の繊維が付着している。鉾を用いて革製の別部材と組み合わせられていたと考えられる。

飾金具E 9である。厚さ約0.7cmの金銅板からなる。残存部は縦1.7cm、横2.4cmである。打ち出しによる円文列が横方向にならび、その上下に蹴り彫りによる波状文と打ち出し円文による列点文からなる波状列点文を配する。文様構成は飾金具Aと同じだが、波状文も上下幅が3～4mmと非常に小さく、

別個体であったと考える。部位構成によっては飾金具Dと同一個体であった可能性も想定できる。

飾金具F 10・11である。厚さ約0.7mmの金銅板からなる。10は展開長約10cmで左端約2cmが内側に直角に折り曲げられている。正面部分は縦幅約2.5cmだが、折り曲げ箇所を下縁側が直角に幅を減じており、左端は縦幅約2.0cmになる。

折り曲げ箇所から僅かに下方の部分で縦に約1.5mm間隔で蹴り彫り状の痕跡が残る。正面部分左端には蹴り彫りによる波状文が縦に1条あり、続いて右側に2条の打ち出し円文列、蹴り彫りによる波状文、1条の打ち出し円文が縦に並ぶ。その右側にはいずれも左下から右上に傾く形で、蹴り彫りによる波状列点文、蹴り彫りによる直線文、波状列点文、打ち出し円文列、蹴り彫りによる波状文、打ち出し円文列、蹴り彫りによる直線文もしくは波がかなり緩やかな波状文、打ち出し円文列、蹴り彫りによる波状文、打ち出し円文列、蹴り彫りによる直線文と続き、その右側には下半のみに打ち出し円文と蹴り彫りによる直線文が配される。当該部分上縁付近には穿孔があり金銅製の鉾が遺存しているが、その箇所を縦の中軸として、右半にはこれまでに述べてきた左半の文様を反転させた形で文様が配置される。また上記のほかに、下縁付近には裏面からの打ち出しによる円文が、上縁付近には表面からの打ち込みによる円文がそれぞれ列をなして配される。さらに部分的には打ち出し円文や打ち込み円文が文様の間でみられる箇所がある。

蹴り彫りがほどこされた際の進行方向は一定ではなく、いま便宜的に蹴り彫り列ならびに蹴り彫りによる波状文・波状列点文を左から数えると、1～5・7列目は上から下に向かって、6・8・9列目は下から上に向かって彫り進められている。蹴り彫りの間隔や一単位の大きさはそれぞれの列でおおむねまとまるものの、1～3・6・8・9列目は蹴り彫りの間隔が粗で比較的一単位が大きいのに対し、4・5・7列目は蹴り彫りが部分的に連続するほど密にほどこされている。

11も細部に多少の違いはあるものの、10の左側の文様を左右反転させた文様であり、同一個体であったと考える。ただし、右端には幅を減じる箇所が遺存しておらず、また内側に折れ曲がりが見られるものの角度が緩やかである。10では左端の蹴り彫りによる波状文の位置で折り曲げがなされている。そのため文様の配置箇所と折り曲げ位置が厳密に対応すると考えるならば11の右端付近の波状文の箇所が折り曲げ位置として適当ではあるが、当該箇所には折り曲げが見られない。11の折れ曲がっている箇所は、10の左端とは折り曲げ角度が明らかに異なり、また折り曲げ箇所としては文様の位置が一致しないことになるため、当初から意図的に折り曲げられたものではない可能性が高いと考える。11の右端には10の左端と同じく直角の折り曲げがあつてしかるべきだが、現状で見られないのは欠失部分が折り曲げられていたためであろうか。ただし、右端には幅を減じる箇所が無く、あるいは右端は折り曲げられていなかったなど、左右両端の形態が異なっていた可能性も否定できない。

10の左端折り曲げ部分には上縁側と下縁側に穿孔があり、上縁側には金銅製の鉾が遺存している。先述の通り、文様配置の中軸箇所では上端付近に穿孔があり、金銅製の鉾が遺存している。この鉾は鉾脚が折り曲げられて使用されている。いずれも鉾頭径は約3mmである。なお、穿孔はいずれも表面からなされている。

10・11ともに裏面には繊維が付着している。遺存状態はあまり良くないものの、飾金具A～Dの裏面に付着していた鳥獣毛状の繊維と同様のものとみられる。

飾金具G 12～14である。厚さ約1mmの金銅板製である。いずれも縦幅約1cmであり、残存幅は12で3.3cm、13は1.9cm、14は2.4cmで、緩やかな弧状をなす。

いずれも上縁・下縁付近に径約1mmの穿孔を心々間5～7mmで配する。それらに加えて中央付近に径1.5～2.0mmの穿孔を持つが、それぞれの破片に1箇所ずつしか穿孔が遺存していないため間隔は不明である。最大の14から中央の穿孔は2cm以上の間隔で配置されていたことがわかる。なお、穿孔の断面形状から、上縁・下縁付近の穿孔列は表面から、中央の穿孔は裏面からなされたことがわかる。

これらの穿孔の機能は不明である。上縁・下縁付近の穿孔列は鉾脚を通すためには径が小さく、鉾留に用いられたとは考えがたい。飾金具A～Fのように飾金具Gも革などに取り付けられていたと考えるならば、これらの穿孔は飾金具Fと革製の部材を針と糸で縫い付けるために用いられたと考えることもできる。ただし、糸の痕跡はみられず、また革の付着も顕著で無いことから確定はできない。

いずれの個体も中央に横方向一列の蹴り彫りをほどこす。ただし12では右半で部分的に蹴り彫り列が2列になる箇所があるが、何らかの文様をなすものではなく、彫り直しによるものであろう。12では蹴り彫りは左から右へと進められているのに対し、13・14では右から左へと進められている。図で配置したように3個体の弧状をなす向きを同じとみた場合には、いずれかの箇所で蹴り彫りを進める方向を変えたこととなり、反対に蹴り彫りは常に一定方向に向かって進められたと考えるならば飾金具Gは全体として波形をなすものであったと復元される。いずれかに決するための積極的な根拠は無く、本来の全形は不明である。

小 結 以上の飾金具A～Gの様相をまとめると次のようになる。

1. 飾金具A～Fは本来いずれも革製の部材に鉾留されていたとみられる。鳥獣毛の付着状況はかなり似ており、同一の構造物を構成していた可能性もある。
2. いずれもかなり薄手の金銅板製であり、これらの飾金具はフレームや補強として用いられたのではなく、装飾のために用いられたとみられる。
3. 飾金具AとBは文様が異なるが、大きさや鉾の位置など多くの特徴を共有しており、同一個体の類似する箇所、もしくは別個体の同一箇所に配置されていたと考えられる。
4. 飾金具Fは左右両端がL字形に折り曲げられていたと復元でき、箱状の立体構造物に取り付けられていたとみてよい。
5. 飾金具Cも立体的に折り曲げられていた可能性があるが、飾金具Fとは折り曲げ角度が異なり、異なる箇所に配置されていたとみられる。
6. 飾金具Gは飾金具A～Fとはかなり様相が異なり、同一の器物を構成していたかどうかは不明である。ただし、革や布といった有機質製部材に縫い付けられていた可能性があり、その場合同一器物を構成していた可能性もある。

飾金具の使用法 管見による限り、これらの飾金具と同様の形態をなす器物の出土は知られない。そのため、類例を元にこれらの機能は類推できない。ただ、飾金具A～Fが革製の部材に鉾留されていたことは本来の製品としての形態を考える上で参考になる。五條猫塚古墳が築造された古墳時代中期までに古墳に副葬される革製品としては、革盾や鞆・胡籛などが知られる。各片の大きさから考えて、革盾に取り付けられたとは考えがたく、鞆や胡籛といった盛矢具の部材の可能性はある。

盛矢具を装飾するための部材と考えた場合、飾金具Fの形態は箱状の形態をなす盛矢具に取り付けるのにふさわしい。胡籙金具にみられるコ字形金具のように、側面に取り付けたものであろうか。また、飾金具A・Bは胡籙金具のうち、山字形をなす収納部金具のような配置の仕方も想定できるかもしれない。山字形の収納部金具の中央部の突起を飾金具Gを用いて表現することも可能であろうが、これは想像がいきすぎであらうか。通例の山字形収納部金具の突起部の縁金具は胡籙本体に鋳留されており、その点からも飾金具Gにそういった使用法を想定するのは難しい。

また、吊手金具のような胡籙の本来の機能上もっとも重要な部位を構成する部材が無いことから、いわゆる胡籙金具と確定することはできない。現状では蛇尾や鉸具との積極的な組み合わせを想定できない点も胡籙として機能を同定する際の問題点である。

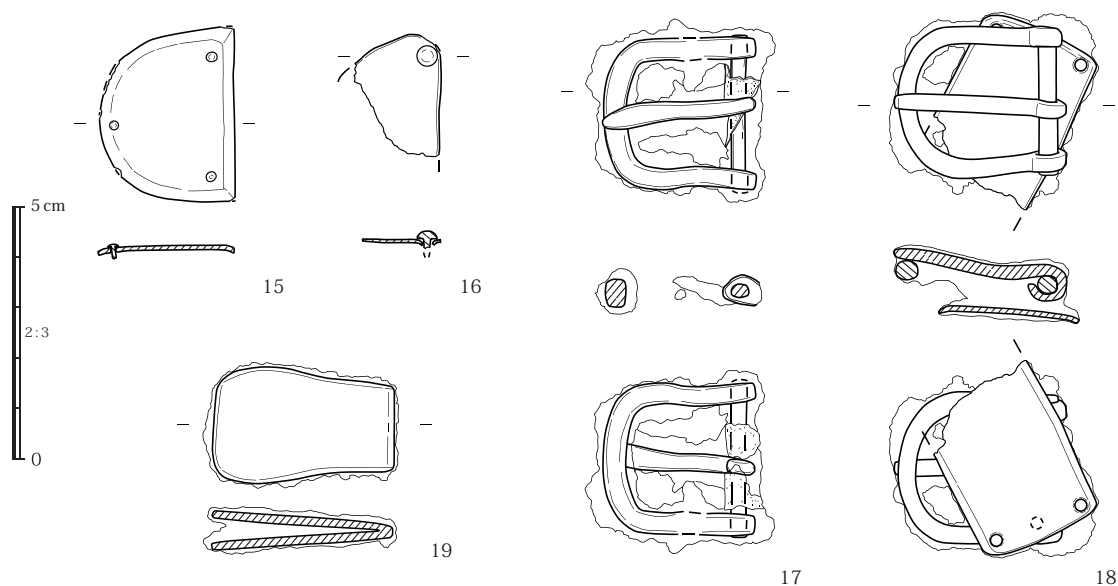
鞆と胡籙の最大の違いは、鞆は背中に背負って使用するのに対し、胡籙は吊手構造を持ち帯から垂下させる点にあると考えるが、現状で吊手金具がみられず、蛇尾や鉸具との組み合わせを積極的に肯定できない点は、これらの金具が装飾したのは胡籙というよりも鞆に近い構造物であったという考えに有利にはたらく。一般的に中期には金銅装とされない鞆を飾るための金具であったのなら、これらの金具の特異性を説明できるかもしれないが、根拠に乏しい。また、飾金具A・Bの類似性から、そもそも2個体が存在していた可能性も考慮する必要がある。盛矢具を装飾した金具の可能性があるととはしたが、用途の確定ならびに復元には大きな問題が残る。

(川畑 純)

(5) 蛇尾・鉸具(図版94・95、第87図)

蛇尾と鉸具は帯金具とともに銚帯を構成したと考えられるが、飾金具にともなっていた可能性もある。

蛇 尾 形状がやや特異なために確定はしがたいが、蛇尾と考えうる銅製品が2点と鉄製品が1点存在する。



第87図 蛇尾・鉸具実測図

15 は平面形態が半円形を呈する板状の製品であり、周囲が幅 2 mm ほどに渡って面取り状に傾斜が付けられた形状を持つものである。周囲の傾斜は非常に緩やかである。大きさは縦約 3.4cm、横約 2.7cm、厚さが 1 mm 弱である。表面と裏面の両面に鍍金がほどこされる金銅装の金具である。半円の円弧の中央の端から 3 mm ほどの位置に一つ、円弧と直線が交わる隅角の部分の端からおおよそ 5 mm の位置にそれぞれ一つずつ、合計三つの穿孔がほどこされている。穿孔部分には頭の直径 3 mm 弱、脚長 3 mm ほどの金銅装の鉾が打ち込まれている。なお、蛇尾にはさらに帯先金具が組み合わせられて鉸具と連結したものと考えるが、その存在は確認されておらず、いかなる構造であったかは不明である。

16 は金銅製の板状製品である。縦 2.4cm、横 1.7cm が遺存し、厚さは約 0.5mm で 15 よりも薄い。大半を欠失するが、図左側が弧状を、右側が直線をなしており、本来の形態は 15 と同じく半円形であったと考えられる。ただし、15 よりも直線部分と円弧状部分の角度がやや急であり、本来は 15 よりも小型であったとみられる。また隅角は丸みを帯びている。隅角付近には穿孔があり、金銅製の鉾が遺存する。鉾頭はやや偏平に近い半円形で、径は 4 mm、鉾脚は欠損しておりどのようなものに鉾留されていたのかは不明である。裏面にも特に有機物の付着などはみられない。

19 は横断面形が V 字形をなす鉄製品である。両端で 2.4cm と幅が最大になり、緩やかに幅を減じつつ中央部分で最小の 1.7cm となる蝶ネクタイ形の厚さ 2 mm 弱の鉄板を、中央部分で約 170 度の角度に折り返して造られている。現状の横幅は 3.6cm である。隅角は丸みを帯びている。折り返した内側に何らかの別材を挟み込んで使用することで、蛇尾として機能したものと考えられるが、内側は錆膨れにより観察が不可能であり、有機物などの詳細は不明である。また、他の部材と接続するための穿孔や鉾といったものもみられず、折り返して挟み込むだけで蛇尾としての使用に耐えるほどの十分な固定効果があったのかどうかは疑問が残る。

鉸 具 鉸具は 2 点を確認している。うち 1 点は三葉文鍔帯金具とともに出土し (17)、もう 1 点は調査前に出土した遺物群中に小札と錆着した状態にあった (18)。

17 は全長約 3.0cm、最大幅 3.1cm のもので、刺金の長さは 3.1cm である。縁金にはおおよそ 5 mm 角程度の断面隅丸方形の棒状鉄材を逆 U 字形に折り曲げて使用し、下辺に直径 3 mm ほどの断面円形を呈する別の鉄棒を横棒として、輪金を構成する。輪金の U 字形部分と下辺にあたる横棒との接合方法の詳細な構造については、遺存状態があまりはっきりしないものであるために判断が困難であるが、U 字形部分の両端に穿孔をほどこし、そこに下辺となる鉄棒を通してさらにその両端をかしめるもののようである。刺金は直径 2 ～ 3 mm ほどの断面形態が楕円形の棒状の鉄材であり、横棒に巻き付けることで固定する。先端近くでやや太くなり、先端自体は細く収める。なお、横棒には、革状の有機質が付着するのを確認できる。

18 は全長約 3.4cm、最大幅 3.1cm のもので、刺金の長さは 3.5cm となる。縁金には径 5 mm 程度の断面円形の棒状鉄材を逆 U 字形に折り曲げて用い、横棒には直径 5 mm ほどの断面円形を呈する別の鉄棒を渡して輪金とする。輪金の U 字形部分と横棒との接合方法の詳細は、遺存状態があまりはっきりしないものであるために判断が困難であるが、U 字形部分の両端をやや偏平に広くしたうえで穿孔をほどこし、そこに横棒を通してさらにその両端をかしめて固定するものと推測される。刺金には直径がおおよそ 3 ～ 4 mm の断面楕円形の棒状鉄材が使用され、横棒に巻き付けて固定されている。(岩本 崇・川畑 純)

3 武 器

(1) 鉄 鋸 (図版 96～133 第 88～113 図)

概 要 石槨外から出土した鉄鋸は、十分に長い茎を持ち直接矢柄に差し込んで連結する長茎式と、矢柄とは別部材である根挟みを介在させて矢柄を装着する短茎式・無茎式に大別できる。長茎式 9 形式、短茎式 8 形式 (類)、無茎式 1 形式に区分した。長茎式は短頸三角式 95 点、短頸柳葉式 41 点以上、剣身式 11 点、三稜式 13 点、段違い柳葉式 32 点、鳥舌式 4 点、腸袂柳葉式 6 点、二段腸袂式 44 点、大型定角式 8 点がある。短茎式は形式としては区分せず、類として区分したが、A 類 60 点、B 類 18 点、C 類 3 点、D 類 10 点、E 類 1 点、F 類 1 点、G 類 1 点、H 類 18 点がある。無茎式は 1 点ある。長茎式・短茎式・無茎式の合計は 367 点以上である。全体として石槨内出土鉄鋸よりも形式数が多く、特に二段腸袂式や短茎式といった石槨内ではほとんどみられない大型で比較的偏平な形式の点数が多い。

①長 茎 式 (1～258)

短頸三角式 (1～94) 95 点ある。平面形・側面形ともに石槨内出土のものと同様である。鋸身部長は 1.9～3.2cm、頸部長は 3.3～5.8cm、茎部長は 2.4～5.5cm である。大きさは多様だが、いずれかの大きさにまとまる様子はない。

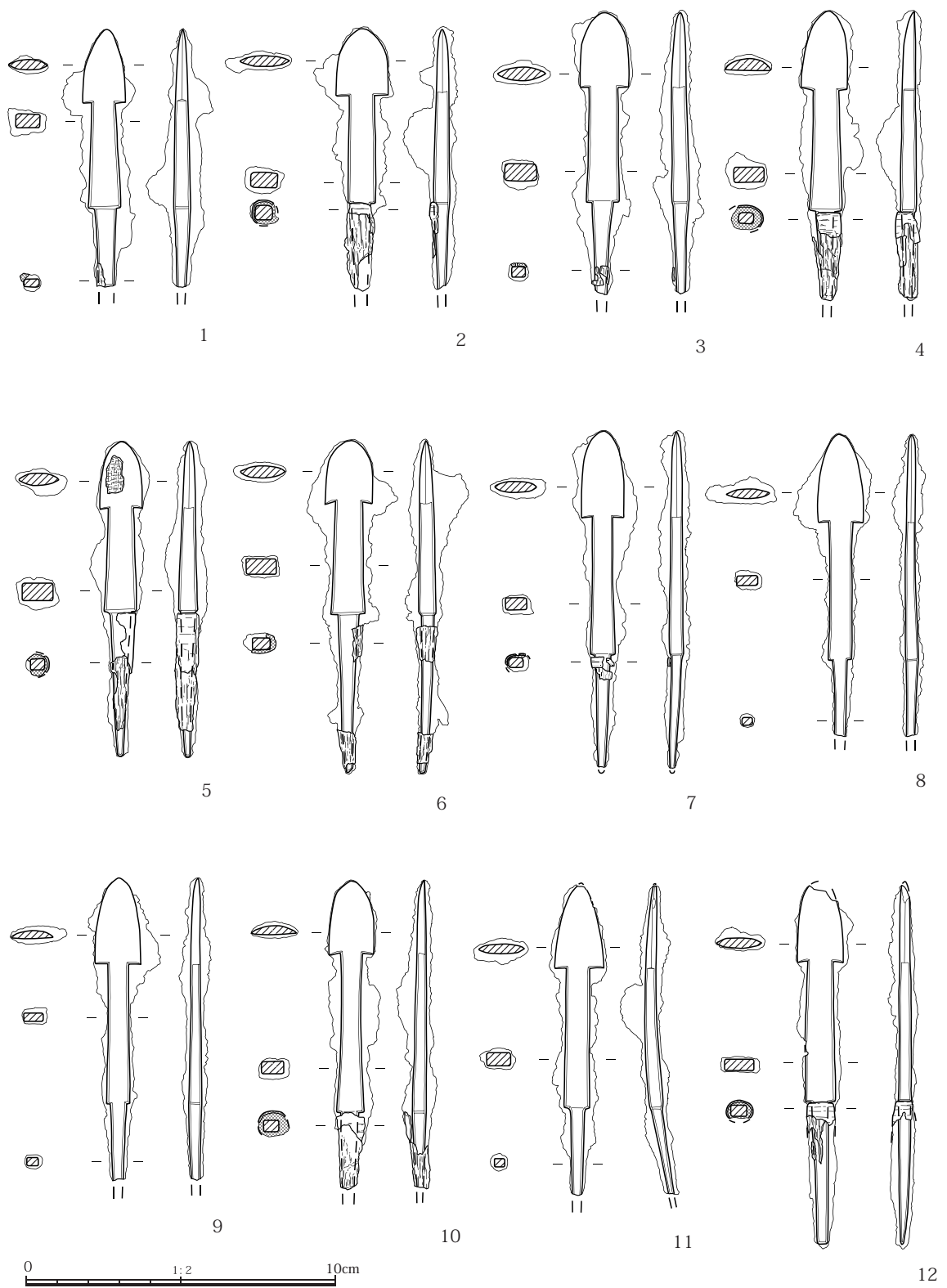
鋸身部の横断面形はレンズ形のものと同様に片平造のものがあるが、34 のみ切刃造に近い。厚さは 4 mm 前後で、茎関付近で厚さが最大になるものの 5 mm ほどであり、全体的に厚みの変化がほとんどない。20～24 では茎関に僅かに立体的な段差があると理解し図化した。側面 X 線画像撮影の際の据え付けが完全に側面正位置となっていなかったために平面の関部の段差が写り込んだ可能性があり、必ずしも茎関に立体的な段差があるとは確定しきれない。基本的には頸部と茎部の厚みの差はほとんどなく、茎関に立体的な段差を造り出さないとみてよい。矢柄にともなう有機質の遺存状態はあまりよくないが、4 や 62 をみる限り先細りとなる矢柄先端部に口巻きとして樹皮を用いたとみられる。現状では茎部に糸を巻き付ける茎巻きの遺存はみられない。

18 や 59 では鋸身関が鋭角的に切り込み腸袂に近い形態をなしているが、平面形・側面形・矢柄先端の様相など基本的に石槨内出土例と同一とみなしてよい。また 61～81 は複数の個体がおおむね切先方向を揃えて錆着しているが、そのことから束でまとめられた状態で副葬されたことがわかる。67・68 や 78～81 では錆着している個体に 30 度ほどの角度の違いがあるが、束によって配置時の角度に多少の違いがあったのかもしれない。なお、篠状鉄札に錆着した個体が 1 点ある (第 80 図 290)

5 の鋸身部には布が、15・60 の鋸身部から頸部にかけての範囲には木質が付着している。

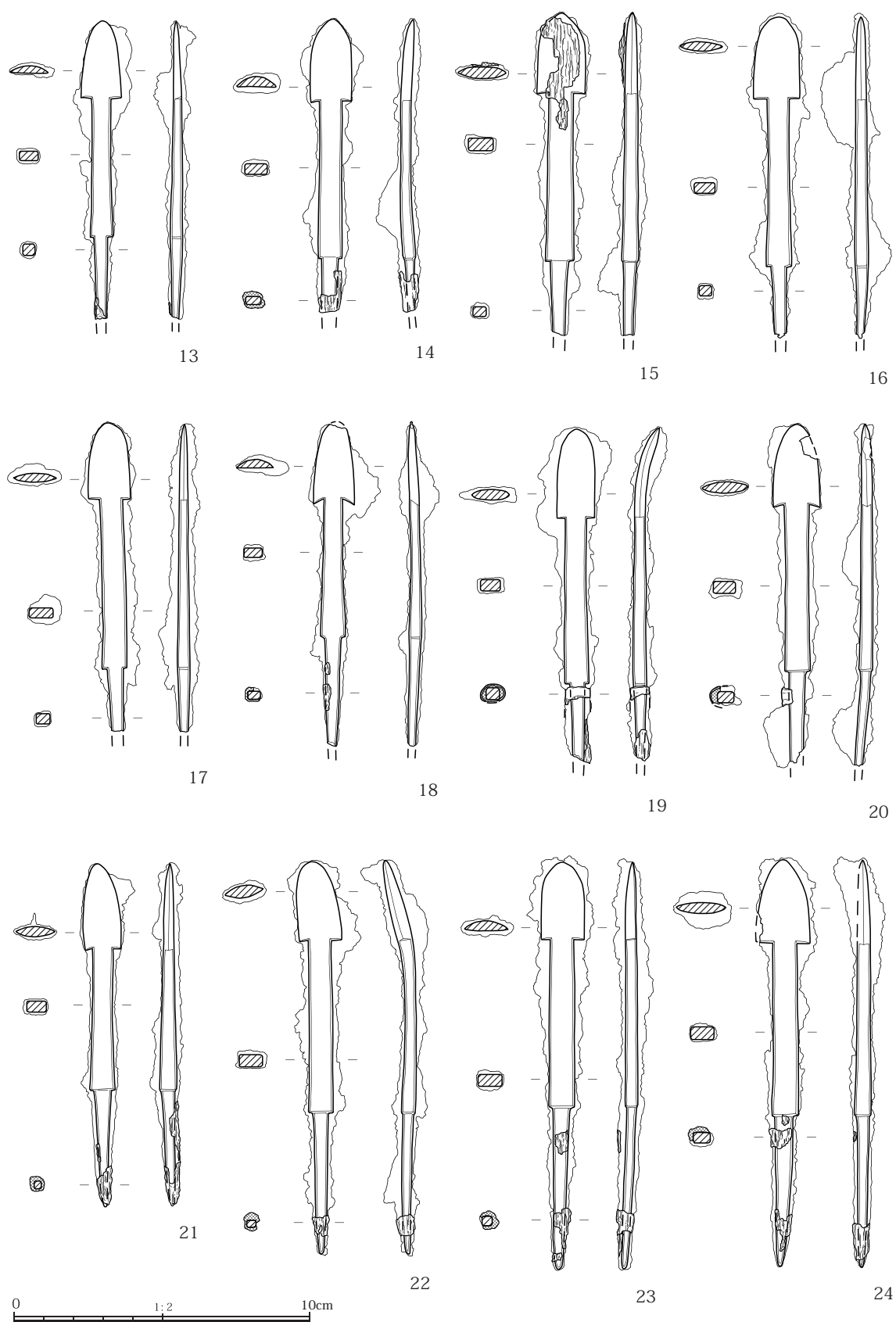
短頸柳葉式 (95～137) 43 点を図化した。切先のみで計測したものもあるため、鋸身関の数から 41 点以上とするのが妥当である。平面形・側面形ともに石槨内出土のものと同様である。鋸身部長は 2.4～3.8cm、頸部長は 2.7～4.9cm、茎部長は唯一完存している 109 で 4.4cm である。大きさは多様だが、いずれかの大きさにまとまる様子はない。

鋸身部の横断面形はレンズ形のものも多く、103 や 107 は片平造、104 や 106 などは両鑄造、115 は二等辺三角形に近い片鑄造とみられる。鋸身部の厚さは薄手の 103 や 107 は 3 mm 前後で、ほかの厚

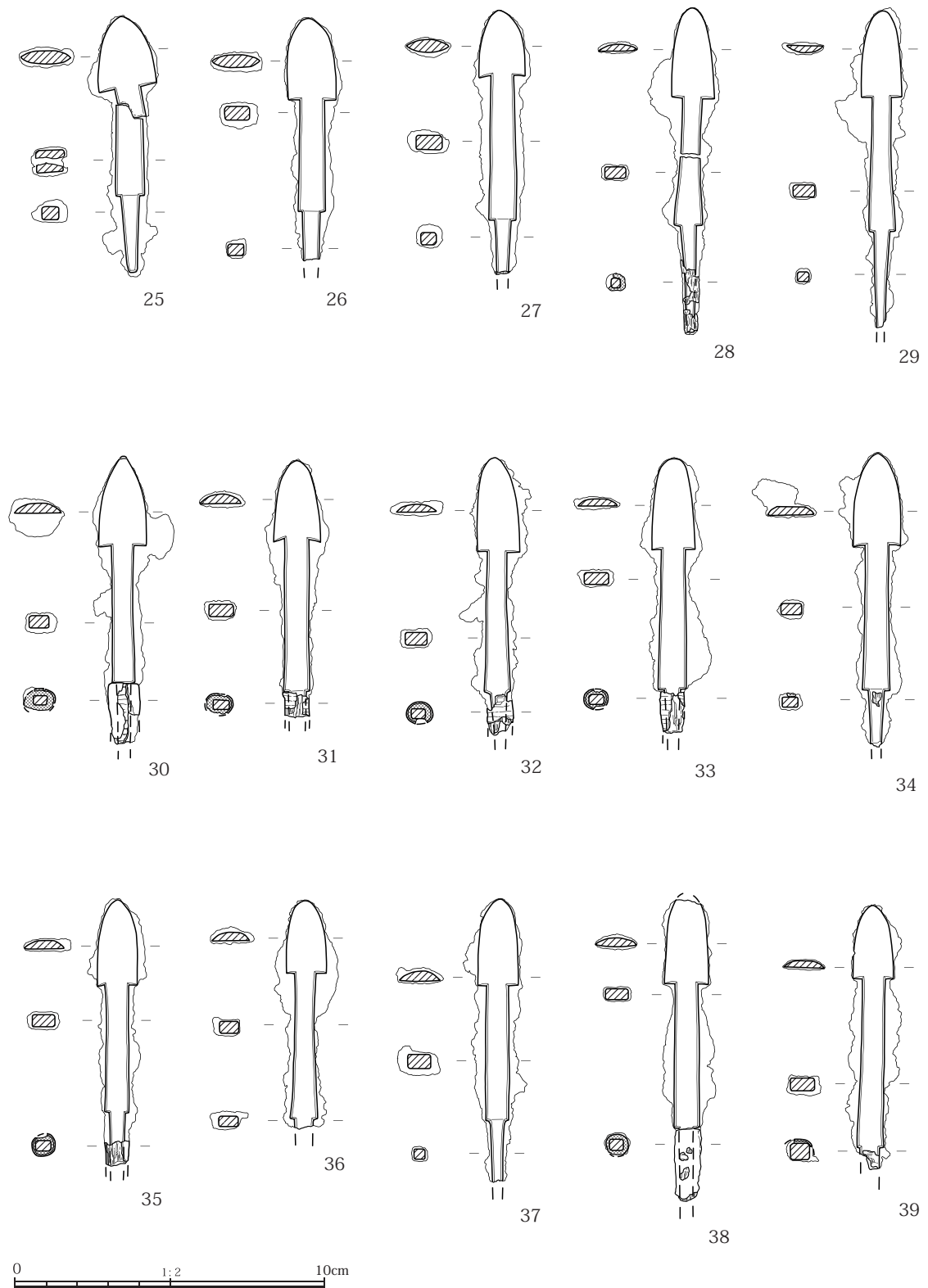


第88図 鉄鏃実測図(1):短頸三角式(1)

3 武器

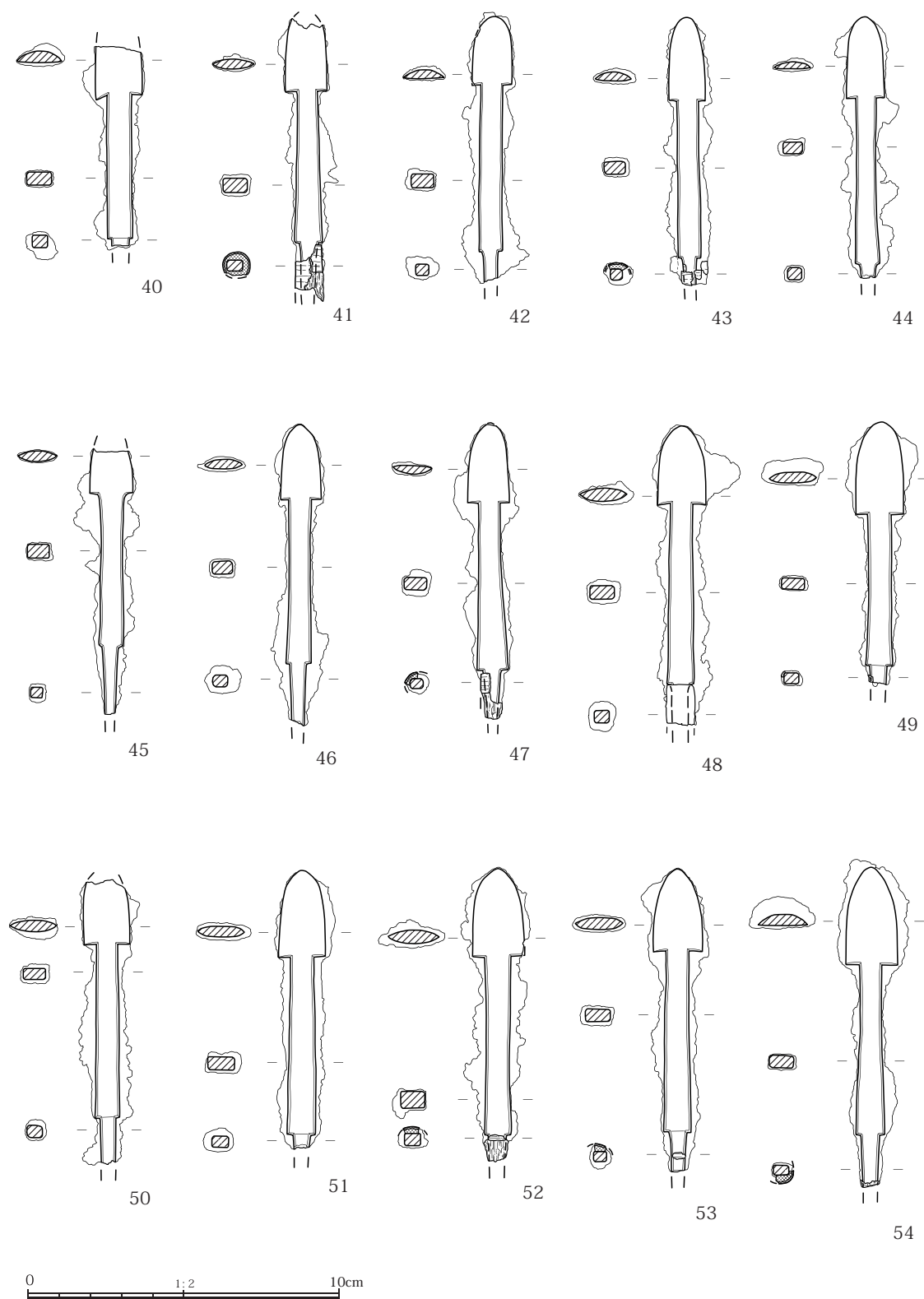


第 89 図 鉄鏃実測図 (2)：短頸三角式 (2)

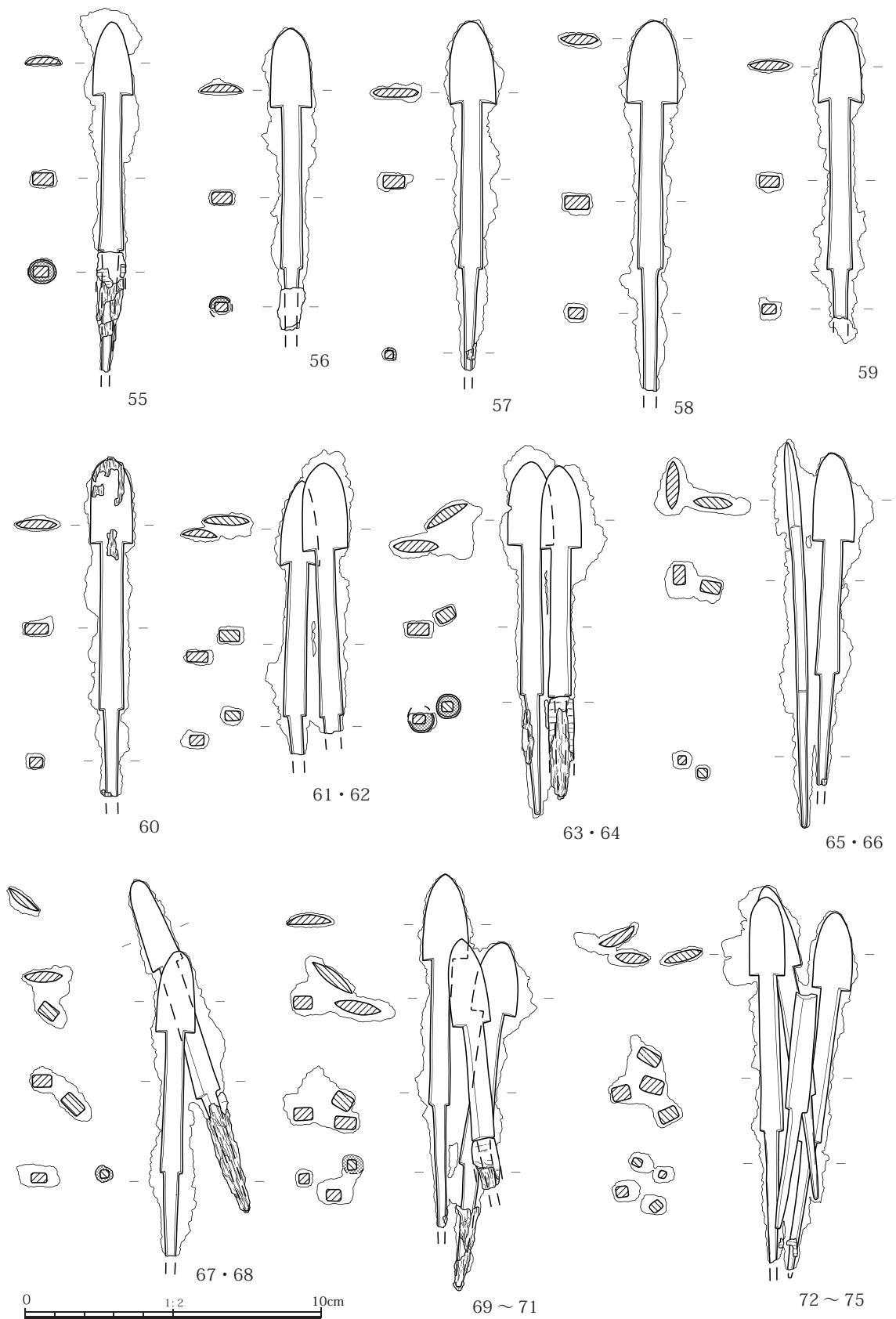


第90図 鉄鏃実測図(3):短頸三角式(3)

3 武器

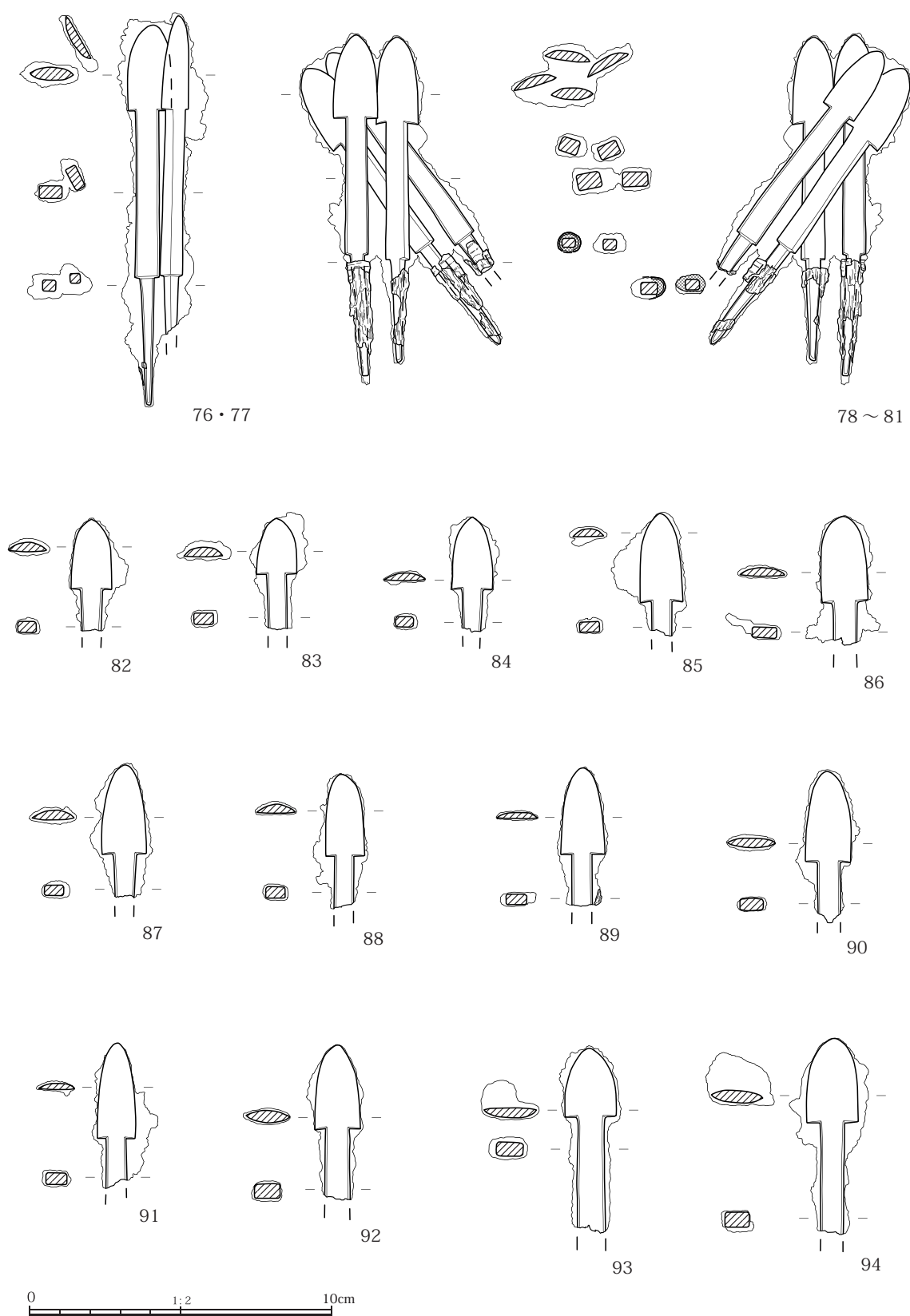


第91図 鉄鏃実測図(4):短頸三角式(4)



第92図 鉄鏃実測図(5):短頸三角式(5)

3 武器



第93図 鉄鏃実測図(6):短頸三角式(6)

手のものは5mm前後である。103や107は茎関付近でも厚さ4mmほどでそのまま茎部へと至り、全体としてほとんど厚みが変わらない。一方で厚手のものは茎関で8mmほどとかなり厚みを増し、茎関で段落ちして明確な段差を造り出して茎部へと至る。薄手のものと厚手のものがある点は、石槨内出土例と同様である。

矢柄にともなう有機質の遺存状態は悪いが、遺存する例からみると先細りする矢柄先端に口巻きとして樹皮を巻き付けたとみてよい。107の口巻き部分には水銀朱とみられる赤色顔料が塗布されており、少なくとも口巻き付近では矢柄が赤彩されていたことがわかる。茎巻きを確認した個体はないが、遺存状態の問題なのかそれとも本来ほどこされていなかったのかは確定できない。なお、121～124は4個体がほぼ切先を揃えた状態で銹着しており、束で副葬されていたことがわかる。

120には方頭小札A類の小札が1点銹着している。また、109のみ保存処理がほどこされている。

剣身式 (138～147) 11点ある。平面形・側面形ともに石槨内出土のものとはほぼ同形同大である。刃部長は3.9～4.5cm、銹身下半部長は2.0～2.8cm、茎部長は唯一完存する141で3.8cmである。

刃部最大厚は4mm、銹身下半部最大厚は5mmほどで、刃部から銹身下半部にかけては全体的に扁平だが、銹身下半部から茎部にかけて茎関で急に厚みを減じるものがある点も石槨内出土例と同様である。矢柄にともなう有機質の遺存状態は非常に悪く、矢柄先端部の形態は復元できない。

三稜式 (148～160) 13点ある。石槨内出土例にはみられない形式である。平面形は、切先付近と刃部関付近の幅がほぼ一定となる柳葉形の銹身部からナデ関状の刃部関を経て銹身下半部に至り、銹身下半部から直角の茎関を経て茎部に至る。刃部横断面形は正三角形で、銹身下半部の横断面形は方形から隅丸方形で、152や153では円形である。刃部横断面形の三つの頂点がそれぞれナデ関状の刃部関を経て銹身下半部へと至る形態である。茎関では平面・側面ともに段落ちして茎部に至る。段落ちというよりも、径あるいは一辺8mmほどの銹身下半部に、一辺4mmほどの茎部が接続するとした方が表現としては適切かもしれない。

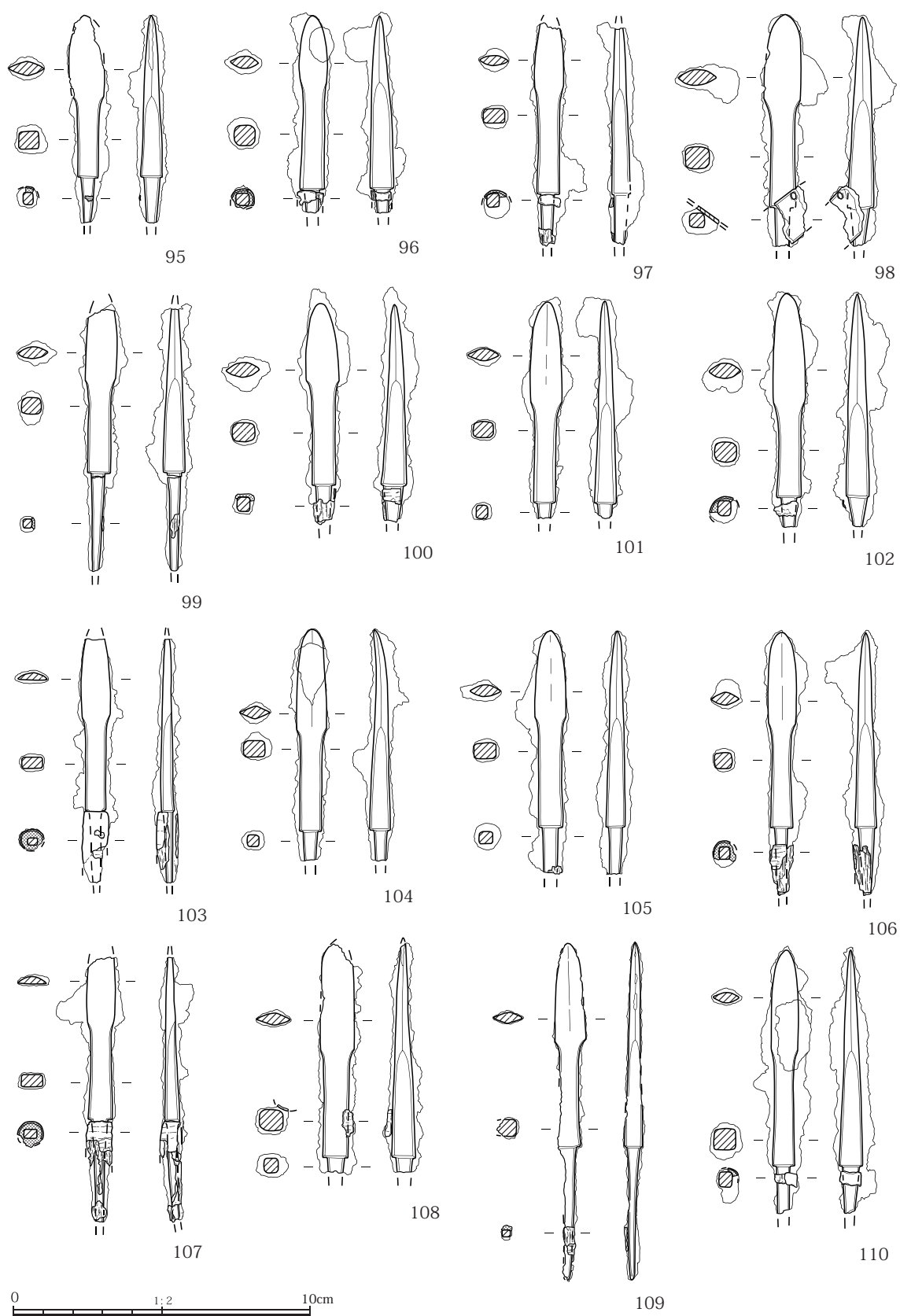
刃部長は3.9～4.4cmで、銹身下半部長は2.0～2.3cm、茎部長は完存する151と復元が可能な154とともに3.6cmである。刃部最大厚は8mmほど、銹身下半部最大厚は7mmほどで刃部の方が僅かに厚い。刃部横断面形が正三角形という形態的な特徴も関係しているのであろうが、全体として非常に厚手で重厚な印象を受ける。そのために、内部からの銹膨れによって崩壊が進んでいるものも多く、鉄自体の遺存状態は悪い。

矢柄にともなう有機質が比較的良好に遺存している156では、矢柄先端は僅かに先細りとなる形状をなすことがわかる。口巻きには樹皮巻きを用いている。現状では茎巻きは確認できていないが、遺存状態の問題から本来ほどこされていなかったのかどうかは判断できない。

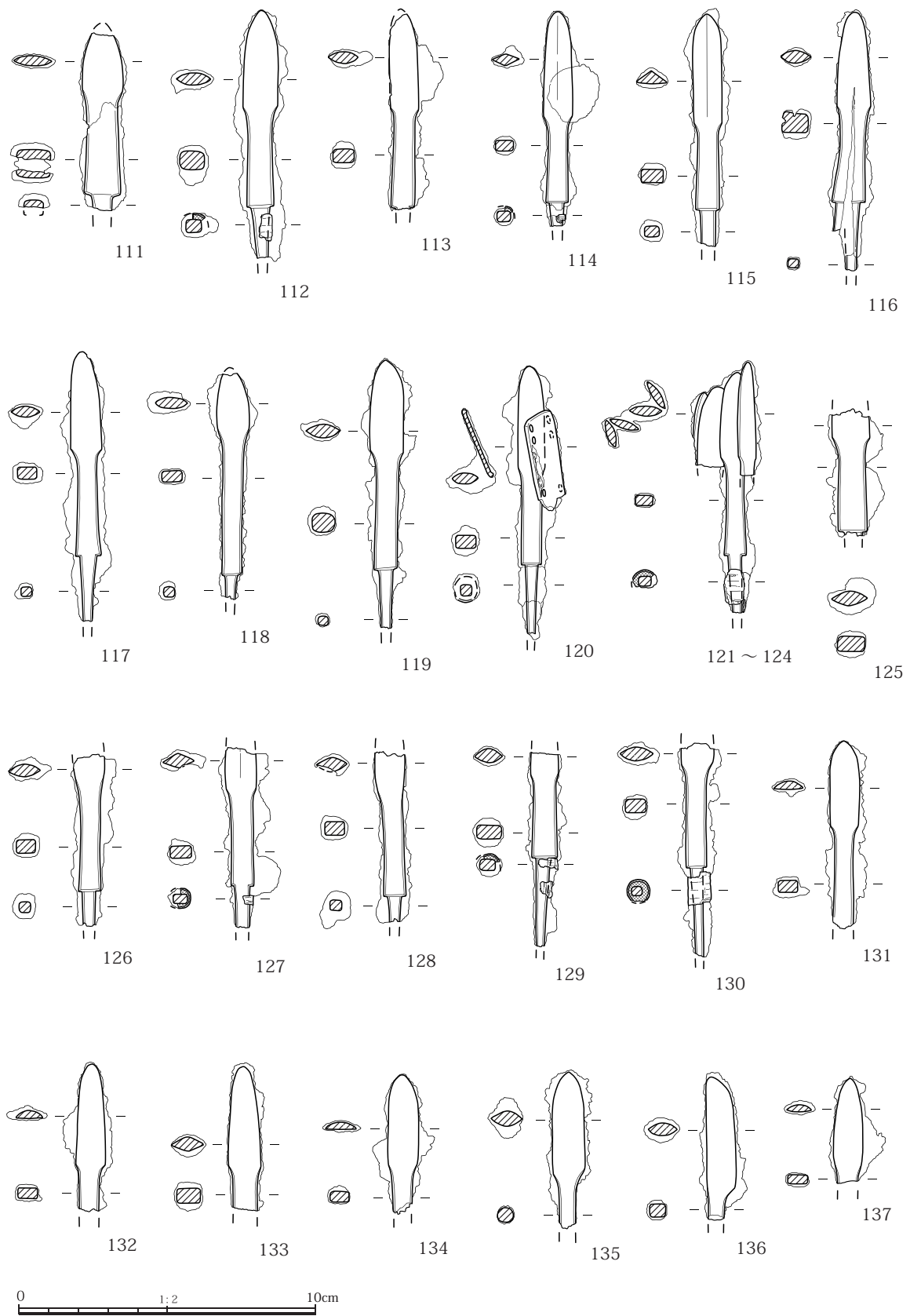
段違い柳葉式 (161～192) 32点ある。丸みを帯びた刃部先端から左右両側で上下に位置が異なる刃部関を経て銹身下半部に至り、銹身下半部から直角の茎関を経て茎部に至るものである。石槨内からは左右両側の刃部関がいずれも腸袂となる形式が出土したが、石槨外出土例には刃部関の形態が異なるものがあり、5種に細分できる。それぞれA～E類とする。なお以下の記載は石槨内出土例と同じく、刃部関の位置が切先に近い側を左側、茎部に近い側を右側として進める。

A類 (161・162) は刃部関付近で刃部が左右に突出し、腸袂をなす刃部関から銹身下半部へと至る

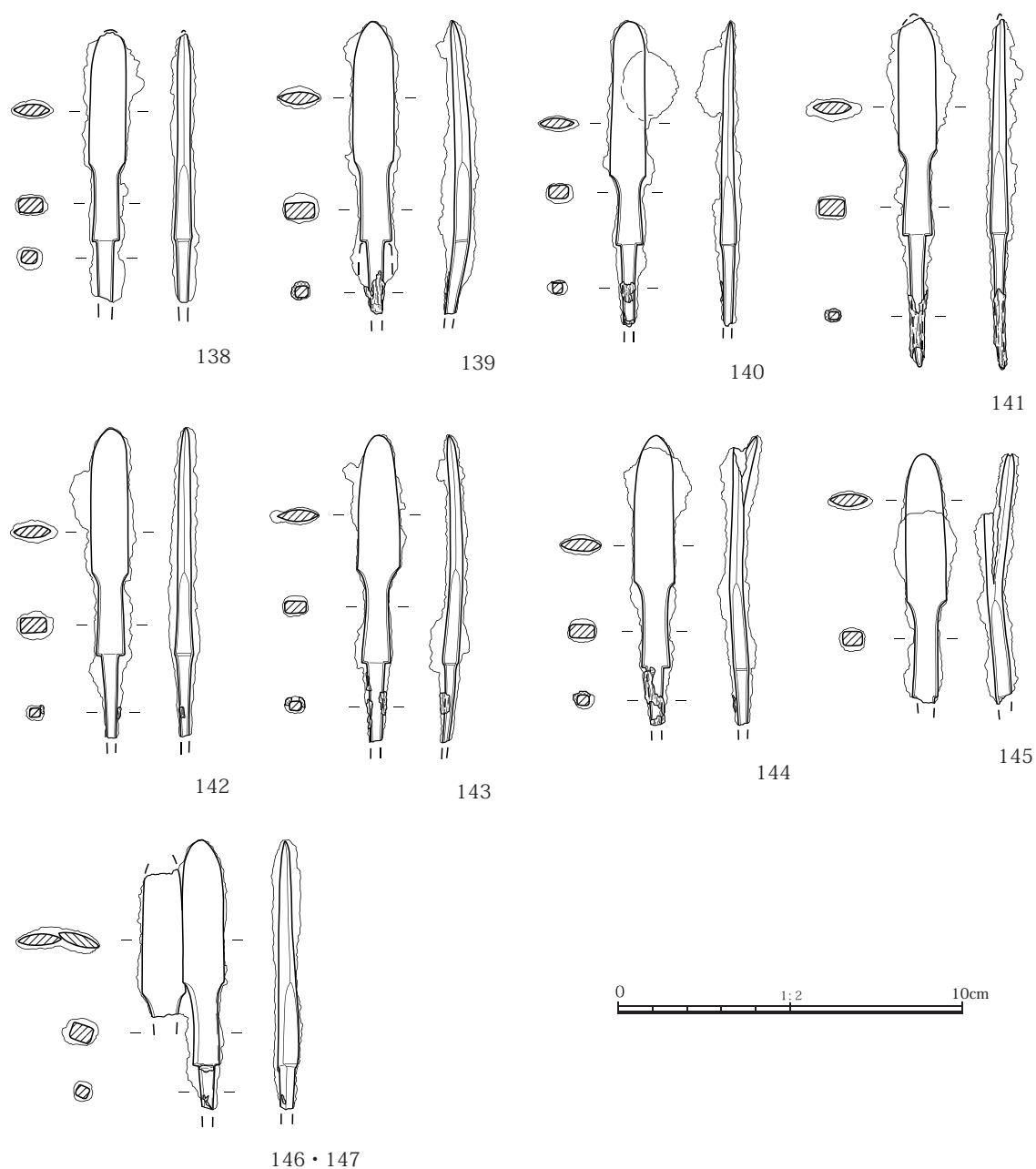
3 武器



第94図 鉄鏃実測図(7):短頸柳葉式(1)



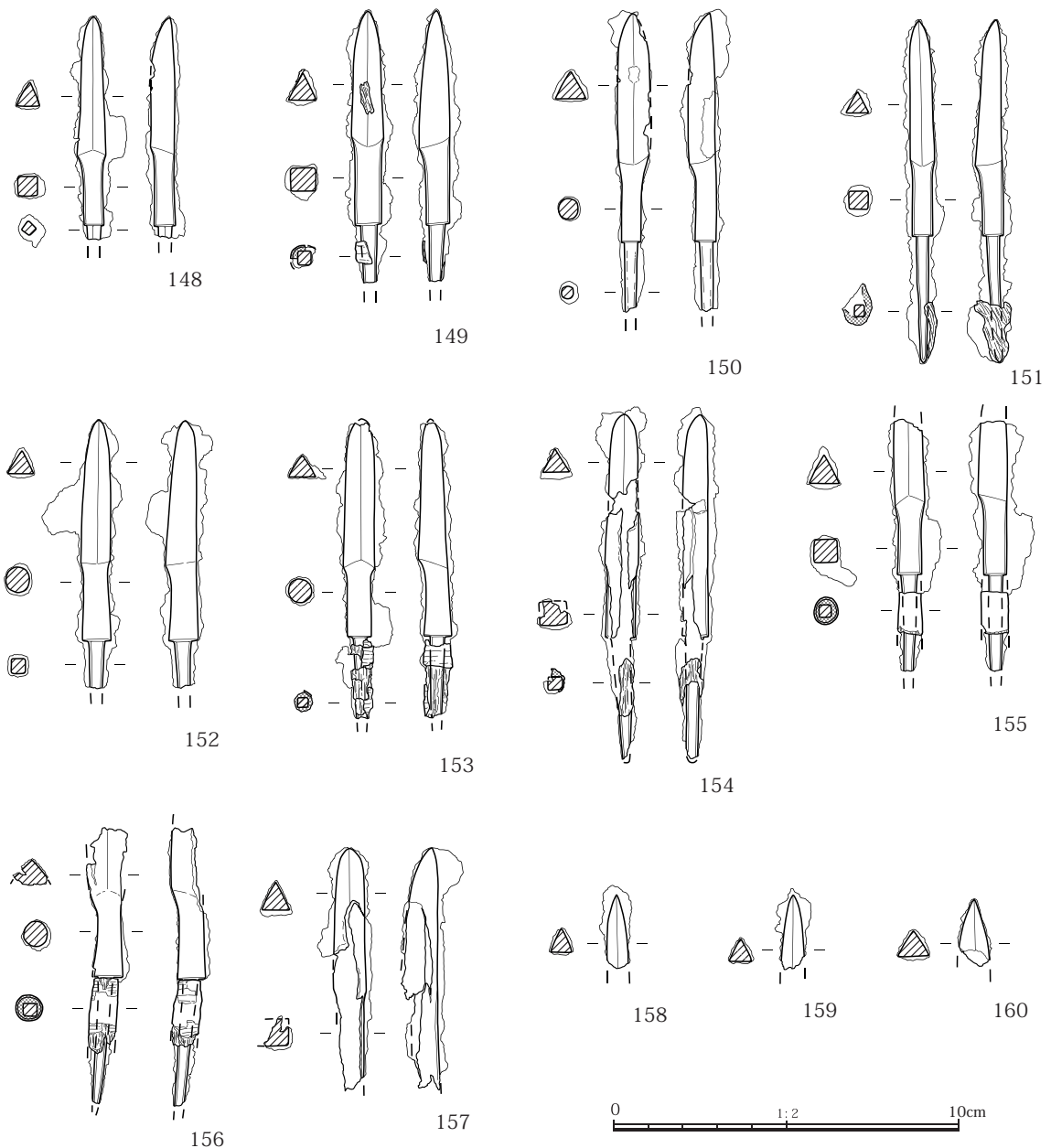
第95図 鉄鍬実測図(8):短頸柳葉式(2)



第96図 鉄鐏実測図(9): 剣身式

平面形をなす。別造り片腸挟や独立片逆刺と呼称される、短頸鐏や長頸鐏の頸部に独立して付属する特殊な腸挟が刃部両側に取り付いたかのような形態である。ただし、別造り片腸挟は一般的に腸挟の切り込みが深いため、本例の形態とは異なる。上段の突出部分の長さが0.7cmほど、下段で2.0cmほどと上下で突出部分の長さの違いがある。いずれも腸挟の深さは3～4mmほどで切り込みは弱い。

刃部が完存する162で左側刃部長2.8cm、右側刃部長4.8cm、刃部先端から茎関までの長さは6.4cmである。茎部は先端を欠失している。刃部横断面形はレンズ形で最大厚は6mm、鐏身下半部横断面形は最大厚8mmの隅丸方形で、刃部先端から鐏身下半部にかけて徐々に厚みを増す。茎関は平面形で角関をなすが立体的な段差があり、鐏身下半部から茎関で段落ちして最大厚5mmの茎部に至る。

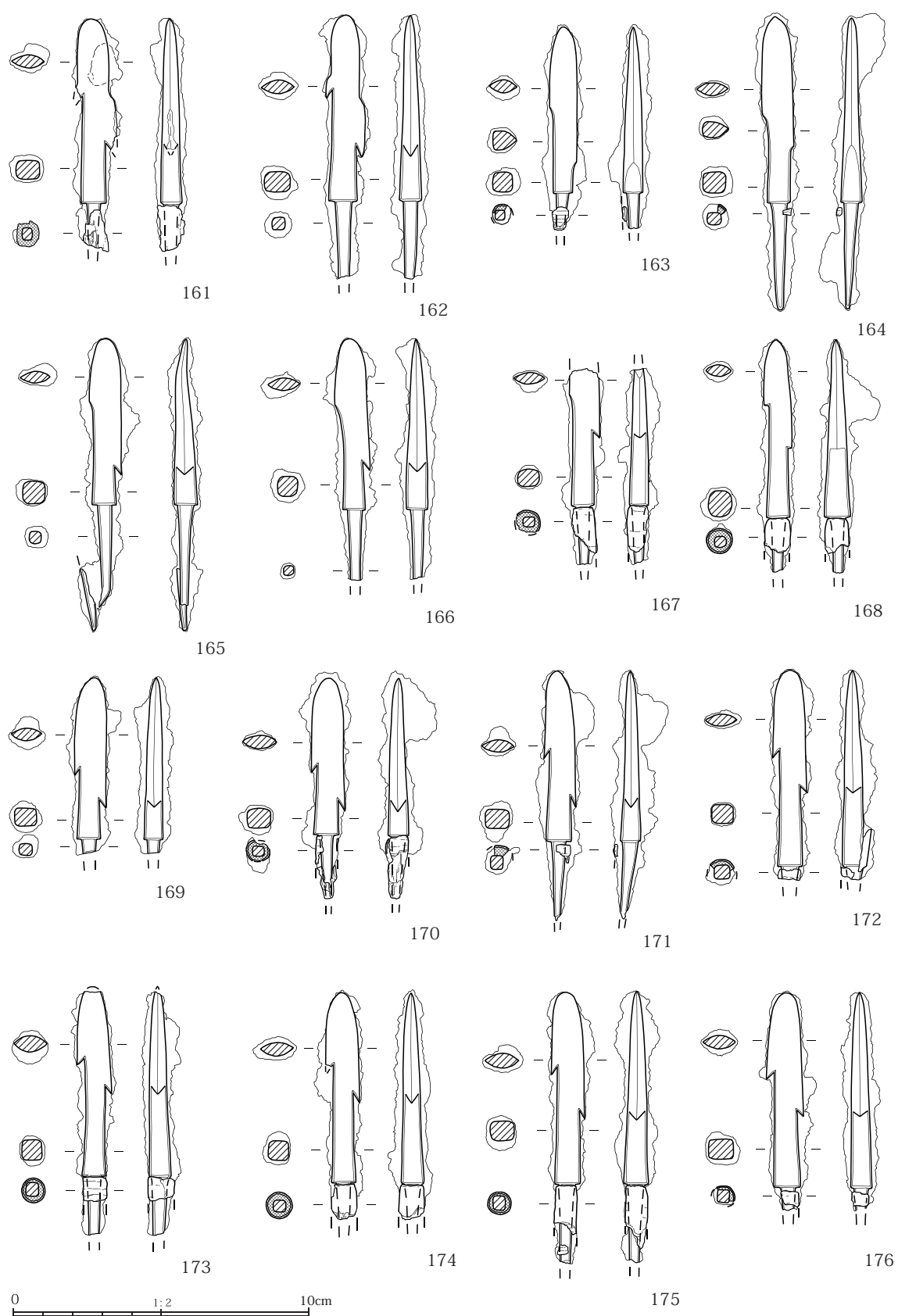


第97図 鉄鎌実測図(10):三稜式

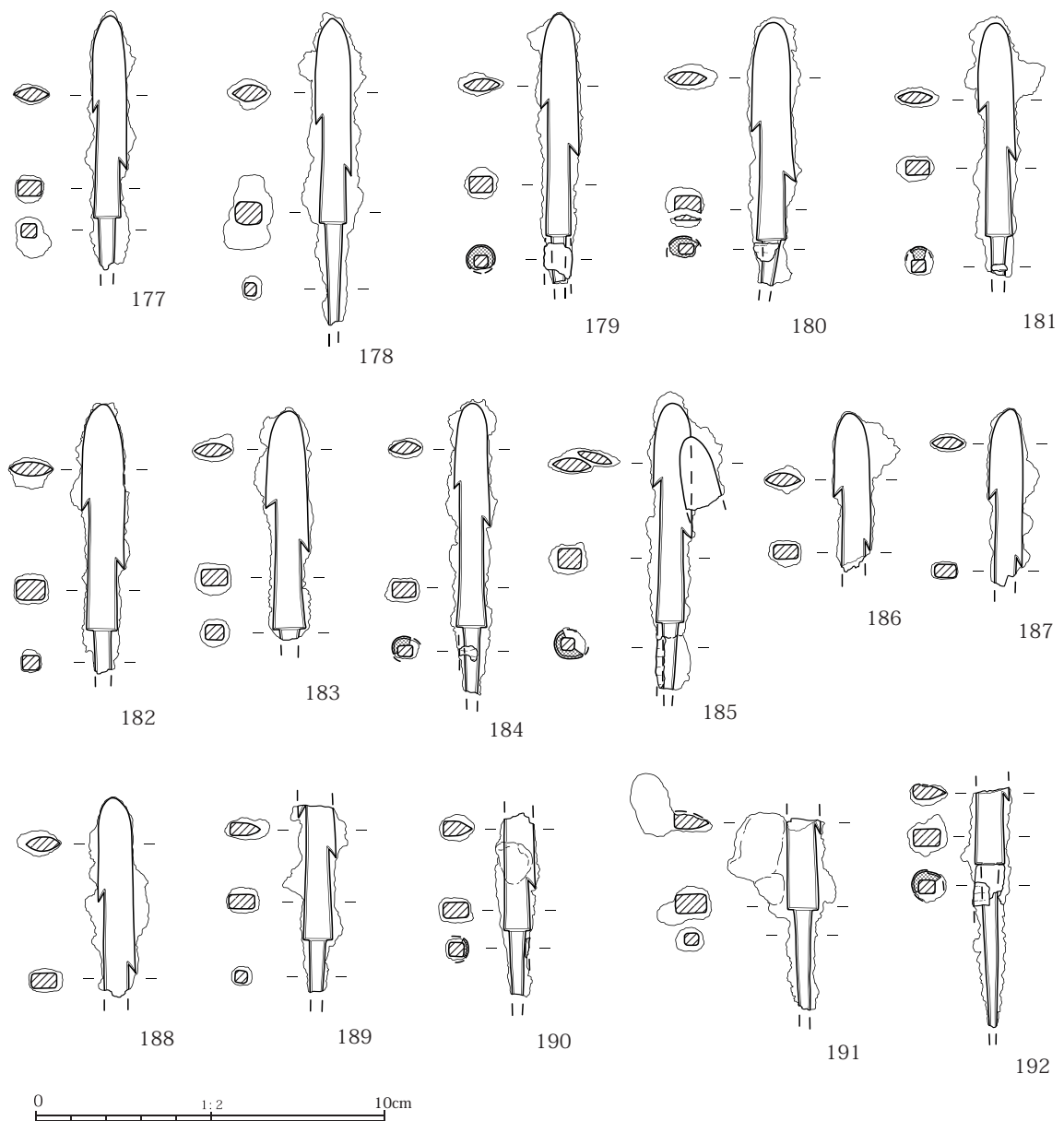
B類(163・164)は左右両側の刃部関がナデ関となる。163は左側刃部長2.7cm、右側刃部長4.6cm、刃部先端から茎関までの長さ5.6cmである。164は左側刃部長3.3cm、右側刃部長4.4cm、刃部先端から茎関までの長さ6.2cm、茎部長3.6cmであり、2個体で大きさにやや差がある。刃部横断面形はレンズ形で最大厚は6mmほど、鎌身下半部横断面形は隅丸方形で最大厚は7mmであり、刃部先端から鎌身下半部にかけて徐々に厚みを増す。茎関には立体的な段差があり、鎌身下半部から茎関で段落ちして最大厚5mmほどの茎部に至る。

C類(165～167)は上段の刃部関がナデ関で下段の刃部関が腸袂となる。下段の腸袂の深さは3mmほどで切り込みは弱い。165は左側刃部長2.1cm、右側刃部長4.5cm、刃部先端から茎関までの長さ5.6

3 武器



第98図 鉄鏃実測図(11): 段違い柳葉式(1)



第99図 鉄鎌実測図(12): 段違い柳葉式(2)

cmで、茎部は錆膨れにより変形しているが4.2cmである。166は左側刃部長2.2cm、右側刃部長4.4cm、刃部先端から茎関までの長さ5.8cmである。167は刃部先端を欠失しているが、遺存部分をみ限り鎌身下半部がほかの2個体と比べて長い。刃部横断面形はレンズ形で最大厚は6mmほど、鎌身下半部横断面形は隅丸方形で最大厚は7mmほどで、刃部先端から鎌身下半部にかけて徐々に厚みを増す。茎関には立体的な段差があり、鎌身下半部から茎関で段落ちして最大厚5mmほどの茎部に至る。167には矢柄にともなう有機質が遺存しており先端がごく僅かに先細りとなる形態とみられる。口巻きの材質はやや判然としないが樹皮とみられる。

D類(168)は上段・下段の刃部関がどちらも角関となる。どちらも刃部関で2mmほど内側に入り込む。左側刃部長2.2cm、右側刃部長3.7cm、刃部先端から茎関までの長さ6.0cmである。刃部横断面形はレン

3 武 器

ズ形で最大厚 7 mm、鍔身下半部横断面形は隅丸方形で最大厚 9 mm で、刃部先端から鍔身下半部にかけて徐々に厚みを増す。茎関には立体的な段差があり、鍔身下半部から茎関で段落ちして最大厚 5 mm ほどの茎部に至る。矢柄先端の形態は平面・側面ともに先細りとなる。口巻きの材質はやや判然としないが樹皮とみられる。

E 類 (169 ~ 189) は石槨内出土例と同形で、左右両側の刃部関がどちらも腸袂となる。腸袂の切り込みは 3 ~ 4 mm ほどと弱い。左側刃部長 2.4 ~ 3.0 cm、右側刃部長 3.5 ~ 5.0 cm、刃部先端から茎関までの長さ 5.3 ~ 6.6 cm で、茎部を完存する個体はない。刃部横断面形はレンズ形で最大厚 6 mm ほど、鍔身下半部横断面形は隅丸方形で最大厚 7 mm ほどで、刃部先端から鍔身下半部にかけて徐々に厚みを増す。茎関には立体的な段差があり、鍔身下半部から茎関で段落ちして最大厚 5 mm ほどの茎部に至る。矢柄先端の形態は平面・側面ともに先細りとなる。口巻きの材質はやや判然としないが樹皮とみられる。

また、このほかに下段の腸袂のみが遺存し上段が欠失しているため、C 類か E 類か確定できないものとして 190 ~ 192 がある。なお、いずれの個体においても茎巻きは確認できていないが遺存状態の問題の可能性はある。

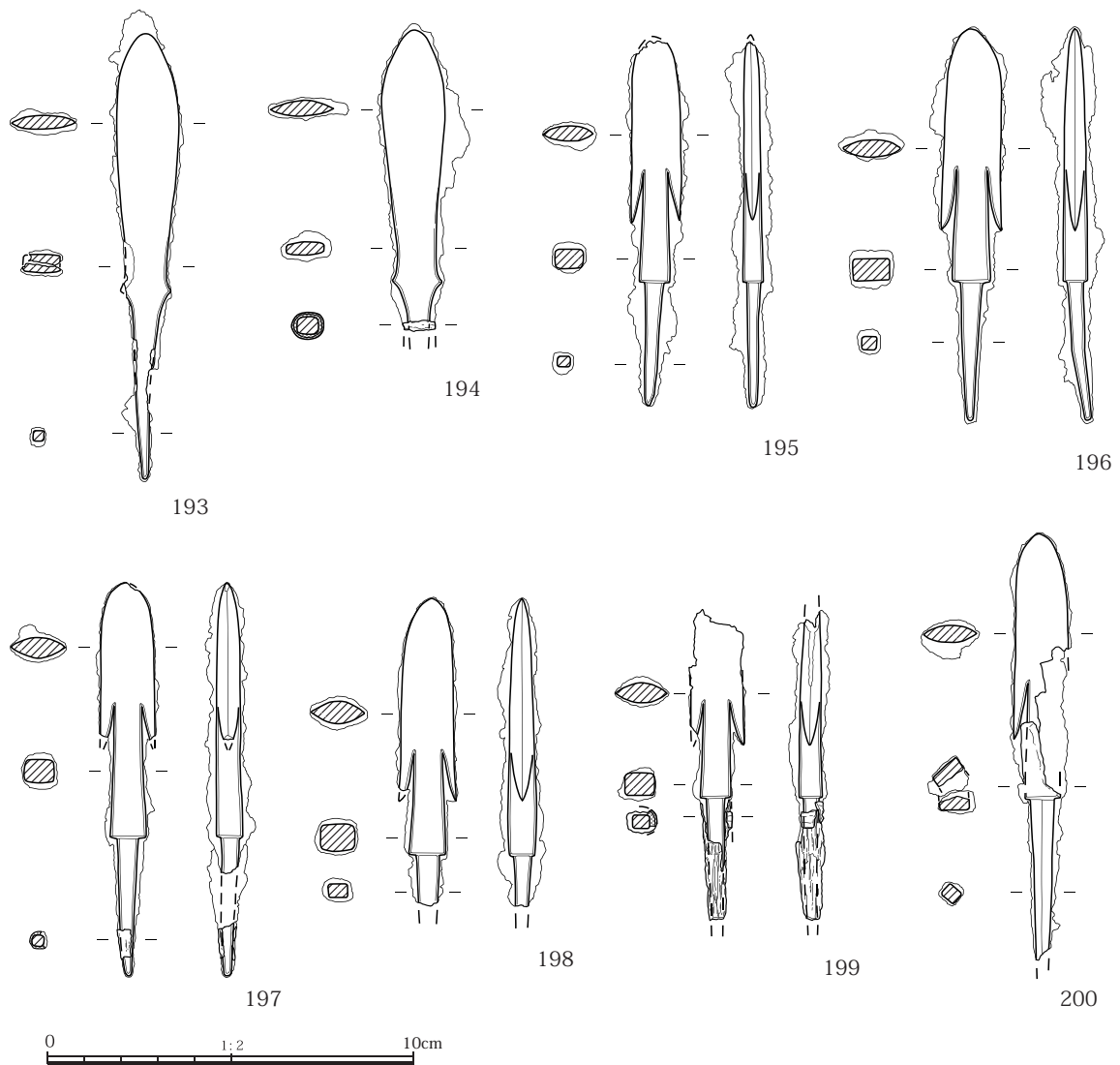
鳥舌式 (193・194) 全部で 4 点あるが図化が可能であったのは遺存状態のよい 2 点のみである。石槨内出土例と同形同大である。193 は鍔身部長 7.1 cm、茎部長 5.0 cm、194 は鍔身部長 6.9 cm である。刃部横断面形はレンズ形で最大厚 4 mm。刃部の研ぎ出しは鍔身部全体には及んでおらず、山形関付近では横断面形はややふくらみのある長方形となる。矢柄にともなう有機質の遺存状態は悪く、詳細は不明である。

腸袂柳葉式 (195 ~ 200) 6 点ある。石槨外だけでみられる形式である。切先が丸みを帯びた幅がほぼ一定の柳葉形の刃部に切り込みの深い腸袂が切り込まれ、腸袂基部からのびる棒状の鍔身下半部から角関の茎関を経て茎部に至る形態である。

全ての個体で切先や腸袂先端などいずれかの箇所を欠失しているが、刃部長 5.0 ~ 5.6 cm、鍔身下半部長 2.7 ~ 3.6 cm、茎部長 3.3 ~ 3.8 cm である。腸袂の切り込みは 1.2 ~ 1.5 cm ほどで、腸袂の内側は弧を描くように切り込む。刃部横断面形はレンズ形で、鍔身下半部から茎部にかけての横断面形は方形から隅丸方形である。刃部最大厚は 195 で 5 mm、196 で 7 mm、鍔身下半部最大厚は 195 で 5 mm、196 で 7 mm であり厚さには僅かに差があるが、いずれも鍔身下半部から段落ちして茎部へと至る立体的な茎関を持つ。矢柄にともなう有機質の遺存状態は悪く、詳細は不明である。

二段腸袂式 (201 ~ 250) 50 点を図化したが、接合関係は不明ではあるが同一個体となる可能性のあるものを除外すると 44 点以上となる。石槨外だけでみられる形式である。切先が丸みを帯びた幅がほぼ一定の柳葉形の刃部の左右両側にそれぞれ上下二段に腸袂が深く切り込まれ、下段の腸袂基部からのびる鍔身下半部が山形関を経て茎部に至る形態をなす。201 では上段腸袂の基部付近に 2 列 2 段計 4 孔の穿孔と、下段腸袂の基部付近に 2 列 1 段計 2 孔の穿孔の合計 6 孔の穿孔を持つが、ほかの個体はいずれも上段下段ともに 2 孔ずつの合計 4 孔の穿孔を持つ。穿孔の径は 2 mm ほどである。

201 は上段の刃部長 5.3 cm、下段の刃部長 2.8 cm、鍔身部長 8.4 cm で、ほかは上段の刃部長 4.2 ~ 5.6 cm、下段の刃部長 2.6 ~ 3.8 cm、鍔身部長 7.7 ~ 8.8 cm、茎部長 4.3 ~ 5.4 cm である。腸袂の切り込みは上段で 1.4 ~ 2.3 cm、下段で 1.2 ~ 2.2 cm で、いずれも腸袂の内側は弧を描くように切り込む。刃部横断面形はレ



第100図 鉄鏃実測図(13)：鳥舌式・腸袂柳葉式

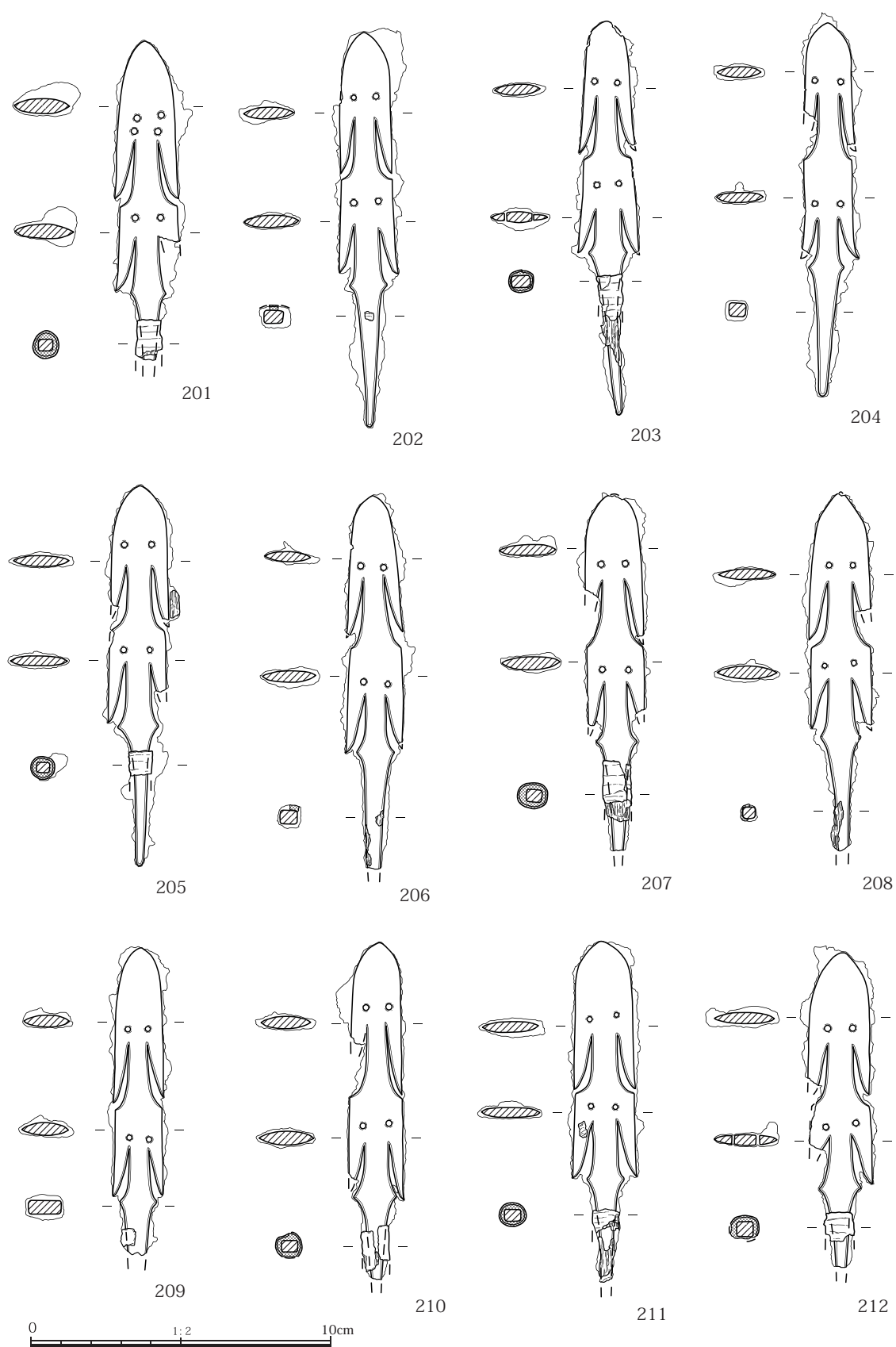
ンズ形で、鏃身下半部から茎部にかけての横断面形は方形から隅丸方形である。刃部最大厚は4mm前後で、全体的に平坦であり立体的な段差を持たない。矢柄にともなう有機質の遺存状態はあまり良くないが、遺存している例をみると平面的には茎部の形態に規定されてほとんど幅を減じずに矢柄先端に至るが、側面では矢柄先端が先細りの形となる。口巻きには樹皮を用いている。茎巻きは確認できていない。

なお、220・236にはそれぞれ偏円頭小札B類の小札が2点ずつ、232には別個体の鉄鏃の関部が錆着している。

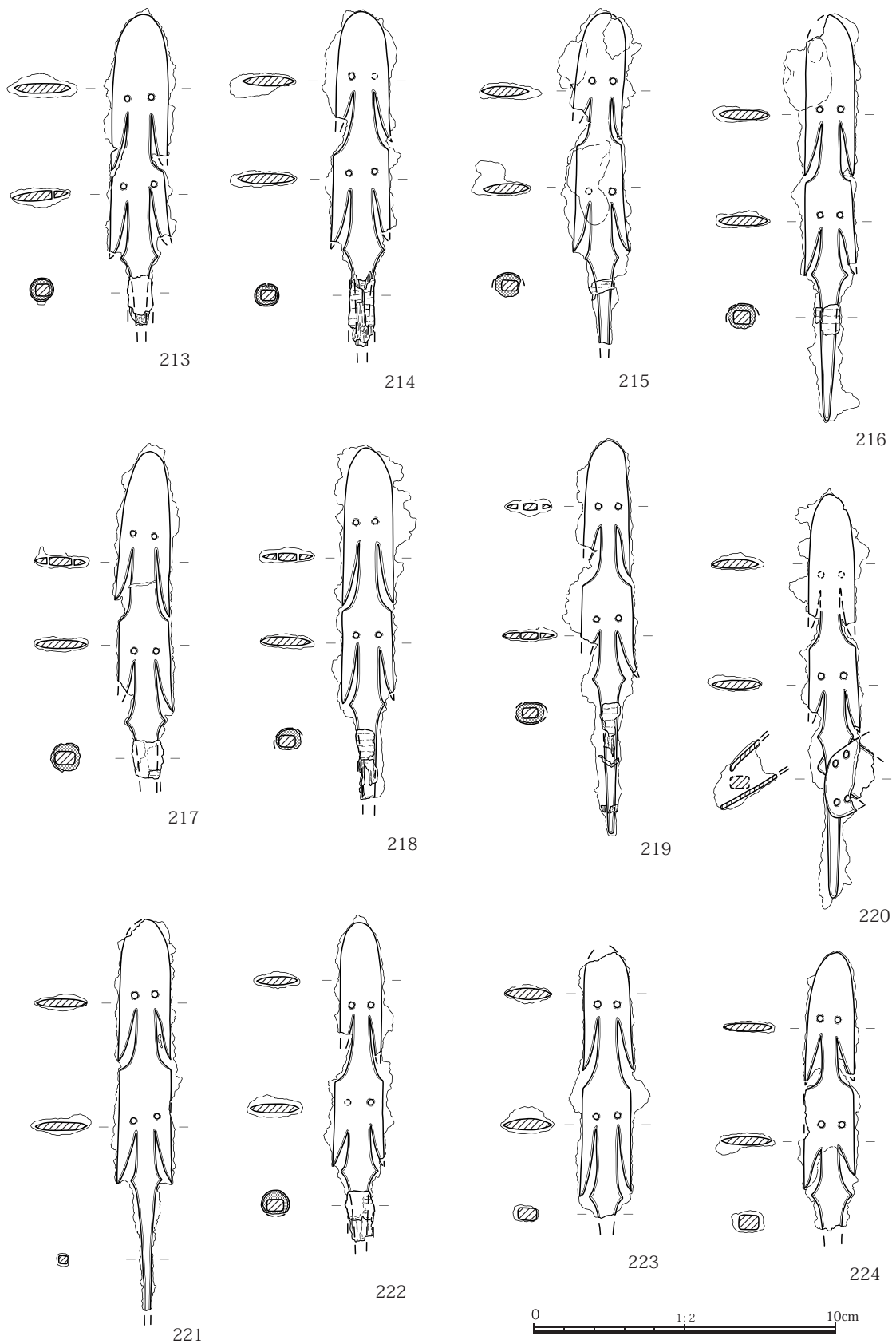
大型定角式(251～258) 8点ある。石槨外でのみみられる形式である。ふくらの強い三角形の刃部から強いナデ関による刃部関を経て鏃身下半部へと至る形態をなすが、細部の形態の違いによりA～Cの3類に細分できる。

A類(251～254)は鏃身下半部から山形関を経て茎部に至る。鏃身部中央には僅かに下方二辺が長いが菱形に近い透かし孔を持つ。刃部長は251や252では5.5cmほどで、253では4.6cmとやや短く、

3 武器

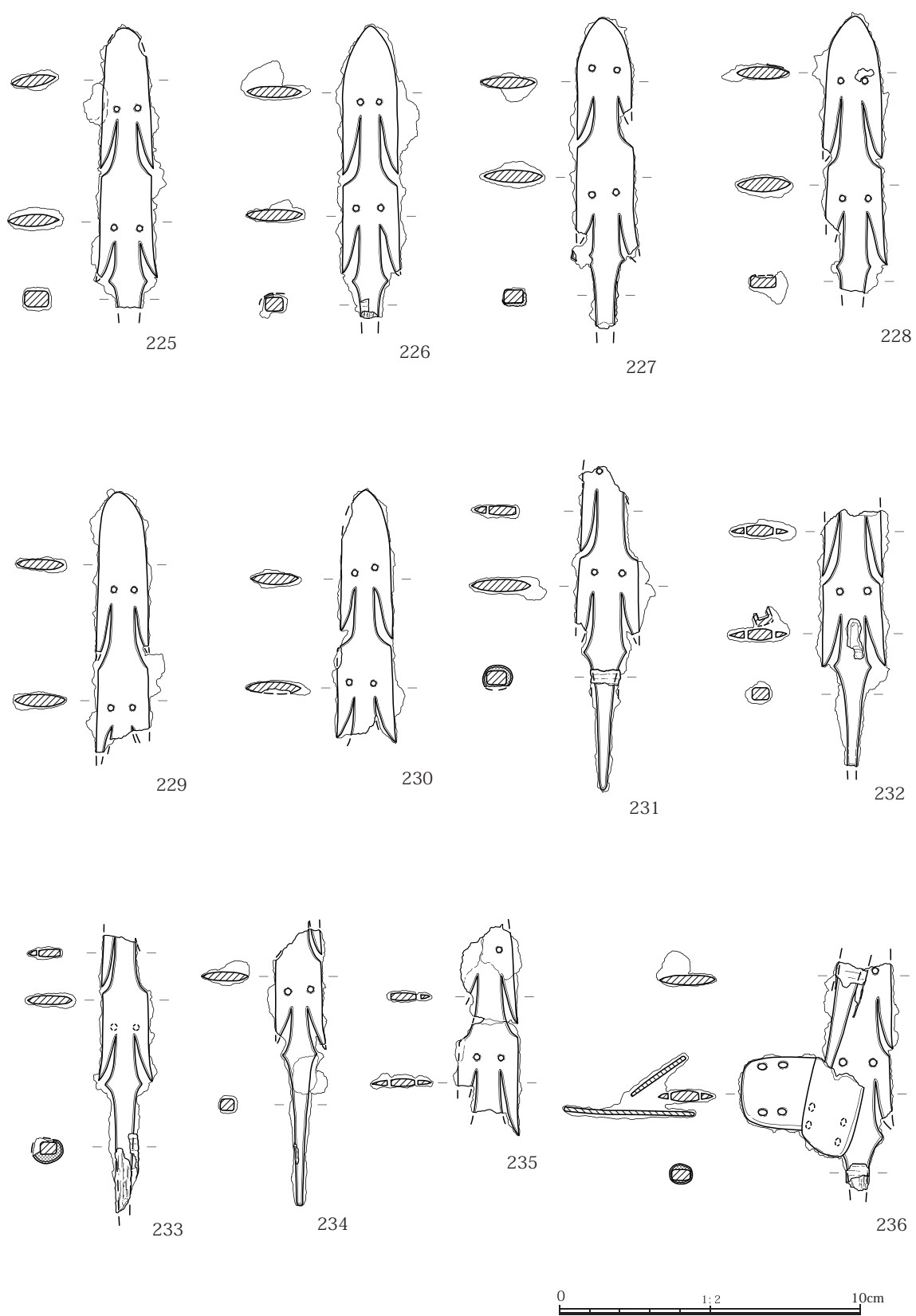


第 101 図 鉄鏃実測図 (14)：二段腸扶式 (1)

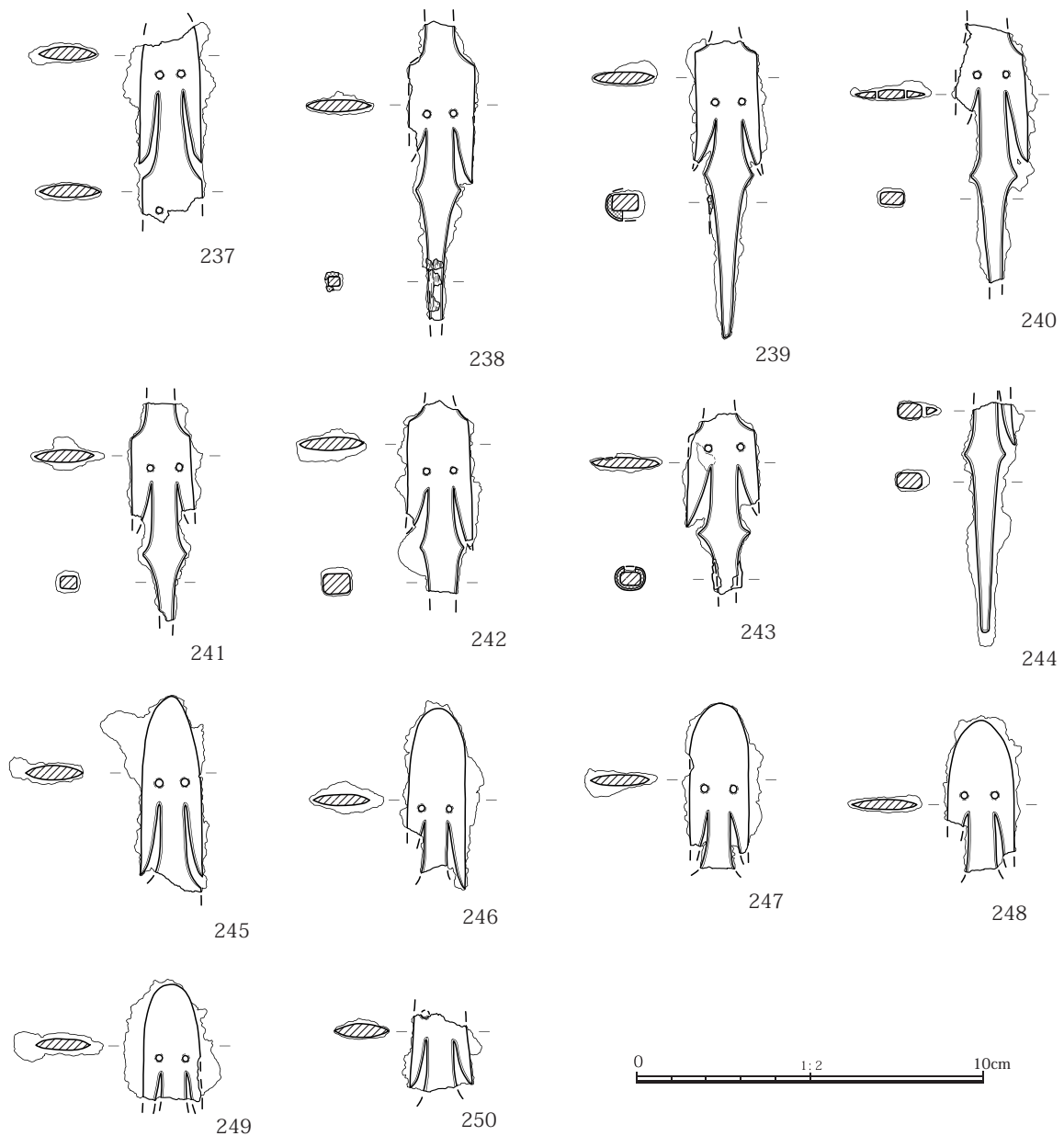


第102図 鉄鍔実測図(15):二段腸袂式(2)

3 武 器



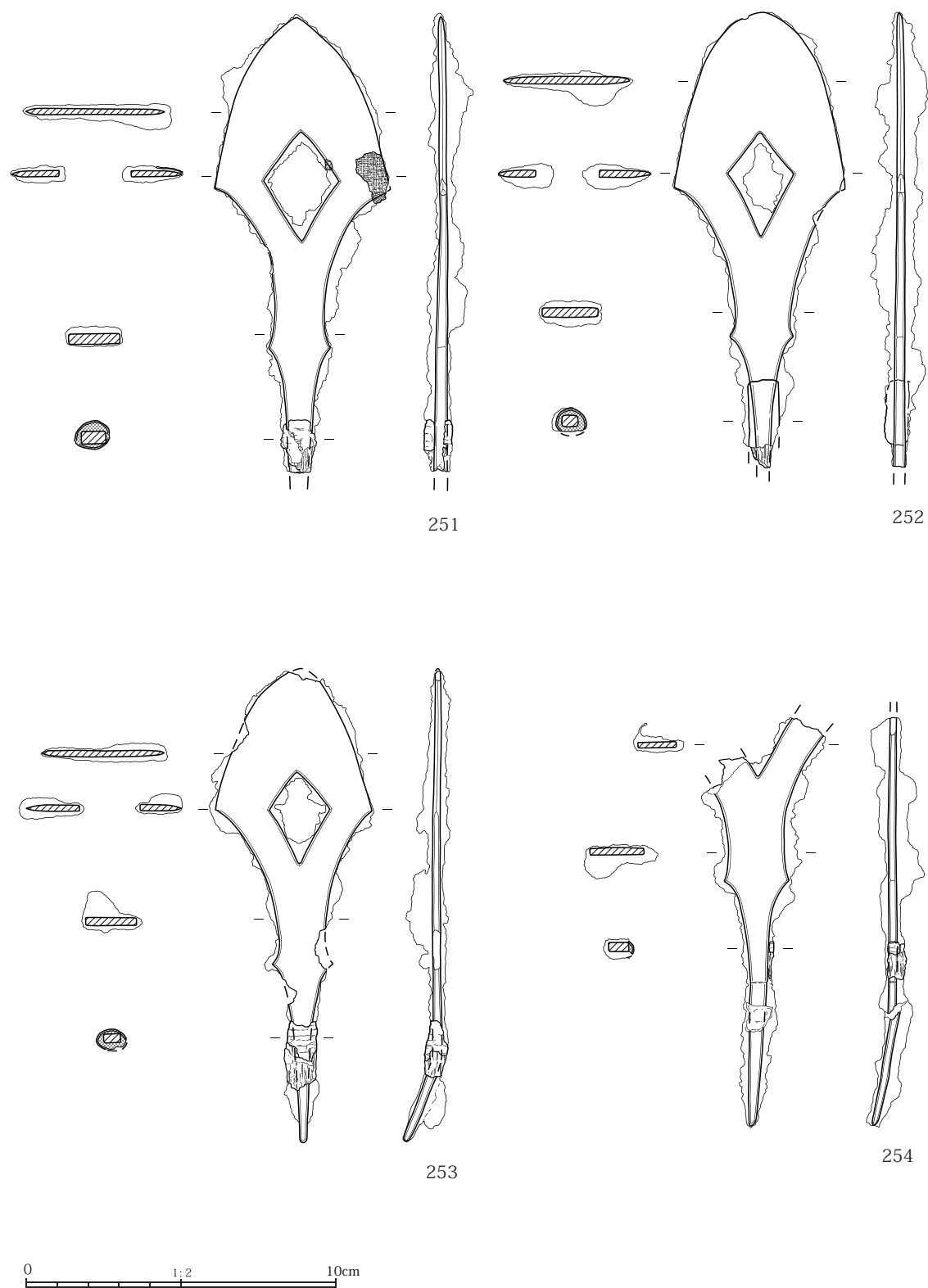
第 103 図 鉄鏃実測図 (16)：二段腸扶式 (3)



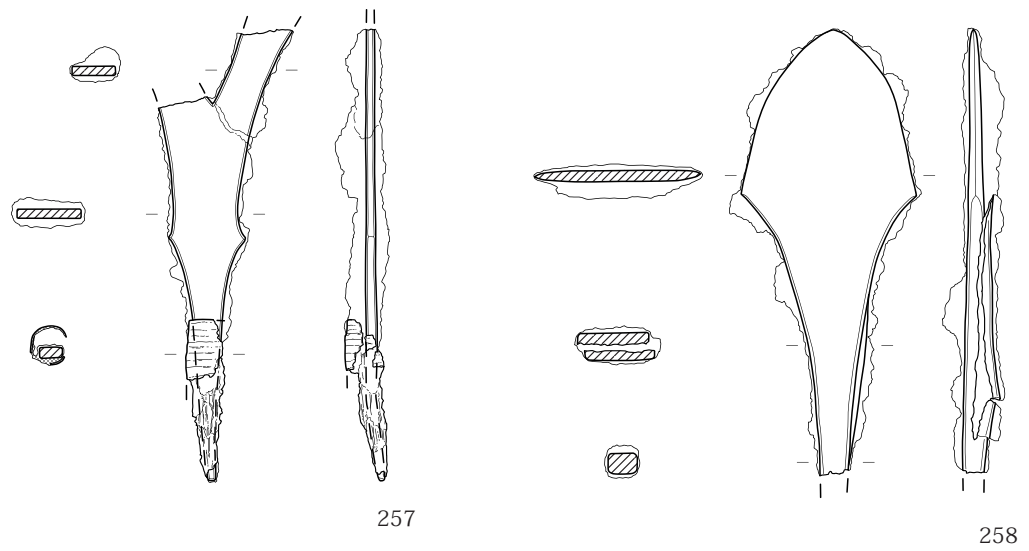
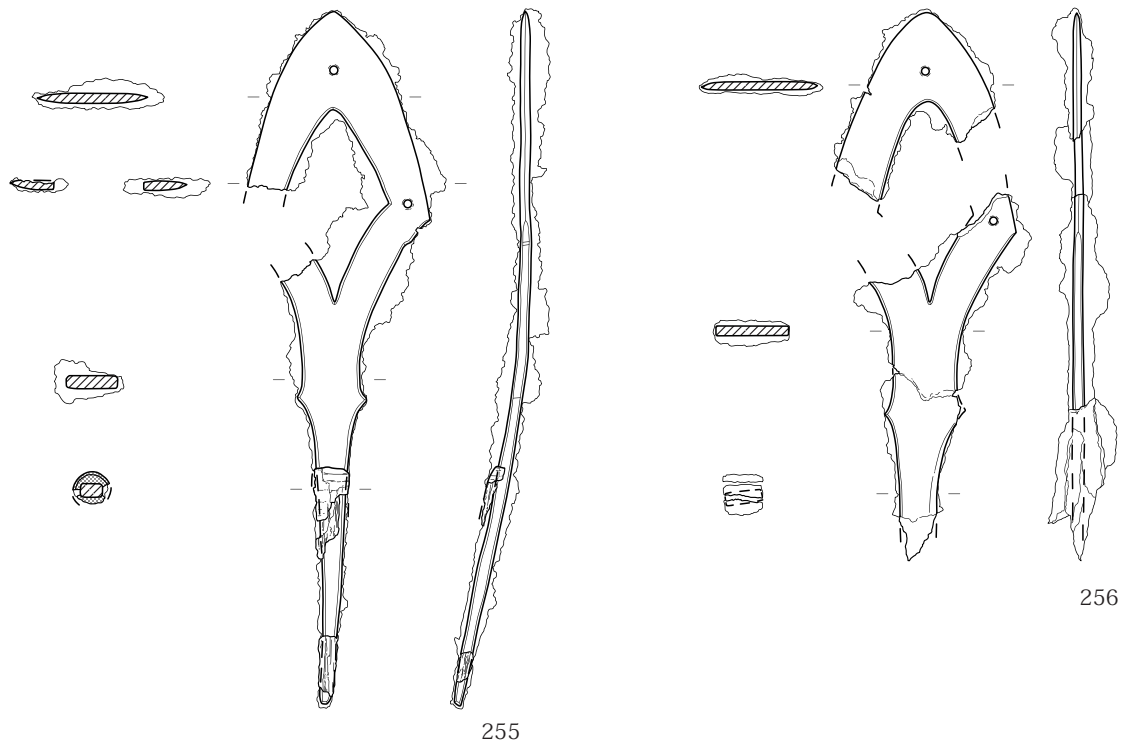
第104図 鉄鏃実測図(17)：二段腸袂式(4)

刃部最大幅は251・252では復元値で5.7cmほど、253では5.0cmと、253がやや小さい。鏃身下半部長はいずれも5.0cmほどで、茎部長は253で5.7cmである。刃部横断面形は偏平なレンズ形で厚さは3mmほどである。鏃身下半部以下の横断面形は隅丸の長方形で、切先側から茎部側へと僅かに厚さを増し、茎部最大厚は4mmほどとみられる。矢柄の先端形状は平面形では鏃本体の茎部の形態に規定されてほとんど幅を減じないが、側面形では先細りとなるようである。口巻きには樹皮を用いており、茎巻きの有無は不明である。

B類(255～257)は平面形はA類とほぼ同じだが、唯一全形がほぼわかる255で刃部長5.4cm、刃部最大幅は復元値で5.0cmほど、鏃身下半部長4.9cm、茎部長8.1cmであり、A類と比べて刃部幅が狭い。また、透かし孔の各辺が鏃身部の外形に合わせて強い弧状をなす点や、鏃身部の3点の頂点に近い位置



第 105 図 鉄鏃実測図 (18) : 大型定角式 (1)



0 1:2 10cm

第106図 鉄鍬実測図(19):大型定角式(2)

3 武 器

に1点ずつ計3箇所の穿孔を持つ点がA類と大きく異なる。穿孔の径は約2mmである。なお、257は鍔身部のほとんどが失われており、A類・B類の確定がやや難しい。透かしにあまり湾曲がみられない点はA類に近いが、あまり横幅が開かないことからB類として考えておく。また、255の刃部関部分には僅かなふくらみがあり、精美なナデ関を呈さない。

いずれも刃部横断面形は偏平なレンズ形で厚さは3mmほど、鍔身下半部以下の横断面形は隅丸の長方形で、切先側から茎部側へと僅かに厚さを増し、茎部最大厚は4mmほどになる点はA類と共通する。矢柄先端部分の形状も同様で、側面形が先細りとなる形態に口巻きとして樹皮を巻き付けている。

C類(258)は鍔身部中央に透かし孔を持たず、また明確な茎関も持たない。刃部は刃部関付近で僅かに外湾する。刃部長4.3cm、刃部最大幅4.6cmでA類・B類より僅かに小型である。刃部横断面形は偏平なレンズ形で最大厚3mm、鍔身下半部から茎部にかけての横断面形は隅丸方形で茎部最大厚は5mmとやや厚手である。ただし、内部からの錆膨れが進んでおり、本来の形態とはやや異なる可能性がある。矢柄にともなう有機質は遺存していない。

②短茎式・無茎式(259～370)

概 要 短茎式112点、無茎式1点の計113点ある。先述のとおり短茎式は分類の基準がやや不明瞭となるため形式ではなく類としてA～H類の8類に区分したが、これまでに述べてきた各形式と比較すれば、細分8類が形式相当の分類基準に近いものもある。

短茎A類(259～318) 60点ある。ふくらを持った曲線的な切先から緩やかに幅を広げ、全体として長三角形をなす。左右両側からのびる腸挟は鋭く長く、内側に小型の腸挟が造り出されるいわゆる二重腸挟をなす。ただし、264のみ内側に二つの腸挟が造り出される三重腸挟となる。腸挟の内側は弧状をなし、茎部にほぼ直角に取り付く。腸挟先端の欠損のため全長を確定できないものも多いが、全長5.1～8.4cm、茎部長1.2～1.9cmで、鍔身部最大幅2.8～3.9cm、厚さは2mmである。ただし、鍔身部最大幅については腸挟先端を欠失しているものが多く、本来は4.0cmを超えていたものとみられる。全体的に大きさにばらつきがあるが、特定の大きさにまとまる様子はない。また、301のように腸挟が短く外側に開くような形態をなすものもあり、腸挟の形態をもとに細分も可能であるが、腸挟先端の欠失のため詳細を確定できないものが多いため、細分はおこなわない。

鍔身部には穿孔があるものとないものがあり、穿孔があるものはその位置と個数からいくつかの種類化できる。259～279は穿孔を持たない。280～306は中心軸上切先寄りの位置に1点、307～312はやや片側に寄った位置に1点、313・314は中心軸を挟んだ両側寄りにそれぞれ1点の計2点、315は中心軸上切先寄りに1点と茎部寄りで中心軸を挟んで左右それぞれに1点の計3点の穿孔がみられる。なお、破片資料ではあるが、316では根挟みに近接する片側のみに穿孔がみられる。穿孔の有無や配置と鍔身部の形態との間には明確な関係はみられない。

根挟みの遺存状況は全体的にあまりよくないが、X線画像の検討から根挟みの平面形を確定できたものもある。根挟みの挟み部の平面形態には細長で先端が尖るもの(尖頭式)と、挟み部が短く先端に3点の角を持つもの(圭頭式)の2種類がある〔川畑2010〕。尖頭式はいずれの鍔身部形態・穿孔方式のものにもみられるが、圭頭式は中軸線上に1点の穿孔を持つもの(282・283・286・291)と316

にしかみられない。あまり明確ではないが、鏃身部形態の小差・穿孔方式・根挟みの形状には若干のまとまりがあった可能性がある。

短茎式鏃の鏃身部にほどこされる穿孔には、糸や紐を通して根挟みを緊縛し固定を強化するために用いられたものもあるが、実物・X線画像の観察によってもそういった造作は確認できなかった。そもそも中心軸からかけ離れた位置に穿孔を持つものもあり、全ての穿孔が根挟みの固定機能を担っていたとは考えがたい。ただし、根挟みの固定を想定しない場合の穿孔の使用方法は不明である。

短茎B類 (319～336) 18点ある。鏃身部先端が圭頭状をなし、幅を変えずに腸袂へと至るもので、全体として縦長の五角形に近い形をなす。鏃身部先端の幅が茎部側の幅よりも広く、左右に張り出すような形をなす個体もある。左右両側からのびる腸袂は鋭く長く二重腸袂を持ち、内側は弧状をなして茎部にほぼ直角に取り付く。鏃身部先端の形態を除けばA類に近似した形態をなすが、A類としたものの中にも鏃身部先端のふくらが弱く直線的でB類に近いものがあり、また逆にB類としたものの中にも鏃身部先端がやや曲線状をなすものがあり、厳密な区分がやや難しい個体もある。全長6.5～8.0cm、茎部長1.4～1.8cm、鏃身部最大幅2.8～3.4cm、厚さ2mmである。個体数が少ないためもあると考えられるが、比較的大きさがまとまる。

鏃身部には穿孔を持つものと持たないものがある。319～329は穿孔を持たない。330は刃部片側に寄った位置に1点の穿孔を持ち、穿孔の位置や全体的な形態もA類に近く、区分が難しい。331～334は中心軸上に2点、335・336は欠損部が多いものの中心軸上に1点の穿孔がみられる。穿孔の径はいずれも2mmほどだが、335ではやや判然としないもののX線画像の観察による限り径5mmほどの非常に大きい穿孔がほどこされている。

根挟みの形状は遺存するものはいずれも細長で先端が尖る尖頭式である。中心軸上に2点の穿孔を持つ個体は根挟みの固定にも使用可能だが、根挟みの固定に用いられた糸や紐らしき痕跡はみられない。

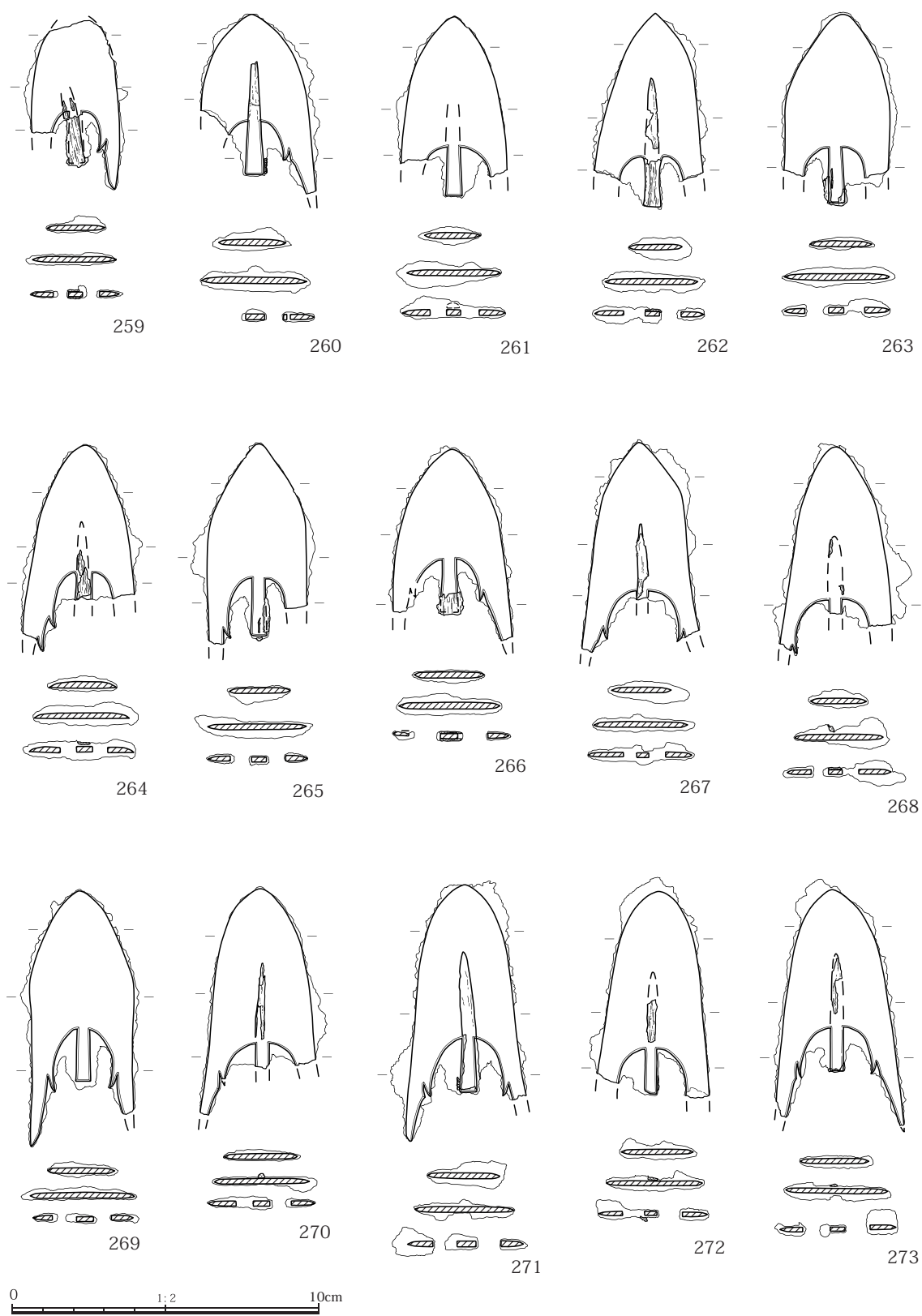
短茎C類 (337～339) 3点ある。ふくらを持つ鏃身部先端から徐々に幅を広げつつ腸袂に至る。腸袂の切り返しは弱く、直線的に茎部へと取り付く。全体として砲弾形に近い形といえる。337は全長8.0cm、鏃身部長6.7cm、鏃身部幅は復元で4.6cm、茎部長2.0cmである。338は茎部が長く鏃身部幅が4.0cmと狭い。339は全長9.1cm、鏃身部長7.5cm、鏃身部幅4.7cmに復元でき、やや大きい。厚さはいずれも2mmである。

鏃身部には穿孔を持たず、また根挟みの遺存状態も悪く形状は確定しがたい。337では根挟みに由来する木質が鏃身部中ほどにまで及んでいるため、根挟みの形状は細長で先端が尖る尖頭式であった可能性が高い。

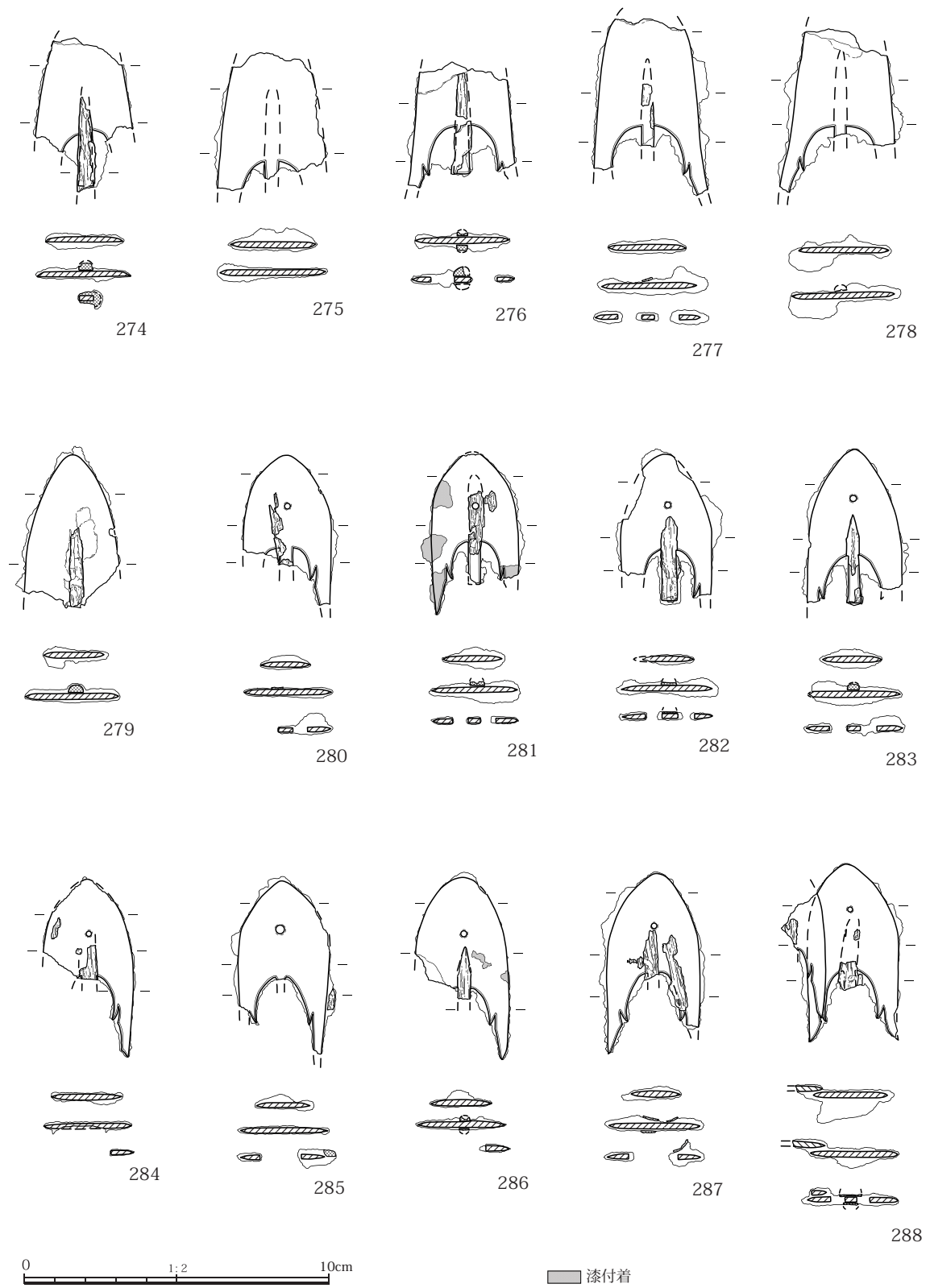
短茎D類 (340～349) 10点ある。ふくらを持つ鏃身部先端から幅を広げ、鏃身部中ほどでもっとも張り出し、そこから弧状をなしつつ幅を減じて腸袂に至る。腸袂の切り返しは弱く、直線的に茎部へと取り付く。鏃身部は全体としてやや不整な五角形となる。全長7.0～8.3cm、鏃身部長6.6～7.1cm、茎部長1.8cmほど、鏃身部最大幅4.0～4.5cm、厚さ2mmで、比較的大型である。

340～347では、鏃身部幅が最大となる箇所ですら左右それぞれやや側縁寄りの位置に計2点の穿孔を持つ。348は破片資料であるが、現状では穿孔は確認できなかった。根挟みは342で完存しており、細長で先端が尖る尖頭式である。ほかの例についても同様とみて問題ない。短茎D類にみられる根挟

3 武器

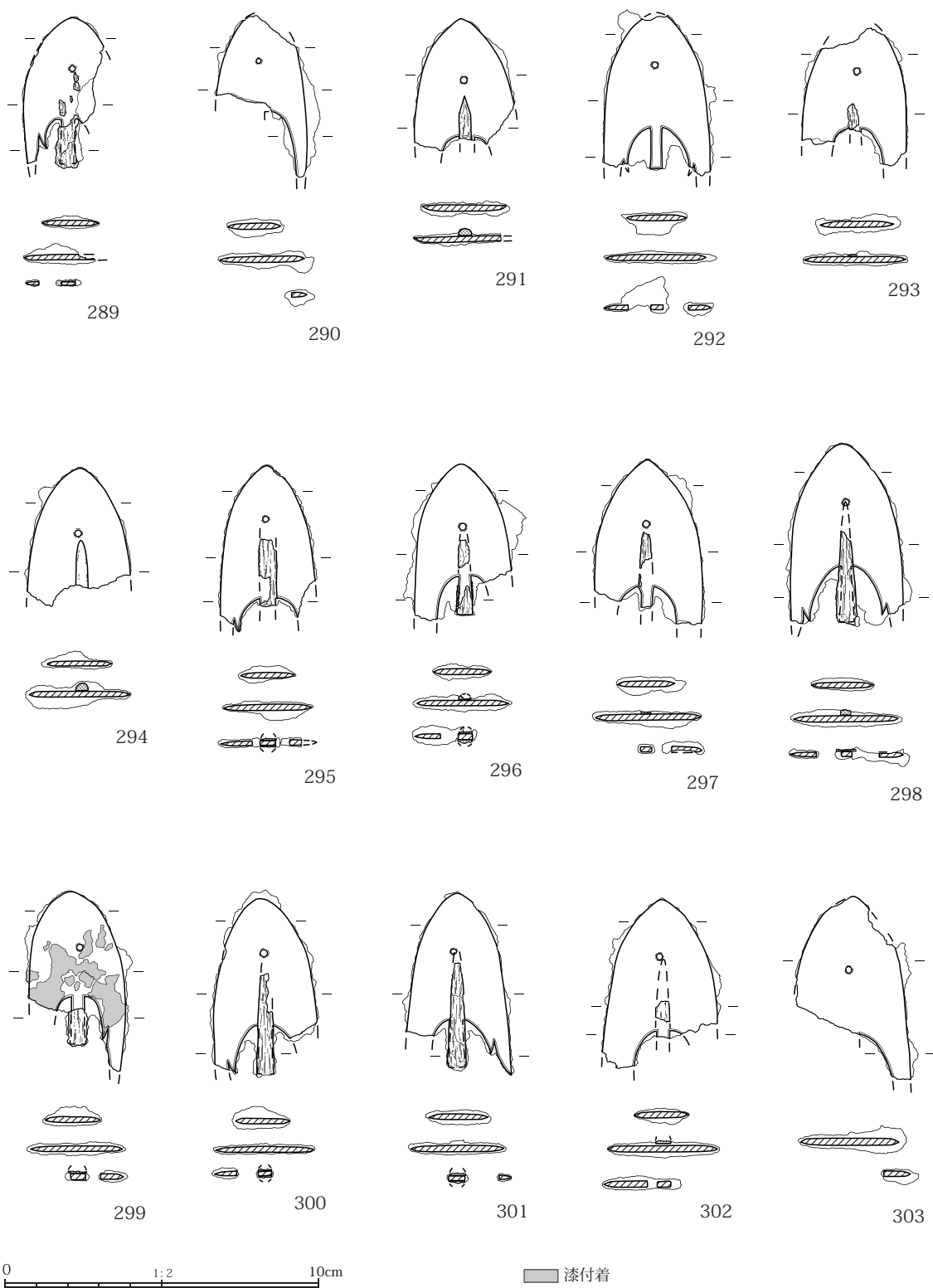


第107図 鉄鏃実測図(20):短茎A類(1)

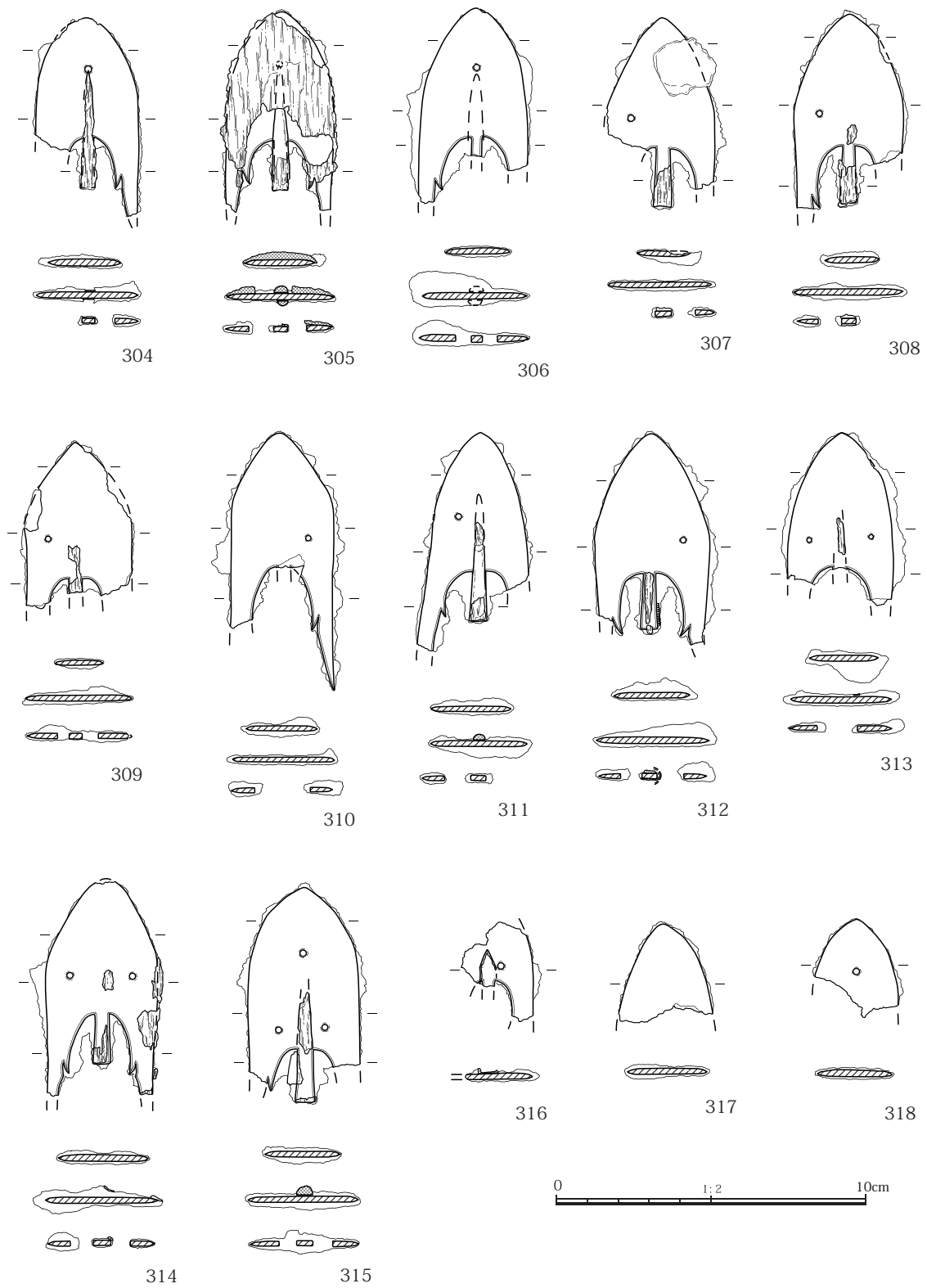


第108図 鉄鏃実測図(21):短茎A類(2)

3 武器

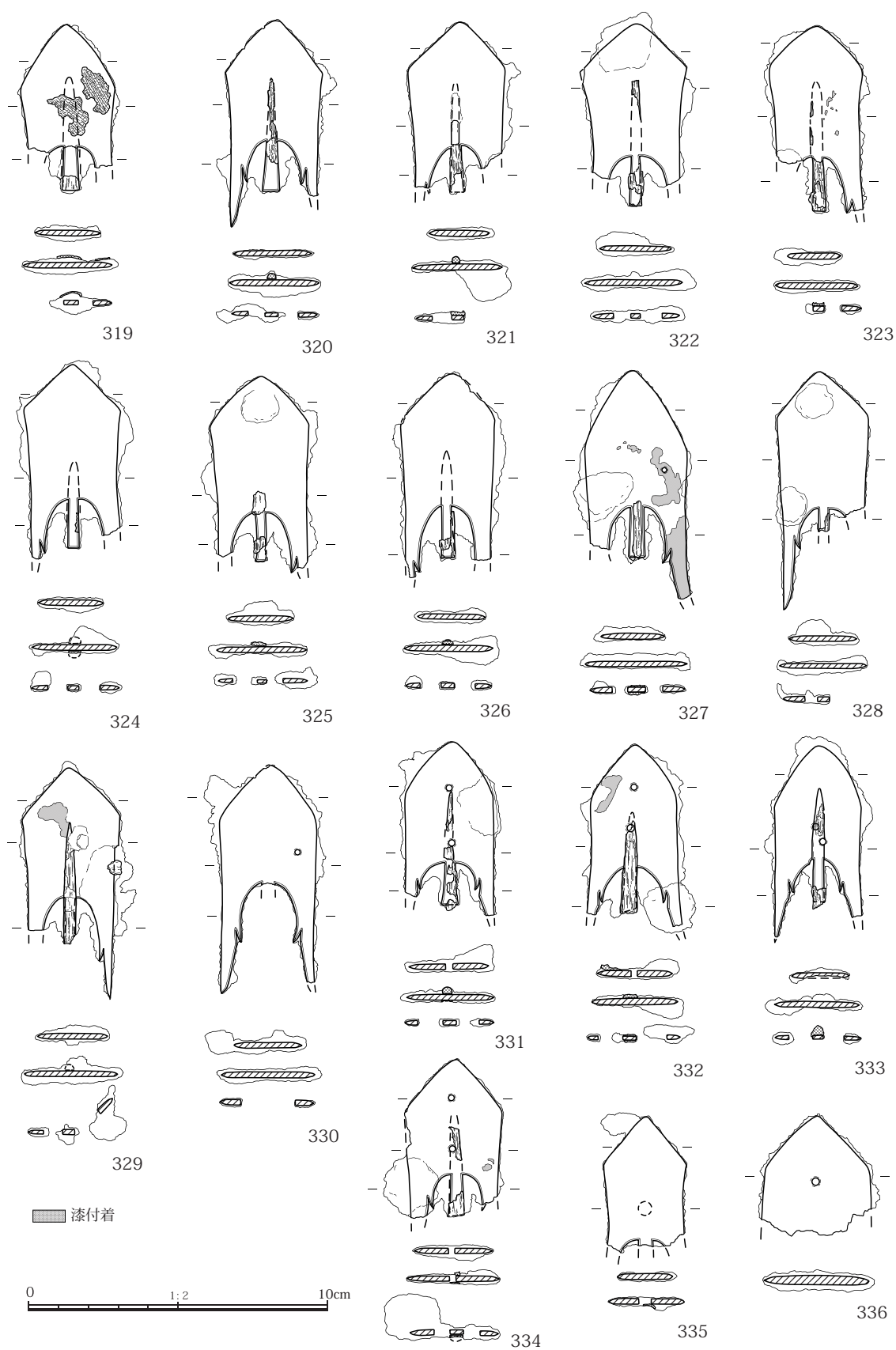


第109図 鉄鍔実測図(22):短茎A類(3)

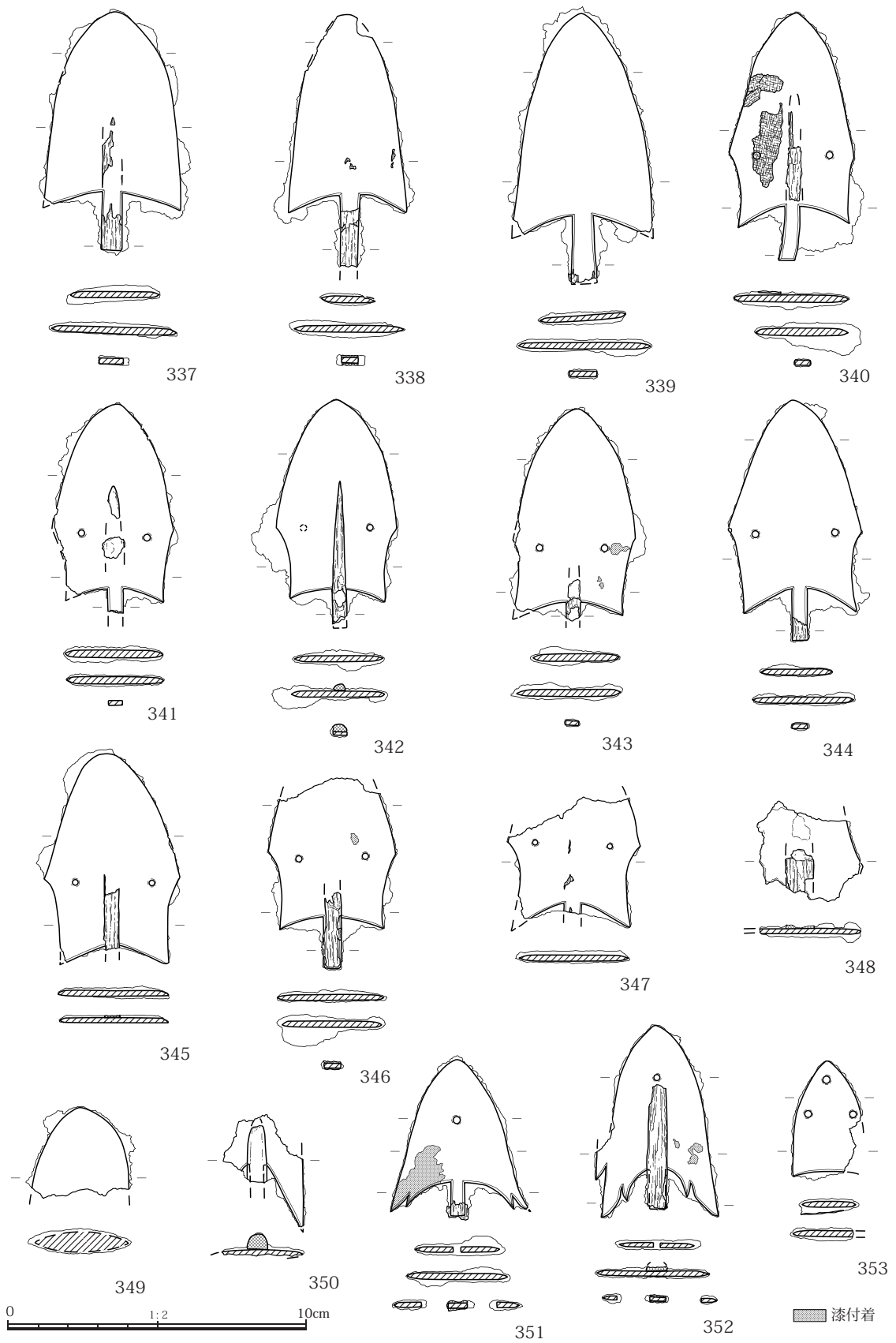


第110図 鉄鏃実測図(23):短茎A類(4)

3 武器



第111図 鉄鏃実測図(24):短茎B類



第112図 鉄鏃実測図(25): 短茎C・D・E・F・G類・無茎式

みから離れた2箇所にある穿孔は、根挟み固定用としてはまったく機能しない位置にあり、機能上の理由から穿孔されたものではないと考えられる。なお、349については鋤身部先端の形態から短茎D類と考えたが、大半を欠失しており確定はできない。

短茎E類 (350) 350の1点のみである。鋤身部先端を欠失しており全体形は不明だが、腸袂の切り返しが強、腸袂内縁は直線的で茎部とは鋭角的に取り付く。腸袂には重袂はみられない。残存長3.7cm、残存幅2.7cm、厚さ2mmである。根挟みの形状は先端を欠失しているため確定できないが、あまり長くのびない砲弾形に近い形であったと考えられる。

短茎F類 (351) 351の1点のみである。ふくらを持つ鋤身部先端から幅を広げつつ腸袂先端に至る。腸袂先端に二重腸袂を持ち、弱い切り返しから緩やかな弧状をなしつつ茎部にほぼ直角に取り付く。全体形は正三角形に近い。全長5.2cm、鋤身部長5.1cm、茎部長1.1cm、鋤身部幅4.6cm、厚さ2mmである。鋤身部中央やや上方寄りに穿孔を1点持つ。根挟みはうしなわれており、形状は不明である。

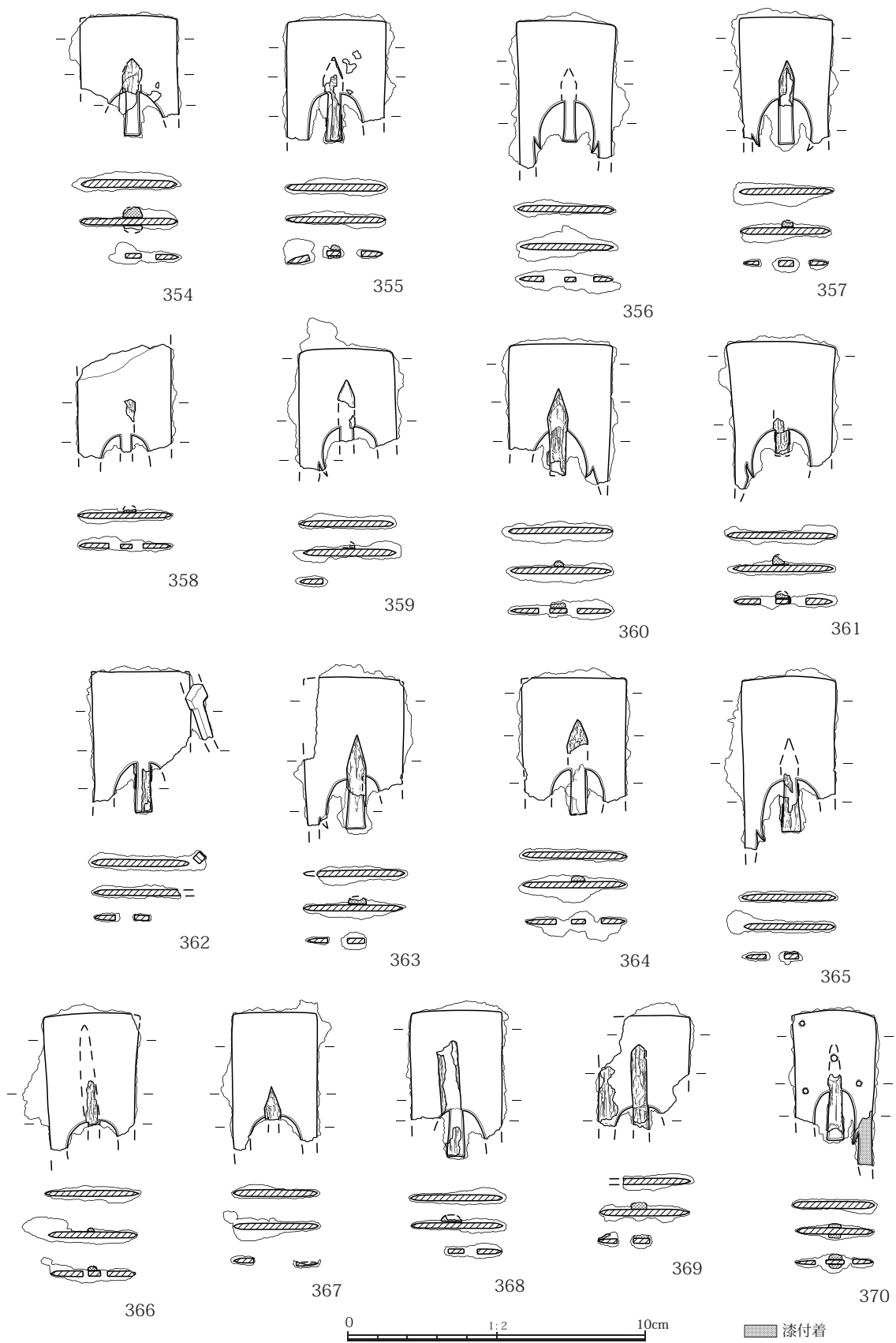
短茎G類 (352) 352の1点のみである。ふくらを持つ鋤身部先端から幅を広げつつ腸袂先端に至る。腸袂の切り返しはやや強めで、腸袂内縁は弧状をなし角を持って茎部に取り付く。腸袂は二重腸袂をなす。全体形は長三角形である。鋤身部側縁の一方には別個に腸袂が突出する形で造り出されているが、その上方を欠失しており、鋤身部先端側がどのように取り付いていたかはわからない。全長6.4cmで茎部よりも腸袂の方が長い。茎部長1.4cm、鋤身部幅4.0cm、厚さ2mmである。鋤身部中心軸上やや切先寄りの位置に穿孔が1点ある。根挟みの形状は、やや幅広で長く、先端に角を持つ圭頭状をなす。

短茎H類 (354～370) 18点ある。鋤身部先端が横方向の直線をなし、そこから直角に折れ曲がり腸袂へと至る形態である。全体として方形をなす。刃部は鋤身部先端だけでなく側縁にも及んでいる。腸袂の切り返しはかなり強く、腸袂内縁には二重腸袂を持ち、弧状を描きつつ茎部に直角に取り付く。横幅が広く鋤身部先端から茎部までの距離が短い354～364と、横幅が狭く鋤身部先端から茎部までの距離が長い365～370の2群に大きく分けることができるが区分は厳密ではなく、やや中間的な個体もある。また、370は穿孔を4箇所に持ち鋤身部幅も狭いなどやや特殊な形態をなしている。いずれも腸袂先端までを完存するものはない。354～364は残存長4.3～5.0cm、茎部長1.3～1.7cm、鋤身部幅3.1～3.6cmである。365～370は残存長3.7～5.9cm、茎部長1.5～1.7cm、鋤身部幅2.8～3.1cmである。どちらも厚さは2mmである。なお、篠状鉄札に鏽着するものが1点ある(第80図290)。

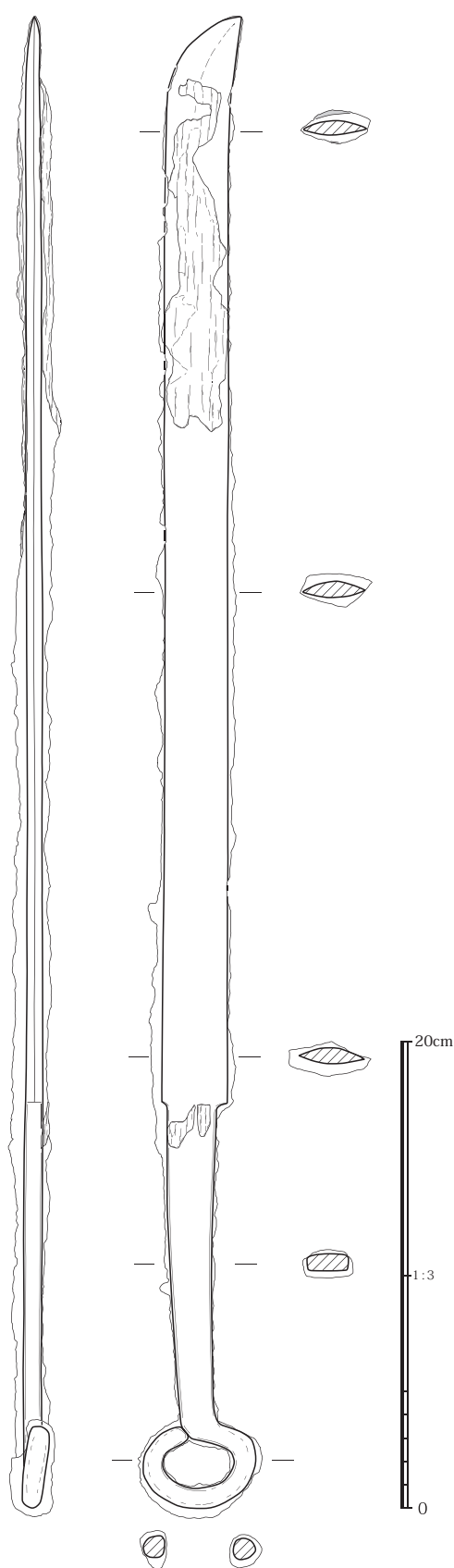
根挟みの形状には全長が短く先端が鋭く突出する圭頭状のものと、全長が長く先端の突出が弱い圭頭状のものがある。後者は短茎G類の根挟みに近似する。ほかに366や370はX線画像によって痕跡をみる限り、細長い尖頭状となる可能性がある。全長が短い圭頭状の根挟みはH類に集中して多くみられることから、鋤形式と根挟みの形状に一定の相関性があったと考えられる。

無茎式 (353) 353の1点のみである。ほかに類例の無い形態であり、蛇尾など鉄鋤以外の器種の可能性も考えたが、刃部を持つと判断したため、鉄鋤とした。

ふくらを持つ鋤身部先端から幅を広げつつ下端へと至る。下端での切り返しはほとんどなく、いわゆる凹基式の石鋤に近い基部形態であり、全体として長三角形となる。全長3.8cm、鋤身部最大幅2.3cmで小型である。中心軸上の鋤身部先端寄りに1点、やや下って両側縁に1点ずつの計3点の穿孔を持つ。根挟みの痕跡は残っておらず、鉄鋤としての器種同定には問題を残す。(川畑 純)



第113図 鉄鍬実測図(26):短茎H類



第114図 環頭剣実測図

(2) 環頭剣(図版134、第114図)

極めて特殊な形状を有する両刃の武器であり、環頭剣と呼称しうる事例である。

鉄剣本体の全長は64.6cmである。刃部は長さ47.0cm、関部の幅2.8cm、厚さは7.5mmほどである。切先は一方のみに反りを持ちながら、ふくらを形成する特徴的な形態をなす。刃部はほとんどにおいて断面がレンズ状であるが、切先は鋭く造られており、僅かながら鎬が認められる。刃部は幅と厚みが切先付近を除いてほぼ一定を保つ。表面には鞘木に由来するものと思われる木質が遺存するが、その構造を把握できるほどではない。

茎部は長さ14.0cm、関付近で幅2.2cm程度、茎尻付近で幅約1.5cmであり、最大厚は8mmに達する。環頭部を含めた長さは17.6cmである。関部は、X線画像による観察でもあまりはっきりしないが、一方はやや深く抉られたような形態で、もう一方が小さく落ちる形状となる。それぞれの関の深さは深い方でおよそ5mm、浅い方は2mmほどである。茎部断面は長方形を呈する。全体に緩やかに弧を描くようにのびる。茎尻には、直径8～10mmほどの円形に近い断面形態を持つ環頭部が取り付け。その長さは3.6cm、幅が4.9cmであり、X線画像をみる限り、環頭部は茎尻を長く引き伸ばして巻き込む形状のものと判断しうる。目釘孔はX線画像によってもその存在をまったく確認できない。茎部には有機質が遺存する。有機質は木質であり、把装具に由来するものと考え。木製の把装具が装着され、把縁の位置は関と一致する構造となる。ただし、遺存状態が悪いため、これ以上の構造の詳細については不明である。

本例は全体の形状を考慮すれば、両刃の鉄剣でありながら、鉄刀の形態をある程度指向したものと推測しうる。切先のふくらが一方のみに形成される点や、関の深さが左右非対称である点などは、そうした可能性をうかがわせる特徴であると評価しておきたい。

(岩本 崇)

4 農工漁具

(1) 鍬・鋤先(図版 135、第 115 図)

発掘報告では存在が認識されていなかった器種である。破片 3 点で、1・2 はいずれも左部分の折り返しであるので別個体であるのは確実だが、3 はどちらかの個体と同一か、それともいずれでもなく第 3 の個体かは確定できない。2 個体以上とするのが適切であろう。

1 は左部分の折り返し部分の破片である。折り返しが側方に開く部分は「つぶし」(巻き込み)がほどこされている。折り返し内部の一部には木質が遺存している。2 も左部分の折り返し部分の破片である。1 よりも明らかに折り返しが長く、別個体の根拠となる。こちらは「つぶし」が認められない。折り返し内部はごく僅かであるが木質が遺存している。3 は右部分の折り返し下部と刃先の部分である。緩やかに内反している。角は丸く収められている。

1 から 3 はいずれも雛形であるとみて間違いない。次に述べるように鎌も確実に雛形で、手鎌も雛形の可能性が高い。五條猫塚古墳の副葬鉄器を構成する農具がいずれも雛形と考えられるのは興味深い事実である。(魚津知克)

(2) 鎌(図版 135、第 115 図)

いわゆる曲刃鎌である。先端と基部を欠失している。残存長 6.7cm、身部最大幅 1.9cm で、刃部の断面形は楔形である。基部付近の両面には幅約 5mm に渡って木柄の痕跡が認められる。木柄は背に対して約 100 度の傾きで装着されていたとみられる。楔などの痕跡はみられない。木柄の痕跡がみられるため、基部付近まで残存しているとみられるが、折り返しは遺存していない。刃部は左端から約 1.0cm の位置から緩やかに内湾して弧状をなしており、そのため刃先が内湾すると判断し、図では曲刃として復元した。ただし、刃部の内湾については研ぎ減りの可能性もあり、刃先は直線的であった可能性も否定できない。

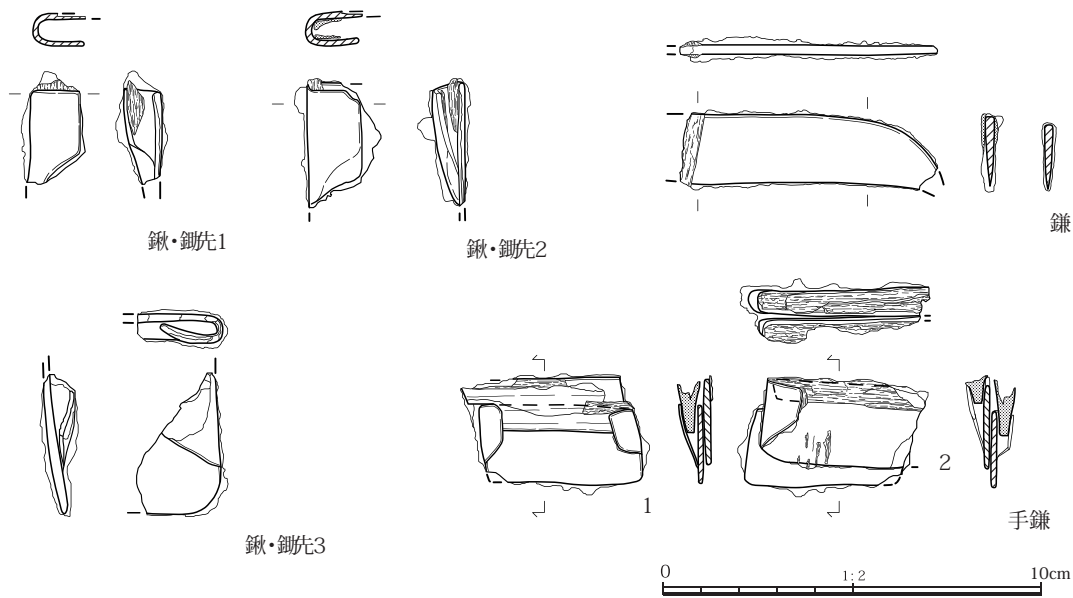
先端と基部を欠失するものの、ほぼ全形の復元が可能であり、先述のとおり雛形とみられる。

(鈴木康高・川畑 純)

(3) 手 鎌(図版 135、第 115 図)

発掘報告では「横形斧」として報告されていた器種である。2 点が背中合わせに錆着している。いずれも鉄板の両側を折り返して木製台を挟む型式のものである。1 は完形であるが、2 は右側の折り返しを欠く。

1・2 ともほぼ同形同大と推定されるが、折り返しの長さは 1 の方が小さい。錆に覆われているので詳細な観察は困難であるが、1・2 ともに折り返し部分の「つぶし」(巻き込み)はほどこされていないようである。2 点とも刃の両側は緩やかな弧を描き、断面をみるとあまり鋭利ではないことがわかる。1 と 2 とは上下方向に多少ずれて錆着しており、結果として 1 の木製台が 2 の背面に付着する形で良好に遺存している。1 の木製台は左端部を遺存しており、その形状は平面逆台形の薄い板に鉄刃取り付け用の調整をほどこしたものであると考えられる。2 においても、折り返し内の木質は良好に遺存している。



第 115 図 鍬・鋤先、鎌、手鎌実測図

古墳時代の集落跡から出土する手鎌鉄刃もしくは木製台と比べると、明らかに全長が短く、雛形の可能性が高い。ただし、縦幅は全長の約半分の比率となり、同時期の集落跡から出土する鉄刃に細長化の傾向が認められるのとは対照的である。また、同様に雛形と考えられる鍬・鋤先とは、法量の点で明らかに作り分けがなされている点にも注意しておきたい。(魚津知克)

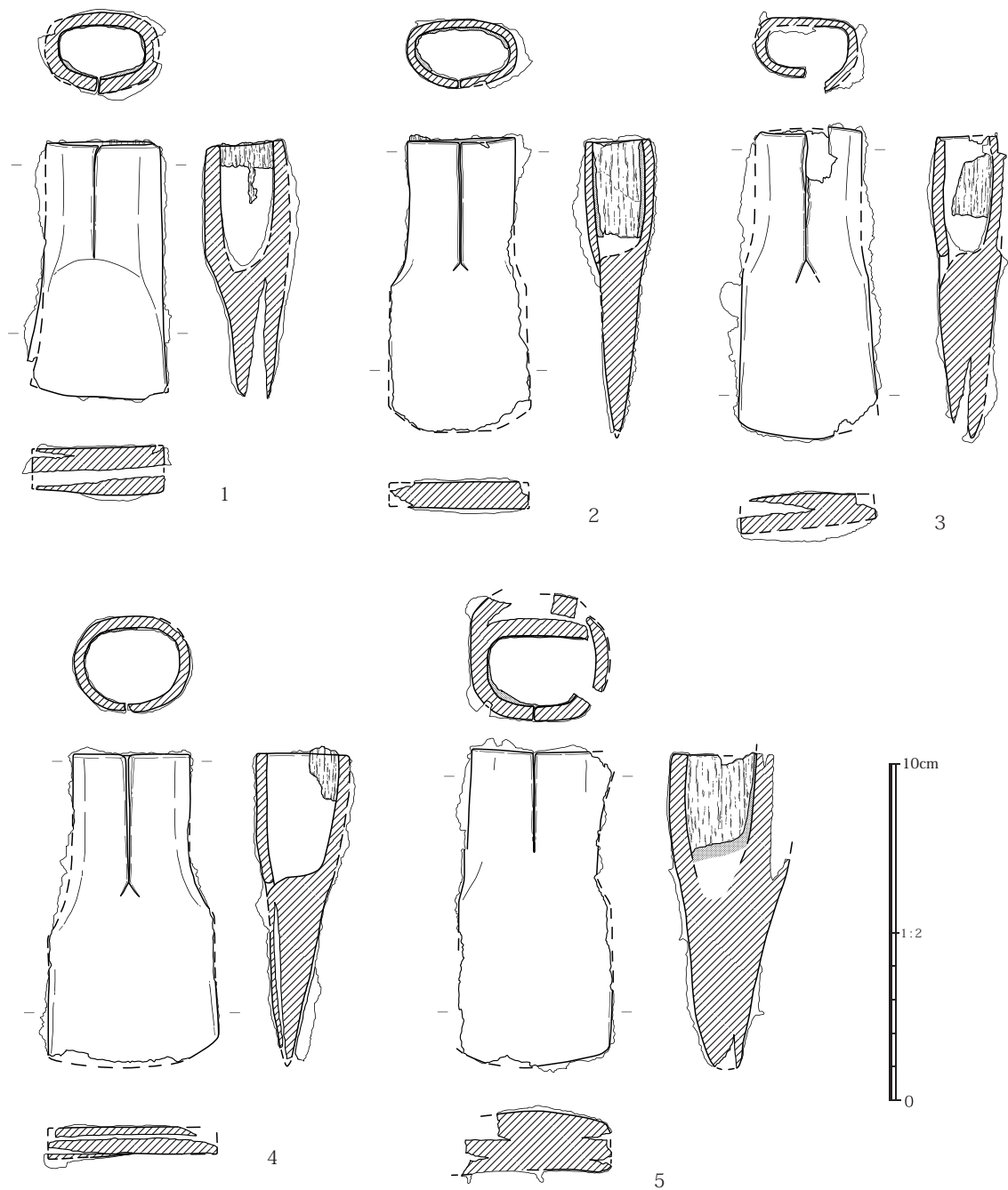
(4) 斧 (図版 136、第 116 図)

斧は 5 点ある。いずれも肉厚の刃部を持つ有袋鉄斧である。2 のみ保存処理がなされており、本来の形態をおおむね維持しているが、ほかは錆化により内部から破裂するように膨れており、変形がいちじるしい。いずれも袋部内面には木質が付着しており、木柄を装着した状態で副葬されたとみられる。

1 は刃部の角を欠損するものの、ほぼ完形品である。全長 7.8cm、袋部幅 3.4cm、袋部厚 5mm、刃部幅は現状で 4.2cm である。錆膨れのため確定できないが、刃部最大厚は 1.0cm ほどとみられる。明確な肩はみられず、側縁は直線的である。袋部の横断面はやや隅丸方形に近い楕円形である。袋部合わせ目は密着し、袋部合わせ目の開きはみられない。袋部から中央付近にかけて徐々に厚さを増すとみられる。刃部先端は直線的である。

2 は刃部の一部と側縁を僅かに欠失する。全長 8.8cm、袋部幅 3.2cm、袋部厚 3mm、刃部幅は復元で 4.2cm、刃部最大厚は 1.2cm である。なだらかに広がる肩を持つ。袋部の横断面形は楕円形である。袋部合わせ目は密着し、袋部合わせ目の端部は僅かに開く。袋部から中央付近にかけて急激に厚さを増し、中央から刃部先端にかけて徐々に厚さを減じる。欠損がいちじるしいが刃部先端は丸みを帯びる。

3 は刃部の角を欠損する。全長 9.3cm、袋部幅 3.2cm、袋部厚 3mm、刃部幅 4.1cm、刃部最大厚 1.5cm である。僅かに肩を持つ。袋部は変形がいちじるしいが、横断面形は隅丸方形とみられる。袋部合わせ目は密着し、袋部合わせ目端部には開きがみられる。袋部から中央付近にかけて急激に厚さを増す。中



第 116 図 斧実測図

中央から刃部先端にかけて徐々に厚さを減じるとみられるが、錆膨れのためやや不明瞭である。刃部先端は丸みを帯びる。

4 は刃部先端を欠損する。復元全長 9.4cm、袋部幅 3.5cm、袋部厚 3 mm、刃部幅 5.0cm、刃部最大厚 1.7 cm である。なだらかに広がる肩を持つ。袋部の横断面形はやや偏平な円形である。袋部合わせ目は密着し、袋部合わせ目端部は僅かに開く。袋部から中央付近にかけて急激に厚さを増し、中央から刃部先端にかけて徐々に厚さを減じる。刃部先端はやや丸みを帯びる。

5は側縁と刃部先端の一部を欠損する。全長9.4cm、袋部は変形がいちじるしいが復元値で幅3.9cm、袋部厚5mm、刃部幅は復元値で4.6cmである。刃部最大厚は錆膨れにより不明である。側縁にはごく僅かに肩を持つ。袋部は錆膨れによる変形がいちじるしいが隅丸方形であったとみられる。袋部合わせ目は密着し、合わせ目端部には開きがみられない。袋部から中央付近にかけて徐々に厚さを増すとみられるが判然としない。刃部先端は丸みを帯びる。
(鈴木康高・川畑 純)

(5) 鑿 (図版138・139、第117図)

破片を含め13点を数える。1・2・4・5・7～9の7点は関部を含んでおり、関を含まない破片のうち13はほかの破片と大きく形態が異なるため、本来は8個体以上が副葬されていたとみられる。

大きく3群に分けることができ、第1群はさらに細分できる。

第1群は1・3～12の11点である。断面方形の細長い形態をなす。錐に近い形態であるが、先端は幅5mm程度となり、回転穿孔のための道具とは考えづらいため、錐ではなく鑿に含めた。

第1群は主に関の形態を基準として、A～Dの4類に区分できる。A類は1・3・4・6の4点で、関の平面形が菱形に緩く広がるもののうち、いちじるしく長いものである。完形に近い1は全長28.5cmに達し、そのほかも全長はほぼ同じか、少なくとも20cm程度であったと推定される。身の断面は一边5～7mmのほぼ正方形をなす。穂先は6は明確に両刃で、1・3についても錆化のためはっきりしないため両刃に表現したが、片刃を完全に否定するものではない。茎は断面長方形で、基部方向に徐々に薄くなっている。4の茎の一部に柄の木質が付着する。

B類は7・9の2点である。A類と同様の関形態をとるものの、明らかに小型である。7・9とも先端が欠損しており全長を知ることはできないが、茎の長さの比からみて全長10～15cm程度だと推定される。太さも、身の部分で一边3～5mmほどである。ただし、関の幅はA類とほとんど異ならない。9の茎の一部に柄の木質が付着する。

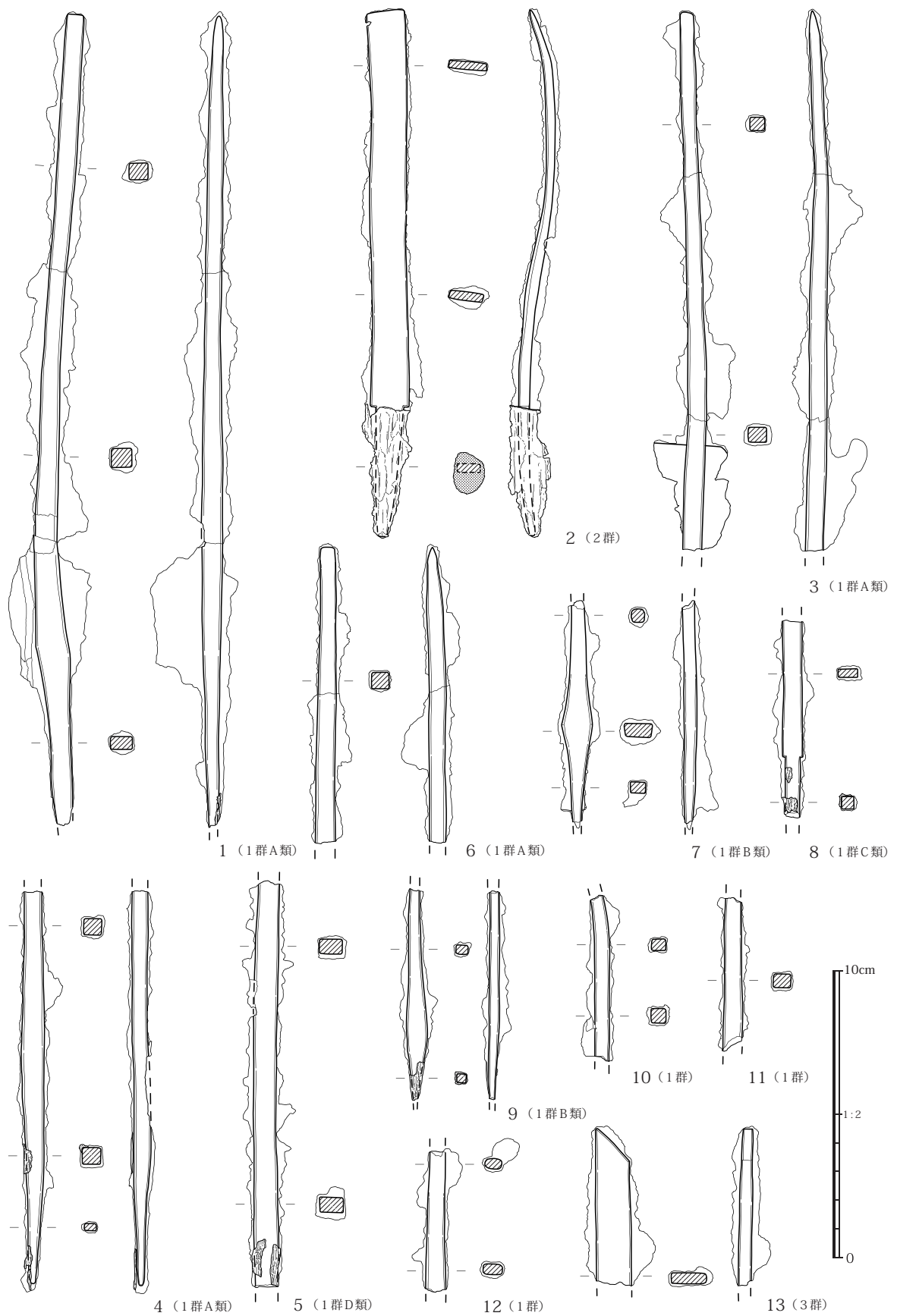
C類は8の1点で、角張った両関となるものである。身の断面は長方形、茎の断面は正方形となる。茎の一部に柄の木質が付着する。

D類は5の1点で、関を有しないものである。身の断面は長方形で、茎の一部に柄の木質が付着する。

残る10～12は破片であるため、どの類に属するかは確定しがたい。ただし、ある程度の長さがある10・11の断面形は正方形であるので、A類の身である可能性が高い。一方、12は身と茎とのどちらの部分であるかもはっきりしない。茎であった場合、上下が逆転する。

第2群は2の1点である。完形品で、第3群とほぼ同様の平坦な板状の身となるが、こちらは先端が直線的な平鑿である。全体的に緩やかに反る。中央付近を境に、反る方向が表裏入れ替わるため、横から見ると緩いS字状を呈している。土圧の結果かとも思われるが、柄の木質が良好に残存している茎部分にも反りが及ぶ。発掘報告で指摘されているように、当初からこのような形状だった可能性がある。明確な直角関を両方に有し、断面長方形の茎に接続する。

第3群は13の1点である。発掘報告で刀子として報告された個体のうち1点〔網干1962 p.54 第31図3、図版第37－8〕に類似するが、別個体であろう。平坦な板状の身は中ほどで基部側を欠損しており、全長はわからない。先端は斜めに落とされるが、前面には刃を持たない。図面右側に示す幅



第117図 鑿実測図

の狭い面を表に向け、反対側の面の先端で抉る、一種の追入鑿である。

合計 13 点の鑿について、大きく 3 群に分類した。第 1 群は細長い棒状、第 2 群と第 3 群は平坦な板状を基調とする点で好対照であるが、中期に出現した型式である点では共通している。（魚津知克）

（6）鋸（図版 137、第 118 図）

発掘報告では存在が認識されていなかった器種である。破片 3 点を確認している。大きく形態が異なる点から、2 個体以上であるのは確実であり、後述のように類似する 2 点の間でも細かな形態差があるので、3 個体分とみてよさそうである。

大型の第 1 群（1）と小型の第 2 群（2・3）とに分けることができる。

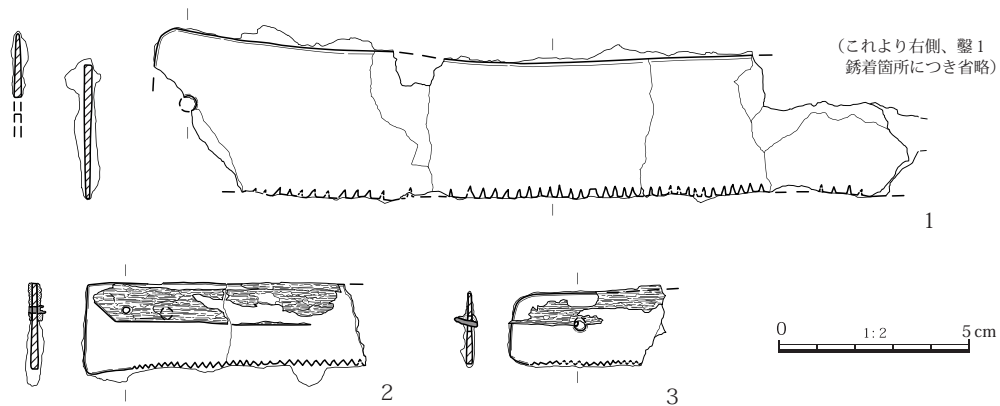
第 1 群の 1 は、幅 3.5 ～ 4.0cm、厚さ 2 mm 程度の薄い鉄板を素材とし、片側の長辺に切れ込みを入れることで台形の歯が付けられる。歯が付いていない方、すなわち背は緩く内湾する。反り具合を考慮すると、本来の長さは 23cm 以上と推測される。鉄板の左端は中ほどが厚くなる一方、中央は背側が厚く歯側が薄い。左端から約 1 cm 入った中央よりやや背側に、直径 4 mm ほどの目釘孔が穿たれる。ちょうどこの孔の半分より歯側の端部が欠損しており、本来複数の孔が穿たれていたかは明らかでない。孔周辺はもとより、全体に渡って木質の付着は認められない。

歯の形状を詳細に検討すると、端近くと中央付近とで形態や間隔に差異があることがわかる。左端の欠損部から約 4 cm の範囲、12 個ほどの歯の両側の切れ込みは外側に開く形態をなす。一方、数 cm に渡る歯の欠損を挟んだ右側 30 個ほどの切れ込みは、ほぼ二等辺三角形をなす。歯の間隔は、前者では平均 3.3mm 弱であるのに対し、後者では平均 2.5mm あまりで、明確に異なる。興味深いのはさらに欠損を挟んだ現状ではもっとも右側の部分で、再び 3.0mm を超える間隔になるという点である。両端部と中央部とで、歯の形態や間隔が対称的に配置されていることが示唆される。なお、図面右側の一部が鑿（第 117 図 1）と銹着する。その状況から、両者はほぼ平行して副葬されていたようである。

第 2 群は、幅 2.0 ～ 2.5cm、厚さ 2 mm 程度の薄い鉄板を素材とする。片側長辺のみ歯が付けられている点では第 1 群と共通するが、形態は素歯と呼ばれる二等辺三角形である点が異なる。

2 の背はほぼ一直線で、歯の方が緩く内湾する。背のほぼ全体に台の木質が付着している。左側の木質端部は、台の形状を反映し斜めに切れ上がっている。左端から 1.1cm と 2.2cm ほど入った背側寄りに 2 箇所、前者は直径 2 mm、後者は直径 3 mm の穿孔がある。前者は目釘が現在でも刺さった状態だが、後者は台の木質が完全にかぶさっており、実際の目釘固定には用いられていない。左端より 1 cm あまり入ったところから歯が付けられている。1 とは異なり歯の形態にはほとんど差異がみられない。一方で、歯の間隔は左端近くでは 2 mm 以下と狭く、それより右の部分では 2 mm を超える傾向がみて取れる。これは 1 とは正反対であり、大いに注意される。

3 は背側・歯側とも左側の角が取れて丸くなる。2 と同様に背のほぼ全体に台の木質が付着する。背と木質下端との幅は 2 よりも浅く、左端の切れ上がりも認められない。以上の特徴を踏まえると、2 と 3 は別個体の破片である可能性が高い。左端から 1.9cm ほど入ったほぼ中央に直径 2 mm あまりの穿孔が 1 箇所ある。孔の中心は木質の下端と一致しており、孔を通した表裏に紐状の有機質が残存する。左端より 5 mm あまり入ったところから歯が付けられている。端寄りの 5 個ほどの歯はやや内側に傾く。X 線



第118図 鋸実測図

画像によってもところどころ歯が不鮮明であるが、歯の間隔にはそれほど有意な差が認められない。

大型の第1群と小型の第2群の間には、歯の形状や端部と中央部との間隔に差がある。この差は用途の違いに基づくことが考えられる。(魚津知克)

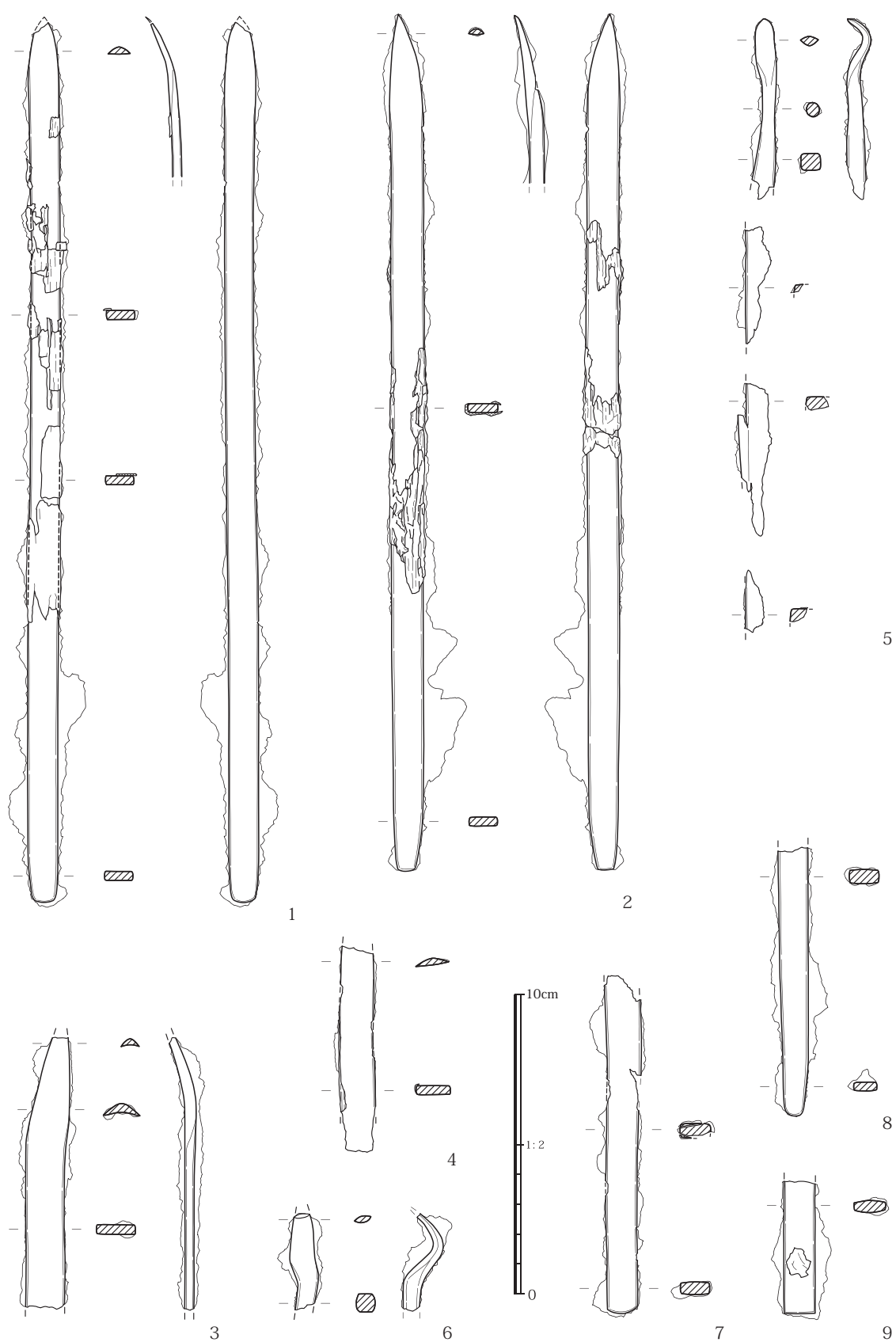
(7) 鉋 (図版140・141、第119・120図)

竪穴式石槨外から出土した鉋には、ほぼ完形のもの2個体(1・2)、接点を確認できないものの発掘報告と対照することにより同一個体と推定しうる破片4点からなる1個体(5)のほか、細片化した破片27点(3・4・6～30)が現存している。破片には、刃部を含むものが3点(3・4・6)、基部末端を含むものが3点(7～9)あり、残りの21点は両端ともに欠損している。ただし、両端ともに欠損している破片のうち、柄に由来する木質が遺存していないものについては、鑿の軸部など、ほかの品目の破片である可能性も否定はできない。

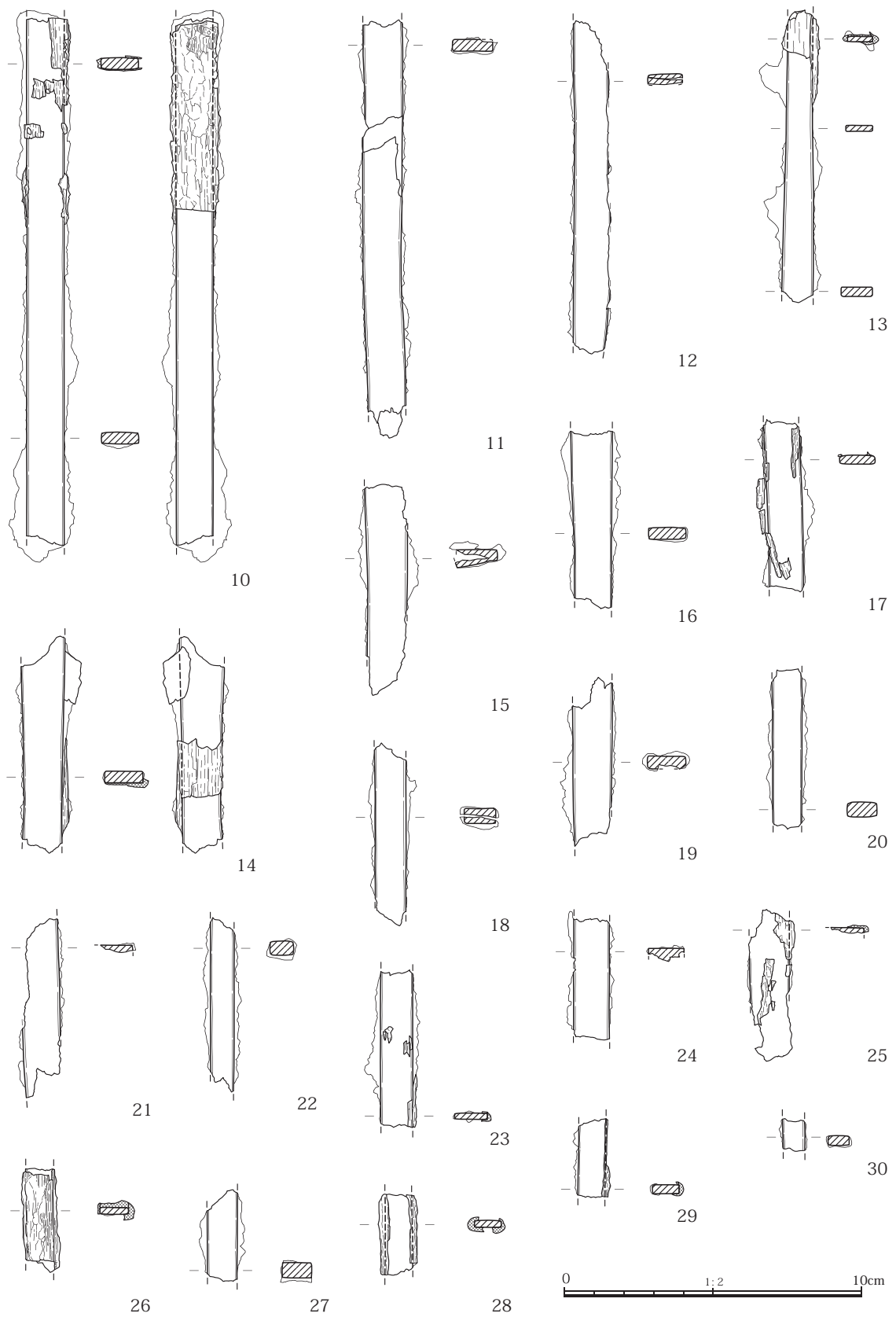
本来の副葬個体数は、上記の3個体(1・2・5)のほか、刃部を含む破片と基部末端を含む破片がそれぞれ3点を数えることから、確実に6個体以上といえる。ただし、両端を欠損している破片が21点にも及ぶことから、これらに同一個体の破片やほかの品目の破片が含まれるとしても、本来は6個体を大幅に超えると推定して大過ないであろう。

以下、個体ごと、破片ごとに観察所見を記述する。記述にあたり、便宜的に、平面図上で刃部を上方に向けた状態での左方の側面を左側面、右方の面を右側面とする。ただし、両端を欠損している破片については、刃部の方向を判断する材料のないものも多く、それらについては本来の上下左右とは逆転して表記している可能性がある。記述にあたっては古瀬清秀氏による刃部形態に基づいた分類を用いる〔古瀬1991 pp.85-86〕。

1は刃部先端を僅かに欠損するものの、ほぼ完形品である。身部で2と鑄着しているが分離して図化した。刃部幅が身部幅と一致し、刃部長が1～3cmに収まるⅡa類に属する。刃部の表面に鑄を持たず、裏面に裏透きを持たない。身部から基部にかけての幅は一定であるが、基部末端付近でやや狭まる。基部末端は隅丸状を呈する。柄の木質の遺存状況は良好ではなく、その刃部側の端部の位置は不明であるが、基部側の端部は本体の基部末端から刃部側へ9.2cmの位置にそれらしき痕跡がある。身部の上面に



第119図 鉈実測図(1)



第120図 鈍実測図(2)

遺存している木質に、身部よりも外側へ張り出しているが、側面へは回り込まないように観察される部位がある。このことから、横断面「凹」字形の身に、身幅と同じ幅の蓋をかぶせる構造の柄を復元しうる。また、樹皮状の有機質が身部の側面に回り込んでいるように観察される部位があり、柄を身部に固定するための巻き付けが僅かに遺存しているものと判断しうる。

2は完形品である。身部で1と銕着している。Ⅱa類に属する。刃部の表面に鎬を持たず、裏面に裏透きを持たない。身部から基部にかけての幅は一定であるが、基部末端付近でやや狭まる。基部末端は明瞭な隅角を持ち、下縁は直線的である。柄の木質の遺存状況は良好ではなく、その範囲も判然としない。身部に遺存している木質は、表面・左側面・裏面を一連で覆っているように観察されるが、右側面には遺存していない。このことから、柄の右側面からスリットが彫り込まれ、そこに本体の身部をはめ込む構造であったと復元しうる。柄を身部に固定するための巻き付けは遺存していない。

3は刃部から身部にかけての破片であるが、刃部先端を僅かに欠くほか、刃部の全体に二次的な歪みを生じている。Ⅱa類に属する。刃部の表面に鎬を持たず、裏面に裏透きを持つ。身部に柄の木質は遺存していない。

4は刃部から身部にかけての破片であるが、刃部の大部分を欠損している。Ⅱa類に属する。刃部の表面に鎬を持たず、裏面に裏透きを持たない。身部の左側面に柄の木質が僅かに遺存する。

5は破片4点に細片化しているが、発掘報告の段階では、基部を欠失するものの残存長14.8cmを測る個体であった。スプーン状にフックした刃部を持つⅢ類に属し、発掘報告では「鉤形」と呼称している。刃部に鎬はなく、横断面は杏仁形であるが、表裏対称ではなく表面の側に大きく張り出す形状を呈する。刃部から身部にかけては、いったん幅を狭めて頸部状をなし、そこでの横断面は円形を呈するが、次第に幅を広げ、それとともに横断面は隅丸方形へと変化する。身部の破片3点は細片化がいちじるしく、外面の遺存部分は少ないが、本来の横断面は隅丸方形を呈すると推定される。柄の木質は遺存していない。Ⅲ類の場合、1などと同様に横断面「凹」字形の柄を装着する例（大阪府和泉黄金塚古墳など）と、鑿などと同様に茎式の例（岡山県金蔵山古墳、大阪府アリ山古墳など）があるが、そのどちらの構造をとるかも明らかではない。

6は刃部の破片であるが、先端を僅かに欠くほか、全体に二次的な歪みを生じている。Ⅲ類に属する。刃部に鎬はなく、横断面は杏仁形をなす。身部の横断面は隅丸方形を呈する。

7は身部の破片であり、基部末端まで遺存する。身部から基部にかけての幅は一定で、基部末端は明瞭な隅角を持ち、下縁は弧状を呈する。柄の木質は遺存していない。

8は身部の破片であり、基部末端まで遺存する。身部から基部にかけて幅を少しずつ狭め、基部末端は隅丸状を呈する。柄の木質は遺存していない。

9は身部の破片であり、基部末端まで遺存する。身部から基部にかけての幅は一定で、基部末端は明瞭な隅角を持ち、下縁は直線的である。柄の木質は遺存していない。漆膜状の物質が付着しているが、別個体に由来する可能性が高い。

10は身部の破片である。柄の木質が比較的良好に遺存している。柄の基部側の端部を右側面と裏面で確認できるが、両者の位置には僅かにずれがある。木質の遺存状況から、1と同様に、横断面「凹」字形の身に身幅と同じ幅の蓋をかぶせる構造の柄を復元しうる。

11 は身部の破片である。裏面に柄の木質が僅かに遺存する。表面と右側面に緑青が付着していることから、青銅製品あるいは金銅製品の付近で出土したことがわかる。

12 は身部の破片である。一方の端部に近づくにつれて幅を狭めるが、遺存状況が良好ではなく全面的に剥離がいちじるしいため、本来の形態を示していない可能性もある。柄の木質は遺存していない。表面に緑青が付着している。

13 は身部の破片である。身部から基部にかけて幅を少しずつ広げるが、これは稀少な例である。柄の木質が比較的良好に遺存している。木質の遺存状況から、1 や 10 とは異なり、横断面「凹」字形の身に鉈の身部幅と同じ幅の蓋をはめ込む構造の柄を復元しうる。

14 は身部の破片である。柄の木質が部分的に遺存しており、同一の材が裏面から側面へと回り込んでいるように観察される。

15・16・18～22・24・27・30 は身部の破片である。15・18・21・24 は銹化による破損が特にいちじるしい。いずれも柄の木質は遺存していない。

17 は身部の破片である。柄の木質は部分的に遺存しているが、柄の構造は不明である。そのほかに、別個体に由来する木質が斜交して銹着している。

23 は身部の破片である。柄の木質が部分的に遺存している。木質の遺存状況から、13 と同様に、横断面「凹」字形の身に鉈の身部幅と同じ幅の蓋をはめ込む構造の柄を復元しうる。緑青が付着している。

25 は身部の破片である。遺存状況が良好ではなく表面の剥離がいちじるしいため、裏面を表に向けて図化している。柄の木質が部分的に遺存しており、同一の材が裏面から側面へと回り込んでいるように観察される。緑青が付着している。

26・29 は身部の破片である。柄の木質が比較的良好に遺存している。木質の遺存状況から、13・23 と同様に、横断面「凹」字形の身に鉈の身部幅と同じ幅の蓋をはめ込む構造の柄を復元しうる。

28 は身部の破片である。柄の木質が部分的に遺存している。木質は、現状では一材からなるように観察され、莖式の構造である可能性がある。鑿などのほかの品目である可能性も考えられる。

五條猫塚古墳の竪穴式石槨外から出土した鉈は、完形に近い資料は2点に過ぎず、大半は細片化しているため、本来の副葬点数も明らかではない。

現存する資料には、古瀬清秀氏による刃部形態に基づく分類では、Ⅱa類（1～4）とⅢ類（5・6）を確認できる。なお、発掘報告（第56図1）では、10を鋸形の刃部とくびれた頸部を持ち、なおかつ身部の幅が刃部よりも狭い形態に復元しており、こうした形態は先の分類ではⅠ類に該当する。しかし、これは銹化した身部を鋸形の刃部と誤認したものと考えられる。現状では、本資料群中にⅠ類に比定しうる資料は確認できない。

柄の構造については、木質の遺存状況から3種類を想定した。例数が多い順に、①横断面「凹」字形の身に鉈の身部幅と同じ幅の蓋をはめ込むもの（13・23・26・29）、②横断面「凹」字形の身に身幅と同じ幅の蓋をかぶせるもの（1・10）、③柄の右側面からスリットが彫り込まれ、そこに本体の身部をはめ込むもの（2）の3種類である。ただし、③は1例に過ぎず、かつ遺存状況がとりわけ良好な資料でもない。また、ほかの古墳からの出土資料にも類例を見出していない。より明瞭に確認しうる類例の増加を期待したい。

（阪口英毅）

(8) 刀 子 (図版 142・143、第 121 図)

発掘報告で刀子とされたものの中から、今回の報告では次項にあげるヤスリ状鉄器と呼ぶ一群を分離した。また、先述のように 1 点を鑿に含めた。竪穴式石槨外から出土した刀子は、破片を含め 9 点を数える。茎で集計すると、少なくとも 7 個体分となる。5 群に大きく分けることができる。

第 1 群は 1・2 の 2 点である。全長 10cm 以上で平面形は長方形の刃渡り 5 cm ほどの小型品で、関がはっきりしない。1 は完形品で、ごく僅かに斜関を有する。柄の木質が片側全面に付着し、反対側にも一部付着する。2 も完形品である。関は認められない。柄の木質（発掘報告では鹿角とされた）が片側の一部に付着する。

第 2 群は 3 の 1 点である。この個体は刃部中央より先を欠失している。そのため、第 1 群との区別がやや不明確であるが、3 は直角の刃関を明確に有する点を区別の最大根拠とした。また、茎の長さや厚さ、刃と茎の幅について、第 1 群を上回る数値を測る。全長も第 1 群を大きく上回るのは確実である。おそらく刃渡りは 10cm 弱となるだろう。茎の片面に木質が付着する。

第 3 群は 5 の 1 点である。刃渡りは 10cm 以上で、第 2 群をほぼ確実に上回る。刃幅や茎の大きさや形態においても、第 2 群とは明確に区別できる。斜関を刃側に有する。背は、刃から茎にかけてごく僅かにすばまる。茎端は角が取れ、丸みを帯びる。木質の付着は認められない。

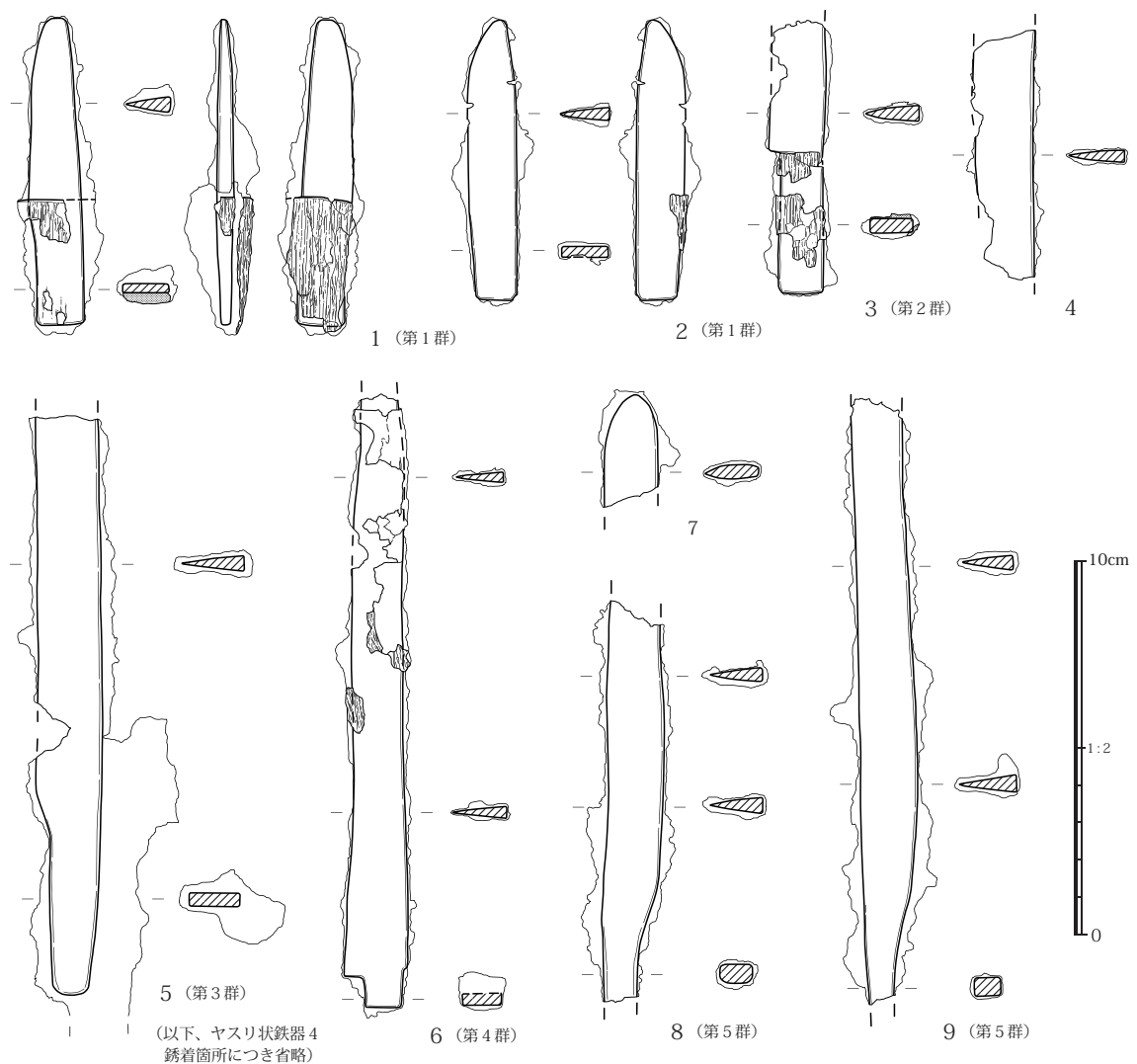
第 4 群は 6 の 1 点である。刃渡りは 15cm 以上に達するが、茎は長さ 0.8cm と極端に短い。茎が製作から副葬までの間に折れた可能性も残るが、ほかの群と形態的に区別できる箇所が存在する。第一に関の形態で、刃関はやや尖り気味で鋭角をなす。そして背側にも、ごく僅かに関が存在するようである。第二が刃の形態で、先に行くにしたがって幅を減じる。これは使用による研ぎ減りの結果かもしれないが、ほかの群に比べて薄刃である点も注意される。

第 5 群は 8・9 の 2 点である。刃側には関が存在せず、背側は斜関もしくはごく緩やかにすばまり、茎に接続する。茎の断面は、ほかの群が板状になるのに対し、この群のものは角棒に近くなる。独特の形態を持つ一群である。

残る 4・7 は刃の破片である。4 は中央部分の破片である。法量からいって第 1 群には属さないのは確実であるが、残りのどの群に帰属するかは確定できない。刃側の欠失が多い。7 は切先部分の破片で、断面をみると中央部分がやや膨らむレンズ状を呈する。こちらも帰属は不明であるが、背と刃との幅は第 5 群に近似する。

刀子合計 9 点のうち 7 点を 5 群に分類した。また、全体形状が不明な破片も 2 点存在している。これらは法量や形態の上で多様性に富む。第 1 群は小型である上、関がはっきりせず、鎌形の可能性がある。第 4 群も茎の短さから実用性に疑問が生じるが、刃の形態は研ぎ減りによる可能性があり、確定はできない。また、第 5 群は刃縁がそのまま一直線に柄側につながるといった独特の形態をなす。管見では類例を見出しておらず、特殊な用途が考えられる。残る第 2 群と第 3 群についても、形態としては集落出土品にも共通するものであるが、前記のようにお互いの形態差は明確である。

合計 9 点の刀子が少なくとも 5 群に区分され、お互いに明確な形態的差異がある点は、前期後半から中期にかけての古墳副葬刀子の多くが示す斉一的な状況とは異なる。多種多様な鉄製生産用具を副葬するという意識を、猫塚古墳の石槨外副葬行為の背後に見出してよいであろう。 (魚津知克)



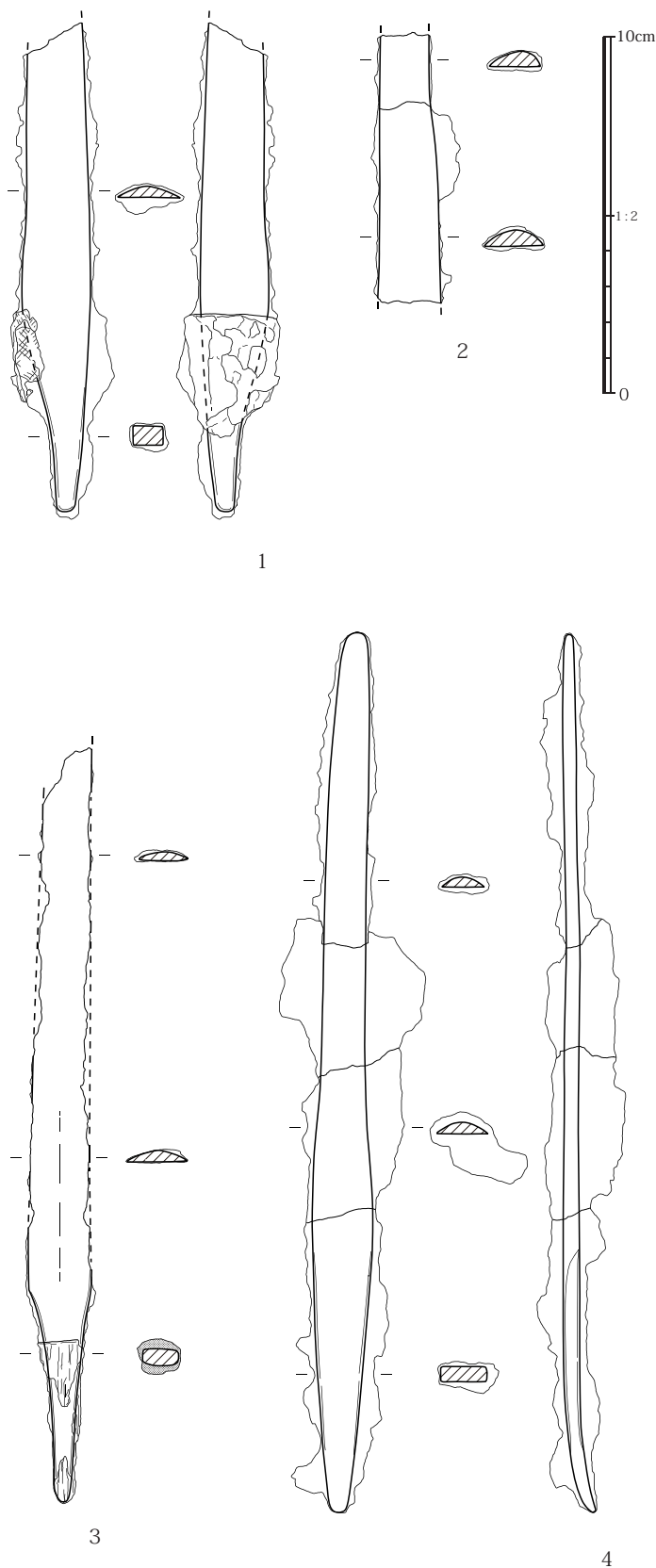
第121図 刀子実測図

(9) ヤスリ状鉄器 (図版 144・145、第122図)

発掘報告では存在が認識されていなかった器種である。完形のものは1点で、残りの破片3点のうち、2点は茎が完形で残っているため別個体であるのは確実である。残り1点も、断面形がほんと大きく異なるので、合計4個体分であると考えられる。細部形態が異なるものの明確に区分できる基準を見出せなかったため、群別はおこなわない。

1は身の先端部分を欠失する。茎の断面は方形で、不明瞭な斜関に向かって幅が広がる。中ほどから関にかけて獣皮のような、また細かい網代のような有機質が付着する。後者の有機質は、付着状況からみて別個体にとまうものである可能性が高い。斜関は左右対称ではなく、茎は一方に偏る。刃は左右両側にあって横断面が薄い半月形となる。中央に鑄は認められない。関から中央にいくにしたがって、幅が狭くなる。関より約4cmまでが現存し、それより先は欠けているため、先端の形状は明らかでない。

2は身の中央付近の破片であると考えられる。鑄が認められない点は1と同じであるが、刃はやや肉厚で特に先端側を中心にして厚みの頂点が片側(実測図は右側)に偏る点異なる。



第 122 図 ヤスリ状鉄器実測図

3は1と同様に身の先端部分を欠失する。外形はおおよそ1と共通するが、柄の木質が明確に認められる点、斜関の角が比較的明瞭である点、さらには身の根元側の一部では錆が認められる点などが異なる。

4は完形品である。しかし、ところどころ錆に厚く覆われていて細部の観察が困難である。茎には有機質の付着はみられない。端は反り返り、鉋のような刃が付けられている可能性もあるが、はっきりしない。関の正確な位置や形状も決しがたい。身はほかの個体よりもやや細長い印象を受けるが、ほかの個体が先端部分を欠いているためとも考えられる。切先は尖らず、鋸状を呈している。

これらの工具はほかの古墳出土資料中にも類例を見出しておらず、用途も不明である。身の左右両側に刃がついた一種の刀子である可能性もあるが、3の一部を除いて錆が認められないなど、刃が付けられている積極的な根拠を見出せなかった。

現在用いられる横断面が薄い半月形となる工具としてはヤスリがある。本稿に記した鉄製品については、今回撮影したX線画像の観察でも、ヤスリ目が付けられていた明確な痕跡は認められなかった。しかし、細かいヤスリ目が錆化により劣化した場合X線画像によっても観察は困難であると考えられる。本項では仮にヤスリ状鉄器と呼び、今後の類例増加を期待したい。(魚津知克)

(10) 鉄 鉗 (図版 146、第 123 図)

大型品と小型品をそれぞれ 1 点ずつ、合計 2 点の存在を確認している。基本的には、いずれも 2 本の鉄棒を交差させて、1箇所を鉗で留める鋏のような構造を持つものである。ただし、大型品については、発掘報告段階以降の劣化がいちじるしく、現状において全体像を把握することは困難な状態となっている。したがって、発掘報告段階の観察所見を引用しながら、細部について記述をおこなうこととしたい。

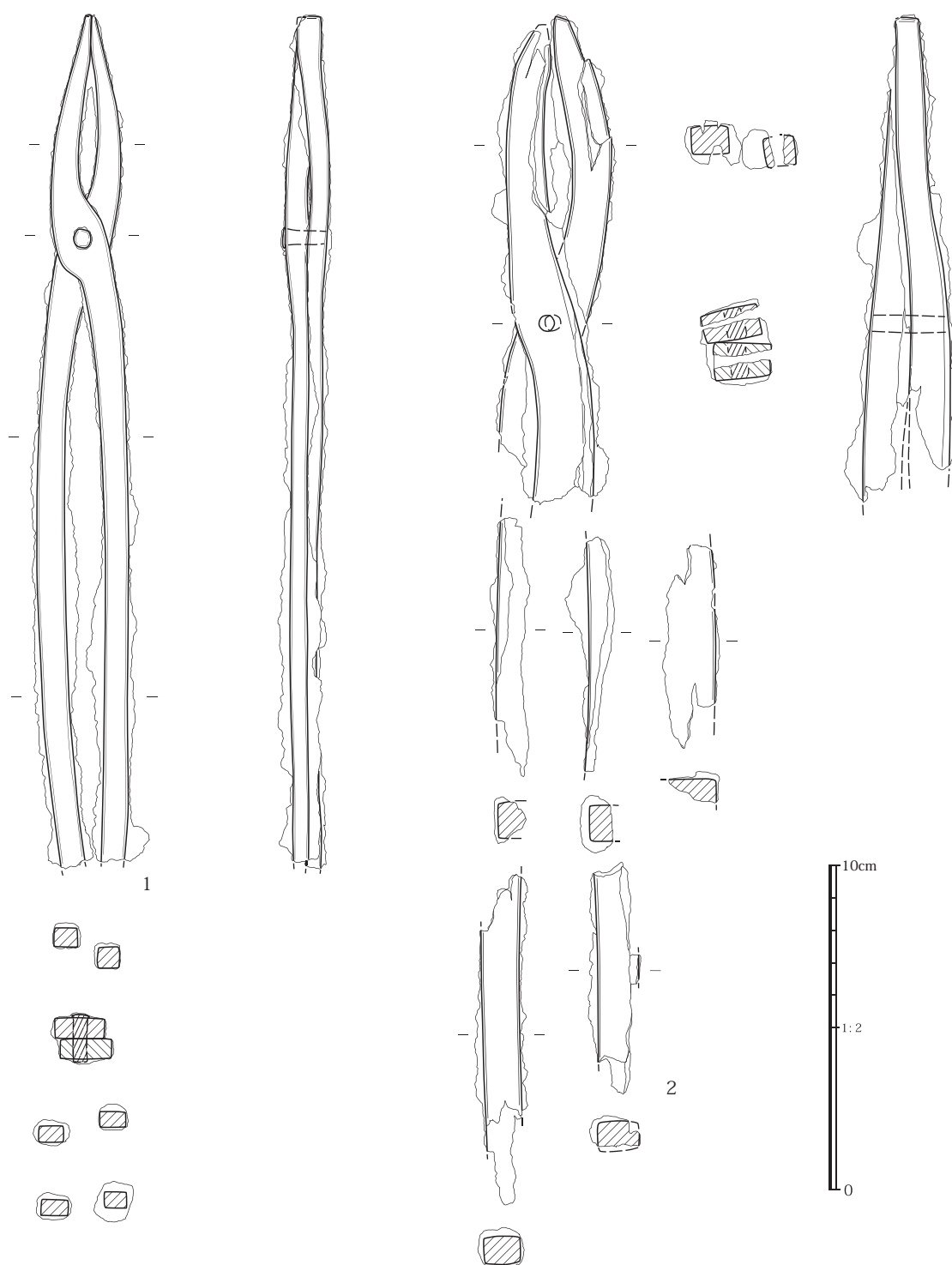
1 は小型品であり、握り部の端部を欠損するが、ほぼ全形を留めるものと判断しうる。保存処理がおこなわれている。現存長が約 26cm、はさみ部長が 7 cm 程度、握り部長が 19cm 程度である。現重量は 161.6 g である。素材となる鉄棒の各部の断面形態はおおむね方形を呈し、結合部付近とはさみ部の先端が長方形、そのほかの大部分は正方形に近い形状である。はさみ部は全体に緩やかに弧状を呈し、先端のおよそ 1 cm 程度の部分が平坦となり、隙間なく密着する。はさみ部の先端幅は 7 mm ほどであり、5 mm ほどとなるそのほかの部分よりも僅かに幅が広がっている。はさみ部でも結合部に近い顎部は明瞭に屈曲し、ほかの部位より発達した形状を呈する。結合部は直径 5 mm 程度の鉗を使用して留める。握り部は肩部付近に明瞭な屈曲はなく、全体に緩やかに湾曲しながら端部へと至る。握り部の鉄棒の太さは 5～7 mm 程度である。有機質の付着などは認められない。

2 は大型品であり、発掘報告段階においては一方の握り部の端部を欠損するのみであったようだが、現状においては細片化がいちじるしく、全形が大きく損なわれている。保存処理は実施されているが、断片の状態である。発掘報告によれば、全長は 31.7cm、はさみ部長が 7.0cm、握り部長が 24.7cm であったと記述されている。破片の総重量は現状で 299.3 g である。素材となる鉄棒の各部の断面形態はおおむね方形であり、結合部が長方形を呈する偏平な形状となっており、そのほかの大部分は結合部に比べると方形でも厚みのある形状となっている。小型品である 1 に比べると、鉄棒の断面形状は方形でも隅丸を呈するものであることを観察しうる。はさみ部は全体に緩やかに弧状を呈し、先端のおよそ 1.5 cm 程度の部分が平坦となり、隙間なく密着する。はさみ部の先端幅は 7 mm ほどである。はさみ部のそのほかの部分もほぼ同様の太さを呈する。はさみ部でも結合部に近い顎部があまり明瞭に屈曲せず、平面形において幅が広がる程度である。結合部は直径 5 mm 程度の鉗を使用して留めたとみられる。握り部は肩部付近に明瞭な屈曲はなく、全体に緩やかに湾曲しながら端部へと至る。握り部の鉄棒の太さは 0.8～1.2cm 程度である。有機質の付着などは認められない。

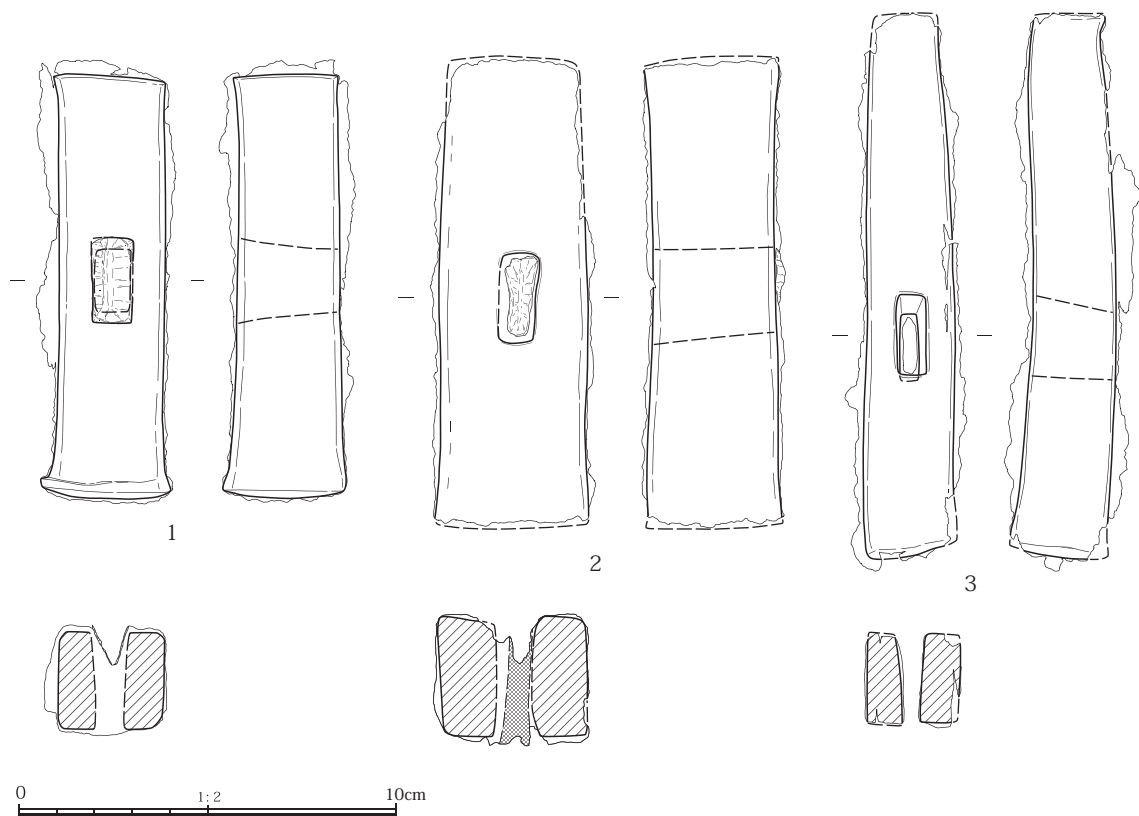
(11) 鋤 頭 (図版 150、第 124 図)

鋤頭は 3 点を確認できる。方柱状の鉄塊のほぼ中央に、木柄を通すための方形の挿入孔が貫通した形態をなす。3 点とも中型品に属する。なお、重量に関する記述は、いずれの個体においても欠損がみられるため、あくまでも参考値であることを明記しておく。

1 は全長 11.2cm、幅が 2.8～3.4cm、厚さが 2.7～3.3cm である。現重量は 568.2 g である。保存処理はおこなわれていない。中央に柄を付けるための長方形の孔があけられる。鋤頭と柄の取り付け角度はおおむね直角で、T 字形となる。孔は一方が約 1.0cm×約 2.2cm、もう一方が約 0.75cm×約 1.7cm と、大きさが異なる。方柱部の断面形態は隅丸の方形を呈し、柄の孔があけられる中央付近が細くなる。図の上端と下端ともに使用にともなって潰れが生じており、特に下端は明瞭な打面を形成する。柄孔内部



第 123 図 鉄鉋実測図



第 124 図 鋤頭実測図

には木質が付着しており、木柄に由来するものと考える。

2は現存長 12.3cm、幅が 3.4～4.1cm、厚さが 3.2～3.6cmである。現重量は 762.5 gである。保存処理が実施されている。中央に柄を通すための長方形の孔がけられる。鋤頭と柄の取り付け角度はおおむね直角で、T字形となる。柄孔は一方が約 1.0cm×約 2.5cm、もう一方が約 1.0cm×約 2.3cmと、僅かに大きさが異なる。また、孔は僅かに丸みを帯びた形状となっている。方柱部の断面形態は隅丸の方形を呈し、平面形では図の下端に向かって太くなる。対して、側面観では柄の孔がけられる中央付近が細くなる。図の上端と下端ともに使用にともなう潰れが認められる。柄孔内部には木質が付着しており、木柄に由来するものと考える。

3は現存長 14.4cm、幅が 1.9～2.4cm、厚さが 1.9～2.6cmである。現重量は 314.3 gである。保存処理は実施されていない。長さに対して全体に細長い形態をなす。また、全体に反りのある形状を呈する。中央より図の下端に偏した位置に柄を付けるための長方形の孔がけられる。鋤頭に対する着柄の角度は、柄が下端方向に傾くように、僅かながらではあるが斜めとなる。孔は一方が約 0.8cm×約 2.1cm、もう一方が約 0.5cm×約 1.8cmと大きさが異なる。また、孔はやや丸みを帯びた形状となっている。方柱部の断面形態はおおむね隅丸の方形を呈するが、角の面取りは弱い。全体に上端から下端に向かって太くなる形状である。図の上端と下端ともに使用にともなう潰れが生じており、特に下端は顕著な打面を形成する。木質などの有機質の付着は、現状では認められない。

(12) 鉄 床 (図版 147、第 125 図)

1 点を確認している。形態は方柱状を呈し、上面が大きく、下面が小さい形状をなし、重厚な造りである。高さは 10.6cm、上面が最大で 7.6cm×8.5cm、下面が最大で 5.7cm×5.8cm である。保存処理が実施されており、現重量は 3097.9 g である。上面と下面ともにおおむね平坦な面を形成し、横断面の形状は正方形に近く、縦断面形は逆台形状となる。上面と下面それぞれの中央部の位置を結ぶと、上下は垂直ではなく若干ずれる形状をなしており、ややいびつな形態となる。こうした形態にみる特徴は、使用に際して決まった配置方法の存在をうかがわせるであろう。詳細に観察したが、有機質の付着などは認められない。なお、発掘報告では使用にともなう磨滅の痕跡が観察されているが、遺存状態を考慮すれば現状において明瞭な使用痕を見出すことは困難といわざるを得ない。

(13) 鑿 (図版 148・149、第 126・127 図)

鑿は合計 9 点の存在を確認している。いずれも片側に刃部を有する棒状の製品である。形態、特に法量においておおむね 2 大別することが可能であり、相対的に短い形式の一群 (1～4) と、細長い形式の一群 (5～9) に属するものがある。短い形式の一群が 4 点、細長い形式の一群が 5 点である。なお、刃部の平面形態には直線的なもの、弧状を呈するもの、針状となるものがあり、両面から刃が付けられるものと片面のみから刃が付けられるものなど差異が存在する点には注目しておく必要がある。なお、重量についてはどの個体においても少なからず欠損があるため、参考までに示したものである点を強調しておきたい。

1 は頭部を欠損する。保存処理は実施されていない。現重量は 33.8 g である。短い形式の一群に属し、現存長が 7.3cm である。幅は現状でもっとも細い部分が 1.2cm 程度である。劣化にともなう錆膨れによって、頭部側が大きく変形しているため、厚みについては不明である。軸部の断面形態は方形である。刃部は直線的な形態をなし、やや幅広に造り出される。刃部の幅はおよそ 1.4cm に復元できる。側面をみると、長さ約 5mm に渡って片面のみを面取りすることで刃を形成する片鑄のものとなる。有機質の付着などは確認できない。

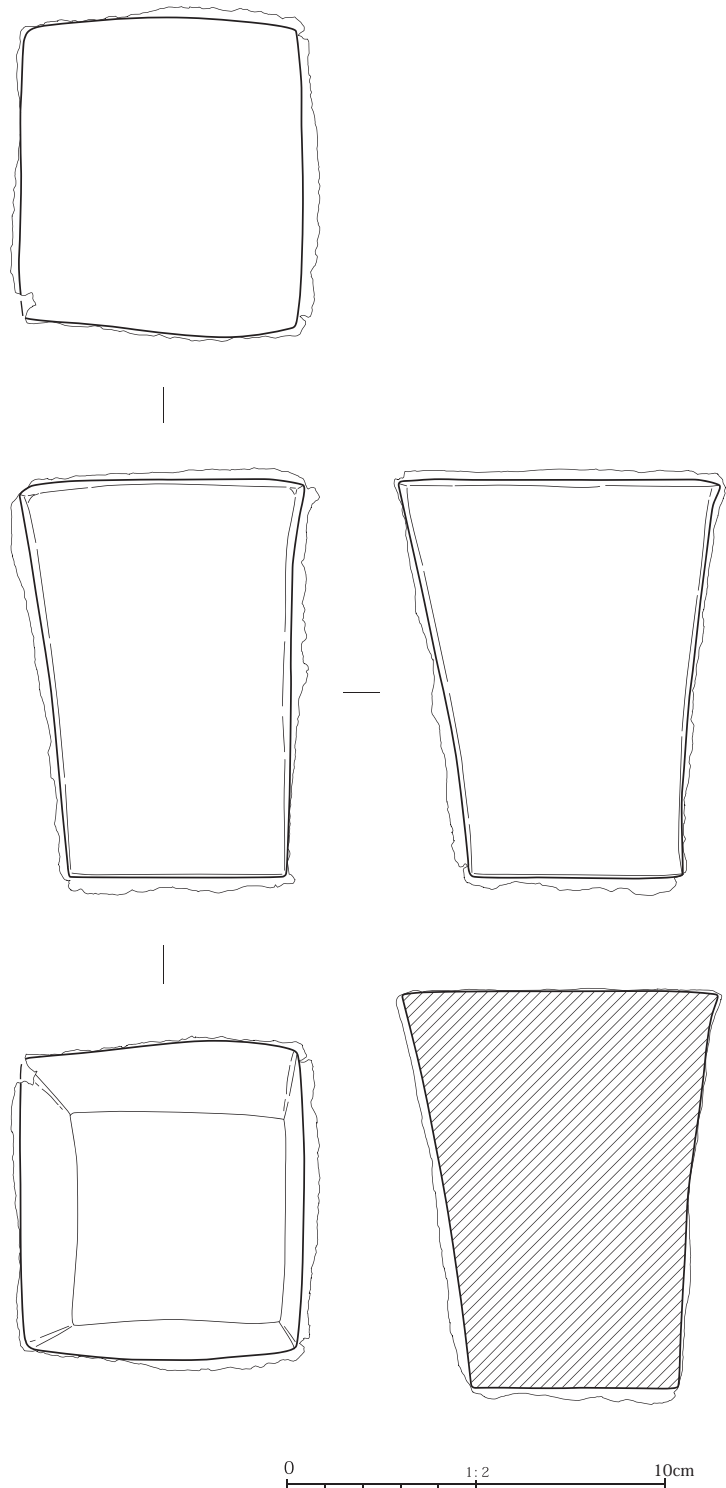
2 は刃部を欠損する。保存処理がおこなわれている。現重量は 125.5 g である。短い形式の一群に属し、現存長が 9.6cm である。復元長は 10cm ほどになるものと推測される個体である。頭部付近の幅は 2.1cm、厚みが 1.9cm であり、刃部は幅 1.3cm 程度に復元できる。頭部がもっとも太く、幅と厚みを徐々に減じながら刃部へと至る。ただし、平面形は緩やかに細くなっていく形態であるが、側面では中ほどから刃部へと急激に薄くなる。軸部の断面形態は方形である。刃部は直線的な形態である。頭部は使用にともない、平坦な面が形成される。有機質の付着などは確認できない。

3 は刃部付近を若干欠損する。保存処理はおこなわれていない。現重量は 73.4 g である。短い形式の一群に属し、現存長は 9.9cm である。頭部付近の幅は 1.9cm 程度、厚さが 1.7cm 程度であり、軸部はおおむね 1.5cm 角となり、刃部へと至る。頭部が太く、そこから中ほどまでは太さをほぼ一定に保ち、中ほどより刃部付近から徐々に幅と厚みを減ずる。軸部の断面は頭部付近がほぼ正方形を呈し、刃部付近では円形に近くなる。刃部の形状は不明であるが、おそらくは針状の先端が尖った形状に復元しうであろう。頭部は使用にともなって潰れが生じており、打面が軸部より幅広くなっている。有機質の付着

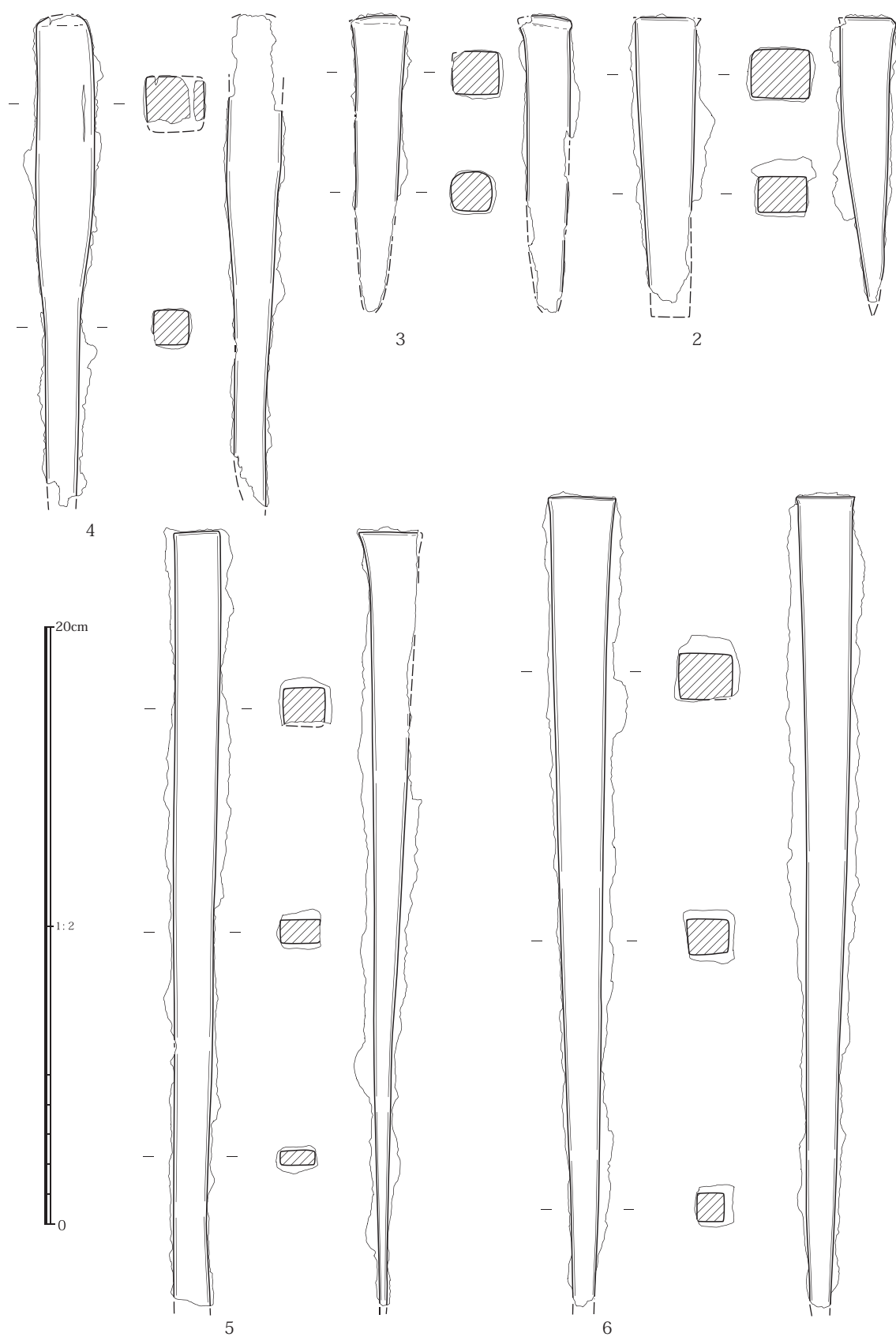
などは認められない。

4は頭部を若干と刃部付近を欠損する。保存処理は実施されていない。現重量は119.6gである。短い形式の一群に属し、現存長は16.5cmである。短い形式の中でもやや長い部類に属するものとする。頭部付近の幅は最大で約1.9cm、厚さが約1.8cmであり、中ほどまでは太さをほぼ一定に保つ。中ほどから刃部側へはやや細くなって幅1.2cm前後、厚さ約1.1cm前後となって、刃部付近へと至る。軸部の断面形態はおおむね方形である。刃部は残存状態を考慮すれば、片面を面取りすることによって形成される片鑄状のものになると推測する。頭部は使用にともない、上面が丸みを帯びた形状となっている。有機質の付着などは確認することができない。

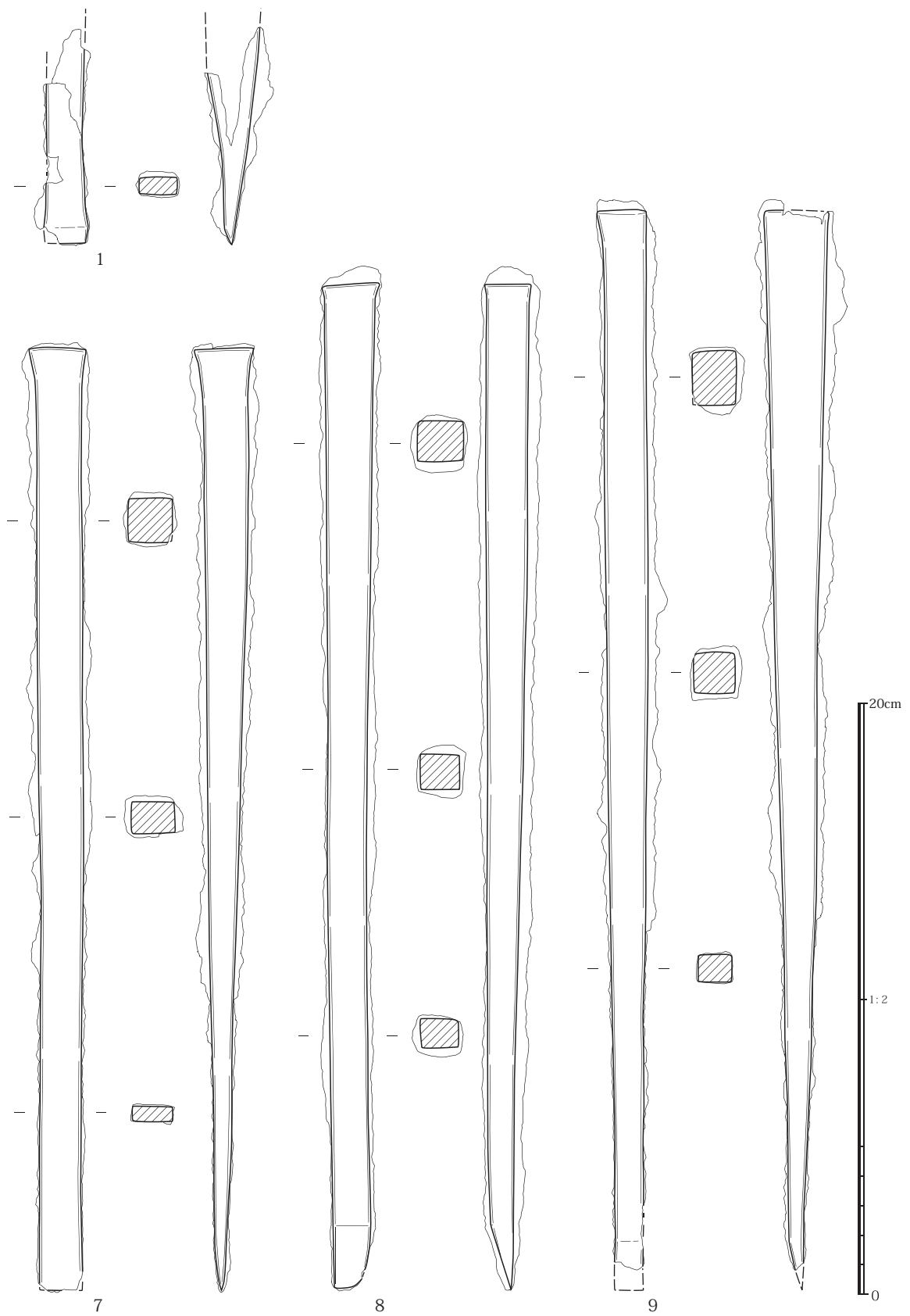
5は刃部を若干欠損する。保存処理がおこなわれている。現重量は154.9gである。長い形式の一群に属し、現存長は25.9cmである。頭部付近の幅は最大で1.6cm、厚みが2.1cmであり、平面形においてはあまり幅が細くならないが、側面をみると刃部に向かって厚みは徐々に薄くなる。刃部付近の残存幅は1.2cmである。したがって、軸部の断面形状も頭部付近は正方形に近く、刃部付近は長方形



第125図 鉄床実測図



第126図 鑿実測図(1)



第127図 竪実測図(2)

となる。残存状況から刃部は平面形が直線的な形状になるものとする。頭部は使用にともなって、特に側面からみると平坦な面が形成されているのを観察する。有機質の付着などは認められない。

6は刃部付近を欠損する。保存処理が実施されている。現重量は305.1 gである。長い形式の一群に属し、現存長は27.1cmである。頭部付近の幅は最大で2.3cm、厚みが1.9cmであり、刃部に向かって徐々に幅と厚みを減じる。刃部付近の残存部で幅7 mm、厚さ7 mmとなっており、軸部の断面形状は正方形に近い形態をなす。刃部の形状は欠損のため、不明である。頭部は使用にともなっていく若干ではあるが潰れた状態となっている。有機質の付着などは認められない。

7はほぼ完全な形で遺存する個体である。保存処理が実施されている。現重量は272.5 gである。長い形式の一群に属し、全長は31.8cmである。頭部付近の幅は最大で1.9cm、厚みが2.0cmである。平面形においてはあまり幅が細くならないが、側面をみると刃部に向かって厚みは徐々に薄くなる。刃部は平面形において直線的な形状を示し、刃は両面から形成される。刃部幅は1.5cmである。軸部の断面形状は頭部付近では正方形に近いが、刃部に向かうにつれ扁平な長方形を呈する。頭部は使用にともなっていく若干ではあるが潰れた状態となっている。また、平坦な面が形成される。有機質の付着などは認められない。

8もほぼ完全な形で遺存する個体である。保存処理が実施されている。現重量は354.4 gである。長い形式の一群に属し、全長は34.0cmである。頭部付近の幅は最大で2.0cm、厚みが1.6cmである。形状は平面においてはあまり幅が細くならない。一方、側面をみると刃部に向かって厚みが僅かながら薄くなり、刃部先端近くで片面に鑄を形成して急激に厚みを減じる。刃部は平面形において緩やかな弧状を呈する、片鑄のものである。刃部の先端幅はおおむね1 cm程度となる。軸部の断面形状はおおむね正方形に近い形態をなす。頭部は使用にともなっていく若干ではあるが潰れた状態となっている。有機質の付着などは認められない。

9は刃部付近を欠損するものの、ほぼ全形の判明する個体である。保存処理がおこなわれている。現重量は363.5 gである。長い形式の一群に属し、残存長は35.8cm、復元長が36.5cmである。頭部付近の幅は最大で1.7cm、厚みが2.2cmである。頭部から刃部に向かって徐々に細くなる形状を呈し、あまりはっきりとはしないが側面の刃部先端近くにおいて片面に鑄を形成して急激に厚みを減じる。刃部は残存していないが、幅約1 cmほどの直線的な形状になるものとする。軸部の断面形状はおおむね正方形に近い形態をなす。頭部は使用にともなっていく若干ではあるが潰れた状態となっている。有機質の付着などは認められない。

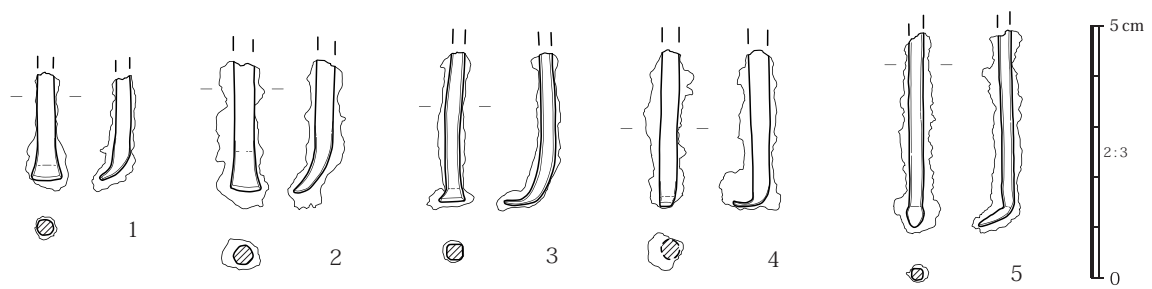
(岩本 崇)

(14) 耳搔き状鉄製品 (図版 151、第 128 図)

耳搔き状鉄製品としたものは全部で5点ある。いずれも破片で完形のものはない。機能などは確定できないが、曲り鑿のような木製品の細部加工用の利器の可能性が高い。

1は残存長2.1cmである。身部は径4 mmの断面円形で、先端7 mmほどが緩やかに屈曲する。屈曲部はハの字状に開きつつ先端で扁平になり、先端部の幅は6 mmである。

2は残存長2.6cmである。身部は径4 mmの断面円形で、先端1 cmほどが緩やかに屈曲する。屈曲部はハの字状に開きつつ先端で扁平になり、先端部の幅は6 mmである。1よりも屈曲部が長い、ほぼ同形・



第128図 耳搔き状鉄製品実測図

同大といえる。

3は残存長3.0cmである。身部は一辺3mmの隅丸方形で、先端付近の1cmほどが緩やかに屈曲し、先端の5mmは柄部に対して直角となる。屈曲部はハの字状に開きつつ先端で偏平になるようだが、錆膨れのためやや判然としない。

4は残存長3.1cmである。やや判然としないが、身部は径4mmの円形とみられる。先端の5mmほどがほぼ直角に折れ曲がる。先端部は厚さ1mmほどで、1～3とは異なり幅は広がらない。

5は残存長3.8cmである。身部は一辺3mmほどの隅丸方形で、先端8mmほどが約60度の角度で折れ曲がる。屈曲部は蛇頭状をなす。

1と2の形態はかなり近似するものの、先端の形態や屈曲部の折り曲げ角度など全体としてやや形態にばらつきがある。屈曲部の折り曲げ角度については、埋納後の土圧による変化なども想定できるため、確定はできないが、それぞれ用途や機能が少しずつ異なっていた可能性も想定できる。

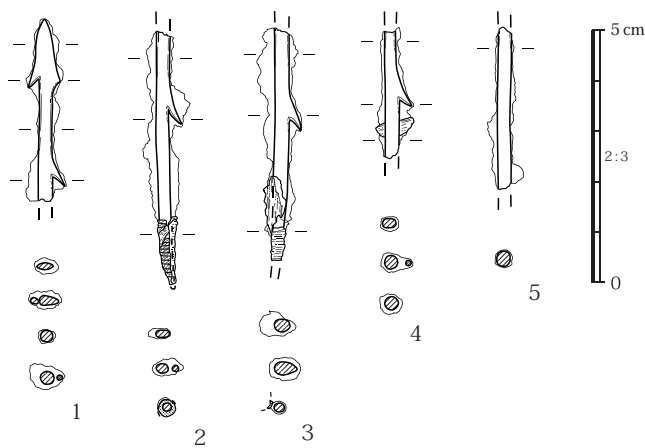
(15) ヤス (図版152、第129図)

ヤスは全部で5点が存在するが、いずれも一部を欠失しており完存する個体はない。5については、ほかの個体とやや様相が異なり、ヤスとは異なる製品の可能性も残る。

1は残存長3.6cmで、刃部から頸部中央の逆刺までが遺存する。先端には長さ1.4cm、幅7mmのややふくらを持つ長三角形の刃部を持つ。刃部の横断面形はレンズ形である。刃部には図の左側には深さ2mmの逆刺があるが、反対側には逆刺はなく、やや内湾しつつナゲ関状に頸部に至る。頸部の片側には深さ2mmの逆刺を持つ。頸部の断面形は、逆刺よりも刃部側では隅丸方形に近いが、逆刺付近から茎部側にかけて円形となる。

2は残存長5.0cmで、刃部と茎部先端を僅かに欠失するが、頸部の大半が遺存する。逆刺から2.1cmの位置より茎部の先端側1.4cmにかけて柄に由来する木質が遺存しており、連結部として使用されたことがわかる。木質のさらに外側には撚り糸が巻き付けられており、その単位はおよそ1cmあたり13巻きである。糸巻きは茎部を一周せず、およそ1/3の範囲のみにみられる。糸巻きは連結部の下半では頸部に直交する方向で巻き付けられているが、上半では上方へ約45度の角度で傾いている箇所があり、後述するようにほかの個体と束ねる際には連結部の先端では、ほかの個体とまとめてたすき掛け状に糸が巻き付けられたことがわかる(図版152-2・3)。

3は残存長4.6cmで、刃部と茎部先端を欠失する。茎部側1.7cmの範囲には柄に由来する木質が付着



第129図 ヤス実測図

しており、さらに先端から7mmの範囲には糸巻きの痕跡もみられる。ただし、糸巻きは遺存状態が悪く、詳細は不明である。

4は残存長2.5cmで、軸部のみが遺存する。軸部下半には、軸部にほぼ直交する角度で木質が付着しているが、角度から柄に由来するものではないと考えられる。別個体由来の木質が付着したものであろう。

5は残存長3.2cmである。1～4とは異なり逆刺を持たず、また刺突部や基部も遺存範囲にはみられないため、ヤスではなく別製品の可能性もある。ただし、一方の断面形が隅丸方形に近く反対側の断面形は円形に近いと、ヤスの可能性を想定しておく。

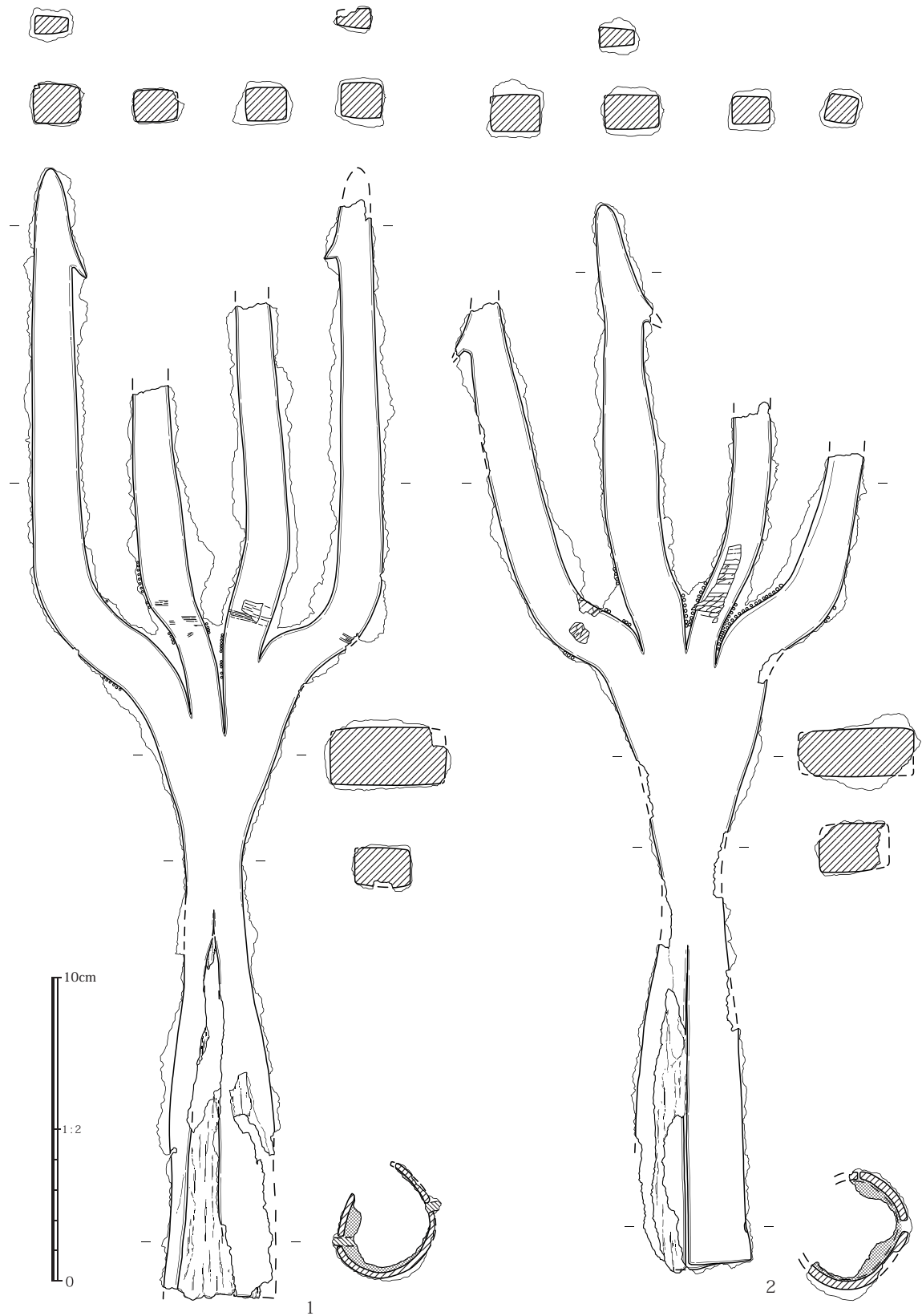
ヤスではない可能性も残る5を別とすれば、1と2の逆刺を基準に考えることで全形の復元が可能であり、全長は6.5cmほどであったとみられる。2では糸巻きが茎部を一周せず、また、軸部の長軸に沿って直線的に剥離している部分があることから、木柄との連結部では何本かをまとめて木柄の先端に束ね、糸を巻き付けて固定したことがわかる。固定に際しては、茎部の下方では柄の主軸に直交する方向で何回か巻き付けた上で、さらに上方では複数の個体にたすき掛け状に糸を巻き付けたことがわかる。なお、組み合わせの本数は確定できないが、2の茎部に遺存する糸巻きの範囲がおおよそ1/3であることから、3本一組であった可能性が高い。その場合、逆刺を持つものが4点あることからヤスは2個体以上が副葬されていたことがわかる。

(16) 鉞 (図版153～156、第130図)

鉞は2点ある。どちらもソケット状の袋部から頸部を経て四つ叉に分かれる刺突部を持つ。どちらも保存処理済みだが、袋部を中心に錆膨れにより変形している。

1は全長37.3cm、刺突部最大幅11.5cm、頸部幅1.9cmである。柄部となる袋部は劣化がいちじるしいが、幅3.7cmに復元でき、本来の袋部径も同様であったとみられる。刺突部は2cmほどの間隔で四つ叉に分かれており、先端はやや丸みを帯びている。4本の刺突部のうち内側の2本は先端を欠失するため不明だが、外側の2本では先端から3cmほどの位置の内側に逆刺を持つ。図左端のものでは逆刺は深く切り込むのに対し、図右端のものでは逆刺は浅く、直角に近い。内側の2本については欠失のため確定できないが、本来は逆刺を持っていたと考えられる。

刺突部の断面形は方形だが、先端付近では外側が厚さ6mmなのに対し内側が厚さ4mmと、内側がやや薄い。先端から14cmほどの位置で4本とも内側に屈曲してすばまり、基部で鍛接されて束ねられたとみられる。基部の厚さは1.9cmで、刺突部では先端から基部に向かって幅と厚さが増しているが、基部から頸部にかけて再び厚さを減じており、頸部の厚さは1.3cmである。刺突部の屈曲点から基部にかけ



第130図 鋳実測図

て、刺突部 1 本 1 本に撚り糸が巻き付けられていた痕跡が一部遺存している（図版 155 - 2）。糸巻きの範囲は現状で 5 cm を超えるが、さらに上方に続いていた可能性もある。ただし、撚り糸の遺存状態は悪く、詳細な巻き付け方法などは不明である。

柄の装着部はソケット状をなし、鉄鉾の柄の装着部と同様に、袋部と呼ぶべき形態をなす。袋部端から 12.8 cm の位置まで合わせ目がみられる。劣化の進行により遺存箇所は少ないものの、袋部端は直線的であったとみられる。現状では頸部のやや下方が袋部端よりも幅広となっているが、錆膨れによる変形のためと考えられる。袋部端から 2 cm ほどの位置には、径 3 mm ほどの孔が対向する位置で 2 箇所があり、目釘孔と考えられる。目釘は遺存状態が悪く詳細は不明である。袋部の内面には柄に由来する木質が付着しており、本来は柄を装着したままの状態で副葬されたことがわかる（図版 155 - 1）。

2 は全長 35.0 cm、刺突部最大幅 13.5 cm、頸部幅 2.2 cm である。袋部端は欠損しているが、現存幅は 3.5 cm であり、本来も同程度であったとみられる。刺突部は四つ叉に分かれるが、1 が先端に向かって直線的にのびるのに対し、やや外反気味にのび、間隔は先端で 3 cm ほど空いていたとみられる。刺突部は図左側から 2 番目のものだけが先端まで遺存しており、先端はやや丸みを帯びる。図左端のものには外側に逆刺が、左側から 2 番目のものには内側に逆刺があり、少なくとも左端のものでは 1 とは逆刺の付く方向が異なっていたことがわかる。図右側の 2 本については欠損のため不明だが、どちらも逆刺を持っていたと考えられる。

刺突部の断面形は方形だが、先端付近では外側が厚さ 6 mm なのに対して内側が厚さ 5 mm と、内側がやや薄い。先端から 14 cm ほどの位置で 4 本とも内側に屈曲してすばまり、基部で鍛接されて束ねられたとみられる。基部の厚さ 1.5 cm、頸部の厚さ 1.7 cm と、刺突部先端から頸部にかけて徐々に厚さを増している。刺突部の屈曲点から基部にかけて、刺突部 1 本 1 本に撚り糸が巻き付けられていた痕跡が残存する（図版 155 - 4）。糸巻きの範囲は現状で 3.5 cm ほどだが、遺存状態が悪く、詳細な巻き付け方法などは不明である。

柄の装着部はソケット状の袋部をなす。袋部端から 10.6 cm の位置まで合わせ目がみられる。袋部端は直線をなす。袋部端から 1.5 cm ほどの位置には、径 4 mm ほどの孔があり目釘孔とみられるが、目釘は遺存しない。袋部の内面には柄に由来する木質が付着しており、本来は柄を装着したままの状態副葬されたことがわかる（図版 155 - 3）。

1・2 はほぼ同大であるが、逆刺の取り付く方向や刺突部の開き方が異なるなどやや異なる点も見受けられる。一方で、両者に共通する特徴として、どちらも基部付近に糸巻きがみられる点があげられる。この糸巻きについては、本来どのような巻き付け方がなされていたのか、また、糸の終端の処理方法などについては不明だが、漁具としての機能を考えれば、対象物への刺突や投擲によって木柄を手放した後に、糸をたぐり寄せて獲物を引き寄せるような使用法が想定できる。あるいは、糸の先に浮子をくくり付けておくような使用法も想定できよう。なお、柄の装着部が袋状をなす点はいわゆる離頭鉞のような使用法に親和性が高いが、目釘孔が認められるため、袋部から木柄が抜ける離頭鉞のような使用法は想定しにくい。

上記のように糸巻きを鉞の使用法に直結させる理解に対して、糸の太さは 1.5 ~ 2.0 mm ほどであり、大形の獲物を引き寄せるように使用するにはやや心許ない太さであるという点には問題が残る。ただ

し、それぞれの刺突部に巻きつけられた糸を束ねて紐状にした可能性もあり、基部に遺存する糸の太さからだけでは判断できない。基部付近のみに巻き付けられていることから、別材を鍛接することで四つ又とした刺突部の固定強化を目的としたものの可能性も想定できる。また、先述のとおりヤスでは連結部に糸巻きをすることで複数の部材を組み合わせているが、そのようなヤスとの外観上の類似を意図した可能性もある。2を参照する限り、現状で遺存する糸巻きは一重で、隙間なく非常に密に巻き付けられており、単なる使用時の機能性以上の外観への配慮が認められる点は注意される。ただし、実用性と外観への配慮は同時に成り立ちうるため、確定的な根拠とはできない。いずれにしろ、遺存状態は不良であり本来の外観の復元も困難であるため、糸巻きの機能は確定できず、種々の可能性の提示に留めておく。

(鈴木康高・川畑 純)

(17) 砥 石 (図版 157・158、第 131～133 図)

砥石は全部で6点出土した。いずれの個体も6～7面の比較的広い面を有しており、それぞれの面は長方形に近い形状を呈する。また、全ての個体で使用による大小さまざまな凹みや研磨の痕跡が認められ、さらには研磨による凹みにより面全体が曲面となっているものが多く見受けられる。

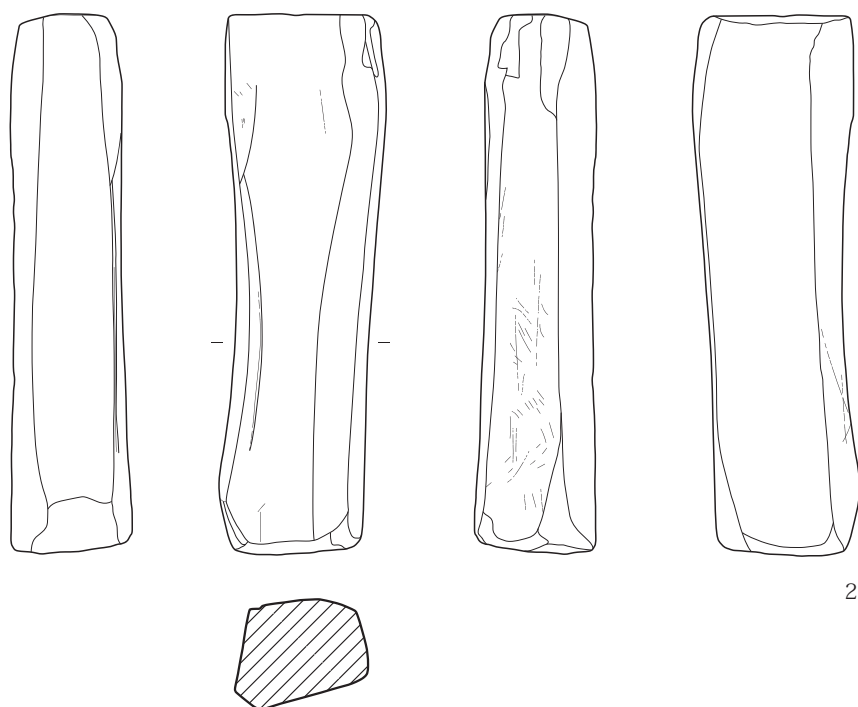
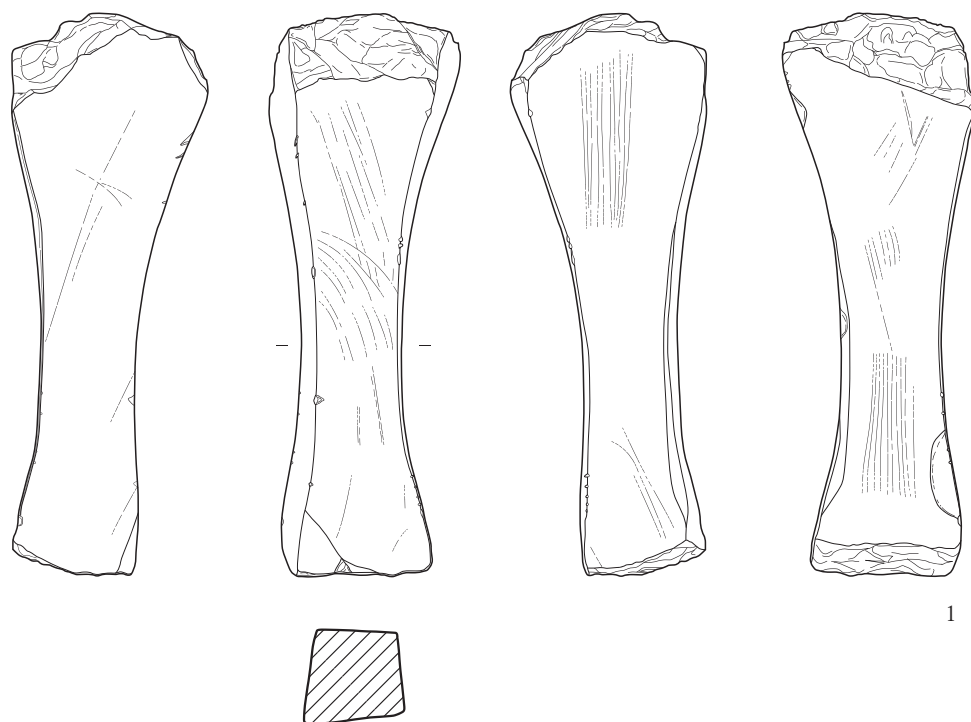
ここでは、記述の都合上、1個体の中で表面の凹みや曲面の反りがもっとも激しいもの、すなわち、使用の頻度がもっとも高いと考えられる面をA面とし、A面と接する面のうち、長辺と接する左右側面をそれぞれB・C面、短辺に接する狭い面を小口面、そして、A面の裏に位置する面をD面と呼ぶこととする。個体番号については発掘報告のものと異なるため、個体ごとの記述でその対応を述べていく。なお、石材の鑑定については奥田尚氏からご教示を賜った。

1は発掘報告の砥石3にあたり、法量は全長22.3cm、幅4.0～7.3cm、厚さ3.7～7.8cmである。凝灰岩質砂岩である。6点ある砥石の中でもっとも大きい。石の肌目はほかの個体と比べて非常に粗く、ところどころに鉄製品の錆の一部が付着しているものの遺存状態は比較的良好である。形状や重量などから、おそらく置砥として用いられたと考える。

使用痕跡をみると、小口面以外の全ての面が、中央部分に強い凹みを持ち、端部に向かって反るような形状をなしており、砥面として繰り返し使用されていたものと思われる。

A面は中央部分で幅がもっとも狭く、端部にいくほど幅が広がっている。表面には長辺に平行する、もしくはやや斜め方向となる条線状の使用痕跡が認められる。またそれらの痕跡とは別に中央部分に強い凹みが存在する。この凹みは左方向にカーブするような形状を呈しており、刃部が強く湾曲する金属製品を研いだ際の痕跡と想定できる。その中央部分の凹みよりやや小口面寄りの場所に長さ3cm、幅1cmほどの僅かな窪み状の使用痕跡が見て取れる。このことから、A面では少なくとも2種類以上の金属製品が使用された可能性が指摘できる。

B面の平面形態は、中央部分がもっとも幅が狭く、小口面側に向かうほど幅が広がるが、片方の小口側の幅がもう一方に比べて非常に広がっている。表面には長辺に対してやや斜め方向となる条線状の使用痕跡が認められる。C面の平面形態はB面とほぼ同じである。条線状の痕跡が多数認められ、長辺に平行しなおかつストロークの長い痕跡と、斜め方向でストロークが比較的短い痕跡などが複数存在することから、複数回に渡って繰り返し使用されたことがわかる。D面の平面形態はA面とほとんど



第 131 図 砥石実測図 (1)

同じで、使用痕跡もほかの面でみられるような条線状の痕跡がほとんどであるが、小口面寄りの部分にはほかの痕跡よりも溝が深く特徴的な条線状の痕跡が存在する。さらに、B面との端部において半円状の窪みが確認でき、磨面としても使用していた可能性が考えられる。小口面は打ち割りにによって粗く整形された状態で、砥面として使用されていた痕跡は確認できない。

2は発掘報告の砥石2にあたり、法量は全長21.5cm、幅5.4～6.4cm、厚さ3.6～4.8cm。細粒砂質片岩である。6点の中では比較的大型の部類に入る。石の肌目はやや細かく、表面全体に出土後に付けられた条線状の傷が多数存在するため、もともとの使用痕跡を判別することは非常に困難であり、遺存状態も良好ではない。この個体も、1と同様に置砥として用いられたものとする。

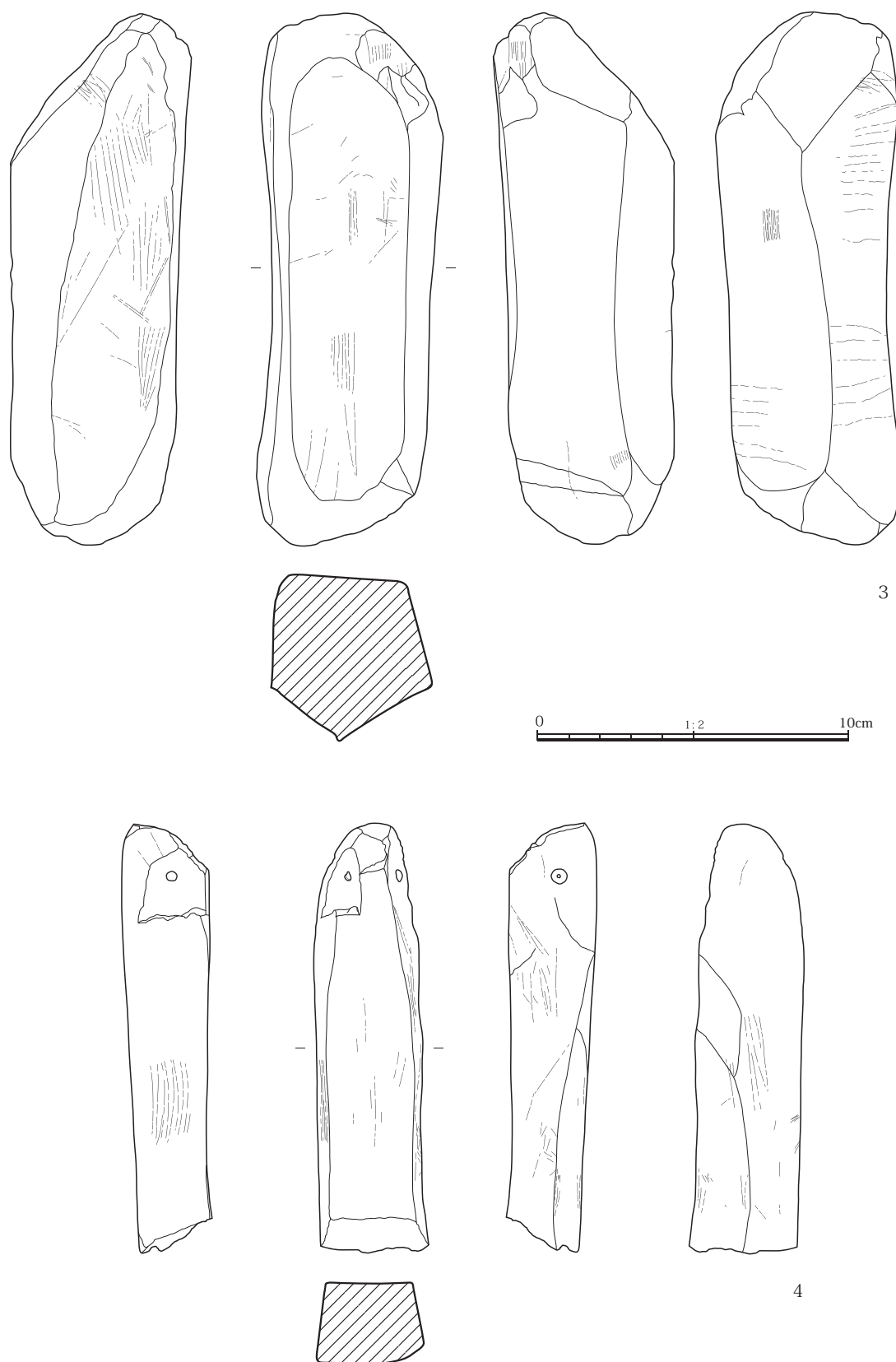
A面の平面形態は細長い長方形をなす。横断面は山なりで左右で二つの細長い面を形成しており、それぞれの面は砥面として使用されたと推測できる。B面との境界には長さ約11cm、幅約5mm、深さ1mmほどの溝状の使用痕跡が境界に沿う形で存在する。これは、例えば鉄鏃や鉈のような、刃部が小さいもしくは短い金属製品を砥いだ痕跡と想定でき、研磨をおこなっていた製品を特定できる非常に重要な痕跡である。B面の幅は非常に狭く、地面に置いた際の安定はあまり良くないが、縦断面が曲面を呈することから砥面として使用されたことがわかる。C面はB面と同様の平面形態をなし、表面に細かな条線状の使用痕跡が多く認められる。D面はA面と同様の平面形態をなすが、先述した傷の影響により使用痕跡はほとんど見出せない。ただし、平面は比較的平滑なため砥面として使用されていた可能性が高い。小口面は2面とも平滑になるよう整形されているが、砥面として使用された痕跡は認められない。

3は発掘報告の砥石1にあたり、法量は全長17.1cm、幅5.1～5.9cm、厚さ5.2～5.5cm。黒雲母流紋岩である。石の肌目は細かく、6点の中では比較的小型である。面全体に鉄錆が付着しており、出土後の傷も多数みられ、遺存状態はあまり良くない。5と同様の形状をなし、置砥とするにはやや不安定であるが、台などで周りを固定すれば置いた状態での使用は可能と考えられる。

A面の平面形態は小口側の端部が円弧を描く長楕円形を呈し、表面はほぼ平滑である。また、条線状の使用痕跡が複数方向存在することも確認できる。B面の平面形態も、A面同様やや偏平な長楕円形であり、条線状の使用痕跡も多数存在する。それに加えて、ほかよりもやや幅の広い条線もいくつか確認できる。C面はほぼ長方形の形態をなすが、判別可能な使用痕跡はごく僅かで、ほとんどが錆や傷などで覆われている。D面は5と同様に、横断面が山なりになっており、二つの大きな面を形成している。どちらの面も使用痕跡は僅かしか確認できないが、それとは別に、表面にはまるで波打つかのような幅広の凹凸が規則的にみられる。これは砥石の砥面を使用前に整形した際に付けられた痕跡と考えられ、砥石の長軸に直交する方向へ工具を動かして整形したために付いたものと判断する。

このような痕跡は、ほかの遺跡出土資料ではあまり知られず、砥石の整形方法を考える上で非常に貴重な痕跡である。小口面の表面には細かな凹凸があり、打ち割りにによって粗く整形されただけの状態と判断でき、使用痕跡もほとんど認められない。ただし、小口面とそのほかの面の間に形成された小さな面に条線状の使用痕跡がいくつか確認できることから、おそらく端部を用いて製品を研磨したものと推測できる。

4は発掘報告の砥石5にあたり、法量は全長13.8cm、最大幅3.5cm、最大厚2.8cm。柘榴石黒雲母流紋岩である。石の肌目は細かく、6点の中でもっとも小型である。ところどころに鉄製品の錆が付着し



第 132 図 砥石実測図 (2)

ており、傷もいくつか見受けられるものの遺存状態は比較的良好である。小口面付近に孔があげられており、孔に紐を通して腰から提げて携帯する提碁と考えられる。

いずれの面も平面形態は偏平な長方形を呈し、孔があげられている側の端部は丸く円弧を描いている。また、全ての面で条線状の使用痕跡が確認でき、その方向は、砥石の長軸方向に平行するものが比較的多い傾向にある。またそれら以外の使用痕跡としては、D面に二つみられる端部の窪みがあげられる。孔があげられている方の小口面は、穿孔のために幅が狭くなるよう整形されており、もう片方の小口面は、表面には細かな凹凸があり、打ち割りにによって粗く整形されただけの状態と判断でき、使用痕跡もほとんど認められない。孔は両面穿孔で、片方の面ではやや斜め方向から穿孔がおこなわれているため、一直線に貫通してはいない。

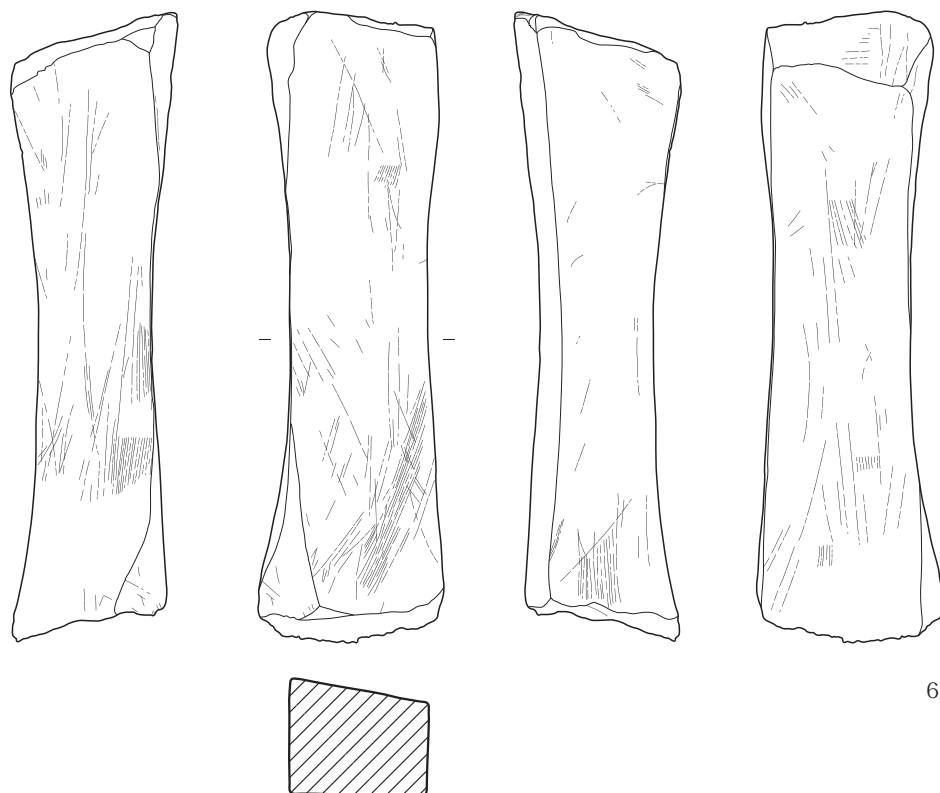
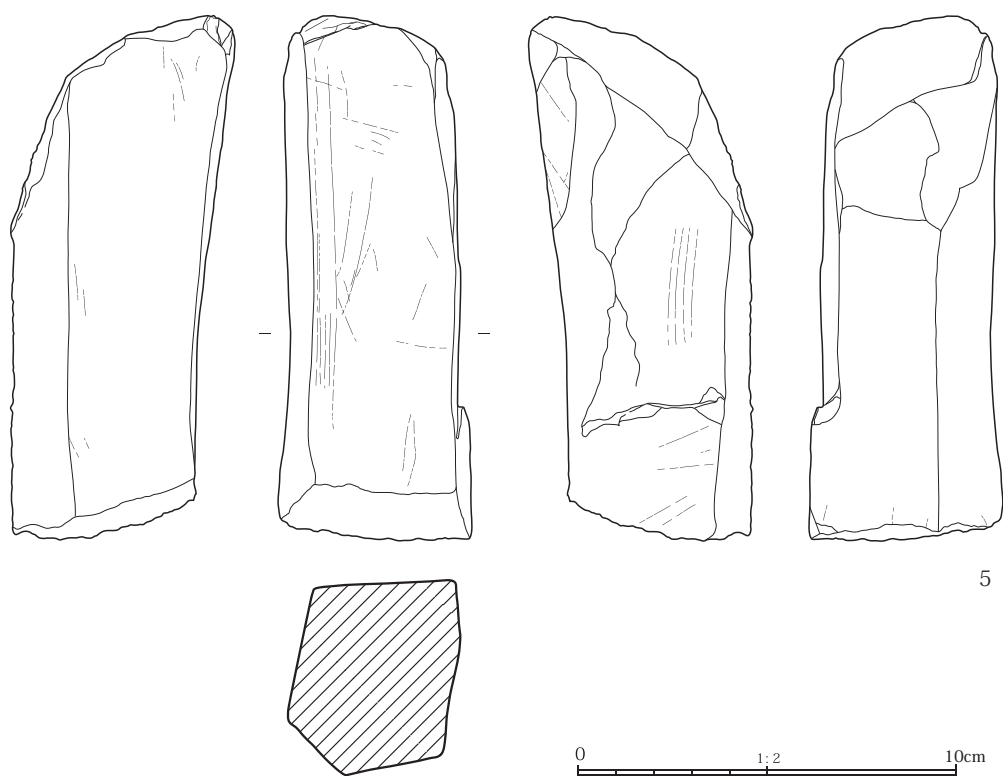
5は発掘報告の砥石6にあたり、法量は全長13.8cm、幅4.2～5.1cm、厚さ4.8～5.3cm。黒雲母流紋岩である。6点の中では比較的小型である。石の肌目は細かく、面全体に出土後に付けられた条線状の傷が多数存在するため、遺存状態も良好ではなく、一部の面において使用痕跡を判別することは非常に困難である。この個体は横断面が五角形を呈し、小形である点も含めて、置碁とするにはやや不安定であるが、台などで周りを固定すれば置いた状態での使用も可能と考える。

A面の平面形態は長方形をなし、表面は平滑であるが、中央部分がやや凹んで曲面となる。表面には条線状の使用痕跡が多数認められ、その方向も、長辺に平行なもの、斜め方向のもの、ほぼ直交するものなど、複数の種類が確認できる。B面の平面形態は長方形に近く、表面は中央部分が若干凹むもののほとんど平滑である。使用痕跡も僅かに確認できるが、ほとんどが出土後の傷によって判別不可能となっている。C面は整形の際の打ち割りの痕跡が顕著に残っており、面全体を一度に使用したとは考えられない。ただし、表面にところどころみられる平滑な部分には条線状の使用痕跡をいくつか確認できることから、研磨に用いられたことは確実である。D面の横断面は山なりになっており、二つの大きな面を形成している。いずれの面も錆の付着や出土後の傷の影響により使用痕跡はほとんど判別できない。小口面の表面には細かな凹凸があり、打ち割りにによって粗く整形されただけの状態であり、使用痕跡も認められない。

6は発掘報告の砥石4にあたり、法量は全長16.7cm、幅3.7～4.9cm、厚さ3.0～4.4cm。黒雲母流紋岩である。6点の中では比較的小型である。石の肌目は細かい。面全体に出土後に付けられた条線状の傷が多数存在するが、各面において一部では当時の使用痕跡を判別可能と判断し、図面上に表現している。小型であるが、平面形は整った長方形を呈し、比較的安定していることから、置碁として使用されたと考える。

A～Dのいずれの面も、平面形態は長方形で、表面は中央部分がやや凹みながら緩やかな曲面を描くようになっており、砥面として使用されていたと判断できる。さらにどの面も、条線状の使用痕跡が多数認められ、その方向も、長辺に平行するもの、斜め方向のもの、ほぼ直交するものなど、いくつかの種類が確認できることから数回に渡って使用されたものと判断できる。小口面の表面には細かな凹凸があり、打ち割りにによって粗く整形された状態と判断できるが、片方の小口面には細かな条線状の使用痕跡が存在することから、砥面として使用されたとみられる。

(藤原光平)



第 133 図 砥石実測図 (3)

5 不明鉄製品 (図版 159・第 134 図)

収納されていた箱番号から、竪穴式石槨外出土と想定される鉄製品のうち、機能・品目が不明なもの 15 点を図化した。いずれも完形品ではなく、これまでに報告した品目のうちのいずれかに該当する可能性もあるが、確定できなかったものも含む。

1 は残存長 4.2cm の棒状品である。断面形は円形で、図上方では径約 4mm だが図下方に向かって僅かにすばまる。中央付近で緩やかに湾曲するが、製品本来の形態であったのか、埋納後の二次的な変形によるものかは不明である。側縁には木質状の有機物が付着しているように見える箇所もあるが、劣化のため確定できない。

2 は残存長 3.5cm、幅 8mm、厚さ 3mm で偏平な棒状をなす。鉋や鑿の柄とも考えられるが、劣化により詳細は不明だが、全体に植物に由来するとみられる有機物が付着しているため、別製品と考えた。

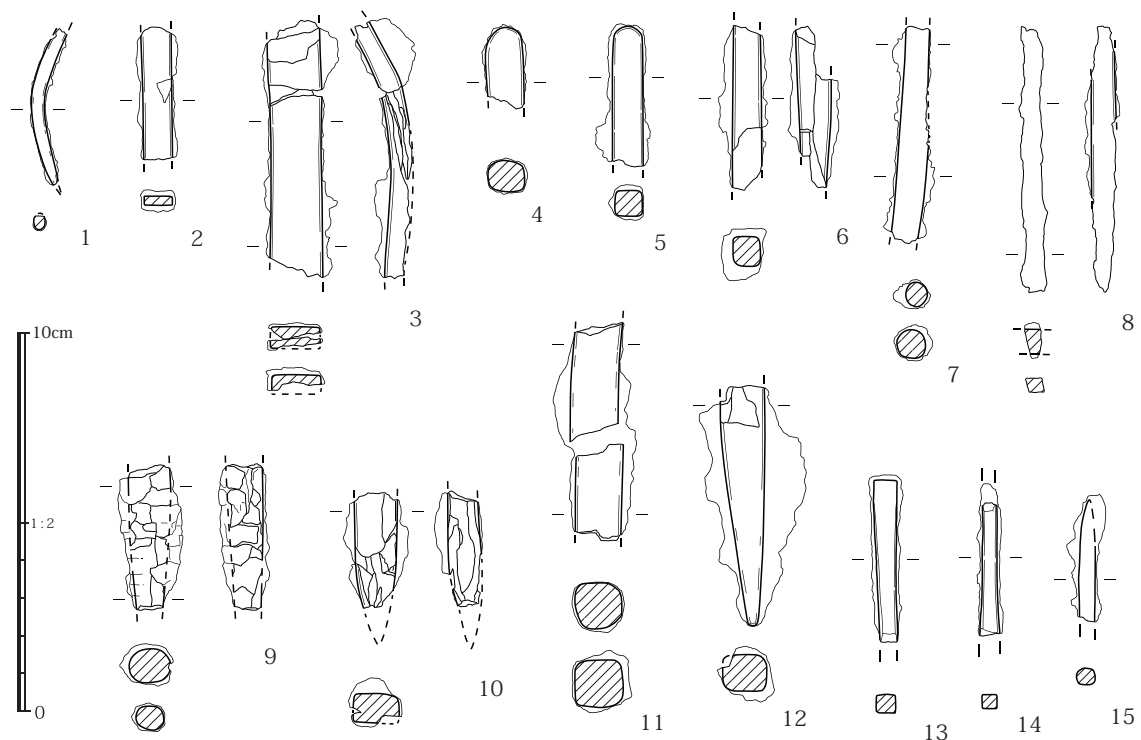
3 は残存長 6.8cm、幅 1.4cm、厚さは復元で約 5mm でやや偏平な棒状をなす。本来の形態を反映したものかどうか不明だが縦に湾曲することから、鉋や鑿とは別製品と考えた。

4・5 は断面形が隅丸方形で先端が丸みを帯びる棒状品である。4 は残存長 2.1cm、幅 1.0cm、厚さ 4mm であり、5 は残存長 3.7cm、幅 8mm、厚さ 7mm である。

6 は残存長 4.4cm、幅 8mm、厚さ 8mm の棒状品で、断面形は隅丸方形。5 と同一個体の可能性もある。

7 は残存長 7.8cm の棒状品。図上端で幅と厚さはどちらも 6mm ほどだが、図下方に向かって僅かに幅と厚さを増し、図下端で幅と厚さともに 8mm となる。断面形は円形である。

8 は残存長 8.0cm、厚さ 7mm の棒状品である。劣化の進行がいちじるしいが、鑿の可能性はある。



第 134 図 不明鉄製品実測図

5 不明鉄製品

9は残存長3.9cmの棒状品である。図上端では幅1.1cm、厚さ9mmだが、図下方に向かって幅・厚みを減じ、図下端では幅7mm、厚さ7mmとなる。幅3～4mmほどの革紐状の有機物が横方向に巻き付けられているが、その機能は不明である。

10は残存長3.0cm、最大幅1.2cm、最大厚8mmで、先端に向かってすぼまる。鑿の可能性はある。

11は残存長5.8cm、幅1.2cm、厚さ1.2cmの棒状品である。図上方では横断面形は略円形に近いが、図下方では隅丸方形になるとみられる。鑿や鑿の茎部分などの可能性がある。

12は残存長6.4cm、最大幅1.2cm、最大厚1.0cmである。図下方に向かってすぼまる形態をなす。劣化のため判然としないが、図上方では横断面形は隅丸方形とみられるが、図下方では円形であった可能性がある。鑿や鑿の可能性はある。

13は残存長4.3cmの棒状品である。断面は方形で、図下端では幅・厚さともに5mmだが、図上端ではやや厚みを減じ、幅は6mmとなる。

14は残存長3.5cmの棒状品である。断面は方形で、幅・厚さともに4mm。図下端で僅かに幅が広がる。

15は残存長3.2cmの棒状品である。断面は隅丸方形から略円形で、径は4～5mm。図上端は錆膨れで判然としないが、すぼまるとみられる。13～15はいずれも鑿の可能性はある。(鈴木康高・川畑 純)

<参考文献>

- 梅原末治 1932 「淡輪村西小山古墳と其の遺物」『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告』第3輯 大阪府 pp.34-61
- 川畑 純 2010 「古墳副葬矢鏃の生産・流通・保有・副葬」『古代学研究』第185号 古代学研究会 pp.1-20
- 児玉真一(編) 2005 『若宮古墳群Ⅲ 一月岡古墳一』吉井町文化財調査報告書第19集 吉井町教育委員会
- 小林謙一 1983 「甲冑出土古墳の研究―眉庇付冑出土古墳について―」『文化財論叢』同朋社出版 pp.105-113
- 阪口英毅(編) 1998 『秋期特別展 いにしへの金工たち～古代金工技術の復元～』(宗)元興寺・(財)元興寺文化財研究所
- 下村登良男ほか 1978 「1 佐久米古墳群」『松阪市史』第2巻 資料編 考古 松阪市 pp.396-403
- 末永雅雄 1934 『日本上代の甲冑』岡書院
- 滝沢 誠 1996 「大山古墳前方部石室出土の甲冑について」『考古学雑渉』西野元先生退官記念論文集 同記念会 pp.159-167
- 西田弘・鈴木博司・金関恕 1961 「栗東町安養寺古墳群」『滋賀県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第12冊 滋賀県教育委員会
- 橋本達也 1995 「古墳時代中期における金工技術の変革とその意義―眉庇付冑を中心として―」『考古学雑誌』第80巻第4号 日本考古学会 pp.1-33
- 橋本達也 2005 「稲童21号墳出土の眉庇付冑」『稲童古墳群』行橋市文化財調査報告書第32集 行橋市教育委員会 pp.276-285
- 初村武寛 2011 「古墳時代中期における小札甲の変遷」『古代学研究』192号 古代学研究会 pp.1-19
- 古瀬清秀 1991 「農工具」『古墳時代の研究』第8巻 古墳Ⅱ 副葬品 雄山閣出版 pp.71-91
- 古谷 毅 1988 「久津川車塚古墳出土の甲冑―いわゆる“一枚鍔”の提起する問題」『MUSEUM』No.445 東京国立博物館 pp.4-17
- 村井崑雄 1966 「千葉県木更津市大塚山古墳出土遺物の研究」『MUSEUM』No.189 東京国立博物館 pp.2-7
- 山中英彦(編) 2005 『稲童古墳群』行橋市文化財調査報告書第32集 行橋市教育委員会

五條猫塚古墳の研究

報告編

発行年月日 2014（平成 26）年 3 月 31 日

発 行 奈良国立博物館
〒 630-8213 奈良市登大路町 50 番地
TEL 0 7 4 2 - 2 2 - 7 7 7 1

印 刷 株式会社 天理時報社
〒 632-0083 天理市稲葉町 80 番地